慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル
Sub Title	Event cancellation in Mainland Southeast Asian languages
Author	春日, 淳(Kasuga, Atsushi) 清水, 政明(Shimizu, Masaaki) 上田, 広美(Ueda, Hiromi) 鈴木, 玲子(Suzuki, Reiko) 峰岸, 真琴(Minegishi, Makoto) 加藤, 昌彦(Kato, Atsuhiko) 澤田, 英夫(Sawada, Hideo) 岡野, 賢二(Okano, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	
JaLC DOI	10.14991/BD01706123
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BD01706123-00000000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル

Event Cancellation in Mainland Southeast Asian Languages

加藤昌彦 編
Atsuhiko Kato (Ed.)

慶應義塾大学言語文化研究所
The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル

Event Cancellation in Mainland Southeast Asian Languages

加藤昌彦 編

Atsuhiko Kato (Ed.)

慶應義塾大学言語文化研究所

The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

まえがき

三上直光教授(現在、慶應義塾大学名誉教授)が 1998 年 4 月から主宰していた慶應義塾大学言語文化研究所の共同研究プロジェクト「東南アジア諸言語研究会」は、2017 年 3 月における三上教授の定年退職の後、大阪大学から慶應義塾大学言語文化研究所に移ってきた加藤昌彦が同年 4 月に引き継ぐこととなった。三上教授は在任中に、東南アジア諸言語研究会の研究成果として、『東南アジア大陸部諸言語の「行く・来る」』(2003 年)、『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』(2006 年)、『東南アジア大陸部諸言語の動詞句』(2013 年)、『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』(2017 年)という計 4 冊の報告書を刊行した。本報告書『東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル』は、三上教授が刊行した 4 冊の報告書の続編とも言えるものである。

加藤が引き継いだ東南アジア諸言語研究会においては、最初の一年ほど、研究会の柱となるテーマをまずは何に設定すべきかをめぐって参加者間で意見交換が続いていた。そうした中、2018 年 3 月に加藤が事象キャンセルについて発表したことをきっかけに、新しいテーマとして事象キャンセルを取り上げることになった。テーマを決定して最初に行ったのが、調査票の作成である。加藤が調査票の原案を作って 2018 年 10 月の研究会で提示した。これをさらに、参加者の意見を取り入れながら修正していった。この間、加藤はミャンマーにおいて試験的にこの調査票を用いてポー・カレン語の調査を行い、さらなる修正を行った。このような過程を経て、最終的な調査票ができあがったのは、2019 年 3 月のことである。それ以降は、この調査票を用いて参加者が各々の担当言語の事象キャンセルについて調査を行い、2022 年 3 月に全員の調査報告が終了した。本報告書の各言語についての論文は、それら報告を発展させたものである。ベトナム語についてはコンサルタントの異なる 2 編の論文を掲載しているが、これは、話者が異なれば容認度の判断も異なり得ることが示せる点で学問的に有意義と考えたからである。

いずれの論文も、それぞれの言語における事象キャンセルの様相を詳細に記述しており、記述言語学的に見て資料的価値が高いと思われる。この報告書が東南アジア言語学ひいては一般言語学の発展に寄与することを願ってやまない。

「東南アジア諸言語研究会」の参加者は次のとおりである。(五十音順)

上田広美　岡野賢二　加藤昌彦　春日　淳　澤田英夫　清水政明　鈴木玲子
三上直光　峰岸真琴

東南アジア諸言語研究会
代表者　加藤昌彦
2023 年 3 月

目　　次

まえがき
Preface

事象キャンセルについて
　――東南アジア大陸部諸言語の観点から――
On event cancellation:
　From the perspective of Mainland Southeast Asian languages
…… 加藤　昌彦
Atsuhiko Kato　1

事象キャンセル調査票
A questionnaire for event cancellation …… 41

ベトナム語の事象キャンセル
　――ハノイ方言についての一報告――
Event cancellation in Vietnamese:
　A report on Hanoi Vietnamese
…… 春日　　淳
Atsushi Kasuga　47

ベトナム語の事象キャンセル
Event cancellation in Vietnamese
…… 清水　政明
Masaaki Shimizu　73

クメール語の事象キャンセル
Event cancellation in Khmer
…… 上田　広美
Hiromi Ueda　101

ラオ語の事象キャンセル
Event cancellation in Lao
…… 鈴木　玲子
Reiko Suzuki　119

タイ語の事象キャンセル
Event cancellation in Thai
…… 峰岸　真琴
Makoto Minegishi　141

ポー・カレン語の事象キャンセル
Event cancellation in Pwo Karen
…… 加藤　昌彦
Atsuhiko Kato　167

ロンウォー語の事象キャンセル
Event cancellation in Lhaovo
…… 澤田　英夫
Hideo Sawada　189

ビルマ語の事象キャンセルについての一考察
A consideration on event cancellation in Burmese
…… 岡野　賢二
Kenji Okano　215

執筆者一覧
Contributors …… 248

事象キャンセルについて

――東南アジア大陸部諸言語の観点から――

加藤　昌彦

0. はじめに

まえがきに述べたように、慶應義塾大学東南アジア諸言語研究会においては、2018 年から東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセルについて検討してきた。本報告書の目的は、ベトナム語(Vietnamese)、クメール語(Khmer)、ラオ語(Lao)、タイ語(Thai)、ポー・カレン語(Pwo Karen)、ロンウォー語(Lhaovo)、ビルマ語(Burmese)の事象キャンセルの様相を、同一の調査票を用いて対照可能な形で示すことである。本章では、調査票および各言語の報告を理解するための前提となる、事象キャンセルにまつわる様々な問題について論じる。

以降、第 1 節では「事象キャンセル」という現象についての紹介を行い、「事象キャンセル」という用語の妥当性についても述べる。第 2 節では事象キャンセルで何が否定されるかについて論じる。第 3 節では事象キャンセルが可能とされている言語間で事象キャンセルが容認される度合いが大きく異なることを見る。第 4 節では日本語の事象キャンセルの特徴について、先行研究を批判しながら一般化することを試みる。第 5 節では、東南アジア大陸部諸言語の一例として、ビルマ語を取り上げ、やはりその事象キャンセルについての一般化を試みる。第 6 節では本巻所収の「事象キャンセル調査票」について説明する。第 7 節では、本研究会で明らかになったことのいくつかを指摘する。第 8 節はまとめである。

1. 事象キャンセル

Event cancellation という用語を使った研究としてよく知られているのは Tsujimura (2003) である[1]。この用語の日本語訳としては「事象キャンセル」あるいは「事象キャンセレーション」が考えられるが、本章では前者を採用する。何らかの事象が既に成立したことを表す発話の後に、その事象の成立を否定する発話が現れる現象を、この用語は指している。例えば日本語では、池上(1981: 249–283)が示した次のような文が容認されることがある。池上の研究はこの現象の先駆的な研究のひとつである。

(1)　燃やしたけれど、燃えなかった。

この文は「燃やしたけれど」という従属節と「燃えなかった」という主節の 2 つの節からな

[1] この用語を誰が初めて使ったかについて筆者はまだ結論を得ていない。Tsujimura (2003)の前にこの用語を使った研究として Chae (2002)がある。

る。動詞「燃やす」は、その意味の中に、何らかの物体が燃えるという事象を含む。最初の節はこの動詞を使って「燃やした」と言っているのだから、何かが燃えるという事象も成立したはずである。ところが、続く 2 番目の節では、燃えるという事象が成立しなかったと言っている。すなわち、最初の節と 2 番目の節は論理的に矛盾する関係にある。この文を矛盾がないように解釈する 1 つの方法は、「燃えた」という最初の発言の内容を話者自身が言外に撤回した、すなわちキャンセルしたと見なすことである。例えば、「燃やしたと言ったが、実はその発言内容は誤りだった」と話者が言外に考えているという推意を行えば、「燃えなかった」の部分を論理的な矛盾なしに解釈することができる。このように、何らかの事象について、その事象が成立したことを表す発話の内容を話者がその後で撤回しているように見える現象を、本巻では事象キャンセルと呼ぶことにする。この現象は(1)のように同一文中で起きることもあれば、(2)のように文の境界を越えて起きることもある。

(2)　燃やした。しかし、燃えなかった。

また、「燃えなかった」のような直接的な否定でなくても、(3)の「あとで見たら全部そのまま残っていた」のように、事象が成立しなかったことを表す別の表現が使われることもある。このような事例も事象キャンセルに含む。

(3)　木の枝を燃やした。しかし、あとで見たら全部そのまま残っていた。

筆者は、日本語とビルマ語の事象キャンセルの対照研究である Kato (2018)の草稿を書いて提出したときに、event cancellation という用語について査読者から批判を頂戴した。それは、現実世界で既に起こった事象を発話によってキャンセルすることはできないのだから、event cancellation という用語は不適切であるという内容だった。そこで草稿の修正にあたって、筆者はこの批判をかわすため、result cancellation (結果キャンセル)という用語を用いた。しかし、これとて現実世界で起こった結果は発話によって取り消すことはできないのだから、同じ問題が残る。この査読者の意見は論理的に考えて正しい。ただ、この現象を何と呼べばよいのかという問題が残る。この現象を端的に表す用語を考え出すのは非常に難しい。そこで本報告書では、このような問題があることは心得た上で、事象キャンセルという用語を使うことにする。筆者自身は、「事象が成立したことを表す発話の内容を同一の話者がその後で撤回(=キャンセル)する」という回りくどい言い方を縮約したのが事象キャンセルという用語であると理解している。もちろん、キャンセルの対象となるのは、現実世界の事象ではなく、その事象についての発話内容である。本来なら、「事象についての発話内容キャンセル」とでも言うべきものかもしれない。学術用語は概念を正しく伝えるものであることが望ましいのではあるが、一方で、簡便さも必要である。キャンセルの対象となるのは事象そのものではなく事象についての発話内容であるということを適切に理解した上で使うの

であれば、事象キャンセルという用語を使うことは許されると筆者は考える。なお、ここで用いる事象(event)という用語が表す範囲には、英語の event という単語の典型的な指示対象としての event (出来事)だけでなく、動作(activity)や状態(state)などを始めとするあらゆる事態(state of affairs)を含むものとする。

2. 事象キャンセルで何が否定されるか

事象キャンセルの現象において否定され得るのは、典型的には、語彙的使役動詞が表す結果の部分である。例えば、(1)に示した日本語の「燃やす」という動詞が表す意味には、少なくとも、何かに火をつける動作の部分と、何かが燃える結果の部分がある。同様に、日本語の「殺す」という動詞の意味には、少なくとも、生き物に何らかの影響を与える動作と、その生き物が死ぬ結果の部分がある。典型的には、語彙的使役動詞におけるこのような結果の部分が、事象キャンセルが成立するときに否定される部分である。しかし、詳しく検討すると、否定される部分の実態は多様である。本節では、事象キャンセルで何が否定されるのかを考える。

この問題を考えるにあたり、まず、ビルマ語の動詞 t̪aʔ「殺す」の意味を検討する。ビルマ語を例に取るのは、本研究会の研究によって、ビルマ語は事象キャンセルが他の言語に比べて多くの動詞で容認される言語であることが分かってきたからである(Kato [2014], 加藤 [2015], Kato [2018], 岡野[本巻所収]を参照されたい)。ここでは、正確を期すため、Role and Reference Grammar (RRG; Van Valin 1993 および Van Valin and LaPolla 1997 参照)で提案されている語彙アスペクトの表示法を用いる。RRG では動詞の語彙アスペクトの表示を論理構造(logical structure; LS と略される)と呼ぶ。これは、Vendler (1957, 1967)による Actionsart の 4 分類に基づきながら、Dowty (1979)の形式化に倣って作られたものである。ビルマ語の動詞 t̪aʔ「殺す」の語彙アスペクトは、RRG の LS に従えば、次のように表示できると思われる。

(4) DO (x, [do′ (x, ø)] CAUSE [BECOME dead′ (y)])

小文字の do′ はこの動詞の表す事象が動作(activity)であることを表す。右辺の BECOME は変化を表す部分である。CAUSE は、それより左側にある事象がそれより右側にある事象を引き起こすことを表す。RRG では左端の項に動作者(actor)という macrorole が、右端の項に被動作者(undergoer)という macrorole が付与されるから、x は動作者であり、y 被動作者である。DO は動作主性(agency)を表す部分である。動作主性は動作者が持つ意志(volition)と言い換えてもよい。動作は意志によってもたらされる場合とそうでない場合とがある。意志によらない動作の場合、DO を表示しない。Kato (2014)と加藤(2015)に述べたように、ビルマ語の動詞は一部の動詞を除いて明確に意志動詞(volitional verb)と無意志動詞(non-volitional verb)に分けることができる。語彙レベルで意志動詞には DO が組み込まれており、無意志動詞には組み込まれていない。t̪aʔ は DO が語彙レベルで組み込まれている動詞のひとつで

ある。全体としてこの LS は、x による何らかの意志的な動作が結果としての「y が死ぬ」という状態変化を引き起こすことを表す。意志(volition)と動作(activity)と結果(result)にのみ着目して因果関係を単純に図示すれば、(5)のようになるだろう。なお、意志と動作はそれそのものの性質によって意味的に規定することができるが、「結果」は事象間の因果関係によって相対的に規定されるものだから、本来は意志・動作と結果を同列に並べるのは好ましくない。しかし、本章では便宜的に、動作の作用によって生じるあらゆる状況、すなわち、状態、状態変化、新しい局面、被使役動作、等々をまとめる概念を表す用語として「結果」を用いることにする。

(5) Volition → Activity → Result

ビルマ語の動詞 ʨaʔ「殺す」が表す意味においては、意志が原因となって何らかの動作が行われ、その動作が「死ぬ」という結果を引き起こす。(4)の LS はそれを表現している。この LS は英語の murder と同じものである。もちろん、ビルマ語の動詞 ʨaʔと英語の動詞 murder のアスペクト表示が同じであることは、語彙アスペクトにおける共通性を表現するのみであって、この 2 動詞の意味が他の点においても同じであることを意味しない。

ビルマ語では、(6)に示すとおり、この動詞 ʨaʔを用いた ŋà ʨû=gò ʨaʔ=tɛ̀「俺は彼を殺した」という文の後に、dà=bèmɛ̂ mă-ʨɛ̀=bú「しかし死ななかった」という文を続けることが可能である。

(6) ŋà ʨû=gò ʨaʔ=tɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-ʨɛ̀=bú.
1SG 3SG=OBJ 殺す=RLS しかし NEG-死ぬ=NEG
「僕は彼を殺した。しかし、死ななかった。」

ここでは、動詞 ʨaʔがその意味の中に結果事象として含む「死ぬ」という状態変化が否定されている。最初の文を「前件文」、それに続く文を「後件文」と呼ぶことにすれば、後件文において使われる動詞は、(6)の ʨɛ̀「死ぬ」のように、前件文の動詞の結果部分を表す動詞であることが多い。しかし、言語によっては、「V した。しかし、V することができなかった」のように前件文の動詞の可能否定表現を後件文として用いることによって、結果を否定することができる。例えば、次のビルマ語例(7)では、(6)が表す状況と同じく、結果がキャンセルされている。V=lô mă-yâ=bú は不許可や状況的な不可能を表す表現である。

(7) ŋà ʨû=gò ʨaʔ=tɛ̀. dà=bèmɛ̂ ʨaʔ=lô mă-yâ=bú
1SG 3SG=OBJ 殺す=RLS しかし 殺す=ACM NEG-得る=NEG
「僕は彼を殺した。しかし、殺すことができなかった。」

例(6)や(7)では結果が否定されているので、(6)や(7)の事象キャンセルを、(5)を使って(8)のように表現してみよう。NOT[ ]は否定の作用している部分を表す。

(8)　Volition → Activity → NOT[Result]

また、言語によっては、(7)のような可能否定表現を使うと、動作そのものの開始を否定することができる場合がある。(9)はビルマ語の例である。

(9)　ŋà　thâ=dɛ̀.　dà=bèmɛ̂　thâ=lô　mă-yâ=bú
　　1SG　立つ=RLS　しかし　立つ=ACM　NEG-得る=NEG
　　「僕は立った。しかし、立つことができなかった。」

この文連続の意味する状況には 2 つの可能性がある。1 つは、動作者が立つための動作を開始したが、例えば脚が痛くて、最終的な立った状態にまで至らなかったという状況である。最終的な立った状態は結果の部分と考えることができるから、この状況を、(8)と同じく(10)のように表示することができる。

(10)　Volition → Activity → NOT[Result]

もう 1 つは、動作者が立とうとしたが、すなわち、立つという動作を行うための意志を持ってはいたが、脚に力が入らなかった等の理由で、まったく動けなかったという状況である。この状況は、(11)のように表示することができる。

(11)　Volition → NOT[Activity → Result]

ここでは、動作そのものが否定され、否定されないのは意志のみである。ビルマ語において、このような、動作そのものが開始しないという解釈は、thâ「立つ」以外に、thàiɴ「座る」、pyé「走る」、ɕauʔ「歩く」、yì「笑う」のような、日常的によく行われる基本的な動作を表す自動詞でのみ可能である(Kato 2014, 加藤 2015)。

ビルマ語の事象キャンセルについて、Kato (2014)と加藤(2015)は、ビルマ語の意志動詞は終端への到達(reaching of the end point)を意味論的に含意(entail)しないと考えた。そのためにビルマ語では、意志動詞の意味構造における結果部分を否定することが可能になると一般化した。(11)に示したようなキャンセルについては、日常的な単純な動作そのものが終端と見なされたときに可能となると解釈した。

注意すべきは、ビルマ語のような、事象キャンセルが広範に容認される言語においても、(12)のように表示されるような、意志から結果までを含めた動作の過程すべてがキャンセルされることはないということである。したがって、(9)は、最初から立つ意志がなかった状況を表すことはない。

(12)　NOT[Volition → Activity → Result]

これはおそらく、Grice (1975)の言う「質の公理」(maxim of quality)に違反するからだろう。(12)が表すような事象キャンセルがもし可能であれば、前件文が表す内容は嘘だったことになる。これは質の公理に違反する。だから、当然のことながら、ビルマ語においても、(13)や(14)のように前件文の動詞をそのままの形で後件文において否定することは許されない[2]。(7)や(9)の後件文においては、前件文の動詞を用いて否定文を作っているが、動詞をそのまま否定しているのではなく、可能表現と共起させて否定していることに注意されたい。

(13)　*ŋà　thâ=dɛ̀.　dà=bèmɛ̂　mă-thâ=bú.
1SG　立った=RLS　しかし　NEG-立つ=NEG
「僕は立った。しかし、立たなかった。」

(14)　*ŋà　ṯû=gò　ṯaʔ=tɛ̀.　dà=bèmɛ̂　mă-ṯaʔ=phú.
1SG　3SG=OBJ　殺す=RLS　しかし　NEG-殺す=NEG
「僕は彼を殺した。しかし、殺さなかった。」

さらに、事象キャンセルの現象においては注意すべき重要な点がある。それは、事象キャンセルが、意志的な(volitional)動作の場合にしか起きないということである。次のビルマ語の例を見ていただきたい。

(15)　*ŋà　ṯè=dɛ̀.　dà=bèmɛ̂　ṯè=lô　mă-yâ=bú
1SG　死ぬ=RLS　しかし　死ぬ=ACM　NEG-得る=NEG
「僕は死んだ。しかし、死ぬことができなかった。」

この(15)は容認されない。それは、動詞 ṯè「死ぬ」が無意志動詞であることに原因があると考えられる。この点に関して、Kato (2014)と加藤(2015)は、事象キャンセルが意志動詞(volitional verb)にしか生じないという一般化を行った。これには普遍性が見られるようであり、日本語については Tsujimura (2003)や江連(2013)に指摘がある。通言語学的には、Martin (2020)が、事象キャンセル(Martin の言葉では zero-change use of causative predicates「使役述語のゼロ変化用法」)が使役述語(causative predicate)のうち動作主用法(agentive use)にのみ起きるという一般化を行っている。ビルマ語を含む東南アジア大陸部諸言語においては、一般的に、意志性(volitionality)すなわち動作主性(agentivity)が動詞レベルで指定されている。言い換えると、意志動詞(volitional verb)と無意志動詞(non-volitional verb)がはっきりと分かれて

[2] 最近の言語学の論文では、文脈的に容認されないことを「#」で示すことが多い。この記号を使うならば、(11)と(12)は、「*」を使わず、後件文に「#」を付すべきところである。しかし、東南アジア大陸部諸言語では、容認度の低さが統語論、意味論、統語論といったいかなる言語学上のレベルに帰するかを判断しにくいことがままあるため、本章ではこのような場合においても「*」を用いることにする。

いる[3]。そのような言語、例えばビルマ語についての「事象キャンセルは意志動詞にしか起きない」という一般化は、「事象キャンセルは述語の動作主用法(agentive use)にしか起きない」という一般化とほぼ同義である。しかし、Sato (2021)が示したインドネシア語の事例[4]のように、言語によっては、同じ動詞が動作主性を持つ場合と持たない場合とがあり、そのような言語を含めて考えれば、述語が動作主性を持つ場合にのみ事象キャンセルが可能であるという Martin (2020)の一般化のほうがより普遍性を持つ。Martin の一般化を、「事象キャンセル」という用語と(4)に示した RRG の論理構造(logical structure)を用いて表現すれば、「事象キャンセルは LS に DO を持つ場合にのみ可能である」ということになる。

このように、事象キャンセルにおいては、(8)の表示のように、意志的な述語における結果が否定される。加えて、比較的稀な事例として、(11)に示したように意志的な述語における動作が否定されることもある。では、より一層細かく観察すると、事象キャンセルにはどのようなケースがあるのか。Kato (2014)と加藤(2015)で示したビルマ語の様々な事象キャンセルを参考にすると、より具体的には、通言語的に少なくとも次の(a)から(l)に挙げるような事象キャンセルが存在すると考えられる。ビルマ語においては、話者による判断の差はあるものの、これらすべてが完全に容認可能あるいはそれに準じる容認度を示す。なお、下記の各ケースに示す日本語の事象キャンセル例は、それが容認される言語における事象キャンセルを直訳したものというように捉えていただきたい。日本語においてこれらの文連続が容認されるとは限らない。

(a) 対象物の物理的変化が否定されるケース。「殺した。しかし、死ななかった」「燃やした。しかし、燃えなかった」のような、語彙的使役動詞を用いた事象キャンセルである。「殺す」に対する「死ぬ」、「燃やす」に対する「燃える」の部分、すなわち結果の部分が否定される。Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

(b) 対象物に対する知覚が否定されるケース。「見た。しかし、(暗くて)見えなかった」「聞いた。しかし、(周りがうるさくて)聞こえなかった」のような事象キャンセルである。

---

[3] 意志・無意志を随意・不随意という用語に置き換えることも可能である。随意・不随意という用語を用いた研究として、例えば三上(1984)、坂本(1985, 1994)、峰岸(1986, 2007)がある。このうち動詞分類としての随意動詞・不随意動詞という用語を用いているのは坂本(1985, 1994)である。峰岸(1986)はさらに進んでクメール語の動詞を「「する」動詞」「「なる」動詞」という用語を用いて分類している。峰岸(1986)は「する」「なる」という用語を用いることについて、「クメール語の「する」動詞は、行為の企てを含意はするが、行為の達成までは含意しない。外的状況によってはうまくいかない行為もあるので、厳密には「意志」により「随意」には行えない」という理由を挙げる(p. 48)。この指摘は、東南アジアの言語で意志動詞の表す事象が成立しない場合もあることを早い時期に示唆した点で注目に値する。なお、峰岸(2007: 211)によれば、随意動詞・不随意動詞という用語は「不随意筋」(involuntary muscle)という用語に着想を得て作られた造語であるという。

[4] Sato (2021)によれば、例えばインドネシア語の他動詞 menutup「閉める」は、意志的な行為にも非意志的な行為にも用いることができる。

このケースでは、「見ようとする動作」や「聞こうとする動作」は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

(c) 対象物の移動が否定されるケース。「(小石を)投げた。しかし、(小石は手にくっついて)飛んでいかなかった」「(山芋を)抜いた。しかし、抜けなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、「小石を飛ばすための動作」や「山芋を抜こうとする動作」は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

(d) 対象物との接触が否定されるケース。「(彼を)叩いた。しかし、(彼に手が)届かなかった」「彼を蹴った。しかし、(彼に足が)届かなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、「手を動かす動作」や「脚部を動かす動作」は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

(e) 移動において目的地への到達が否定されるケース。「(東京に)行った。しかし、(東京に)着かなかった」「(ここに)来た。しかし、(ここに)着かなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、目的地に向かう移動自体は既に開始されているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

(f) 作成を表す動作において作成物の出現が否定されるケース。「(人形を)作った。しかし、(最終的に人形は)出来上がらなかった」「(家を)建てた。しかし、(最終的に家は)出来上がらなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、人形や家は途中までは出来上がっている。途中まで作成した動作は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

(g) 対象物の獲得が否定されるケース。「(本を)買った。しかし、入手できなかった」「(金を)盗んだ。しかし、入手できなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、「書店に入って本の有無を確かめる動作」や「金を盗むために他人の家に押し入る動作」は既に行われている。そのため、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

(h) 発話において発声が否定されるケース。「話した。しかし、(恐怖で)声が出なかった」「歌った。しかし、(極度の緊張のため)声が出なかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、声を出すための筋肉活動が既に行われていたが声が出なかった場合と、筋肉活動が一切行われなかった場合の 2 通りが考えられる。前者は Volition → Activity → NOT[Result]と表示でき、後者は Volition → NOT[Activity → Result]と表示できる。

(i) 飲食において飲食物の摂取が否定されるケース。「(魚を)食べた。しかし、(まずくて)喉を通らなかった」「(酒を)飲んだ。しかし、(まずくて)喉を通らなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、飲食物を口に入れるまでの動作は行われている(「食べる」の場合は咀嚼も行われている可能性がある)から、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

(j) 自己完結的な動作の最終状態が否定されるケース。(9)を(10)のような意味で解釈するようなケースである。すなわち、「立った。しかし、(身体を動かし始めたものの、脚が痛くて)直立した姿勢には至らなかった」「座った。しかし、(身体を動かし始めたものの、

脚が痛くて)着席した姿勢には至らなかった」といった事象キャンセルである。このケースでは、身体を動かす動作は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

(k) 自己完結的な動作の開始が否定されるケース。(9)を(11)のような意味で解釈するようなケースである。すなわち、「立った。しかし、(体に力が入らず、)まったく動けなかった」「座った。しかし、(脚の痛みが強すぎて、)まったく動けなかった」といった事象キャンセルである。このケースでは、身体を動かす動作そのものが開始していないから、Volition → NOT[Activity → Result]と表示できる。

(l) 使役行為における被使役者の動作や感情が否定されるケース。「(彼を)踊らせた。しかし、(彼は)踊らなかった」「(彼を)行かせた。しかし、(彼は)行かなかった」というような、使役を表す述語を前件文に使った事象キャンセルである。このケースでは、「踊る」「行く」といった動作を被使役者に行わせるための命令や指示などの発話行為は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。「踊る」「行く」といった動作が Result 部分に相当する。また、「(彼に)売った。しかし、(彼は)買わなかった」「(彼に)与えた。しかし、(彼は)受け取らなかった」における「売る」や「与える」のように、被使役的な動作(つまり「売る」にとっての「買う」、「与える」にとっての「受け取る」のような動作)を意味に含む動詞を前件文に使った事象キャンセルもここに含めることができる。売買や授受のための交渉が、発話あるいは文書のやり取り等の動作によって既に行われているから、これも Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。「買う」「受け取る」といった動作が Result 部分に相当する。

この中には、(h)の発声や(k)の自己完結的動作の開始のように、Volition → NOT[Activity → Result]と表示できるものがあるので、事象キャンセルで否定され得る部分の最大値は「意志を除いた部分」であると言える。しかし、他のケースは Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

ここで、Volition → NOT[Activity → Result]と表示できる(h)と(k)のケースについて、ビルマ語に即して詳しく考えてみる。(k)のタイプの事象キャンセルが可能な動詞は、既に述べたように、thâ「立つ」以外に、thàiɴ「座る」、pyé「走る」、ɕauʔ「歩く」、yì「笑う」のような、日常的によく行われる基本的な動作を表す自動詞である。注意すべきは、これらの動詞のすべてが、(j)の自己完結的な動作の最終状態が否定されるケースでも使用可能なことである。具体的には、「立とうとして途中まで身体を動かしたが、直立した状態にならなかった」「座ろうとして途中まで身体を動かしたが、着席した状態にならなかった」「走ろうとして脚を交互に動かしたが、“走る”と呼べる速度に達しなかった」「歩こうとして脚を出したが、移動はできなかった」「笑おうとして顔の表情を変えたが、“笑う”と呼べる表情にまで達しなかった」といった状況を表すことができるのである。これらはすべて(j)のタイプの事象キャンセルが表す状況であり、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。また、(h)の

発声が否定されるケースにおいても、上で述べたように、Volition → NOT[Activity → Result]だけでなく Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる場合もある。このようなことを考えると、Volition → NOT[Activity → Result]と表示できるような事象キャンセルは、一部の動詞にのみ見られる特殊なケースだと言えるのではないか。このようなケースにおいては、Activity そのものが Result の一部として捉えられていると見なすことにしよう。

以上の議論から、本節の最初に設定した「事象キャンセルで何が否定されるのか」という問いに対して次のように答えることができる。事象キャンセルによって否定されるのは、Volition → Activity → Result という流れのうち結果の部分である(特殊なケースでは動作も結果に含む)。そして、事象キャンセルによって表されるのは、動作者が何らかの結果を目論んで動作を遂行したのにその結果が生じないという意味である(特殊なケースでは、動作者が動作を遂行する意志を持ったのにその動作が遂行されないという意味にもなる)。

さらに本章では、上の(a)から(l)で論じた様々な事象における「Activity → Result」の部分をすべて Vendler (1957)の言う達成(accomplishment)に含めて考える。これらの中には、拠って立つ分析の枠組みや採用する分類基準によっては到達(achievement)あるいは動作(activity;「活動」と訳すほうが正確かもしれない)と捉えられるものも含む。例えば、日本語の「殺す」の表す事象は到達と見なされ得るし、「見る」の表す事象は通常は動作(活動)と見なされる。しかし、事象キャンセルの観点からはこれらを一括して達成と捉えるほうが便利であるため、本章では、上で示した「Activity → Result」の部分をすべて達成と呼び、この部分を語彙化した動詞を達成動詞と呼ぶ。また、Kato (2018)の冒頭(p. 173)に述べたように、言語が違えば、表面上は似た意味の動詞が Vendler の 4 分類における異なるカテゴリーに入るのはよくあることである。したがって、(a)から(l)の「Activity → Result」の部分を語彙化した動詞がすべて達成動詞と解釈され得るような言語があったとしてもおかしくはない。

3. 事象キャンセルが可能な言語

事象キャンセルにおいて観察されるような、最終局面までたどりつかない達成(accomplishment)を、この分野における重要な研究である Martin (2019)は、不成就達成[5](non-culminating accomplishment)と呼んでいる。彼女によれば、不成就達成は、ヒンディー語(Hindi)、タミール語(Tamil)、北京語(Mandarin Chinese)、韓国語(Korean)、日本語(Japanese)、タイ語(Thai)、ビルマ語(Burmese)、セイリッシュ諸語(Salish languages)、ワカシャン諸語(Wakashan languages)、タガログ語(Tagalog)、マラガシ語(Malagasy)、アタヤル語群(Atayal)、カラチャイ・バルカル語(Karachay-Balkar)、アブイ語(Abui)などで報告されているという(各言語の当該現象について報告した文献については Martin の当該論文を参照されたい)。これ以外にも、マラーティー語(Marathi; Pardeshi et al. [2014])や、下で述べるモン語(Mon)、白メオ語(White Hmong)などをここに加えることができる。これらの言語では、多かれ少なかれ事象キャンセルの現象が見

[5] 不成就達成というのは筆者による暫定的な訳語である。

られると言ってよいだろう。

東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセルに言及した研究としては、タイ語(Thai)についての Koenig and Muansuwan (2000)、Jenny (2001)、Thepkanjana and Uehara (2009)、Thepkanjana and Uehara (2010)、ビルマ語(Burmese)についての Kato (2014)、加藤(2015)、Kato (2018)、モン語(Mon)についての Jenny (2005: 75–77, 132–134, 156–157)、白メオ語(White Hmong)についての Jarkey (2015: 153–156)などがある。東南アジア島嶼部の諸言語でも事象キャンセルの存在が報告されており、例えば、タガログ語(Tagalog)についての Dell (1983)、Santiago (2015)、インドネシア語(Indonesian)についての Sato (2021)などがある。

一方で、Martin (2019)によれば、英語(English)やドイツ語(German)などのゲルマン諸語(Germanic languages)やフランス語(French)などのロマンス諸語(Romance languages)では、不成就達成(non-culminating accomplishment)が、より制限されたセット(a more restricted set)でしか起きないという。言い換えれば、これらの言語では事象キャンセルが起きにくい。英語については、池上(1981)や Ikegami (1981)において日本語と比べたときの事象キャンセルのしにくさについて詳しく論じられている。同様に、Tai (1984)が中国語との比較において、また Singh (1991)がヒンディー語との比較において、英語の事象キャンセルのしにくさに言及している。例えば Ikegami (1985)は、英語の(16)と(17)が容認されないことを指摘している。同様に、Nathan Badenoch (p.c., 2022 年 8 月 21 日)によれば、英語では、(16)や(17)のような過去形を取って現れた動詞だけでなく、(18)のように仮定節の中に非過去形で現れた動詞の意味をキャンセルすることもできない。(18)を適切にするには“Even if you try to kill that guy, he won’t die.”と言い換えなければならないという。

(16) *I burned it, but it didn’t burn.
(直訳: 私はそれを燃やしたが、燃えなかった。)

(17) *John killed Mary, but Mary didn’t die.
(直訳: ジョンはメアリーを殺したが、メアリーは死ななかった。)

(18) *Even if you kill that guy, he won’t die.
(直訳: たとえそいつを殺しても、死なないだろう。)

実は、事象キャンセルが可能とされている言語の中でも、事象キャンセルの容認度や事象キャンセルが適用できる動詞の範囲は言語によって非常に異なる。この点は先行研究においてあまり注目されてこなかった。しかし、一部の研究、例えば Thepkanjana and Uehara (2010)は英語と対照しながら中国語とタイ語の違いを論じており、Kato (2018)はビルマ語と日本語の事象キャンセルの違いを論じている。ビルマ語と日本語の違いを示すため、下の(19)から(26)に Kato (2018: 177–178)からビルマ語の例を引く。

(19) mí ɕô=dɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-làuɴ=bú.
火 燃やす=RLS しかし NEG-燃える=NEG
「(それを)燃やした。しかし、燃えなかった。」

(20) ṯû=gò ṯaʔ=tɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-ṯè=bú.
3SG=OBJ 殺す=RLS しかし NEG-死ぬ=NEG
「彼を殺した。しかし、死ななかった。」

(21) châ=dɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-câ=bú.
落とす=RLS しかし NEG-落ちる=NEG
「落とした。しかし、落ちなかった。」

(22) chó=dɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-có=bú.
折る=RLS しかし NEG-折れる=NEG
「折った。しかし、折れなかった。」

(23) hlɛ́=dɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-lɛ́=bú.
倒す=RLS しかし NEG-倒れる=NEG
「倒した。しかし、倒れなかった。」

(24) phwîɴ=dɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-pwîɴ=bú.
あける=RLS しかし NEG-あく=NEG
「あけた。しかし、あかなかった。」

(25) phyɛʔ=tɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-pyɛʔ=phú.
壊す=RLS しかし NEG-壊れる=NEG
「壊した。しかし、壊れなかった。」

(26) kaʔ=tɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-kaʔ=bú.
くっつける=RLS しかし NEG-くっつく=NEG
「くっつけた。しかし、くっつかなかった。」

ビルマ語では、上に挙げた(19)から(26)の事象キャンセルすべてが可能である。大部分の話者がこのような文連続を容認すると言ってよい。ところが、日本語はこれとはかなり違う様相を見せる。実を言えば、筆者の判断では、(19)から(26)の各例文につけた日本語訳はいずれも容認することができない。これだけでなく、これまでの研究で容認可能とされている多くの例文を筆者は不自然と感じる。例えば、池上(1981)が示した(1)の例は筆者の判断では非常に不自然である。そのような話者がいる一方で、事象キャンセルをかなり容認する日本語話者がいるのも事実である。また、事象キャンセルを容認する日本語話者であっても、用いる動詞によって適格性の判断が異なるという状況もある。

日本語話者の事象キャンセルに関する適格性判断については、宮島(1985)による非常に示唆的な研究がある。宮島は、様々な意味を持つ 16 個の動詞を使って(27)や(28)のような例文を作り、各 100 人の日本語話者からなる 3 つのグループ A、B、C に対してアンケートを行

い、それぞれの文について、「自然」「やや不自然だが使われる」「まったく不自然」のいずれであるかを尋ねた。アンケートに使われた文はグループ間で少しずつ異なる。(27)と(28)はいずれも A グループに対して尋ねた文である。

(27)　木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった。

(28)　太郎は次郎を殺したけれど、次郎は死ななかった。

宮島(1985)の報告によれば、被調査者 100 人のこれらの文に対する判断は表 1 に示すとおりである。

表 1: 「燃やす」を用いた例文(27)と「殺す」を用いた例文(28)に対する日本語話者の判断(宮島[1985]のデータに基づく)

	自然	やや不自然だが使われる	まったく不自然	計
例文(27)	30	48	22	100
例文(28)	7	18	75	100

池上(1981)は(1)の「燃やしたけれど、燃えなかった」を容認されると見なした。しかし、これに類似する(27)の「木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった」に対して、100 人中 70 人[48 人+22 人]が多かれ少なかれ不自然さを感じたことになる。一方、池上は「彼を殺したけれど、死ななかった」を容認されないと見なした。しかし、これに類似する(28)の「太郎は次郎を殺したけれど、次郎は死ななかった」に対して、100 人中 25 人[7 人+18 人]が「使われる」と判断したことになる。このことは、日本語の事象キャンセルの適否が簡単には判断できないことを物語る。そして重要なことは、「まったく不自然」と考えた母語話者が(27)では 22 人、(28)では 75 人と、いずれの場合にも少なからず存在したということである。この状況は、(19)から(26)の事象キャンセルが大部分の話者によって容認されるビルマ語の状況とはかなり異なると言えるだろう。さらに、次節に述べるように、事象キャンセルで表される状況は日本語とビルマ語とで大きく異なる。そのため、Kato (2018)は、日本語において事象キャンセルが容認される要因とビルマ語において事象キャンセルが容認される要因は別個に検討する必要があると考えた。第 4 節と第 5 節では、Kato (2018)で示した解釈を紹介した上で、より踏み込んだ考察を行う。

4. 日本語の事象キャンセル

前節では、事象キャンセルが可能な言語を挙げた上で、ビルマ語と日本語における事象キャンセルの容認度の違いを示した。この 2 言語を見れば想像がつくように、この現象の容

認度は言語によってかなり異なるのである。本節では、日本語の事象キャンセルの様相をKato (2018)に沿う形で観察する。日本語の事象キャンセルを取り上げるのは、この現象が多くの研究者によって研究されてきたからである。議論の過程で、日本語の事象キャンセルの特徴を、ビルマ語の事象キャンセルの特徴と比べる。そうすることで、日本語とビルマ語の事象キャンセルが容認度だけでなく、意味的にもかなり異なることが分かっていただけるだろう。以下ではまず、日本語の事象キャンセルについての先行研究における解釈を紹介する。

影山(1996: 275–291)は、この現象を語彙概念構造(lexical conceptual structure; LCS と略す)を用いて説明している。LCS は、生成文法理論における語彙アスペクトの表示方式であり、先に見た RRG における LS(logical structure)に相当する。影山によると、「殺す」「燃やす」のような使役的達成動詞(causative accomplishment verb)の語彙アスペクトは、LCS を用いると(29)のように表示できる。ここで、ACT ON は動作の部分に相当する。CAUSE は、その動作によって右側の事象が生じることを表す。BECOME は対象に生じる変化を表し、BE AT は最終的な状態を表す。

(29)　[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]

さらに影山(1996)は図 1 を示し、次のように論じる。英語では ACT ON すなわち動作の部分に視点が置かれる。一方，日本語では BECOME すなわち変化の部分に視点が置かれ、中国語では，BE AT すなわち最終的な状態に視点が置かれる。黒丸は視点の置かれる場所を表す。

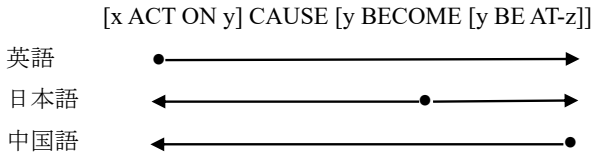

図 1: 影山(1996: 290)の「言語による視点の違い」による説明

影山(1996)の説明によれば、英語で事象キャンセルが難しく、日本語で可能である理由は、両言語の視点の置かれ方の違いにある。英語のように動作に視点が置かれる言語においては、動作の側から結果まで見ることになるため、結果の否定が不可能になるという。一方、日本語では変化部分に視点を置くから、動作の側から結果を見ない。そのためにキャンセルが可能になると主張する。また、中国語では、日本語よりもさらに右側に視点があるため、日本語よりも結果の否定が容易であるという。

Tsujimura (2003)は、日本語の語彙的使役動詞(lexical causative verb)は限界性(telicity)に関して未指定(underspecified)であり、限界的な解釈(telic interpretation)は会話の推意(conversational

implicature)から生じると考える。この解釈によれば、結果の生起(event realization)はあくまで推意であるために、事象キャンセルが可能だということになる。

佐藤(2005: 99–113)は、動作とその結果を意味構造に含む動詞が、メトニミーの作用によって動作のみを表すことになった場合に、事象キャンセルが可能になると考える。また、江連(2006)は、達成動詞(accomplishment)の動作部分に「焦点化操作」(focusing operation)がかかることによってこの現象が可能になると考える。同じく江連(2013)は、日本語の達成動詞は対象への力の働きかけまでを「主要意図作用域」(primary scope of agent's intention)とするためにキャンセルが可能になるとする。さらに、青木・中谷(2013)と Aoki and Nakatani (2013)は、日本語の語彙的使役動詞が限界性に関して未指定であるという Tsujimura (2003)の説を否定した上で、動詞の意味における「プロセス成分の強さ」(strength of the process component)が結果の否定の容認度を高めると主張している。

最後に山川(2004)は、日本語の達成動詞は達成を含意してはいるものの、達成された結果状態が曖昧であるためにキャンセルが可能であるとし、さらにその曖昧さは、結果状態に段階性があってその段階性が "non-trivial standard" (Kennedy and McNally 1999)を持つときに生じるとする。

以上が日本語の事象キャンセルに関する先行研究の解釈である。日本語においてこの現象が可能になる理由がいかなるものであるにしても、留意しておかなければならないのは、前節で述べたように、事象キャンセルの容認度が話者によって大きく異なるということである。日本語においては、特定の事象キャンセル例が適格か否かという単純な二分法で考えるべきではない。その点で、アンケートを用いた分析を行っている宮島(1985)、青木・中谷(2013)、Aoki and Nakatani (2013)の研究は評価されるべきである。さらに、Kato (2018)で論じたように、日本語の事象キャンセルは、ビルマ語の事象キャンセルと比べたとき、上で述べた容認度だけでなく、意味の細部においても異なる。日本語の事象キャンセルが表す意味は、ビルマ語のような言語と比べることによって、より一層明らかになる。以下では、こうした視点から、日本語の事象キャンセルに対する筆者なりの解釈を示す。

動詞 ṯaʔ「殺す」を用いたビルマ語の(6) ŋà ṯû=gò ṯaʔ=tɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-ṯɛ̀=bú「僕は彼を殺した。しかし、死ななかった」と、動詞「殺す」を用いた日本語の(28)「太郎は次郎を殺したけれど、次郎は死ななかった」を比べてみよう。ビルマ語の(6)は典型的に次のような状況を表す。「僕は彼を殺そうと思って、彼をナイフで突き刺した。しかし、彼は元気であり、死んでもいない」というような、動作が実際に「彼」に及んだけれども「彼」が元気であるような状況である。さらには、(6)は動作が対象に到達しなかった状況さえ表すことができる。それは、「僕は彼を殺そうと思ってナイフで突き刺そうとした。しかし、突き出したナイフは届かなかったので、彼は死ななかった」といった状況である。つまり、「彼」は無傷であってもよい。

一方、日本語の(28)を「自然」と考える話者は、例えば次のような状況を考えているのだと思われる。「太郎は次郎を殺そうと思って、次郎をナイフで突き刺した。次郎が動かなく

なったので、太郎は次郎が死んだと思った。しかし、次郎は奇跡的に命を取りとめた」。つまり、次郎がなかば死んだような状況である(言葉は悪いが、「半殺し」の状態である)。

ここでのビルマ語と日本語の違いは明白である。ビルマ語の場合、殺人のもくろみの対象となった相手は物理的影響を一切受けていなくてもよい。しかし、日本語の場合には、殺人の相手はなかば死んだような状態になっているのである。このような状況を思い浮かべた日本語話者は、(28)を「自然」と感じるのだろう。「なかば死んだような状態」と「死ぬ」という事象は異なる事象だから、後者(すなわち死んだこと)を否定しても、前者を否定したことにはならないのである。

次に、燃やす動作を表す動詞を用いたビルマ語の(19) mí ɛ̀ô=dɛ̀. dà=bèmê mă-làuɴ=bú「(それを)燃やした。しかし、燃えなかった」と日本語の(27)「木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった」を比べてみよう。(19)が典型的に表す状況は、「私は木の枝を燃やそうとしてマッチに火をつけた。その火を木の枝に当てたが、木の枝は湿っていたためまったく燃えなかった」あるいは、「私は木の枝を燃やそうとしてマッチに火をつけた。その火を木の枝に当てたが、風が吹いてきて火が消えてしまったため、木の枝は燃えなかった」というような、木の枝がまっく燃えていない状況である。

一方、日本語の(27)「木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった」を「自然」と考える話者の多くは、例えば、「私は木の枝に火をつけた。木の枝は少し燃えた。しかし，風が吹いてきたので、火が消えてしまった。そのため、木の枝は全部は燃えなかった」というような状況を考えているのだろう。

ここでもビルマ語と日本語の違いは明白である。ビルマ語の(19)が表す状況では、木の枝はまったく燃えていない。しかし、日本語の(27)は、木の枝が部分的には燃えた状況を表すのである。そのような状況を思い浮かべた日本語話者は、(27)を「自然」と感じるのだろう。「部分的に燃える」という事象と「全部燃える」という事象は異なる事象だから、後者を否定しても、前者を否定したことにはならないのである。

このような対照から分かるのは、ビルマ語では、使役的達成動詞の表す「死ぬ」や「燃える」といった変化がまったく生じていないという読みが可能[6]なのに対して、日本語においては、変化は、「なかば死んだような状態」あるいは「部分的にだけ燃えた状態」という形で、つまり、不完全な形で発生しているということである。これがビルマ語と日本語の大きな違いである。Martin (2019, 2020)は、ビルマ語の事象キャンセルにおけるような変化がまったく起きない解釈を「ゼロ変化解釈」(zero-change interpretation)と呼んでいる。

このように、日本語の事象キャンセルにおいては、不完全な形であれ、結果が生じているのだと考えられる。この点に関して極めて示唆的なのは、宮島(1985)の考察である。宮島は、先に述べた被験者へのアンケートに基づき、動詞による結果否定の容認度を、「自然」が 1 点、「やや不自然だが使われる」が 0.5 点、「まったく不自然」が 0 点として点数化し、それ

[6] Zhang (2018)によれば、中国語においても、達成動詞において変化がまったく生じていないという読みが可能である。

に人数の 100 を掛けて 100 点満点中の点数を出した。その結果を点数が低い順に並べて(30)に引用する。[ ]でくくった数値がその点数である。なお、宮島が挙げた動詞のうち、使役的達成動詞であると考えられないものは省いた。

(30) ころす[17.0]、おとす[22.0]、こわす[24.0]、ぬく[26.5]、あける[31.5]、わかす[34.5]、ひろげる[36.0]、いれる[45.3]、うごかす[46.0]、よわめる[46.0]、もやす[53.0]、かわかす[56.5]、ひやす[66.0]

この結果を、容認度の度合いによって 10 点ごとに分けて整理すると、表 2 のようになる。

表 2: 宮島(1985)の数値化に基づく動詞による容認度の差

10–19	20–29	30–39	40–49	50–59	60–
ころす	ぬく こわす おとす	ひろげる わかす あける	よわめる うごかす いれる	かわかす もやす	ひやす

表の右端近辺にある「冷やす」「乾かす」「燃やす」などは、結果事象が段階的構造(scalar structure)を持つ(scalar structure については、Hay, Kennedy and Levin [1999], Kennedy and McNally [1999, 2005], Tsujimura [2001]などを参照)。「冷やす」を例にとって考えると、その意味構造に含まれる結果である「冷えた状態」は「かなり冷えた状態」や「少ししか冷えていない状態」など、様々な段階を持つ。結果部分のこの特徴のおかげで「冷やす」は時間的な幅を持つことができ、そのため「5 分間冷やした」と言うことができる。「乾かす」と「燃やす」も同様で、「5 分間乾かした」「5 分間燃やした」と言うことができる。

一方、左端近辺にある「殺す」「抜く」「壊す」「落とす」などは、結果事象が段階的構造を持たない。例えば「死んだ状態」には「かなり死んだ状態」や「少ししか死んでいない状態」などの段階は(通常は)ない。この特徴のため、動詞「殺す」の結果としての「死んだ状態」は時間的な幅を持つことができず、「5 分間殺した」と言うことができない。「抜く」「壊す」「落とす」も同様である。反復事象ではなく単一事象としての読みで「5 分間抜いた」「5 分間壊した」「5 分間落とした」と言うことはできない。

動詞の表す結果が段階的構造を持つ場合、実際に生じた結果のレベルが想定したレベルに達していないという状況を話者が想像しやすい。想定したレベルへの到達を「完全な生起」という言葉で表し、そのレベルに到達していないことを「不完全な生起」(incomplete realization)という言葉で表すと、段階的構造の場合、「完全な生起」(complete realization)が実現せず、「不完全な生起」で終わったという状況が想像しやすいのである。一方、事象が段階的構造を持たない場合、「完全な生起」と「不完全な生起」を話者が想像することは困難である。結論として、日本語では、結果の部分について、「完全には X しなかった」という

解釈が容易なときに結果の否定が容認されやすいということが言える。「完全にはXしない」すなわち「不完全にXする」は、「完全にXする」を含意(entail)しないから、完全にXすることが想定されていた場合に、「完全にはXしなかった」と言っても、矛盾が生じない。日本語においては、このような会話的推意(conversational implicature)が働いて事象キャンセルを可能にしているのではないかと思われる。(1)の「燃やしたけれど、燃えなかった」を例に取ると、(31)の括弧に入れた部分が推意の部分である。

(31)　(完全に燃えることを想定して)燃やしたけれど、(完全には)燃えなかった。

推意が働いているという点において、日本語の事象キャンセルは多分に語用論的な現象であると言える。ただし、不完全な生起の読みを可能にする要因に動詞の段階的構造も関わっているから、意味論的な現象としての側面もある。Kato (2018)は、上で見てきたような議論を経て、結果の不完全な生起という読みが日本語の事象キャンセルを可能にすることを指摘した。この「完全にはXしなかった」という読みは、Martin (2019)の言う非最大達成(non-maximal accomplishment)[7]に相当する。Martinは、非最大達成が、ゼロ変化解釈が可能な不成就達成とは異なる現象であることを、意味論の観点から詳細に議論している(特に第6節)。Martinによれば、非最大達成の読みは、後件文によって粒度(granularity)が粗い粒度レベル(coarse granularity level)から細かい粒度レベル(fine granularity level)へ移行することで起きるという。上の説明に則して言えば、「完全にXする」ことの想定が粗い粒度レベルに相当し、「不完全にXした」という認識が細かい粒度レベルに相当する。Martinの説明は筆者の解釈と軌を一にするものである。

さらに、Kato (2018)を出版した後に、杉岡洋子(慶應義塾大学名誉教授)から、「冷やす」「乾かす」「燃やす」のような動詞が表す動作においては、冷える・乾く・燃えるといった結果事象が動作者の手を離れて放置された状態で生起するという点においてコントロールがしにくいため、「完全にはXしない」という推意が働きやすいのではないかという指摘を受けた。おそらくこの指摘は正しい。「弱める」や「広げる」なども段階的構造を持つ動詞であるが、宮島の調査結果によれば、「冷やす」「乾かす」「燃やす」に比べると事象キャンセルの容認度が低い。「(スイカを)冷やす」「(着物を)乾かす」「(木の枝を)燃やす」といった動作においては、動作者は対象物を放置するのが典型的な状況である。一方で、「(火を)弱める」や「(穴を)広げる」では、対象物は放置されずに動作者のコントロールの及ぶ場所にあることが多い。対象物が動作者の手を離れて放置された状況では結果事象に対する動作者のコントロールがしにくいので、想定した結果が不完全にしか起きなかったという状況が思い浮かべやすい。表2における「弱める」「広げる」と、「冷やす」「乾かす」「燃やす」の差異は、この点に求めることができる。

[7]「非最大達成」(non-maximal accomplishment)も「不成就達成」(non-culminating accomplishment)と同様、筆者による暫定的な訳語である。

池上(1981)と Ikegami (1985)が指摘している日本語と英語の違い、すなわち日本語では事象キャンセルができるが英語では事象キャンセルができないという違いは、おそらく、英語の達成動詞が特別な文脈がない限り結果の完全な成立を表すため、「完全には X しない」という推意を働かせることができないからだと思われる。英語の達成動詞が結果の完全な成立を表すのが、意味論的な含意(entailment)のためなのか、それとも、不完全な成立という推意自体が英語の中で語用論的に禁じられているためなのかは、分からない。

日本語話者の中には，(27)や(28)の文を聞いて、ビルマ語話者のように、結果がまったく生じないという状況を思い浮かべる話者がいるのも確かである。しかし、そのような話者が少数であることは、宮島の行った調査において、全般的に、事象キャンセル文を「自然」と見なす答えが多くなかったことに現れている。以上の議論から、次のようなことが言える。日本語の事象キャンセルにおいては、「不完全な生起」であっても結果は生起しているのであるから、事象キャンセルを容認する日本語話者の日本語においても、達成動詞は結果を含意(entail)するのである。したがって、厳密に言えば、日本語の「事象キャンセル」において、結果はキャンセルされていないと言うことができる。キャンセルされていないのだから、日本語の「事象キャンセル」は、第 2 節の(a)から(l)のいずれにも当てはまらない。なお、中国語の不成就達成を詳細に論じた Zhang (2018: 18, 49, 235)は、「燃やす」のような動詞において、日本語が中国語と同じようにゼロ変化解釈(zero-change interpretation)を許すと考えているが、ここまでの議論から明らかなように、日本語は中国語と違ってゼロ変化解釈を許さないと考えるべきである。

Kato (2018)では、「不完全な生起」という読み以外に、もうひとつ事象キャンセルの容認度を上げる要因について指摘した。宮島(1985)の調査結果によれば、副詞「一生けんめい」(宮島の漢字表記にしたがう)を含む(33)は(32)よりも容認度が高い。(32)は,「自然」が 11 人、「やや不自然だが使われる」が 22 人、「まったく不自然」が 66 人であるが、(33)は、「自然」が 31 人、「やや不自然だが使われる」が 36 人、「まったく不自然」が 33 人であり、「自然」および「やや不自然だが使われる」の数が増えている。

(32)　柿の実を落としたけれど、落ちなかった。

(33)　一生けんめい、柿の実を落としたけれど、落ちなかった。

「落ちる」という事象が不完全に起きるということは考えにくいから，(33)の容認度がより高いことを、結果の不完全な生起の観点から説明するのは難しい。宮島(1985) は、副詞「一生けんめい」により、動作に焦点が当たったことがその原因だと考える。筆者も Kato (2018)でこれが原因であると考えた。「一生けんめい」は意味的に動作の部分のみを修飾する副詞だから、動作に焦点を当てる。そのため、結果の部分が非焦点化(defocus)される、すなわち目立たなくなるのだろう。これは語用論的な効果である。さらに、結果の部分が目立たなく

なることによって、その後にそれを否定する表現を置いても許容される余地が生まれるのだろう。結果の非焦点化を引き起こす副詞的要素としては,「一生けんめい」「こっそり」「おそるおそる」などのほか、「真剣に」「急いで」「力を込めて」なども候補になる。

しかしながら宮島(1985)の調査で、(33)を「まったく不自然」と考えた被調査者が 30%以上もいたという事実は無視できない。「結果の非焦点化」は、事象キャンセルの容認度を高める要因としては、「結果の不完全な生起」よりは弱いと考えられる。したがって、「結果の非焦点化」は、日本語の事象キャンセルを可能にする要因において、副次的な要因であると考えられる。なお、Kato (2018)では述べなかったが、副詞的要素がなくても、文脈の効果によって結果の非焦点化が起きる可能性もあると思われる。

ここまでの議論を下記(i)と(ii)にまとめる。

(i) 日本語においては、語用論的に、「完全には X しなかった」という推意、つまり、結果が部分的にのみ起きたという推意が働くことによって事象キャンセルが可能になる。そのため、「結果の不完全な生起」(incomplete realization of the result)の解釈がしやすい事象の場合に事象キャンセルが可能になりやすい。これが日本語の事象キャンセルを可能にする基本的な要因である。日本語の事象キャンセルが表す状況においては、結果事象は部分的だとしても起きている。これは、結果事象がまったく起きていないという解釈が可能なビルマ語の事象キャンセルとの大きな違いである。

(ii) 日本語では、「結果の非焦点化」も事象キャンセルを可能とする副次的な語用論的要因として働いている。

ここで、先に紹介した先行研究について振り返ってみよう。影山(1996)は、日本語では Lexical Conceptual Structure の BECOME に視点が置かれるので、ACT ON に視点が置かれる英語よりも、結果否定の容認度が高くなるとする。しかし、これだけでは、宮島(1985)が報告した、動詞によって容認度が異なる事実が説明できない。Tsujimura (2003)は，日本語の語彙的使役動詞(lexical causative verb; =使役的達成動詞)は限界性に関して未指定であると述べる。しかし、先ほど述べたとおり、多くの日本語話者において達成動詞は部分的ではあっても結果を含意(entail)するから、この説は妥当ではない。これは Aoki and Nakatani (2013)も指摘するとおりである。佐藤(2005: 99–113)のメトニミー説と江連(2006)の焦点化操作(focusing operation)説は、上で述べた「結果の非焦点化」と同じ方向の考え方であり、部分的には正しいと言えるが、これのみによっては動詞によって容認度が異なるという宮島(1985)の調査結果を説明することができない。江連(2013)の「主要意図作用域」による説明も同様である。青木・中谷(2013)と Aoki and Nakatani (2013)はプロセス成分の強さ(strength of the process component)によって説明しようとする。これは言い換えれば、達成における動作部分の強さによって説明する試みであるが、動詞による容認度の違いは、むしろ「結果の不完全な生起」という結果の部分に重点を置いて説明すべきであると思われる。先行研究の中で唯一、山川(2004)は結果状態に段階性があるときにキャンセルが生じることを指摘しており、この指摘

は的を射ている。ただし、結果の非焦点化が考慮されていないこと、また、結果状態の段階性が “non-trivial standard” (Kennedy and McNally 1999)を持つときに生じるとしていることに再考の余地がある。Kennedy らの trivial standard と non-trivial standard は、段階性における終端(end-point)の有無によって特徴づけられる概念である。trivial standard は終端があり、non-trivial standard は終端がなく文脈依存的である。「完全には X しなかった」という推意が働くためには、終端があるほうがよいとも言えるのであり、したがってむしろ、trivial standard であるほうがキャンセルがしやすい可能性さえある(trivial standard の概念が事象キャンセルの可否に関与しているか否かについては今後の検討を要する)。

先行研究の多くは、日本語の事象キャンセルの容認可能性を 1 つの観点だけから説明しようとした。しかし、上の(i)に示した要因は結果部分の意味にかかわるものであり、逆に、(ii)に示した要因はその結果部分そのものを目立たなくさせるものなので、これらを 1 つにまとめることは不可能だろう。

さらに付け加えれば、日本語の場合、事象キャンセルの主要な要因である(i)を適用できる度合いが母語話者によって大きく異なるのだと思われる。先ほど述べたように、筆者の日本語では、(19)から(26)の各例文につけた日本語訳はいずれも容認することができないし、池上が不可能とした「彼を殺したけれど、死ななかった」のみならず、池上が可能とした「燃やしたけれど、燃えなかった」のようなキャンセル文も容認できない。このような話者は、不完全に生起した結果であったとしても結果は結果であると捉え、事象キャンセルを容認しないのだろう。一方、筆者のまわりにも、事象キャンセルを広範に許す日本語話者がいる。話者によっては、宮島が示した例文すべてを容認可能と判断する。このような話者は、結果の微少な不完全さにも敏感に反応し、それを「完全な生起」とは異なる出来事であると見なすのだろう。たとえ語用論の問題だとしても、同じ言語の中でなぜ話者によってこのような大きな違いが出るのかは説明が難しい問題である。

5. ビルマ語の事象キャンセルをどのように説明するか

第 3 節でビルマ語と日本語の事象キャンセルの容認度が異なることを指摘し、第 4 節では日本語の事象キャンセルについてビルマ語と対照しながら詳しく考えた。本節では、ビルマ語の事象キャンセルについて考察する。ビルマ語で事象キャンセルが可能になる理由については、意味論的観点による解釈と、語用論的観点による解釈の 2 つがあると筆者は考えている。以下の節では、この 2 つの解釈について論じる。

議論に入る前にビルマ語の事象キャンセルの実例を 4 つ挙げておく。(34)から(36)は Google を用いた検索で見つかったもの、(37)は文学雑誌に載った文学作品からの例である。

(34) chìdauʔ=nê　ʔáyâpáyâ　shâuɴkàɴ=bí　phwîɴ=dè.　mă-pwîɴ=bú.
脚=で　思い切り　蹴りあげる=て　あける=RLS　NEG-あく=NEG
「ドアを脚で思い切り蹴りあげてあけた（意訳：あけようとした）。（しかし）あかなかった。」(https://pyomadi.com/article/67560)

(35) weiʔ châ=dɛ̀ mă-câ=bú shò=yìɴ bâjâuɴ khɛʔkhɛ́ nè=yâ=dà=lɛ́.
体重 落とす=RLS NEG-落ちる 言う=if なぜ 困難な いる=must=の=か
「体重を減らした(意訳:減らそうとした)、(しかし)減らないという場合、(その問題が)なぜ困難なのだろうか。」(http://www.shwechitthu.com/2019/02/blog-post_53.html)

(36) míd̪aʔpaiʔ=nḛ̂ lùzû khwɛ́=dɛ̀. mă-kwɛ́=bú.
放水パイプ=で 集団 割る=RLS NEG-割れる=RLS
「放水パイプで人々を解散させた(意訳:解散させようとした)。(しかし)解散しなかった。」(https://www.facebook.com/MARTINSWEMARTIN)

(37) cănɔ̀=gâ pyàɴ=mé=laiʔ=t̪ì.
私=SBJ 帰る=尋ねる=きっぱり=RLS

d̪ôd̪ɔ̀ ʔăt̪àɴ=hà thwɛʔ pɔ̀ mă=là=bà.
しかし 声=TOP 出る 現れる NEG=来る=POL
「私は尋ねかえした(意訳:尋ねかえそうとした)。しかし、声が出てこなかった。」(Myawadi, 1954 年 3 月号: 171 頁)

5.1. 意味論的観点からの説明

Kato (2018)では、Tsujimura (2003)の日本語の事象キャンセルについての解釈が、実はビルマ語に対して有効だと考えた。この解釈は語彙アスペクトの観点を用いるので、意味論的な説明である。

Tsujimura (2003)は、日本語の語彙的使役動詞(lexical causative verbs)は限界性(telicity)に関して未指定(underspecified)であると述べ、限界的な解釈(telic interpretation)は会話の推意(conversational implicature)から生じると考える。つまり、Tsujimura は、日本語において限界性が未指定であるからこそ結果のキャンセルが可能だと見なすのである。先述のとおり、多くの日本語話者において達成動詞は不完全ではあっても結果を含意(entail)するから、この説は妥当ではない。この説はむしろ、ビルマ語の事象キャンセルの説明として有効であろうというのが Kato (2018)の主張である。ビルマ語では、(19)から(26)に示したように、様々な動詞でキャンセルが可能である。なおかつ、第 4 節で示したように結果がまったく生じないという解釈が可能である。ビルマ語の例(6) ŋà t̪û=gò t̪aʔ=tɛ̀. dà=bèmḛ̂ mă-t̪ɛ̀=bú「僕は彼を殺した。しかし、死ななかった」の解釈において殺人の相手が無傷であってもよいこと、また、例(19) mí ɛô=dɛ̀. dà=bèmḛ̂ mă-làuɴ=bú「(それを)燃やした。しかし、燃えなかった」の解釈において、対象物がまったく燃えていなくてもよいことを思い出していただきたい。実は、これまでに一般言語学において、例えば Singh (1991)や Altshuler (2014)によって検討されてきた不成就達成(non-culminating accomplishment)の多くは、日本語の「結果の不完全な生起」のように、部分的な結果の生起を含むものであるように思われる。しかし、ビルマ語の不成就達成には、結果事象がまったく生じない場合がある。すなわち、Martin (2019, 2020)の言う「ゼロ変化解釈」(zero-change interpretation)がビルマ語では可能なことをここで強調しておきたい。

限界性が未指定であるというのは、(5)の意味表示で考えれば、Result の部分が実現しても実現しなくてもよいということである。この考え方を採用するなら、例えば、ビルマ語の動詞 t̪aʔ「殺す」が表す意味の中の「死ぬ」を表す結果の部分が、語彙アスペクトの中で、実現してもしなくてもよいものとして組み込まれていることになる。ビルマ語文(38)は、後に結果事象を否定する文が続かないものとする。そのことを「///」で表している。ここで発話が終了してもよいし、結果事象を否定する文でなければこの文の後にどのような文が続いてもよい。ビルマ語では、このように達成動詞を述語とする文の直後に結果を否定する節が続かない場合、特殊な文脈でない限り、結果事象は生起したと解釈されるのが普通である。一方で、(39)のように、直後に結果を否定する節が続けば、結果事象は生起しなかったと解釈される。

(38) ŋà t̪ʊ̂=gò t̪aʔ=tɛ̀. ///
1SG 3SG=OBJ 殺す=RLS
「僕は彼を殺した。」

(39) ŋà t̪ʊ̂=gò t̪aʔ=tɛ̀. dà=bèmɛ̂ mă-t̪ɛ̀=bú. =(6)
1SG 3SG=OBJ 殺す=RLS しかし NEG-死ぬ=NEG
「僕は彼を殺した。しかし、死ななかった。」

この、結果事象が生起してもしなくてもよいという両義的な状況を、例えば(40)のように表示することができる。Result の前の「±」は、Result の部分が実現してもしなくてもよいことを示す。

(40) Volition → Activity → ±Result

なお、Kato (2018)では、この考え方をさらに推し進め、ビルマ語の達成動詞における結果部分が、語彙の中に目的として存在しているという見方を示した。日本語文「私は魚を買うために、市場に行った」における「私は魚を買う」の部分が表す事象は、「市場に行った」という行為の目的である。目的であるからこそ、「私は魚を買うために、市場に行った」の後に「しかし、魚を買わなかった」と続けることができる。これと同じように、ビルマ語の達成動詞における結果部分を否定することができるのは、この部分が語彙アスペクトにおいて目的の役割を担っているからだと考えたのである。しかし、この考え方は誤りである。なぜなら、もし結果が目的として語彙アスペクトの中に組み込まれているのだとしたら、結果を否定する文が続かない(38)のような文が使われたとき、通常は結果事象が生起したと見なされることの説明がつかない[8]。

[8] ただし、「彼が死ななかった」という事実を聞き手が知っていると話者が考えているとき、(38)は結果事象が生起していない状況を表すことがある。このような場合、実用語学的にも、

ビルマ語の達成動詞において限界性が未指定であることを支持する現象がある。それは、ビルマ語の動詞連続において、達成動詞が第 1 動詞(V1)として現れた後に、第 2 動詞(V2)として V1 の結果事象を表す到達動詞(achievement verb)が現れることがあるということである。(41)では、ṯaʔ「殺す」の後にその結果事象を表す ṯè「死ぬ」が現れており、(42)では、pháɴ「捕まえる(意志動詞)」の後にその結果事象を表す到達動詞 mî「捕まえる(無意志動詞)」が現れている。このような動詞連続は、達成動詞の限界性が未指定であることによる曖昧性を回避するために使われると解釈できる。

(41) ṯù kôkòkò ṯaʔ ṯè=dɛ̀.
1SG 自分を 殺す 死ぬ=RLS
「彼は自殺した。」(直訳：彼は自分を殺して死んだ。)

(42) yɛ́=dwè=gâ tǎyǎkhàɴ=gò pháɴ mî=dè.
警官=PL=SBJ 犯人=OBJ 捕まえる(VOL) 捕まえる(NVOL)=RLS
「警察は犯人を捕まえた。」

東南アジア大陸部の諸言語や中国語では、ビルマ語の(41)や(42)のように動詞連続によって結果を明示することが多い。これらの言語の事象キャンセルを語彙アスペクトの観点から意味論的に説明する場合、動詞連続による結果の明示の現象が限界性の未指定という考え方を支持するひとつの根拠となるだろう。

ただし、ビルマ語においては、(41)や(42)のような動詞連続の出現は頻繁ではない。それは、ビルマ語に、動詞連続を構成する動詞の主語項が同一でなければならないという制限があるからである(澤田 1988)。東南アジア大陸部の諸言語では、一般的に、限界性を動詞連続で表す場合、ポー・カレン語の ɛ̂âɴ já (破く / 破れる)「破く」のように、他動詞の目的語項と自動詞の主語項が共有されるような動詞連続が用いられる。このような動詞連続は、ビルマ語においては主語項共有の原則に抵触するので、V1 が動作を表し V2 が結果を表す(41)と(42)のような動詞連続の出現は稀である。(41)は、V1 の ṯaʔ「殺す」の動作対象が主語の指示対象である「彼」自身であるため、V2 の ṯè「死ぬ」の主語項と V1 の主語項がたまたま同一になり、上記の原則に抵触しない。また、(42)は、V2 の mî「捕まえる」が無意志動詞でありながら、捕獲者を主語に取り捕獲対象を目的語に取る他動詞なので、やはり上記制限に抵触しない(ビルマ語では無意志動詞の大部分は自動詞である)。

結果が生起したか否かについて細心の注意が必要になる。これについて岡野(2014: 18–19)の興味深いエピソードを引いておく。岡野は、入国管理局でビルマ語通訳をしていたとき、あるミャンマー人男性が、(軍人が自分を)銃剣で刺したと日本語に直訳できるようなビルマ語を発したため、最初はそのとおりに訳したが、実際には銃剣が刺さった状況には至らなかったことを知り、係官に実際の状況の詳細を追加説明したという。

5.2. 語用論的観点からの説明

ビルマ語の事象キャンセルを、前節のように動詞の語彙アスペクトの観点から、すなわち意味論的な観点から説明することには、複雑な語用論的規則を持ち込まずに説明できるという利点がある。しかし、問題もある。それは、ビルマ語の達成動詞が限界性に関して本当に未指定であるならば、動詞の意味に含まれる結果の部分が生起したか否かはどのように決定されるのかを説明しなければならないという課題が残ることである。

5.1 で述べたように、(38)のような達成動詞を述語とする文が発話されたとき、その直後に結果を否定する節が続かなければ、結果事象は生起したと解釈されるのが普通である。もし本当に動詞の意味の中に限界性が指定されていないのだったら、このような解釈が起こるだろうか。なぜ直後に達成動詞の結果部分を否定しなければ、結果事象は生起したと解釈されるのか。この問いに答えなければならない。そこで頭をもたげるのが、ビルマ語の事象キャンセルは動詞に内在する意味の問題ではなく、実際のところは語用論の問題だという可能性である。

岡野賢二(p.c., 2021 年 9 月 19 日)の指摘によると、例えば(19)から(26)のような 2 文からなる事象キャンセルは、名詞化辞の =tà で 2 つの文をつないで 1 つの文にしたほうが話し言葉として自然だという。名詞化辞の =tà には、「～したところ」や「～したのだが」のように訳すことのできる副詞節を作る働きがある。(20)を再掲した(43)は動詞文述語の終わりを示す =tɛ̀ で前件文を完全に独立した文の形にしてある。一方、(44)は副詞節を作る =tà を用いて、(43)の 2 文を 1 つの文にしてある。

(43) ṯû=gò　ṯaʔ=tɛ̀.　dà=bèmɛ̂　mă-ṯɛ̀=bú.　=(20)
3SG=OBJ　殺す=RLS　しかし　NEG-死ぬ=NEG
「彼を殺した。しかし、死ななかった。」

(44) ṯû=gò　ṯaʔ=tà　mă-ṯɛ̀=bú.
3SG=OBJ　殺す=NMLZ(RLS)　NEG-死ぬ=NEG
「彼を殺したところ、死ななかった。」

この 2 つを比較すると、(43)も間違いではないが、(44)のほうが自然である。あるいは、(43)から dà=bèmɛ̂「しかし」を省いた(45)のほうが(43)よりも自然である。実際、(34)から(36)に示した実例においても、(45)と同様に、 dà=bèmɛ̂「しかし」が使われていない。

(45) ṯû=gò　ṯaʔ=tɛ̀.　mă-ṯɛ̀=bú.
3SG=OBJ　殺す=RLS　NEG-死ぬ=NEG
「彼を殺した。死ななかった。」

例(44)(45)が(43)と違うところは、達成動詞を含む述語と否定節が、dà=bèmɛ̂「しかし」がない分、近くにあるということである。一方で、既に述べたとおり、結果部分を否定する節が直後に続かない場合は、通常、結果事象は生起したことになる。つまり、結果をキャンセル

したい場合、結果部分を否定する節は達成動詞を含む述語とできるだけ近い場所にあったほうがよいことになる。

このことから予想されるのは、ビルマ語の事象キャンセルは、A ... mă-B=bú と表示できるような一種の連語(collocation)に働く推意であるという可能性である。具体的には、(46)に示すような推意である。

(46) 次のような形式があったとき、

A ... mă-B=bú

(ただし、A と B は動詞。...の部分に入るのは可能な限り少数の形態素。)

A が達成動詞であり、かつ B がその結果部分を表す到達動詞であるならば、次のような推意が働く:「A が表す事象は動作部分のみが成立し、結果部分が成立しない」。

このように考えると、否定節が達成動詞のなるべく近くにあるほうがよいことが説明できる。連語を解釈するには間に夾雑物が入らないほうがよいからである(したがって、「...」の部分には可能ならば文境界が入らないほうがよい)。また、事象キャンセルがこのような語用論的現象であると考えれば、基本的には達成動詞の結果部分は成立するものとして語彙アスペクトの中に組み込まれていると見なしてよいから、(38)のように否定節が続かない場合には結果事象が生起したと見なされることも説明できる。なお、mă-B=bú の場所には、これ以外にも結果を否定するような表現、例えば A=lô mă-yâ=bú 「A することができない」のような表現も現れ得る。

ただし、もしビルマ語の事象キャンセルをこのような語用論的現象と見なすならば、(41)と(42)のような、動詞連続によってわざわざ結果を表す現象がなぜ存在するのかを説明するのが難しくなる。V1 に結果部分が成立するものとして含まれているのだから、V2 で結果をもう一度言うことはトートロジーになってしまうからである。これが語用論的説明の問題点である。

5.3. 第 5 節のまとめ

ビルマ語で事象キャンセルが可能になる理由について、5.1 では意味論的観点から、5.2 では語用論的観点から論じた。この 2 つが、現在、筆者が有力視している解釈である。ただし、どちらの解釈にも短所がある。語彙アスペクトにおける限界性の未指定という意味論的な観点から説明しようとすると、なぜ、達成動詞を述語とする文が発話されたとき、(38)のようにその直後に結果を否定する節が続かなければ、結果事象は生起したと解釈されるのかという問題が生じる。一方で、語彙アスペクトには限界性が指定されているという前提に立って語用論的な観点から説明しようとすると、なぜ、(41)と(42)のような、動詞連続によってわざわざ結果を表す現象が存在するのかという問題が生じる。

意味論的解釈と語用論的解釈それぞれの短所は、対立する解釈にとっての長所になると

いう裏腹の関係にある。どちらの解釈がより適切なのか、筆者はまだ明確な答えを出せないでいる。しかし、直感的には、ビルマ語の事象キャンセルも、日本語と同じように、語用論的観点から説明するのがよいのではないかという予測を持っている。というのは、5.2 で論じたように、なるべく近い位置で達成動詞の結果を否定したほうがキャンセルが自然になるという事実は、事象キャンセルが発話の状況に依存した現象であることを物語るからである。筆者は、ビルマ語以外の東南アジア大陸部諸言語についても、全般的に、事象キャンセルを可能とする要因は語用論にあるのではないかという印象を持っている。例えば、Thepkanjana and Uehara (2009)によると、タイ語では、tamrùat khâa phûuráay mây taay (警察 / 殺す / 悪漢 / NEG / 死ぬ)「直訳: 警察は悪漢を殺したが死ななかった」のように動詞連続の中で結果のキャンセルを行うことは可能であるが、*sŏmchaay khâa malɛɛŋ. tɛ̀ɛ malɛɛŋ mây taay (Somchaay / 殺す / 虫 / しかし / 虫 / NEG / 死ぬ)「直訳: ソムチャイは虫を殺した。しかし、虫は死ななかった」のように節をまたいだキャンセルは容認されなくなるという。これも、タイ語に(46)と同様の、近い位置での否定にはこの否定を成立させるような推意が働くという語用論的な背景が存在しているためなのではないかと思う。さらに、峰岸(本巻所収)の報告によれば、Thepkanjana and Uehara (2009)がアステリスクをつけた上記のような例における前件文も、目的語を明示しなければ事象キャンセルが容認される可能性が高くなるという。このような状況は、事象キャンセルを可能にする要因が意味論ではなく語用論にあることを物語る。以上が第 5 節のまとめである。

5.4. 付記

ここでは、5.2 の語用論的解釈の問題点、つまり、達成動詞の意味に結果事象が含まれているのだとしたらなぜ動詞連続を使って結果を再び言うことがあるのかという問題点の説明として、ひとつの可能性を示す。それは、ビルマ語においては、達成動詞の結果部分は成立するものとして語彙アスペクトの中に組み込まれてはいるものの、これら達成動詞の実際の使用においては、結果部分が非焦点化されているということである。

ビルマ語には次のような表現がある。結果を表す動詞に助詞 =ʔàuɴ「(～する)ように」を後置して従属節を作り、主節には、その結果を意味的に含む達成動詞を置く、非常によく使われる表現である。(47)から(51)に例を示す。

(47) t̪è=ʔàuɴ　　t̪aʔ=tɛ̀.
死ぬ=ように　　殺す=RLS
「努力して殺した。」（直訳：死ぬように殺した。）

(48) mî=ʔàuɴ　　phán=dɛ̀.
とらえる(NVOL)=ように　とらえる(VOL)=RLS
「努力して捕まえた。」（直訳：捕まるように捕まえた。）

(49) có=ʔàuɴ　　chó=dɛ̀.
折れる=ように　　折る=RLS
「努力して折った。」（直訳：折れるように折った。）

(50) pwîɴ=ʔàuɴ　　phwîɴ=dɛ̀.
あく=ように　　あける=RLS
「努力してあけた。」（直訳：あくようにあけた。）

(51) pyɛʔ=ʔàuɴ　　phyɛʔ=tɛ̀.
壊れる=ように　　壊す=RLS
「努力して壊した。」（直訳：壊れるように壊した。）

これらは、文脈に応じて「努力して～する」「きちんと～する」「注意して～する」「確実に～する」のように訳すことができる。=ʔàuɴ を用いたこの表現は論理的に奇妙に感じられる。なぜなら、例えば(47)を見ると、t̪aʔ「殺す」という動詞がそもそも対象物に死をもたらすように遂行される動作を表すのだから、t̪è=ʔàuɴ「死ぬように」の部分は不要であるように思えるからである。(48)から(51)も同様である。

この事例から考えられることは、ビルマ語においては t̪aʔ「殺す」のような達成動詞の結果部分が相対的に目立たなくなっている、すなわち非焦点化されている(defocused)ということである。結果部分が目立たないことを、(52)のように表示してみよう。結果(Result)の部分を括弧内に入れたのは、この部分が目立たないことを表す。

(52) Volition → Activity → (Result)

達成動詞の結果が非焦点化されているという仮説を取り入れることによって、(41)と(42)の動詞連続で到達動詞を用いることの説明がつく。すなわち、達成動詞の結果部分は目立たないから、到達動詞で明示するということである。このような動詞連続は意味論的にはトートロジーになるが、自然言語においては意味の明示や修辞法的な効果のためにトートロジーが使われることはよくあることであるから、このような現象があっても奇妙ではない。

既に述べたように、ビルマ語は意志動詞と無意志動詞の区別が明確な言語である。例えば無意志動詞 t̪è「死ぬ」は意志的に死ぬことを表すことができないし、逆に意志動詞 t̪aʔ「殺す」は無意志的に殺すことを表すことができない[9]。このような言語では、結果事象を表すのは主に無意志動詞の役割になる(ビルマ語における達成動詞は意志動詞であり、到達動詞は無意志動詞である)。そのため、対する達成動詞においては、視点が動作のほうに向かい、

[9] 東南アジア大陸部の諸言語は全般的にこのような特徴を持つ。例えばクメール語について峰岸(1986: 48)は、「要するに、クメール語においては、人間、動物といった「有生」「有情」の存在が、その能力を用いて意図的に企てられる「する」的行為と、彼らの力の及ばない「なる」的状況とが明確に区別され、各々別種の動詞で表現されるのである」と述べている。

結果部分は目立たなくなるという効果が恒常的に働いているのではないか。これはあくまで語用論的効果であるから、達成動詞における結果事象は、後にそれを否定する表現が続かなければ成立したと見なされる。したがって、結果事象は、動詞の語彙アスペクトの中で意味論的に弱い部分として組み込まれているというわけではない。(52)で結果事象を括弧にくくったのは、あくまで語用論的な効果を図示したものである。参考として、(19)から(26)の例に用いた動詞を見ると、達成動詞 ɛô「燃やす」、t̪aʔ「殺す」、châ「落とす」、chó「折る」、hlɛ́「倒す」、phwînˬ「あける」、phyɛʔ「壊す」、kaʔ「くっつける」は意志動詞であり、到達動詞 làuˬ「燃える」、t̪è「死ぬ」、câ「落ちる」、có「折れる」、lɛ́「倒れる」、pwînˬ「あく」、pyɛʔ「壊れる」、kaʔ「くっつく」(kaʔ「くっつける」と同音異義)は無意志動詞である。RRG の意味表示を用いるならば、ɛô「燃やす」のような意志動詞には動作主性を表す DO が語彙レベルで組み込まれており、làuˬ「燃える」のような無意志動詞には DO が語彙レベルでは組み込まれていないということになる。

5.1 で述べたように、(41)と(42)のような、結果を明示する動詞連続は、東南アジア大陸部諸言語や中国語で頻繁に見られる。このような動詞連続が存在する原因は、ビルマ語以外の言語においても、達成動詞の結果事象が非焦点化されていることにある可能性がある。

さらに、もし(46)のような推意がビルマ語に存在しているのだとしたら、それは、達成動詞の結果事象が非焦点化されていることと関係している可能性が高い。第 4 節で、日本語の事象キャンセルの成立要因として結果の非焦点化が副次的な要因として関わっていることを見た(日本語の事象キャンセルの成立要因(ii))。これと同じように、達成動詞の意味における結果部分が語用論的に目立たなくなっているのであれば、その後にそれを否定する表現を置いても許容される余地が生まれるだろう。(46)のような推意が実際にあるのだとしたら、その推意を可能にする原因は結果事象の非焦点化とおそらく関係があるはずである。

達成動詞の結果が目立たなくなる現象は、第 4 節で述べたように日本語でも見られるものである。そして興味深いことに、(41)と(42)のようなトートロジー的な表現は、動詞連続という形ではないが、日本語にも観察される。先述の杉岡洋子(p.c.)によると、数年前に、日本のアニメーションの台詞を英語に訳した字幕が、SNS を通して英語話者の間で話題になったという。それは次の英語文である。

(53)　People die if they are killed.　「人は殺されれば死ぬ」

これは、『Fate』というアニメーション・シリーズで使われた台詞だという。主人公が言った「人は殺されれば死ぬ」という日本語を英語に直訳したものである。日本語では、この後に「それが当たり前なんだ」という台詞が続く。日本語話者であれば、「人は殺されれば死ぬ」に多少の違和感はあれ、主人公が何度も瀕死の重傷を負いながら生き長らえてきたストーリーを知れば、すんなりと許容できる者も多いことと思う。ところが、英語話者の間でこの台詞が話題になり、「こんな表現が日本語では可能なのか」という疑問が多く投げかけられ

たのだという。それは、英語話者にはこの文がトートロジーであると感じられるためらしい。この問題の原因は、日本語においては達成動詞の意味に内在する結果部分が目立たなくなったときに、その結果部分を表す到達動詞を後で用いても違和感を生じないことがある、ということにあるのではないか。このアニメにおける主人公は、何度も殺害を目的とした攻撃を受けている。そのために動詞「殺す」の動作部分が目立つと同時に結果事象の部分が非焦点化され、「人は殺されれば死ぬ」という日本語が成立しているのではないか。一方、英語においては動詞 kill の意味に内在する「死ぬ」という結果部分は常に目立つものなので、「死ぬ」という事象を表す die が同一文中に存在できないのだろう。つまり、(53)の台詞をめぐる「騒動」は、日本語と英語の達成動詞における結果部分の「目立ち具合」の違いに起因するのではないかと思われる。さらに、ビルマ語では、動詞 t̪aʔ「殺す」の結果事象の部分は目立たち具合が常に低いようであり、「人は殺されれば死ぬ」を訳した下の(54)はビルマ語の文としてまったく問題なく容認される。

(54) lù=hà　ʔă-t̪aʔ　khàɴ=yâ=yìɴ　t̪è=mɛ̀.
人=TOP　A-殺す　受ける=INEV=if　死ぬ=IRR
「人は殺されれば死ぬ。」

池上(1981)は、英語に「<動作主>指向的」な傾向があり、日本語には「<出来事全体>把握的」な傾向があるとした。そして、英語のような言語を「<する>的な言語」(DO-language)、日本語のような言語を「<なる>的な言語」(BECOME-language)と呼んだ。池上は、「<なる>的な言語」である日本語は「到達点指向性」が弱く(p. 269)、「もともとから自動詞的な運動の動詞はもちろんのこと、他者へ向けられた行為を表わす動詞まで、言わば「自動詞」化する傾向があるのである」(p. 270)と述べる。上で述べた結果の非焦点化は、池上がここで自動詞化と言っている現象に含まれるだろう。

6. 調査票について

ここでは本巻所収の「事象キャンセル調査票」について述べる。私達の慶應義塾大学東南アジア諸言語研究会では、2018 年に東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセルについて検討を始めた。検討開始後、同一の調査票を使って言語横断的に調べれば東南アジア大陸部諸言語における事象キャンセルの実態が捉えやすくなるという予測に基づき、調査票を作成することになった。そこで、加藤が原案を作って参加者全員で議論をし、修正を加えるというやり方で調査票を作成した。この調査票は次のような 14 種類の質問項目群からなる。

Q1. 対象物の物理的変化が否定され得るか
Q2. 対象物の知覚が否定され得るか
Q3. 対象物の移動が否定され得るか
Q4. 対象物との接触が否定され得るか

Q5. 目的地への到達が否定され得るか
Q6. 作成物の出現が否定され得るか
Q7. 対象物の獲得が否定され得るか
Q8. 発声が否定され得るか
Q9. 飲食物の摂取が否定され得るか
Q10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか
Q11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか
Q12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか
Q13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か
Q14. 受身

このうち、Q1 から Q12 までは、第 2 節で(a)から(l)に示した事象キャンセルのリストにそのままの順番で対応する。Q13 と Q14 は補足のような質問項目群であり、今後、東南アジア諸言語の文法現象を考える上で参考になることもあると考え、筆者の判断で加えたものである。Q13 は、動詞連続の V1 と V2 のうち V2 を否定することができるか否かを調べる項目群であり、Q14 は、もし調査対象言語に受身(=受動態)に類する表現があれば、そこで使われる動詞の結果部分を否定することができるかどうかを調べる項目群である。東南アジアにはポー・カレン語のように受動態のない言語も多い。したがって、Q14 はすべての言語に該当するとは限らない。Q13 と Q14 は補足のような項目群なので、質問項目数も少なく、Q13 は 2 項目、Q14 は 1 項目のみからなる。

各質問項目は日本語で例えば、「1-1. X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかった。」とある。これを各言語に訳したときに、それをコンサルタントがどのように判断するかを調べた。丸括弧に入れた「X さんは」の部分は訳出してもしなくてもよい。各質問項目について注意すべきことがあれば、【注】の後に記載した。

すべての質問項目の日本語は、「しかし」でつながれた 2 文からなる。この 2 文は、同一話者が連続して発話したものと想定する。各質問項目を、「X さんを殺したが、(X さんは)死ななかった。」あるいは「X さんを殺しても、(X さんは)死ななかった。」というような 1 文にしなかったのは、最初の文の陳述が終了していてもキャンセルができるのであれば、それだけ事象キャンセルが確固とした現象であることが示せると考えたからである。しかし、各言語の調査者が 1 文のみの用例を採取する必要があれば、そうしてもよいとした。調査対象とした言語の中には、たとえばポー・カレン語のように、1 文であるか 2 文であるかの判断が難しい言語もあるからである。

各質問項目の前件文の述語は、「殺した」のように動詞単独からなる。日本語の場合、この動詞に「(～し)ようとした」を付けると容認可能な文連続になることが多い。例えば、日本語では通常、「太郎を殺した。しかし、死ななかった」は容認不可能な文連続であるが、「太郎を殺そうとした。しかし、死ななかった」は容認される。他にも、ポー・カレン語で

は、前件文の動詞の後に jōwá「(～し)てみる」を置くと、容認されなかった文連続が可能になる。これは、日本語の「(～し)ようとした」やポー・カレン語の jōwá のような形式が、動作の開始そのものを「含意されないもの」とする機能を持つからだと考えられる。したがって、こうした形式を用いた文でキャンセルが可能であったとしても、それは純然たる事象キャンセルではない。動詞連続に関する Q13 を除き、調査票における日本語の前件文の述語を動詞単独(使役と受動を表す接辞は動詞内部の要素と見なす)にしたのは、このような夾雑物を排除するためである。

7. 東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル

本研究会では、本巻所収の「事象キャンセル調査票」に基づいて参加者がそれぞれ担当する言語を調べ、もし必要があれば個人の判断で追加事項を調べた。調査対象とした言語は、ベトナム語 Vietnamese (春日淳、清水政明)、クメール語 Khmer (上田広美)、ラオ語 Lao (鈴木玲子)、タイ語 Thai (峰岸真琴)、ポー・カレン語 Pwo Karen (加藤昌彦)、ロンウォー語 Lhaovo (澤田英夫)、ビルマ語 Burmese (岡野賢二)、の 7 言語である(括弧内は担当者)。ベトナム語とクメール語はモン・クメール系、ラオ語とタイ語はタイ・カダイ系、ポー・カレン語とロンウォー語とビルマ語はチベット・ビルマ系である。本巻には各担当者が執筆した各言語についての報告論文を収める。このうちベトナム語については、参加者 2 人が異なるコンサルタントを被調査者として別個の報告論文を書くことにした。なぜなら、研究を進めるうちに、同じ言語でもコンサルタントによって事象キャンセルについての容認度が異なることが分かってきたからである。コンサルタントが異なることによって報告論文の内容が異なることがあれば、そこにも何らかの学問的意義を見出せると判断した。したがって、本巻で扱った言語数は 7 言語であるが、報告論文の数は 8 篇である。報告論文の執筆にあたっては、第 5 節で論じたような意味論であるか語用論であるかといった解釈上の問題よりも、対象言語において各々の事象キャンセルが可能であるか否かの記述に重きを置くこととした。

表 3 は各担当者による報告論文の記述に基づいて各言語の事象キャンセル可能性を対照したものである。先頭行は言語名である。Pwo K. はポー・カレン語を表し、Viet 1 は春日淳の調査によるベトナム語、Viet 2 は清水政明の調査によるベトナム語を表す。概ね、左から右に向かって言語の分布域が西から東へ向かうよう配置した。左端の列は質問項目番号とその質問項目の前件文に用いた動詞を示している。Q1 から Q12 の質問項目群のうち各項目群を代表するような質問項目を選んだ。Q13 と Q14 は補足的な項目群であるため省いた。「○」は質問項目の日本語をその言語に直訳した事象キャンセルが完全に容認可能なことを表し、「×」は完全に容認不可能なことを表す。「?」はそのどちらでもないことを表す。2 人以上のコンサルタントの判断を仰いだケースでは、いずれかの母語話者が容認可能と判断したとしても別の母語話者がそのように判断しなかった場合には、「?」とした。

この表の「○」の多さから、東南アジア大陸部諸言語では、細部の違いこそあれ、事象キャ

ンセルが広く容認されることが分かる。

ただし、「○」がついていても言語によっては事象キャンセルによって表される状況が異なる場合があることにも留意する必要がある。調査票の 7-1「その本を買った。しかし、買えなかった。」を例に取ろう。ポー・カレン語の jə xwè láiʔàʊ nɔ́. lānâɴθí nī̱ ʔé (1SG / 買う / 本 / その / しかし / 得る / NEG)「私はその本を買った。しかし、得られなかった」(加藤[本巻所収]参照)は、「本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなくて、入手することができなかった」という調査票が意図したとおりの状況を表す。すなわち、商品そのものが存在せず、したがって支払いもしていない。一方、タイ語の súɯ lɛ́ɛw. tɛ̀ɛ yaŋ mây dây (買う / 完結 / しかし / まだ / NEG / 得る)「買った。しかし、まだ得ていない」(峰岸[本巻所収]参照。表記は本章筆者が変更)は、「代金を払ったが、まだ商品が手元に届いていない」という状況を表す。すなわち、商品は存在し、支払いも済ませており、商品の入手だけが終わっていない。個々の言語のこのような違いには十分に注意する必要がある。

また、同じベトナム語であっても、春日(本巻所収)のコンサルタントと清水(本巻所収)のコンサルタントは、事象キャンセルの可否において異なる判断を示している。つまり、判断が話者によって異なるということであり、このことは、事象キャンセルの容認度の判定に慎重さが必要なことを物語っている。

表 3: Q1 から Q12 のうち代表的な質問項目を選択し、それら事象キャンセルの各言語における容認可能性を示した。

	Burmese	Lhaovo	Pwo K.	Thai	Lao	Khmer	Viet 1	Viet 2
1-1 殺す	○	○	○	○	○	○	○	○
1-12 燃やす	○	○	○	○	○	○	○	○
2-1 見る	○	○	○	○	○	○	○	○
3-1 投げる	○	○	○	○	○	×	○	○
4-1 叩く	?	×	○	○	○	○	○	○
5-1 行く	○	○	○	○	○	○	○	×
5-2 来る	○	○	○	○	×	○	×	×
6-1 作る	○	○	○	○	○	○	○	○
7-1 買う	○	×	○	○	×	×	×	×
8-1 話す	○	○	○	○	○	○	○	○
9-1 食べる	?	○	○	○	○	○	○	○
10-1 立つ	○	○	○	○	○	○	○	×
11-1 立つ	○	○	×	×	×	○	○	×
12-1 踊らせる	○	○	○	○	○	○	○	○
12-6 与える	○	○	○	○	○	○	○	○

各言語の事象キャンセルの詳細については、各報告論文を見ていただくとして、ここでは、東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセルの全体を俯瞰したときに一般化できることを 2 点指摘しておきたい。

1 つは、調査票 Q1 の「対象物の物理的変化」のキャンセルはどの言語でも可能なことが多いということである。Q1 は典型的な使役的達成動詞(causative accomplishment verb)におけるキャンセルである。さらに、いずれの言語においても「殺す」を表す動詞の結果部分がキャンセル可能なことから、これらの言語では Martin (2019, 2020)の言うゼロ変化解釈(zero-change interpretation)が可能だと見てよく、これはゼロ変化解釈を許さない日本語との大きな違いである。なお、Martin (2019)は、ゼロ変化解釈のような不成就達成(non-culminating accomplishment)を可能にする原因の 1 つとして、その言語の完結相演算子(perfective operator)が「弱い完結相」(weak perfective)の特徴を有することを挙げる。しかし、東南アジア大陸部諸言語ではいわゆる完結相標識が現れない場合にも不成就達成が可能であるため、この事実をどのように解釈すべきかという問題が残る。例えばポー・カレン語においては、jə dwé θéɪnthàɪn. lānânθí mí̱ ʔán ʔé (1SG / 燃やす / 木の枝 / しかし / 火 / 食う / NEG)「私は木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった」(加藤[本巻所収]参照)の例のように、無標の動詞述語において不成就達成の解釈が可能である。Sato (2021)は、Martin の解釈に沿ったインドネシア語の不成就達成の分析において、無標の動詞(unmarked/bare verbs)が完結相(perfective aspect)を表していると見なしている。これは理論言語学における一個の解釈として合理性を持つとは思われるが、記述言語学的に見たときに、インドネシア語の無標の動詞が完結相を表すと考えることの妥当性には検討の余地がある。

もう 1 つは、使役構文における被使役動作のキャンセルがどの言語でも可能なことが多いということである。これは調査票 Q12-1 の調査結果に現れている。ここでは使役構文を「使役を表す要素と被使役行為を表す要素が別個の形態素で表される構造」と定義しておく。一例として Q12-1 を使って得られたポー・カレン語の例を右に挙げよう。jə dà thɔ́ɯɴlī ʔə̀. lānânθí ʔəwê thɔ́ɯɴlī ʔé (1SG / CAUS / 踊る / 3SG / しかし / 3SG / 踊る / NEG)「私は彼を踊らせた。しかし、彼は踊らなかった」(加藤[本巻所収]参照)。ここでは、使役を表す助詞 dà が「使役を表す要素」であり、「踊る」の意を表す動詞 thɔ́ɯɴlī が「被使役行為を表す要素」である。

「対象物の物理的変化」および「使役構文における被使役動作」のキャンセルが容易であるのは、(5)に示した図式における動作(activity)と結果(result)の切り分けが容易であることに起因するのだろう。例えば、調査項目の 1-1「X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかった。」が想定する状況において、動作部分は動作者(actor)において遂行されるが、結果部分は被動作者(undergoer)において生じる。同様に、使役構文においても、使役行為は使役者(causer)において遂行されるが、被使役行為は被使役者(causee)において遂行される。これらの事象に登場する存在物(entity)は最低でも 2 つあり、しかもそれぞれの存在物に対して各 1 個の下位事象を認識することが容易である。このように、複数の存在物のそれぞれに別個の

下位事象の生起を認識することが容易な場合には、動作と結果を切り分けることが容易だろう。一方で動作と結果を切り分けることが容易でない場合がある。調査項目の 4-1「X さんを叩いた。しかし、叩けなかった。(【注】叩こうとしたが、手が届かなかったという状況)」が想定する状況において、登場する存在物には動作者と被動作者の 2 つが存在するものの、被動作者の側には変化が生じないため被動作者の側に別個の事象を認識することは難しい。さらに、調査項目の 10-1「立った。しかし、立てなかった。(【注】椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況)」が想定する状況において、登場する存在物は「立つ」という動作を行う動作者のみである。「立つ」という動作そのものも、連続した動きからなるのであり、そこに複数の事象を認識することは難しい。このように、複数の下位事象を認識することが難しかったり、存在物が 1 個しかない事象の場合には、動作と結果を切り分けることが容易ではないだろう。要するに、本章で「達成」と見なした事象の中には、動作と結果を切り分けることが容易な事象からそうでない事象まで、様々なものが存在している。事象キャンセルの観点に立てば、動作と結果の切り分けが容易な場合には結果のキャンセルがしやすく、逆に、切り分けが容易でない場合には結果のキャンセルがしにくいと考えられる。そして、動作と結果の切り分けができるか否かという判断は、言語によってあるいは話者によって異なるのだと思われる。表 3 において、Q1 と Q12 以外の多くの項目における事象キャンセルの可否が言語によってあるいは話者によって様々であるのは、このような理由によるのだろう。

ところで、筆者は、研究会参加者の各報告を聞き、ミャンマーで話される言語であるビルマ語、ロンウォー語、ポー・カレン語の 3 つは、文境界をまたぐ(すなわち、2 文からなる)事象キャンセル例の誘出(elicitation)が他の言語に比べて容易との印象を持った。筆者はこの印象に基づいて、ミャンマーの言語と他の国々の言語のこうした違いは、文境界をまたいだ事象キャンセルが連語的な表現として確立している度合いが言語によって異なることを反映していると推測している。すなわち、ミャンマーの言語では、2 文を使って結果をキャンセルする言い方が他の国の言語よりも高い度合いで連語的な表現として確立している可能性があるということである。加えて、そのような表現の確立の度合いは言語接触によって伝播すると推測している。ビルマ語とロンウォー語、あるいはビルマ語とポー・カレン語は、日常的に極めて濃密に接触しているからである。一方で、ベトナム語、クメール語、ラオ語、タイ語といった言語では、文境界をまたがずに動詞連続の中で結果を否定する現象のほうが一般的なため、2 文を使った事象キャンセルがミャンマーの言語ほどは連語的な表現として確立していないと推測している。ただ、これらの推測には検証が必要である。

8. まとめ

以上、事象キャンセルについて様々なことを議論してきた。第 1 節から第 7 節までに見てきたことを振り返ってみよう。

第 1 節では、「事象キャンセル」という用語に問題があることを認めた上で、「事象が既に

成立したことを表す発話の内容を話者がその後で撤回(=キャンセル)する」という言い方を縮約したものとして「事象キャンセル」という用語を用いることを述べた。

第 2 節では、事象キャンセルで何が否定されるかについて論じ、事象キャンセルによって否定されるのは、意志的な動作に続く結果の部分であることを述べた。

第 3 節では、事象キャンセルが可能とされている言語においても、事象キャンセルの容認度に大きな違いが見られることを指摘した。具体的には、日本語とビルマ語とを比較し、事象キャンセルの容認度が大きく異なることを見た。

第 4 節では日本語の事象キャンセルの特徴について、先行研究を批判しながら一般化することを試みた。Kato (2018)に基づき、日本語では、結果が部分的にのみ起きたという推意が働くことによって事象キャンセルが可能になるのであり、そのため「結果の不完全な生起」の解釈がしやすい事象の場合にキャンセルが可能になりやすいことを指摘した。また、日本語では、「結果の非焦点化」も事象キャンセルを可能とする副次的な要因として働いていることを指摘した。さらに本節では、日本語とビルマ語の事象キャンセルの重要な意味上の違いについても詳述した。日本語の事象キャンセルでは「結果の不完全な生起」という形で結果事象が起きている。一方、ビルマ語の事象キャンセルは、結果事象がまったく起きていない読み、すなわち Martin (2019, 2020)の言うゼロ変化解釈(zero-change interpretation)が可能という点で、日本語と大きく異なる。

第 5 節では、東南アジア諸言語の一例として、ビルマ語を取り上げ、やはりその事象キャンセルについての一般化を、意味論的な観点と語用論的な観点から試みた。意味論的な観点からは、Tsujimura (2003)の日本語の事象キャンセルに関する一般化である「日本語の語彙的使役動詞が限界性に関して未指定」という説が、日本語ではなくビルマ語に当てはまる可能性を論じた。ただし、この説を取ると、動詞の意味に含まれる結果部分が生起したか否かはどのように決定されるのかという問題が残る。語用論的な観点からは、ビルマ語に A ... mă-B=bú という形式があったとき、A が達成動詞であり B がその結果部分を表す到達動詞であるならば、この形式に「A の結果部分が成立しない」という語用論的推意が働く可能性を論じた。この説では、達成動詞の結果事象は成立するものとして語彙アスペクトの中に組み込まれていると考える。ただし、そうだとしたら、達成動詞と到達動詞からなるトートロジー的な動詞連続が許容されることの説明が困難になってしまう。このような議論を行った上で、ビルマ語の事象キャンセルについての一般化として意味論的な説明と語用論的な説明のどちらが良いかはまだ明確に決定できないが、筆者は語用論的な説明のほうがより適切であるとの印象を持っていると述べた。さらに、付記として、ビルマ語においては、達成動詞の表す結果事象が語用論的に非焦点化された(=目立たない)存在になっている可能性を指摘し、そのためにトートロジー的な動詞連続が存在する可能性を指摘した。トートロジーは論理矛盾を生じないから、存在しても構わないのである。ここではまた、達成動詞に含まれる結果事象が非焦点化されているという特徴が他の東南アジア大陸部諸言語においても共通している可能性を示唆した。

第 6 節では本巻所収の「事象キャンセル調査票」について説明した。

第 7 節では、ベトナム語、クメール語、ラオ語、タイ語、ポー・カレン語、ロンウォー語、ビルマ語を対象として行った本研究会の調査で明らかになったことを述べた。まず、東南アジア大陸部諸言語においては、全般的に見て、事象キャンセルが容認されることが多いことを指摘した。さらに、どの言語でも対象物の物理的変化と使役構文における被使役動作のキャンセルが可能な場合が多いという一般化を行った。また、これらの東南アジア大陸部諸言語では達成動詞のゼロ変化解釈(zero-change interpretation)が可能であることを指摘した。

略号

1	一人称	NMLZ	名詞化辞(nominalizer)
2	二人称	NVOL	無意志的(non-volitional)
3	三人称	OBJ	目的語(object)
A	ビルマ語の名詞化接頭辞 ʔă-	PL	複数(plural)
ABL	奪格(ablative)	POL	丁寧(politeness)
ACM	副詞節標識(adverbial clause marker)	RLS	現実法(realis)
CAUS	使役(causative)	SG	単数(singular)
FUT	未来(future)	SBJ	主語(subject)
INEV	不可抗力性(inevitability)	TOP	主題(topic)
IRR	非現実法(irrealis)	VOL	意志的(volitional)
NEG	否定(negation)		

参考文献

Altshuler, Daniel (2014) A typology of partitive aspectual operators. *Natural Language & Linguistic Theory* 32: 735–75. https://doi.org/10.1007/s11049-014-9232-1

青木奈律乃・中谷健太郎(2013)「事象キャンセル可能性についての質問紙調査――その詳細データ――」『甲南大学紀要 文学編』163: 41–57.

Aoki, Natsuno and Kentaro Nakatani (2013) Process, telicity, and event cancellability in Japanese: a questionnaire study. *Papers from the Thirtieth Conference November 10-11, 2012 and from the Fifth International Spring Forum April 21‑22, 2012 of the English Linguistic Society of Japan*, 257–263.

Chae, Seong-Sik (2002) Event cancellation phenomena in Japanese: With special reference to fake result-cancel constructions. *Tsukuba English Studies* 21: 139–140.

Dell, Francois (1983) An aspectual distinction in Tagalog. *Oceanic Linguistics* 22(1/2): 175–206.

Dowty, David (1979) *Word meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.

江連和章(2006)「「燃やしても燃えなかった」：事象無効化に関する日英語対照研究」『神奈

川県立外語短期大学紀要 総合編』29: 23–36.

江連和章(2013)「日英語の事象無効化－因果連鎖構造からの分析に向けて－」*Sophia Linguistica Working Papers in Linguistics* 61: 187–201.

Grice, Paul (1975) Logic and Conversation. In: Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41–58. New York: Academic Press.

Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin (1999) Scalar structure underlies telicity in "degree achievements". In: Tanya Mathews and Devon Strolovitch (eds.) *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory (SALT)* 9: 127–144. Ithaca, NY: CLC Publications.

池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学――言語と文化のタイポロジーへの試論――』東京：大修館書店.

Ikegami, Yoshihiko (1985) 'Activity' - 'accomplishment' - 'achievement' ? A language that can't say 'I burned it, but it didn't burn' and one that can. In: Adam Makkai and Alan K. Melby (eds.) *Linguistics and Philosophy: Essays in Honor of Rulon S. Wells*, 265–304. Amsterdam: John Benjamins.

Jarkey, Nerida (2015) *Serial Verbs in White Hmong*. Leiden/Boston: Brill.

Jenny, Mathias (2001) The aspect system of Thai. In: Karen H. Ebert and Fernando Zúñiga (eds.) *Aktionsart and Aspectotemporality in non-European languages*. Zurich: Seminar für Allgemeine Sprachwissenschaft, Universität Zürich, 97–140.

Jenny, Mathias (2005) *The Verb System of Mon*. Zurich: ASAS.

影山太郎(1996)『動詞意味論－言語と認知の接点－』東京：くろしお出版.

春日淳(本巻所収)「ベトナム語の事象キャンセル――ハノイ方言についての一報告――」

Kato, Atsuhiko (2014) Event cancellation in Burmese. Paper presented at the 24th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, Yangon.

加藤昌彦(2015)「ビルマ語の事象キャンセル」*EX ORIENTE* 22: 1–36.

Kato, Atsuhiko (2018) Entailed and intended results in Japanese and Burmese accomplishment verbs. In: Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguitics*, 173–192. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. https://doi.org/10.1515/9781614514077-006

加藤昌彦(本巻所収)「ポー・カレン語の事象キャンセル」

Kennedy, Christopher and Louise McNally (1999) From event structure to scale structure: Degree modification in deverbal adjectives. In: Tanya Mathews and Devon Strolovitch (eds.), *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory (SALT)* 9: 163–180. Ithaca, NY: CLC Publications.

Kennedy, Christopher and Luise McNally (2005) Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 81.2: 345–381. https://doi.org/10.1353/lan.2005.0071

Koenig, Jean-Pierre and Nuttanart Muansuwan (2000) How to end without ever finishing: Thai semi-perfectivity. *Journal of Semantics* 17: 147–184.

Martin, Fabienne (2019) Non-culminating accomplishments. *Language and Linguistics Compass* 13:e12346.
https://doi.org/10.1111/lnc3.12346

Martin, Fabienne (2020) Aspectual differences between agentive vs. non-agentive uses of causative predicates. In: Elitzur A. Bar-Asher Siegal and Nora Boneh (eds.) *Perspectives on Causation: Selected Papers from the Jerusalem 2017 Workshop*, 257–94. Dordrecht: Springer.
https://doi.org/10.1007/978-3-030-34308-8_8

三上直光(1984)「タイ語の使役文の意味的特徴について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』16: 205–216.

峰岸真琴(1986)「クメール語の動詞連続における/baan/の意味について」『東京大学言語学論集'86』45–57.

峰岸真琴(2007)「孤立語の他動詞性と随意性：タイ語を例に」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨(編)『他動性の通言語的研究』205–216. 東京：くろしお出版.

峰岸真琴(本巻所収)「タイ語の事象キャンセル」

宮島達夫(1985)「「ドアをあけたが、あかなかった」――動詞の意味における<結果性>――」『計量国語学』14.8: 335–353.

岡野賢二(2014)「日本語と似て非なる言語～ビルマ語～」東京外国語大学語学研究所(編)『言葉とその周辺をきわめる』(東京外国語大学オープンアカデミー2012 年度 後期開講講座 活動報告書) 1–21. 東京：東京外国語大学語学研究所.

岡野賢二(本巻所収)「ビルマ語の事象キャンセルについての一考察」

Pardeshi, Prashant, Sonal Kulkarni, Peter E. Hook, Yasunari Imamura and Jae-ho Lee (2014) Entailment cancellation in Marathi with side glances at Japanese, English, Hindi, and Chinese. Paper presented at the 36th International Conference of Linguistic Society of India (ICOLSI-36).

坂本恭章(1985)『カンボジア(クメール)語入門』(昭和 60 年度言語研修カンボジア語テキスト 2) 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

坂本恭章(1994)「タイ語の thammaj<なぜ>と不随意動詞の下位分類」『アジア・アフリカ言語文化研究』46: 409–414.

Santiago, Paul Julian (2015) Event cancellation and telicity in Tagalog. Paper presented at the 150th Meeting of the Linguistic Society of Japan.

佐藤琢三(2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』東京：笠間書院.

Sato, Yosuke (2021) Action/result in Indonesian accomplishment verbs and the agent control hypothesis. *Oceanic Linguistics* 60: 263–301.
https://doi.org/10.1353/ol.2021.0017

澤田英夫(1988)「現代ビルマ語における動詞配列の類型について」『言語学研究』7: 73–110.

清水政明(本巻所収)「ベトナム語の事象キャンセル」

Singh, Mona (1991) The perfective paradox: or how to eat your cake and have it too. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 469–479.

Tai, James H-Y (1984) Verbs and times in Chinese: Vendler's four categories. *Papers from the Parasession on Lexical Semantics, Chicago Linguistic Society*, 289–296.

Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara (2009) Resultative constructions with "implied-result" and "entailed-result" verbs in Thai and English: a contrastive study. *Linguistics* 47(5), 589–618. https://doi.org/10.1515/LING.2009.020

Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara (2010) Syntactic and semantic discrepancies among the verbs for 'kill' in English, Chinese and Thai. *Proceedings of the 24th Conference on Language, Information and Computation*, 291–300. Tohoku University.

Tsujimura, Natsuko (2001) Degree words and scalar structure in Japanese. *Lingua* 111: 29–52. https://doi.org/10.1016/S0024-3841(00)00027-9

Tsujimura, Natsuko (2003) Event cancellation and Telicity. In William McClure (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, Volume 12, 388–399. Stanford: CSLI Publications.

Van Valin, Robert D., Jr. (1993) A synopsis of role and reference grammar. In: R. Van Valin (ed.) *Advances in Role and Reference Grammar*, 1–164. John Benjamins.

Van Valin, Robert D., Jr. (2004) Semantic macroroles in Role and Reference Grammar. In: R. Kailuweit & M. Hummel (eds.) *Semantische Rollen*, 62–82. Tubingen: Gunter Narr Verlag.

Van Valin, Robert D., Jr. & Randy J. LaPolla (1997) *Syntax: Structure, meaning and function*. Cambridge: Cambridge University Press.

Vendler, Zeno (1957) Verbs and Times. *The Philosophical Review* 66.2, 143–160.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

山川太(2004)「いわゆる日本語の Event Cancellation について」『日本言語学会第 128 回大会予稿集』227–232.

Zhang, Anqi (2018) On non-culminating accomplishments in Mandarin. Ph.D. dissertation, University of Chicago.

事象キャンセル調査票

何を調べるか？———動詞述語Aの意味構造に何らかの終点が含まれ、その終点を表す動詞述語Bがあるとき、「Aした。しかし、Bしなかった」と言うことが可能か。あるいは、Bという述語がない場合であっても、終点への到達を何らかの方法で否定することが可能か。

Q1. 対象物の物理的変化が否定され得るか

1-1. Xさんを殺した。しかし、(Xさんは)死ななかった。

1-2. ココヤシの実を落とした。しかし、落ちなかった。

【注】高い所になっているココヤシの実を長い棒でつついて落とそうとしたが、落ちなかったという状況。

1-3. ココヤシの実を割った。しかし、割れなかった。

【注】ヤシの実を鉈(なた)で割ろうとしたが、割れなかったという状況。

1-4. 窓を壊した。しかし、壊れなかった。

【注】ガラス窓を棒で叩いて壊そうとしたが、壊れなかったという状況。

1-5. 糸を切った。しかし、切れなかった。

【注】糸を刃物(あるいは手、歯など)で切ろうとしたが、切れなかったという状況。

1-6. 枝を折った。しかし、折れなかった。

1-7. 窓をあけた。しかし、あかなかった。

1-8. 紙を貼った。しかし、くっつかなかった。

1-9. 木を倒した。しかし、倒れなかった。

1-10. 湯を沸かした。しかし、沸かなかった。

1-11. ござを広げた。しかし、広がらなかった。

1-12. 木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった。

【注】木の枝を焚き木にしようとしたが、湿っていて燃えなかったという状況。

1-13. 山芋を煮た。しかし、煮えなかった。

【注】芋を煮ようとしたが、火力が弱く、煮えなかったという状況。

1-14. 魚を干した。しかし、乾かなかった。

【注】干し魚を作ろうとしたが、乾ききらなかったという状況。

1-15. スイカを冷やした。しかし、冷えなかった。

Q2. 対象物の知覚が否定され得るか

2-1. 見た。しかし、見えなかった。

2-2. 聞いた。しかし、聞こえなかった。

2-3. 魚醤のにおいをかいだ。しかし、においがしなかった。

Q3. 対象物の移動が否定され得るか

3-1. 小石を投げた。しかし、投げられなかった。

【注】小石を投げようとしたが、手にくっついて、手から離れなかったという状況。

3-2. スイカを籠に入れた。しかし、入らなかった。

【注】スイカを籠に入れようとしたが、大きくて入らなかったという状況。籠は袋に替えてもよい。

3-3. 山芋を抜いた。しかし、抜けなかった。

3-4. 岩を動かした。しかし、動かなかった。

【注】大きな岩を動かそうとしたが、重すぎて動かなかったという状況。

3-5. 鳥を放した。しかし、放せなかった。

【注】鳥を放そうとしたが、鳥かごから出て行かなかったという状況。

3-6. 臼を載せた。しかし、載らなかった。

【注】臼(東南アジアでよく見る、食材をすりつぶす擂り鉢大の石臼)を棚に載せようとしたが、思ったより重くて載せられなかったという状況。

Q4. 対象物との接触が否定され得るか

4-1. Xさんを叩いた。しかし、叩けなかった。

【注】叩こうとしたが、手が届かなかったという状況。

4-2. Xさんを蹴った。しかし、蹴れなかった。

【注】蹴ろうとしたが、足が届かなかったという状況。

4-3. コップをつかんだ。しかし、つかめなかった。

【注】コップに一瞬触れたが、熱くてしっかりと持つことができなかったという状況。

Q5. 目的地への到達が否定され得るか

5-1. 東京に行った。しかし、着かなかった。

5-2. ここに来た。しかし、着かなかった。

【注】昨日もここに来ようとしたのだが、道が分からなくてたどり着かなかったという状況。

5-3. 家に帰った。しかし、着かなかった。

5-4. 二階に上がった。しかし、着かなかった。

【注】家の二階に上がろうとしたが、膝が痛くて階段を上がれなかったという状況。

Q6. 作成物の出現が否定され得るか (どの程度まで出現したかに注意)

6-1. 人形を作った。しかし、出来なかった。

【注】人形を作ろうとしたが、技術がなかったので結局は出来上がらなかったという

状況。

6-2. 家を建てた。しかし、出来なかった。

【注】家を作ろうとしたが、途中で風雨で壊れ、出来なかったという状況。

6-3. 穴を掘った。しかし、穴ができなかった。

【注】穴を掘ろうとしたが、地面が固くて穴が出来なかったという状況。

Q7. 対象物の獲得が否定され得るか

7-1. その本を買った。しかし、買えなかった。

【注】本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなくて、入手することができなかったという状況。

7-2. 金を盗んだ。しかし、盗めなかった。

【注】金を盗もうとして店に入ったが、警備員に見つかって入手できなかったという状況。

Q8. 発声が否定され得るか

8-1. 話した。しかし、声が出なかった。

8-2. 歌った。しかし、声が出なかった。

Q9. 飲食物の摂取が否定され得るか

9-1. 魚を食べた。しかし、食べられなかった。

【注】魚を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。

9-2. 酒を飲んだ。しかし、飲めなかった。

【注】酒を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。

Q10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか

10-1. 立った。しかし、立てなかった。

【注】椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況。

10-2. 座った。しかし、座れなかった。

【注】椅子に座ろうとして脚を曲げたが、脚が痛くて、尻を椅子につけた状態にならなかったという状況。

10-3. 眠った。しかし、眠れなかった。

【注】眠ろうとして横になったが、眠りに入ることができなかったという状況。

Q11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか

11-1. 立った。しかし、立てなかった。

【注】立ち上がろうとして力を入れたが、椅子から尻をまったく離すことができなかったという状況。(10-1との違いに注意)

11-2. 座った。しかし、座れなかった。

【注】座ろうとして力を入れたが、脚が痛くてまったく動作を開始することができなかったという状況。(10-2との違いに注意)

11-3. 歩いた。しかし、歩けなかった。

【注】歩こうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。

11-4. 走った。しかし、走れなかった。

【注】走ろうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。

11-5. 笑った。しかし、笑えなかった。

【注】笑った顔を作ろうとしたが、恐怖感のため、笑った顔を作ることができなかったという状況。

11-6. 泣いた。しかし、泣けなかった。

【注】演技のため、泣こうとしたが、演技力がないので涙を流すことができなかったという状況。

Q12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか

12-1. Xさんを踊らせた。しかし、(Xさんは)踊らなかった。

12-2. Xさんを行かせた。しかし、(Xさんは)行かなかった。

12-3. Xさんにマンゴーを食べさせた。しかし、(Xさんは)食べなかった。

12-4. Xさんにマンゴーを売った。しかし、(Xさんは)買わなかった。

12-5. Xさんにマンゴーを見せた。しかし、(Xさんは)見なかった。

12-6. Xさんにマンゴーを与えた。しかし、(Xさんは)受け取らなかった。

12-7. Xさんに本を貸した。しかし、(Xさんは)受け取らなかった。

12-8. Xさんに電話した。しかし、(Xさんは)電話に出なかった。

12-9. Xさんを驚かせた。しかし、(Xさんは)驚かなかった。

12-10. Xさんを怒らせた。しかし、(Xさんは)怒らなかった。

【注】Xさんを悪者にするため、Xさんを怒らせようとしたが、怒らなかったという状況。

12-11. Xさんを説得した。しかし、(Xさんは)引き受けなかった。

【注】困難な仕事をXさんに任せようとしたが、引き受けてくれなかったという状況。

Q13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2しなかった」が可能か

13-1. 魚を<行く>(V1)<買う>(V2)した。しかし、買わなかった。

【注】<行く>(V1)<買う>(V2)の部分は、それぞれの言語で「行く」を表す動詞と「買う」を表す動詞を、動詞連続の形で並べる。

13-2. 魚を<煮る>(V1)<食べる>(V2)した。しかし、食べなかった。

【注】<煮る>(V1)<食べる>(V2)の部分は、それぞれの言語で「煮る」を表す動詞と「食べる」を表す動詞を、動詞連続の形で並べる。動詞の間に魚を表す名詞が介在してもよい。

Q14. 受身

14-1. Xさんは殺された。しかし、死ななかった。

ベトナム語の事象キャンセル

――ハノイ方言についての一報告――

春日　淳

1. はじめに

ベトナム語は、オーストロアジア語族、モン・クメール小語族(Mon-Khmer sub-family)、ベトナム語派(Vietic branch)に属する言語である。ベトナム語の方言は、大きく北部方言（タインホア省辺りまで)、中部方言（タインホア省からハイヴァン峠まで)、南部方言（ハイヴァン峠以南）に分類される[1]が、本稿で扱うベトナム語は、北部方言（ハノイ方言）である。

本稿中のベトナム語の例文は、慣例に従いベトナム語正書法で表記する。

ベトナム語は(1)のように SVO 型の言語であり、否定辞は(2)のように動詞に前置する。

(1) Tôi　ăn　cơm.
1SG　食べる　ご飯
「私はご飯を食べる。」

(2) Tôi　không　ăn　cơm.
1SG　NEG　食べる　ご飯
「私はご飯を食べない。」

ベトナム語は、時制を持たないが、(3)(4)のようにアスペクト辞を用いるか、文脈によって動作の時点や時の中での動作の状態が判断される。上の(1)(2)も文脈によってそれぞれ、「食べた」「食べなかった」という意味にもなる。

(3) Tôi　đã　ăn　cơm　rồi.
1SG　PFV　食べる　ご飯　PFV
「私はすでにご飯を食べた。」

(4) Tôi　chưa　ăn　cơm.
1SG　IPFV　食べる　ご飯
「私はまだご飯を食べていない。」

[1] Hoàng (2004)参照。

本稿の調査結果として得られたベトナム語の文（採取例）も、基本的にアスペクト辞を用いていない。

2. 調査

2019 年 2 月から 2022 年 12 月にかけて本巻所収の「事象キャンセル調査票」を用いて調査を行った。調査協力者（コンサルタント）はハノイ出身、40 代の女性である[2]。

3. 調査の結果

以下調査の結果を示していく。その際、ベトナム語の例文はアスペクト辞を基本的に用いていない。また、調査票の日本語の例文は、2 つの文に分かれているが、ベトナム語の例文は、前件と後件が接続詞 nhưng「しかし」を挟んで 1 つの文で表されている。これは、この形でもベトナム語の事象キャンセルを判定するのに問題ないことに加え、次のような事情による。

ベトナム語の例文を日本語の例文に対応するように 2 文にした場合、例えば調査項目の Q1-1 「X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかった。」[3]は、(5a)(5b)(5c)(5d)のいずれかになる。このうち、(5b)(5c)(5d)の đã または rồi、またはその両方のアスペクト辞(PFV)がある前件の表現は、「X さんを殺した」だけでなく、「X さんがすでに死んでいる」ことを含意し、この 1 文で事象が完結する。コンサルトの感覚として、このように文を言い切った後に、独立した別の文で完結した事象についてそのキャンセルを言うことには違和感がある。これに対して(5a)の前件の文は「X さんが死んでいる」ことまでは含意していないが、前件の動作のキャンセルを判定するのならば、後件の文を前件とは独立した 1 つの文とするのではなく、nhưng で接続した 1 つの文とし方が前件と後件の繋がりができ自然である。

(5)	a.	Hắn	giết	ông X.	Nhưng	ông X	không	chết.	
		3SG	殺す	X さん	しかし	X さん	NEG	死ぬ	
	b.	Hắn	đã	giết	ông X.	Nhưng	ông X	không	chết.
		3SG	PFV	殺す	X さん	しかし	X さん	NEG	死ぬ
	c.	Hắn	giết	ông X	rồi.	Nhưng	ông X	không	chết.
		3SG	PFV	X さん	PFV	しかし	X さん	NEG	死ぬ
	d.	Hắn	đã	giết	ông X	rồi.	Nhưng	ông X	không	chết.
		3SG	PFV	殺す	X さん	PFV	しかし	X さん	NEG	死ぬ

[2] 敢えてお名前を記さないが、同じ例文を何度も繰り返し尋ねるという作業に辛抱強くご協力くださり、ネイティブにしかわからない貴重な情報を提供してくださったコンサルタントの方に心より感謝申し上げる。なお、言うまでもなく、採取例に関する誤解、解釈の誤りは筆者のものである。

[3] この調査項目についての結果は、3.1 節で述べる。

また、調査項目の Q2-1「見た。しかし、見えなかった。」[4]では、これに対応するベトナム語の文として(6a)(6b)(6c)(6d)が考えられるが、アスペクト辞の đã「すでに」を用いた(6b)の文を前件にした場合、コンサルタントの感覚では不自然と感じられるようである。これに対し、(6c)のアスペクト辞 rồi を用いた文を前件にした場合、後件で前件の動作がキャンセルされる最も自然な言い方、と感じられるようである。ただし、文としては、後件の主語（前件と同じもの）を省略し、1 文にしたほうがよい。

(6)	a.	Nó	nhìn.	Nhưng	nó	không	thấy.	
		3SG	見る	しかし	3SG	NEG	見る	
	b.	?Nó	đã	nhìn.	Nhưng	nó	không	thấy.
		3SG	PFV	見る	しかし	3SG	NEG	見る
	c.	Nó	nhìn	rồi.	Nhưng	nó	không	thấy.
		3SG	見る	PFV	しかし	3SG	NEG	見る
	d.	Nó	đã	nhìn	rồi.	Nhưng	nó	không	thấy.
		3SG	PFV	見る	PFV	しかし	3SG	NEG	見る

このように、アスペクト辞については、アスペクト辞が用いられた場合、（đã か rồi か、あるいはその両方かの）アスペクト辞の違いによって前件の動詞の意味する動作の成就あるいは達成については違いが出てくることがわかる。また、前件と後件を nhưng で繋いだ 1 つの文とした方が、コンサルタントにとって前件と後件の繋がりが自然に感じられる。このような事情から、本稿ではアスペクト辞の使用を基本的に避け（アスペクトは想定された文脈によって判断されることになる）、前件と後件を nhưng で繋いだ 1 つの文にしている。

以下、小節の番号と調査項目に続いて調査票の文を Q に番号付きで示し、その下に（簡単なコメントを挟んで）採取例という順序で示す。例文のグロスの欄の[　]は、文法機能を表す。例文の下には適宜【　】に入れて注釈を付けてある。

3.1. 対象物の物理的変化が否定され得るか

基本的に対象物の物理的変化を否定することが可能である。以下に採取例を示す。

Q1-1. X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかった。

(7)	Hắn	giết	ông X	nhưng	ông X	không	chết.
	3SG	殺す	X さん	しかし	X さん	NEG	死ぬ

「やつは X さんを殺したが、X さんは死ななかった。」

(7)は、事象キャンセルが可能という結果である。この結果に加え、ベトナム語の giết「殺

[4] この調査項目についての結果は、3.2 節で述べる。

す」という動詞が、結果としての「被動作主(patient)が死ぬこと」までを含意していないことが次のような例からもわかる。

まず、ベトナム語には、動作ー結果というタイプの動詞の複合形[5]があり、giết chết「殺す-死ぬ：殺す」もその一つである。これは、bắn chết「撃つ-死ぬ：打ち殺す」、đánh chết「殴る-死ぬ：殴り殺す」、đâm chết「刺す-死ぬ：刺し殺す」などと同様に、第一動詞が動作主の被動作主に対する随意的な動作を表し、第二動詞がその動作の結果生じる被動作主の不随意的な状態変化を意味している[6]。このような動詞の複合形において第一動詞の表す動作は、第二動詞と意味的な因果関係をもつが、第一動詞単独では、つまり、giết、bắn、đâm 単独では、一般に、第二動詞の表す状態変化を含意しない。つまり giết chết という複合形の存在は、giết 単独では、被動作主の chết「死ぬ」という結果（状態変化）まで含意していないことの傍証となると考えられる。また、giết cho chết「殺す-CAUS-死ぬ：殺して死なせる」という表現[7]があるが、この表現の存在も giết が動作の結果を含意しないことを裏付けるものと考えられる。それではなぜ、3 節の冒頭で言及したように đã giết ông X、giết ông X rồi、đã giết ông X rồi のように完了相のアスペクト辞を用いた場合は、被動作主(ông X)は死んでいると感じるかという問題であるが、これはおそらく giết という動作の結果として被動作主が死ぬという場合が、現実として圧倒的に多い、あるいはふつうである、という経験からそのように感じられるのではないかと推測される。

Q1-2. ココヤシの実を落とした。しかし、落ちなかった。(高い所になっているココヤシの実を長い棒でつついて落とそうとしたが、落ちなかったという状況。)

(8) Nó chọc cho quả dừa rơi nhưng quả dừa không rơi.
3SG つつく CAUS 実 ヤシ 落ちる しかし 実 ヤシ NEG 落ちる
「あいつはヤシの実をつついて落とそうとしたが、ヤシの実は落ちなかった。」

【注】chọc「つつく」の後ろに使役動詞 cho が必要であり chọc CAUS N rơi「つついて N を落とす」という使役構文となっている。

Q1-3. ココヤシの実を割った。しかし、割れなかった。(ヤシの実を鉈で割ろうとしたが、割れなかったという状況。)

(9) Nó bổ quả dừa nhưng không bổ được.
3SG 割る 実 ヤシ しかし NEG 割る [可能]
「あいつはヤシの実を割ったが、割ることができなかった。」

---

[5] Nguyễn (1999: 69-70)参照。
[6] このタイプの動詞の複合形については春日(2017)を参照されたい。また、注 8 も参照されたい。
[7] Nguyễn (1999:70)に引用されている例文の中の giết sao cho chết（sao cho は CAUS）もこれと同じタイプである。

Q1-4. 窓を壊した。しかし、壊れなかった。(ガラス窓を棒で叩いて壊そうとしたが、壊れなかったという状況。)

(10) Nó phá cửa sổ nhưng cửa sổ không hỏng.
3SG 壊す 窓 しかし 窓 NEG 壊れる
「あいつは窓を壊したが、窓は壊れなかった。」

(11) Nó đấm vỡ cửa sổ nhưng cửa sổ không vỡ.
3SG 叩き割る 窓 しかし 窓 NEG 割れる
「あいつは窓を叩き割ったが、窓は割れなかった。」
【注】窓を「棒で壊す」状況を「(窓ガラスを) 拳で叩き割る」状況に置き換えてある。đấm は「拳で叩く」。これが vỡ「割れる」と複合した đấm vỡ は「叩き割る」の意味。

(10)のように phá「壊す」を用いた場合も、(11)のように đấm vỡ「叩く- 割れる」という動詞の複合形[8]を用いた場合もキャンセル可能である。動詞の複合形の中には、(14)の bẻ gãy「折り曲げる-折れる」、(19)の cưa đổ「切る-倒れる」もそうであるが、一般に、第一動詞の動作によって第二動詞の結果が生じるという、動作－結果を 1 つの動詞のように表した形式で、Vendler(1967)の言う達成(accomplishment)を表すものが多い。複合動詞と考えられる(25)の ướp lạnh についても同様である。このように、動詞の複合形及び複合動詞が達成を表すならば、事象キャンセルの判定に用いることが可能である。

Q1-5. 糸を切った。しかし、切れなかった。(糸を刃物(あるいは手、歯など)で切ろうとしたが、切れなかったという状況。)

(12) Nó cắt chỉ nhưng không cắt được.
3SG 切る 糸 しかし NEG 切る [可能]
「あいつは糸を切ったが、切れなかった。」

(13) Nó cắt chỉ nhưng chỉ không đứt.
3SG 切る 糸 しかし 糸 NEG 切れる
「あいつは糸を切ったが、糸は切れなかった。」

(12)の後件は「切る」という動作が成功あるいは成就しなかったことを表す。これに対して(13)の後件は chỉ「糸」が自動詞主語として現れ、動詞は「切れる」「切断される」を表す

[8] 本稿では、第一動詞と第二動詞の組み合わせが多数あるものを動詞の複合形と呼び、2 つの動詞の組み合わせが限定的で意味的にも一つの動詞と考えられる複合動詞（(25）の ướp lạnh「冷やす」など）と区別している。

自動詞である đứt が使われ、「糸が切断されなかった」という結果を表す(12)とは異なる構文となっている。

Q1-6. 枝を折った。しかし、折れなかった。

(14) Nó bẻ gãy cành cây nhưng cành cây không gãy.
3SG 折る 枝 木 しかし 枝 木 NEG 折れる
「あいつは木の枝を折ったが、木の枝は折れなかった。」
【注】bẻ gãy は「折る」とグロスを付けてあるが、bẻ「折り曲げる」と gãy「折れる」の複合形である。

コンサルタントによると、この場合「折る」という動作は bẻ gãy「折り曲げる - 折れる」という動詞の複合形で表すのが自然だとのことである。もし(14)の bẻ gãy を bẻ のみにすると文法的に容認される文ではあるが、自然さが低下する。

Q1-7. 窓をあけた。しかし、あかなかった。

(15) Nó mở cửa sổ nhưng cửa sổ không mở được.
3SG あける 窓 しかし 窓 NEG あく [可能]
「あいつは窓をあけたが、窓はあかなかった。」
【注】mở は「あく」「あける」を意味する自他両用の動詞。前件の mở は「あける」の意味の他動詞、cửa sổ「窓」は動作の対象、後件の cửa sổ は自動詞主語、mở は「あく」の意味の自動詞である。

(16) Nó mở cửa sổ nhưng không được.
3SG あける 窓 しかし NEG [可能]
「あいつは窓をあけたが、できなかった。」

(15)は「窓が壊れていてあかない」などの場合を表す文で、(16)は、動作主が何らかの原因で「あける」という動作を行うことができない場合も、動作の対象である窓が壊れていてあかない場合も表す。

Q1-8. 紙を貼った。しかし、くっつかなかった。

(17) Nó dán giấy lên tường nhưng (giấy) không dính.
3SG 貼る 紙 上がる 壁 しかし 紙 NEG 貼りつく
「あいつは壁に紙を貼ったが、紙は貼りつかなかった。」
【注】後件の giấy が省略されても同じ意味になる。

Q1-9. 木を倒した。しかし、倒れなかった。

(18) *Nó cưa cây đổ nhưng cây không đổ.
3SG 切る 木 倒れる しかし 木 NEG 倒れる
「あいつは木を切り倒したが、木は倒れなかった。」
【注】cưa は「鋸で引いて切る」動作を表す。

「木を切り倒す」と言う場合、(18)のように cưa cây đổ「切る-木-倒れる」という表現は不自然であるとされ、(19a)のように動詞の複合形 cưa đổ「切る-倒れる」を用いて cưa đổ cây で表す。この場合、事象キャンセルは可能である。ただ表現としては(19b)のように動詞の前に意図を表す định「つもりだ」が入ったほうがより自然な表現とされるが、この場合は事象キャンセルの判定はできない。

(19) a. Nó cưa đổ cây nhưng cây không đổ.
あいつ 切り倒す 木 しかし 木 NEG 倒れる
「あいつは木を切り倒したが、木は倒れなかった。」
b. Nó định cưa đổ cây nhưng cây không đổ.
あいつ [意図] 切り倒す 木 しかし 木 NEG 倒れる
「あいつは木を切り倒すつもりだったが、木は倒れなかった。」

Q1-10. 湯を沸かした。しかし、沸かなかった。
(20) Nó đun nước nhưng nước không sôi.
3SG 沸かす 水 しかし 水 NEG 沸く
「あいつは湯を沸かしたが、湯は沸かなかった。」

Q1-11. ござを広げた。しかし、広がらなかった。
(21) Nó trải chiếu nhưng không trải được.
3SG 広げる ござ しかし NEG 広げる [可能]
「あいつはござを広げたが、広げられなかった。」

(21)は、動作主の能力のため（小さい子供であるなどのため）に、あるいは、ござを広げるスペースがなくて、などの場合が考えられる。

Q1-12. 木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった。(木の枝を焚き木にしようとしたが、湿っていて燃えなかったという状況。)

(22) Nó đốt củi nhưng củi không cháy.
3SG 燃やす 薪 しかし 薪 NEG 燃える
「あいつは薪を燃やしたが、薪は燃えなかった。」
【注】「木の枝」を củi「薪」に代えてある。

Q1-13. 山芋を煮た。しかし、煮えなかった。(芋を煮ようとしたが、火力が弱く、煮えなかったという状況。)

(23) Nó nấu khoai nhưng không nấu được.
3SG 煮る 芋 しかし NEG 煮る [可能]
「あいつは芋を煮たが、煮ることはできなかった。」
【注】「山芋」を khoai「芋」に代えてある。

(23)は動作主が煮方を知らなくて煮ることができなかった場合も、あるいは、結果的に芋が煮えた状態にならなかった、という場合もあり得る。

Q1-14. 魚を干した。しかし、乾かなかった。(干し魚を作ろうとしたが、乾ききらなかったという状況。)

(24) a. Nó phơi cá nhưng cá không khô.
3SG 干す 魚 しかし 魚 NEG 乾く
「あいつは魚を干したが、魚は乾かなかった。」
b. Nó phơi cá nhưng cá chưa khô.
3SG 干す 魚 しかし 魚 IPFV 乾く
「あいつは魚を干したが、魚はまだ乾いていない。」

コンサルタントの感覚では、(24a)は容認できる文であるが (24b)の方がより自然に感じるとのことである。動作の対象が「魚」であることもはたらいて、一定時間干したが乾ききっていない、という感じがするためか、と考えられる。(24)の cá「魚」を áo「服」に置き換えた場合は、phơi áo cho khô「干す-服-CAUS-乾く：服を乾かす」となる。この場合もキャンセル可能である。

Q1-15. スイカを冷やした。しかし、冷えなかった。

(25) Nó ướp lạnh dưa hấu nhưng dưa hấu không lạnh.
3SG 冷やす スイカ しかし スイカ NEG 冷たい
「あいつはスイカを冷やしたが、スイカは冷えなかった。」
【注】ướp lạnh「冷やす」は「香り付けする」「(塩などの）調味料に浸ける」を意味する動詞 ướp と「冷たい」を意味する lạnh が複合したものであるが、ướp lạnh で「冷やす」を意味する複合動詞と考

えられる。

上で見たように、基本的に対象物の物理的変化をキャンセルすることは可能であるが、ただ、その表現は一様ではない。前件の動詞については、単独の動詞を用いるもの（(7)(9)(10)(12)(13)(15)(16)(17)(20)(21)(22)(23)(24)）、単独の動詞の後ろに使役の動詞を用い使役構文となるもの（(8)）、動詞の複合形（あるいは複合動詞）を用いるもの（(11)(14)(19a)(25)）がある。後件の表現については、動作主の動作を表す前件の動詞とは異なる対象物の状態変化（動作の結果）を表す動詞を用いるもの（(7)(8)(10)(13)(15)(17)(20)(22)(24)）と、状態変化を表す動詞が前件の動詞の複合形（あるいは複合動詞）の第二動詞と同一のもの（(11)(14)(19a)(25)）がある。また、前件の動作主の動作が成功あるいは成就しなかったことを表すものに＜NEG-前件の動詞-[可能]＞という形[9]（(9)(12)(21)(23)）と＜NEG-[可能]＞という形（(16)）がある。

3.2. 対象物の知覚が否定され得るか

採取例ではどれも対象物の知覚が否定される。以下に採取例を示す。

Q2-1. 見た。しかし、見えなかった。

(26) a. Nó nhìn nhưng không thấy.
3SG 見る しかし NEG 見える
「あいつは見たが、見えなかった。」

b. Nó nhìn nhưng không nhìn thấy.
3SG 見る しかし NEG 見える
「あいつは見たが、見えなかった」

【注】nhìn は「対象物に視線を送る」という意味の随意動詞。thấy は「視界に入ってくる」という意味の不随意動詞[10]。この 2 つの動詞が複合した nhìn thấy は「見える」という意味の不随意動詞となる。(26)の前件の動詞に完了相を表すアスペクト辞 đã あるいは rồi を付けてみると、đã nhìn は容認度が低く、nhìn rồi は問題なく容認され自然な表現となる。

(26)は、誰かに「（星、飛行機、ネコなど）X が見えるよ」と言われて、その X がある方向あるいは話し手の指さす方向を見たが、見えなかった、というような状況を想定している。

Q2-2. 聞いた。しかし、聞こえなかった。

[9] (15)は mở「あける」「あく」が自他両用の動詞であるためにこの形に見えるが、＜自動詞主語(cửa sổ) -NEG -自動詞主語の状態変化を表す動詞(mở) - [可能]＞である。
[10] ベトナム語の不随意動詞及び随意動詞については、春日(2021)を参照されたい。

(27) Nó lắng nghe tiếng chim hót nhưng không nghe thấy.
3SG 聞く 声 鳥 囀る しかし NEG 聞こえる
「あいつは鳥の鳴き声を聞いたが、聞こえなかった。」
【注】lắng nghe は「耳を澄まして聞く」という意味の動詞。nghe は「意志を持って聞く」という意味の随意動詞で、これが thấy「見える」と複合した nghe thấy は「聞こえる」という意味の不随意動詞となる。(27)の前件の動詞句に完了相を表すアスペクト辞を付けてみると、đã lắng nghe は問題なく容認され自然な表現となり、lắng nghe tiếng hót rồi は容認度が低い。

(27)は、誰かに「鳥の声が聞こえるね」と言われて、耳を澄まして聞いてみたが、鳥の声は聞こえなかった、という状況を想定している。

Q2-3. 魚醤のにおいをかいだ。しかし、においがしなかった。
(28) Tôi ngửi nước mắm nhưng không ngửi thấy mùi gì cả.
1SG かぐ 魚醤 しかし NEG においがする におい 何 [強意]
「私は魚醤のにおいをかいだが、なんのにおいもしなかった。」
【注】ngửi「かぐ」と thấy「見る」が複合した ngửi thấy は「においがする」という意味の不随意動詞。(28)の前件の動詞句に完了相のアスペクト辞を付けてみると、đã ngửi は容認度が低く、ngửi nước mắm rồi は問題なく容認され自然な表現でもある。

(28)は、動作主の嗅覚が麻痺していてなんの匂いもしなかった、という状況を想定している。nước mắm「魚醤」を hoa hồng「バラ」に置き換えた場合は、バラがにおいを発していなかった場合も、動作主の嗅覚が麻痺していた場合もあり得るが、どちらの場合も事象キャンセル可能である。

(26)~(28)の注で述べたように、動詞とアスペクト辞の組み合わせによって文の容認度に違いが出る。ただし、đã と rồi の両方を用いた場合は、3 つの文のどれも問題なく容認される。

3.3. 対象物の移動が否定され得るか

採取例ではどれも対象物の移動が否定される。以下に採取例を示す。

Q3-1. 小石を投げた。しかし、投げられなかった。(小石を投げようとしたが、手にくっついて、手から離れなかったという状況。)

(29) Tôi ném đá nhưng không ném được.
1SG 投げる 石 しかし NEG 投げる [可能]
「私は石を投げたが、投げられなかった。」

Q3-2. スイカを籠に入れた。しかし、入らなかった。(スイカを籠に入れようとしたが、大きくて入らなかったという状況。)

(30) Nó để quả dưa hấu vào rổ nhưng không được.
3SG 置く 実 スイカ 入る 籠 しかし NEG [可能]
「あいつはスイカを籠に入れたが、できなかった。」

Q3-3. 山芋を抜いた。しかし、抜けなかった。

(31) Nó dỡ khoai môn nhưng không dỡ được.
3SG 抜く タロイモ しかし NEG 抜く [可能]
「あいつはタロイモを抜いたが、抜けなかった。」

【注】「山芋」を khoai môn「タロイモ」に代えてある。「抜く」とグロスを付けた dỡ は「取りはずす」が基本的な意味。

Q3-4. 岩を動かした。しかし、動かなかった。(大きな岩を動かそうとしたが、重すぎて動かなかったという状況。)

(32) Nó vần hòn đá nhưng hòn đá không di chuyển.
3SG 動かす 岩 しかし 岩 NEG 動く
「あいつは岩を動かしたが、岩は動かなかった。」

【注】「動かす」とグロスを付けた vần は「転がして運ぶ」の意味の動詞。

コンサルタントによると、(32)は容認される文であるが、(33)のように言うのが最も自然である。

(33) Nó vần hòn đá nhưng không được.
3SG 動かす 岩 しかし NEG [可能]
「あいつは岩を動かしたが、できなかった。」

Q3-5. 鳥を放した。しかし、放せなかった。(鳥を放そうとしたが、鳥かごから出て行かなかったという状況。)

(34) Nó thả chim nhưng không thả được.
3SG 放す 鳥 しかし NEG 放す [可能]
「あいつは鳥を放したが、放せなかった。」

Q3-6. 臼を載せた。しかし、載らなかった。(臼を棚に載せようとしたが、思ったより重くて載せられなかったという状況。)

(35) Nó đặt cối lên giá nhưng không (đặt lên) được.
3SG 置く 臼 上がる 棚 しかし NEG 載せる [可能]
「あいつは臼を棚に載せたが、載せられなかった。」
【注】後件の「載せる」を表す đặt lên「置く-上がる」は省略可能。

以上見てきたように、(32)を除いてどの採取例も、後件は＜NEG-（前件の動詞）-[可能]＞という、動作主の動作が成功あるいは成就しなかったことを表す表現となっている。

3.4. 対象物との接触が否定され得るか

採取例ではどれも対象物との接触が否定される。以下に採取例を示す。

Q4-1. X さんを叩いた。しかし、叩けなかった。(叩こうとしたが、手が届かなかったという状況。)

(36) Nó đánh ông X nhưng không đánh được.
3SG 叩く X さん しかし NEG 叩く [可能]
「あいつは X さんを叩いたが、叩けなかった。」

Q4-2. X さんを蹴った。しかし、蹴れなかった。(蹴ろうとしたが、足が届かなかったという状況。)

(37) Nó đá ông X nhưng không đá được.
3SG 蹴る X さん しかし NEG 蹴る [可能]
「あいつは X さんを蹴ったが、蹴れなかった。」

Q4-3. コップをつかんだ。しかし、つかめなかった。(コップに一瞬触れたが、熱くてしっかりと持つことができなかったという状況。)

(38) Nó cầm cốc nhưng không cầm được.
3SG つかむ コップ しかし NEG つかむ [可能]
「あいつはコップをつかんだが、つかめなかった。」

(36)~(38)のどの採取例も、後件は＜NEG-前件の動詞-[可能]＞という、動作主の動作が成功あるいは成就しなかったことを表す表現となっている。

3.5. 目的地への到達が否定され得るか

採取例ではキャンセル可能な場合と不可能な場合がある。以下採取例を示す。

Q5-1. 東京に行った。しかし、着かなかった。

(39) Nó đi Tokyo nhưng không đến nơi.
3SG 行く 東京 しかし NEG 着く
「あいつは東京へ行ったが、着かなかった。」

【注】đi は出発及び移動を表す動詞であり、到着を含意しない。đi と日本語の「行く」とは、意味的に完全に重なるものではない。đến は到着を表す動詞であり、日本語の話し手を参照点とした「来る」と同じ意味ではない。「着く」とグロスを付けた đến nơi「着く-場所」は「目的地に着く」という意味。

(39)は、途中で事故やトラブルなどがあった、というような理由がわかっていれば容認される文となり、キャンセル可能となる。(39)の文で完了相のアスペクト辞を付けた結果は、アスペクト辞により異なり、đã đi Tokyo は容認される文となり、キャンセル可能、đi Tokyo rồi は文として容認されず、キャンセル不可能、đã đi Tokyo rồi も文として容認されず、キャンセル不可能である。この違いは、アスペクト辞 đã は、どちらかと言うと動作の開始に焦点が当たっていて、一方 rồi は、どちらかと言うと動作の終了、あるいは完了に焦点が当たっているためと考えられる。

Q5-2. ここに来た。しかし、着かなかった。(昨日もここに来ようとしたのだが、道が分からなくてたどり着かなかったという状況。)

(40) *Nó đến Tokyo nhưng không đến.
3SG 着く 東京 しかし NEG 着く
「あいつは東京に来たが、着かなかった。」

【注】「ここ」を「東京」に代えてある。

前件に đến「着く」を単独で用いた(40)は容認されず、キャンセル不可能である。一方、(41)のように đi đến「行く-着く」を用いた表現では、前件の「ここに来たこと」がキャンセル可能となる。コンサルタントによると、(41)は「昨日ここに来ようとしたが、何らかの理由で来れなかった」などの文脈があれば容認されるとのことである。

(41) Hôm qua nó đã đi đến đây nhưng không đến được.
昨日 3SG PFV 行く 着く ここ しかし NEG 着く [可能]
「昨日あいつはここに来たが、着けなかった。」

Q5-3. 家に帰った。しかし、着かなかった。

(42) a. *Nó về nhà nhưng không đến nơi.
3SG 帰る 家 しかし NEG 着く
「あいつは家に帰ったが、着かなかった。」

b. *Nó đi về nhà nhưng không đến nơi.
3SG 行く 帰る 家 しかし NEG 着く
「あいつは家に帰ったが、着かなかった。」

c. Nó đi về nhà nhưng chưa đến nơi.
3SG 行く 帰る 家 しかし IPFV 着く
「あいつは家に帰ったが、まだ着いていない。」

単独の về「帰る」を用いた(42a)も、動詞連続の đi về「行く-帰る」を用いた(42b)も容認されない文である。(42c)のように、(42b)の後件の否定辞 không を未完了相を表す chưa に置き換えれば容認される。このことから、về も đi về も事象キャンセル不可能と判断される。

Q5-4. 二階に上がった。しかし、着かなかった。(家の二階に上がろうとしたが、膝が痛くて階段を上がれなかったという状況。)

(43) a. *Nó lên tầng hai nhưng không lên được.
3SG 上がる 二階 しかし NEG 上がる [可能]
「あいつは二階に上がったが、上がれなかった。」

b. Nó đi lên tầng hai nhưng không lên được.
3SG 行く 上がる 二階 しかし NEG 上がる [可能]
「あいつは二階に上がったが、上がれなかった。」

c. Nó định đi lên tầng hai nhưng không lên được.
3SG [意図] 行く 上がる 二階 しかし NEG 上がる [可能]
「あいつは二階に上がるつもりだったが、上がれなかった。」

【注】コンサルタントによると、(43b)は動作主の身体的な原因のため上がれない、という場合だけでなく、規制がかかっていて上がれない、などの外的要因によって上がれない場合も含む。

前件に単独の動詞 lên「上がる」を用いた(43a)は容認されない文である。(43b)のように動詞を đi lên「行く-上がる」の動詞連続の形にすれば容認される。さらに、(43c)のように

意図を表す định「つもりだ」を用いて định đi lên「上がるつもりだ」とすればより自然な表現となるが、この文からは事象キャンセルの判定はできない。これらの結果から、動作主が自分の意志で上の階などに上がるという場合は、単独の lên「上がる」ではキャンセル不可能で、đi lên「行く-上がる」はキャンセル可能と言える。

以上の採取例から次のようなことが言えそうである。(39)の đi の場合、目的地への到達が否定されるのは đi が到着を含意しないことで説明がつく。また、(40)の đến は到着を表す動詞であることから、目的地への到達が否定されるとすれば矛盾が生じ、キャンセル不可能となる。(41)の đi đến の場合に目的地への到達が否定される（キャンセル可能）ということは、この動詞連続の第一動詞 đi が語彙的アスペクトとして継続性をもつことが関係している可能性がある。また、đến が動詞として到着を表すほかに、前置詞として「～まで」という用法もあることも関係しているかもしれない。(42a)の về、(42b)の đi về についてはどちらもキャンセル不可能である。(43a)の lên はキャンセル不可能であるのに対し(43b)の đi lên はキャンセル可能である。このように、(41)の đi đến と(43b)の đi lên がキャンセル可能であるのに対し、(42b)の đi về はキャンセル不可能であること見ると、語彙的アスペクトだけからは説明できない別の要因が働いているようである。

また、đến、về、lên は、Vendler(1967)の言う到達(achievement)を表す動詞であり、また、動作の継続性については、非継続的あるいは瞬間的(punctual)な動きを表している。このことも、これらの動詞単独で表された前件がキャンセル不可能であることと関係しているかもしれない。

3.6. 作成物の出現が否定され得るか

以下の採取例ではどれも作成物の出現が否定される。以下採取例を示す。

Q6-1. 人形を作った。しかし、出来なかった。(人形を作ろうとしたが、技術がなかったので結局は出来上がらなかったという状況。)

(44) Nó làm búp bê nhưng không làm được.
3SG 作る 人形 しかし NEG 作る [可能]
「あいつは人形を作ったが、作れなかった。」

Q6-2. 家を建てた。しかし、出来なかった。(家を作ろうとしたが、途中で風雨で壊れ、出来なかったという状況。)

(45) Nó xây nhà nhưng không xây được.
3SG 建てる 家 しかし NEG 建てる [可能]
「あいつは家を建てたが、建てられなかった。」

Q6-3. 穴を掘った。しかし、穴ができなかった。(穴を掘ろうとしたが、地面が固くて穴が出来なかったという状況。)

(46) Nó đào lỗ nhưng không đào được.
3SG 掘る 穴 しかし NEG 掘る [可能]
「あいつは穴を掘ったが、掘れなかった。」

(44)~(46) のどの採取例も、後件は＜NEG-前件の動詞-[可能]＞という、動作主の動作が成功あるいは成就しなかったことを表す表現となっている。

3.7. 対象物の獲得が否定され得るか

以下の採取例ではどちらも対象物の獲得が否定されず、事象キャンセル不可能である。以下採取例を示す。

Q7-1. その本を買った。しかし、買えなかった。(本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなくて、入手することができなかったという状況。)

(47) *Nó mua quyển sách đó nhưng không mua được.
3SG 買う CLF 本 その しかし NEG 買う [可能]
「あいつはその本を買ったが、買わなかった。」

Q7-2. 金を盗んだ。しかし、盗めなかった。(金を盗もうとして店に入ったが、警備員に見つかって入手できなかったという状況。)

(48) *Nó ăn trộm tiền nhưng không ăn trộm được.
3SG 盗む 金 しかし NEG 盗む [可能]
「あいつは金を盗んだが、盗めなかった。」

3.8. 発声が否定され得るか

以下の採取例ではどちらも発声が否定される。以下採取例を示す。

Q8-1. 話した。しかし、声が出なかった。

(49) Nó nói nhưng không phát tiếng ra được.
3SG 話す しかし NEG 発する 声 出る [可能]
「あいつは話したが、声が出なかった。」

Q8-2. 歌った。しかし、声が出なかった。

(50) Nó hát nhưng không phát tiếng ra được.
3SG 歌う しかし NEG 発する 声 出る [可能]
「あいつは歌ったが、声が出なかった。」

(49)(50)はそれぞれ前件の動詞 nói「話す」hát「歌う」と後件の動詞句 phát tiếng ra「声を出す」が異なる。(49)の後件の動詞句を前件と同じ動詞 nói にした場合は文として容認されず、キャンセル不可能となる。一方(50)の後件の動詞句を前件と同じ動詞 hát に置き換えた場合は容認される文となり、キャンセル可能である。このように、発声を伴う動作の前件と後件の動詞が同じ場合は、動詞によってキャンセル可能か不可能かに違いが出る。

3.9. 飲食物の摂取が否定され得るか

以下の 2 例ではどちらも飲食物の摂取が否定される。以下採取例を示す。

Q9-1. 魚を食べた。しかし、食べられなかった。(魚を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。)

(51) Nó ăn cá nhưng không ăn được.
3SG 食べる 魚 しかし NEG 食べる [可能]
「あいつは魚を食べたが、食べられなかった。」

Q9-2. 酒を飲んだ。しかし、飲めなかった。(酒を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。)

(52) Nó uống rượu nhưng không uống được.
3SG 飲む 酒 しかし NEG 飲む [可能]
「あいつは酒を飲んだが、飲めなかった。」

(51)(52)とも、後件は＜NEG-前件の動詞-[可能]＞という、動作主の動作が成功あるいは成就しなかったことを表す表現となっている。

3.10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか

採取例では、(53)(54)のように、問題なく事象キャンセル可能なものと、(55a)のように問題なくキャンセル可能とは言えないものがある。以下採取例を示す。

Q10-1. 立った。しかし、立てなかった。(椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況。)

(53) a. Nó đứng nhưng không đứng được.
3SG 立つ しかし NEG 立つ [可能]
「あいつは立ったが、立てなかった。」

b. Nó đứng lên nhưng không đứng được.
3SG 立つ 上がる しかし NEG 立つ [可能]
「あいつは立ち上がったが、立てなかった」

【注】đứng は「立っている」状態を表すのが基本的な意味であるが、「立つ」といういう動作も表す。đứng lên「立つ - 上がる」は「立ち上がる」の意味の、より動作性の強く表れた表現である。

(53a)のように前件が đứng「立つ」単独で表されている場合もキャンセル可能であるが、(53b)の đứng lên「立ち上がる」のようにより動作性が強い場合もキャンセル可能である。

Q10-2. 座った。しかし、座れなかった。(椅子に座ろうとして脚を曲げたが、脚が痛くて、尻を椅子につけた状態にならなかったという状況。)

(54) a. Nó ngồi nhưng không ngồi được.
3SG 座る しかし NEG 座る [可能]
「あいつは座ったが、座れなかった。」

b. Nó ngồi xuống nhưng không ngồi được.
3SG 座る 下がる しかし NEG 座る [可能]
「あいつは腰を下ろしたが、座れなかった。」

【注】ngồi は「座っている」という状態を表すのが基本的意味であるが、「座る」とう動作も表す。ngồi xuống「座る-下がる：腰を下ろす」は、より動作性の強い表現。

(53)と同様、(54a)の ngồi「座る」でも、(54b)の ngồi xuống「座る-下がる」という動作性の強い表現でもキャンセル可能である。

Q10-3. 眠った。しかし、眠れなかった。(眠ろうとして横になったが、眠りに入ることができなかったという状況。)

(55) a. ?Nó ngủ nhưng không ngủ được.
3SG 眠る しかし NEG 眠る [可能]
「あいつは眠ったが、眠れなかった。」

b. Nó đi ngủ nhưng không ngủ được.
3SG 床に就く しかし NEG 眠る [可能]
「あいつは床に就いたが、眠れなかった。」

【注】ngủ は「眠る」という意味の、動作よりも状態を表す動詞。đi ngủ「行く - 眠る」は動詞連続の形をしているが、「床に就く」「就寝する」の意味の複合動詞と考えられる。

(55a)は容認度の低い表現であり、問題なく事象キャンセル可能とは言えない。(55b)のように đi ngủ「床に就く」を用いれば問題なく容認される文となる。ただ(55b)では、đi ngủ「床に就く」と ngủ「眠る」は、動作－目的の関係にあるとしても、意味的な因果関係を持つわけではなく、前件の動作が後件でキャンセルされているとは言えない。また、(55a)が容認度の低い文となり、ngủ「眠る」が問題なくキャンセル可能とは言えないのは、ngủ「眠る」が動作よりも状態を表す動詞であり、動作を表す(53)の đứng (lên)、(54)の ngồi (xuống)と動作性の点で異なるためかもしれない。

3.11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか

概ね事象キャンセル可能である。以下採取例を示す。

Q11-1 立った。しかし、立てなかった。(立ち上がろうとして力を入れたが、椅子から尻をまったく離すことができなかったという状況。)

(56) Nó đứng lên nhưng không đứng được.
3SG 立つ 上がる しかし NEG 立つ [可能]
「あいつは立ち上がったが、立てなかった。」

Q11-2. 座った。しかし、座れなかった。(座ろうとして力を入れたが、脚が痛くてまったく動作を開始することができなかったという状況。)

(57) Nó ngồi xuống nhưng không ngồi được.
3SG 座る 下がる しかし NEG 座る [可能]
「あいつは腰を下ろしたが、座れなかった。」

(56)(57)は Q10-1 及び Q10-2 の(53b)(54b)と同様の表現である。前件は đứng lên、ngồi xuống と動作性の強い表現であり、キャンセル可能である。

Q11-3. 歩いた。しかし、歩けなかった。(歩こうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。)

(58) Nó đi nhưng không đi được.
3SG 歩く しかし NEG 歩く [可能]
「あいつは歩いたが、歩けなかった。」

【注】điは(39)（3.5節Q5-1）の注にあるように、出発及び移動を表す動詞であるが、「歩く」も意味する。グロスもそのように付けてある。なお、「歩く」には đi bộ（bộ は「歩み」）という動詞があるが、コンサルタントによると(58)の例でđiをđi bộに置き換えると文は容認されない。

Q11-4. 走った。しかし、走れなかった。(走ろうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。)

(59) Nó chạy nhưng không chạy được.
3SG 走る しかし NEG 走る [可能]
「あいつは走ったが、走れなかった。」

Q11-5. 笑った。しかし、笑えなかった。(笑った顔を作ろうとしたが、恐怖感のため、笑った顔を作ることができなかったという状況。)

(60) Nó cười nhưng không cười được.
3SG 笑う しかし NEG 笑う [可能]
「あいつは笑ったが、笑えなかった。」

コンサルタントによると、(60)は容認される文であるが、cườiの前にmuốn「～したい」あるいはbuồn「もよおす」などの動詞がある方が自然な言い方である。

Q11-6. 泣いた。しかし、泣けなかった。(演技のため、泣こうとしたが、演技力がないので涙を流すことができなかったという状況。)

(61) Nó khóc nhưng không khóc được.
3SG 泣く しかし NEG 泣く [可能]
「あいつは泣いたが、泣けなかった。」

(61)は「演技のために泣こうとしたが泣けなかった」というような状況がわかっている場合は容認される文となる。(62)は問題なく容認される文であるが、khóc の前に義務を表す phải「～しなければならない」が必要である（例文は、舞台などのある場面での、演技の場面を想定したもの)。

(62) Ở cảnh này nó phải khóc nhưng lại không khóc được.
～で 場面 この 3SG [義務] 泣く しかし [強意] NEG 泣く [可能]
「この場面であいつは泣かなければならなかったが、泣けなかった。」
【注】コンサルタントによると、後件では[強意]の lại があるのが自然とのことである。

以上の結果から、đứng lên「立ち上がる」、ngồi xuống「腰を下ろす」、đi「歩く」、chạy「走る」については問題なく事象キャンセルが可能であり、cười「笑う」、khóc「泣く」については、条件付きではあるがキャンセルが可能と言えそうである。

3.12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか

基本的に事象キャンセル可能である。以下に採取例を示す。

Q12-1. X さんを踊らせた。しかし、(X さんは)踊らなかった。

(63) a. *Nó cho cô X múa nhưng cô X không múa.
3SG CAUS X さん 踊る しかし X さん NEG 踊る
「あいつは X さんを踊らせたが、X さんは踊らなかった。」

b. Nó bảo cô X múa nhưng cô X không múa.
3SG 言う X さん 踊る しかし X さん NEG 踊る
「あいつは X さんに踊るように言ったが、X さんは踊らなかった」

【注】múa「踊る」を nhảy「ダンスする」に置き換えても同じ結果である。múa は「(舞踊などを)踊る」、nhảy は「ダンスする」「跳ぶ」。

(63a)のように使役動詞 cho を用いて使役構文とした場合は容認されない。これは、誰かを踊らせる、という場合に＜cho 人 múa＞あるいは＜cho 人 nhảy＞という使役動詞 cho による使役構文を使わないためである[11]。使役動詞 cho の代わりに(63b)のように bảo「言う」（言って～させるという使役構文を作ることができる動詞）を用いた場合は、容認される文となる。bảo のほかに、nói「話す」、yêu cầu「要求する」、đề nghị「提案する」、mời「勧める」などの動詞でも容認される文となる。

Q12-2. X さんを行かせた。しかし、(X さんは)行かなかった。

(64) Nó cho cô X đi nhưng cô ấy không đi.
3SG CAUS X さん 行く しかし 彼女 NEG 行く
「あいつは X さんを行かせたが、彼女は行かなかった。」

Q12-3. X さんにマンゴーを食べさせた。しかし、(X さんは)食べなかった。

(65) a. Nó cho cô X ăn xoài nhưng cô ấy không ăn.
3SG CAUS X さん 食べる マンゴー しかし 彼女 NEG 食べる
「あいつは X さんにマンゴーを食べさせたが、彼女は食べなかった。」

b. Nó bắt cô X ăn xoài nhưng cô ấy không ăn.
3SG CAUS X さん 食べる マンゴー しかし 彼女 NEG 食べる
「あいつは X さんに無理にマンゴーを食べさせたが、彼女は食べなかった。」

【注】使役動詞 cho を用いた(65a)の前件は、「食べさせようとして口に持っていった」という意味となり、(65b)は「無理に～させる」という意味の使役構文を作ることのできる bắt「無理強いする」を

[11] ただし、機械仕掛けの「踊る人形」を踊らせる場合は cho búp bê nhảy「CAUS-人形-ダンスする」が言える。

用いて「無理に食べさせた」の意味となる。

Q12-4. X さんにマンゴーを売った。しかし、(X さんは)買わなかった。

(66) a. *Nó bán cô X xoài nhưng cô ấy không mua.
3SG 売る X さん マンゴー しかし 彼女 NEG 買う
「あいつは X さんにマンゴーを売ったが、彼女は買わなかった。」

b. Nó bán xoài cho cô X nhưng cô ấy không mua.
3SG 売る マンゴー ～に X さん しかし 彼女 NEG 買う
「あいつは X さんにマンゴーを売ったが、彼女は買わなかった。」

【注】「N1 に N2 を売る」は(66a)のように bán N1 N2 では言わず、(66b)のように、bán N2 cho N1 という構文となる。(66b)の「～に」というグロスを付けた cho は、使役動詞の cho と同起源の語（原義は「与える」）であるが、前置詞として使われている。

(66b)の cô X「X さん」は、前件の動作主の bán xoài「売る-マンゴー」という動作の目標物ではあるが、被使役者ではない。ただ、前件の動作から想定される cô X の mua xoài「買う-マンゴー」という動作や感情の実現が否定されているとは言える。

Q12-5. X さんにマンゴーを見せた。しかし、(X さんは)見なかった。

(67) Nó cho cô X xem xoài nhưng cô ấy không xem.
3SG CAUS X さん 見る マンゴー しかし 彼女 NEG 見る
「あいつは X さんにマンゴーを見せたが、彼女は見なかった。。」

Q12-6. X さんにマンゴーを与えた。しかし、(X さんは)受け取らなかった。

(68) Nó cho cô X xoài nhưng cô ấy không nhận.
3SG 与える X さん マンゴー しかし 彼女 NEG 受け取る
「あいつは X さんにマンゴーを与えたが、彼女は受け取らなかった。」

【注】cho は「与える」という意味の動詞で、使役動詞 cho と同起源（原義）である。「N1 に N2 を与える」は cho N1 N2 という二重目的語構文を取る。

Q12-7. X さんに本を貸した。しかし、(X さんは)受け取らなかった。

(69) Nó cho cô X mượn sách nhưng cô ấy không nhận.
3SG CAUS X さん 借りる 本 しかし 彼女 NEG 受け取る
「あいつは X さんに本を貸したが、彼女は受け取らなかった。」

Q12-8. X さんに電話した。しかし、(X さんは)電話に出なかった。

(70) Nó gọi điện thoại cho cô X nhưng cô ấy không nghe.
3SG 電話する ～に X さん しかし 彼女 NEG 聞く
「あいつは X さんに電話したが、彼女は出なかった。」

(70)は使役構文ではなく、cô X「X さん」は、動作の目標物である。前件の gọi điện thoại cho cô X「X さんに電話する」から期待される「X さんが電話に出ること」が後件で否定されてはいるため、前件の動作を受ける目標物(cô X)の動作が否定されているとは言えるが、構文的な被使役者の動作のキャンセルが可能とは言えない。

Q12-9. X さんを驚かせた。しかし、(X さんは)驚かなかった。
(71) Nó làm cho cô X bất ngờ nhưng cô ấy không bất ngờ.
3SG CAUS X さん 驚く しかし 彼女 NEG 驚く
「あいつは X さんを驚かせたが、彼女は驚かなかった。」
【注】làm cho は意図的な使役を表す。bất ngờ は「突然」「不意に」「前触れなく」の意味の語であるが、「(突然何かが起こり）驚く」の意味でも用い、グロスもそのように付けた。

Q12-10. X さんを怒らせた。しかし、(X さんは)怒らなかった。(X さんを悪者にするため、X さんを怒らせようとしたが、怒らなかったという状況。)
(72) Nó làm cho cô X giận nhưng cô ấy không giận.
3SG CAUS X さん 怒る しかし 彼女 NEG 怒る
「あいつは X さんを怒らせたが、彼女は怒らなかった。」
【注】使役動詞の làm cho を chọc cho に置き換えた場合（chọc cho N giận で「N を怒らせる」）も文は容認される。また、giận「怒る」を tức「怒る」、cáu「怒る」に置き換えても文は同じ意味で成立する。

Q12-11. X さんを説得した。しかし、(X さんは)引き受けなかった。(困難な仕事を X さんに任せようとしたが、引き受けてくれなかったという状況。)
(73) Nó thuyết phục cô X làm việc nhưng cô ấy không nhận lời.
3SG 説得する X さん する 仕事 しかし 彼女 NEG 引き受ける
「あいつは X さんに仕事をさせようと説得したが、彼女は引き受けなかった。」
【注】文脈として、説得する仕事の内容についてわかっている場合は、làm việc がなくても言える。

以上の採取例のうち、使役構文の中の被使役者の動作や感情の実現が否定されるものは、(63b)(64)(65a)(65b)(67)(69)(71)(72)(73)である。使役構文とは異なる(66b)(68)(70)でも、動作の対象（(68)）あるいは目標物（(66b)(70)）の動作や感情の実現が否定される。

3.13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か

事象キャンセル可能な場合と不可能な場合がある。以下採取例を示す。

Q13-1. 魚を<行く>(V1)<買う>(V2)した。しかし、買わなかった。

(74) Nó đi mua cá nhưng không mua.
3SG 行く 買う 魚 しかし NEG 買う
「あいつは魚を買いに行ったが、買わなかった。」

Q13-2. 魚を<煮る>(V1)<食べる>(V2)した。しかし、食べなかった。

(75) a. *Nó nấu cá ăn nhưng không ăn.
3SG 煮る 魚 食べる しかし NEG 食べる
「あいつは魚を煮たが、食べなかった。」

b. Nó nấu cá để ăn nhưng lại không ăn.
3SG 煮る 魚 [目的] 食べる しかし [強意] NEG 食べる
「あいつは魚を食べるために煮たが、食べなかった。」

【注】「魚を煮て食べる」ことを表す際、nấu ăn cá「煮る-食べる-魚」とは言わず、(75a)のように nấu cá ăn「煮る-魚-食べる」とも言わない。前件は、(75b)のように目的の標識 để「〜するために」を用い nấu cá để ăn「煮る-魚-〜するために-食べる」と言わなければならない。また、後件には強意の lại があるのが自然な言い方とされる。

(75b)は V1 N để V2「V2 するために N を V1 する」という構文で、動詞連続とは言えない。したがって、この場合は事象キャンセル可能とは言えない。

3.14. 受身

Q14-1. X さんは殺された。しかし、死ななかった。

(76) *Ông X bị giết nhưng không chết.
X さん [被害] 殺す しかし NEG 死ぬ
「X さんは殺されたが、死ななかった。」

【注】bị は被害を表す標識であると同時に、bị V で被害の受身を表す。bị giết は「殺されて死んでいる」こと、すなわち動作の結果を含意する。

(76)で見る限り、受身はキャンセルされない。

4. まとめ

以上の結果から、全体的に見ると、ベトナム語は事象キャンセルが可能な場合の多い言語であると言えそうである。以下、3.1~3.14 の観点について、事象キャンセルが可能なものと不可能なものに分けてまとめる。

まず、問題なくキャンセルが可能なものは、3.1「対象物の物理的変化が否定され得るか」、3.2「対象物の知覚が否定され得るか」、3.3「対象物の移動が否定され得るか」、3.4「対象物との接触が否定され得るか」、3.6「作成物の出現が否定され得るか」、3.8「発声が否定され得るか」、3.9「飲食物の摂取が否定され得るか」である。

基本的にキャンセル可能と言えるものは 3.12「被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか」である。これには、3.12 節でも言及したが、使役構文内の被使役者の動作や感情の実現が否定されるというほかに、使役構文ではないが前件の動作の対象あるいは目標物の動作や感情の実現が否定されるという場合も含まれている。

事象キャンセル可能な場合と不可能な場合があるが、可能な場合の多いものは、3.10「自己完結的動作の最終状態が否定され得るか」と 3.11「自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか」である。このうち、3.10 については、đứng「立つ」及び đứng lên「立ち上がる」、ngồi「座る」及び ngồi xuống「腰を下ろす」は、その動作性に関係なくキャンセル可能であり、ngủ「眠る」については、問題なくキャンセル可能とは言えない。このことは、3.10 節でも述べたように、ngủ が動作性が弱くどちらかと言うと状態を表す動詞であるという語彙的アスペクトが関係している可能性がある。また、3.11 については、đứng lên「立ち上がる」、ngồi xuống「座る」、đi「歩く」、chạy「走る」のような動作性の強い動詞に加え、cười「笑う」、khóc「泣く」のような動作と状態とどちらも表すと考えられる動詞も（条件付きではあるが）キャンセル可能である。これらについては、語彙的アスペクトなどをさらに検討する必要がありそうである。

事象キャンセル不可能な場合が多いものは、3.5「目的地への到達が否定され得るか」である。このうち、đi「行く」はキャンセル可能であるのに対し、đến「着く」、về「帰る」、lên「上がる」は不可能であり、これは動詞の表す動作の継続性に関係している可能性がある。3.5 節でも述べたが、đi đến と đi lên がキャンセル可能であるのに対し、đi về がキャンセル不可能であることの要因については、さらに検討を要する。

3.13「動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か」については、đi V2「行く-V2」の場合はキャンセル可能であるが、その他の V1V2 連続についてはさらに多くの例にあたる必要がある。

事象キャンセルが不可能なものは、3.7「対象物の獲得が否定されうるか」と 3.14「受身」である。受身については、(76)の採取例の場合はキャンセル不可能という結果だが、さらに多くの例文で調査する必要がある。

略号

1	一人称	NEG	否定
3	三人称	PFV	完了相
CAUS	使役動詞	SG	単数
CLF	類別詞	V1	動詞連続の第一動詞
IPFV	未完了相	V2	動詞連続の第二動詞

参考文献

Hoàng, Thị Châu (2004) *Phương Ngữ Học Tiếng Việt*. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Đại Học Quốc Gia Hà Nôi.

春日淳(2017)「ベトナム語における動詞 V1 と V2 の主体が異なる連続 V1V2 について」東南アジア諸言語研究会(編)『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』1–18. 東京：慶應義塾大学言語文化研究所.

春日淳(2021)「ベトナム語における VN 型の不随意動詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』52: 13–22.

Nguyễn, Kim Thản (1999) *Động Từ trong Tiếng Việt (2nd Edition)*. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

ベトナム語の事象キャンセル

清水　政明

はじめに

本稿は、統一の調査票にもとずいて調査したベトナム語の事象キャンセルの可能性について報告するものである。コンサルタントはハノイ出身の20代女性、調査当時、ベトナム語の文法を研究する大学院生で、高い日本語能力を有する。調査は、基本的に日本語の文をコンサルタントに見せ、それをベトナム語に訳してもらう形で行った。細かい状況の説明、確認などはベトナム語で行った。なお、調査文で用いられる一人称は全て「弟妹」から派生した人称代名詞emである[1]。これは一般に生徒が先生に向かって用いる一人称代名詞であり、コンサルタントが調査者を聞き手に据え発話する状況を想定して調査を行ったことを意味する。

調査票の文は全て「～した。しかし、(～は)～しなかった。」の形をとる。「～した。」を前件、「しかし、(～は)～しなかった」を後件と呼ぶとすると、前件の動詞句の前に「既然」（動作・状態の実現）を表すđãを、同動詞句の後に「完了」を表すrồiを置いても、基本的にその文の容認度は同じであった。しかし、一部結果に差が見られたので、その場合に限って説明を付すことにした。また、コンサルタントによると、多くの場合、後件を省略し前件の文のみにrồiを置いた形で、結果を含意することが可能とのことであった。よって、(1-5-c)のように、そうでない場合には特に説明を付すこととした。

Q1. 対象物の物理的変化が否定され得るか

(1-1) ゴキブリを殺した。しかし、(ゴキブリは)死ななかった。

Tao	giết	gián,	nhưng	nó	không	chết.
1sg	殺す	ゴキブリ	しかし	3sg	NEG	死ぬ

ゴキブリを殺したが、死ななかった。

(1-1)は、ゴキブリを丸めた新聞などでたたきつぶそうとしたが、完全には死にきらずどこかへ逃げて行った状況を表す。一方、対象が人間で刃物で刺して殺そうとした場合には、その刃が当たったが血が出ていない場合、muốn giết（殺そうとする）、刃が当たって血が出てきただけの場合giết（殺す）、刃が刺さって死んだ場合もgiétで表現するとのコメントがあった。

(1-2) ココヤシの実を落とした。しかし、落ちなかった。

【注】高い所になっているココヤシの実を長い棒でつついて落とそうとしたが、落ちなか

[1] 唯一の例外は(1-1)giết(殺す)の文であり、そこでは卑称 tao が用いられている。

ったという状況。

a. Em	chọc	cho	dừa	rơi,	nhưng	nó	không	rơi.
1sg	突く	CAUS	椰子	落ちる	しかし	3sg	NEG	落ちる

椰子の実を突いて落とそうとしたけど、落ちませんでした。

b. Em	đã	chọc	cho	dừa	rơi,	nhưng	nó	không	rơi.
1sg	既然	突く	CAUS	椰子	落ちる	しかし	3sg	NEG	落ちる

椰子の実を突いて落とそうとしたけど、落ちませんでした。

c. *Em	chọc	cho	dừa	rơi	rồi,	nhưng	nó	không	rơi.
1sg	突く	CAUS	椰子	落ちる	完了	しかし	3sg	NEG	落ちる

椰子の実を突いて落とそうとしたけど、落ちませんでした。

(1-2)の状況を表現するのにコンサルタントは動詞連続(VP1-VP2)の形をとった。この場合、đãはVP1(chọc)に、rồiはVP2(cho dừa rơi)のrơi(落ちる)に作用する傾向があることから、(1-2-c)は椰子を落とすことが完結しており、後件の内容と矛盾し非文となったと考えられる。

(1-3) ココヤシの実を割った。しかし、割れなかった。

【注】ヤシの実を鉈(なた)で割ろうとしたが、割れなかったという状況。

a. ?Em	chặt	dừa,	nhưng	nó	không	vỡ.
1sg	叩き切る	椰子	しかし	3sg	NEG	割れる

椰子の実を叩き切ったけど、割れませんでした。

b. *Em	bổ	dừa,	nhưng	nó	không	vỡ.
1sg	割る	椰子	しかし	3sg	NEG	割れる

椰子の実を割ったけど、割れませんでした。

(1-3-a)の動詞chặtは「叩き切る」を意味し、通常その対象となるのはdừa(椰子), xương(骨), gà(鶏), cây(木)などである。一方(1-3-b)の動詞bổは「割る」を意味し、通常その対象はdừa(椰子), cam(オレンジ), dưa hấu(西瓜), củi(薪)などである。dừa(椰子)の場合、いずれの動詞の対象にもなりえる。

(1-3-a)の場合「何度も叩き切る動作を繰り返したが割れなかった」という読みが可能であり、その場合に限りキャンセルが可能である。ただし、動詞句の前にđã(既然)、あるいは動詞句の後にrồi(完了)、あるいはその両方を置くと、その読みも難しくなり非文となる。

以上より、chặtにせよbổにせよ、その動作が完了した時点で割れた状態が実現している場合には、容認不可となり、1回の動作だけでまだ割れた状態が実現していない場合にのみ容

認可能となる。その読みを可能にするのは(1-3-a)のchặtである。

(1-4) 窓を壊した。しかし、壊れなかった。

【注】ガラス窓を棒で叩いて壊そうとしたが、壊れなかったという状況。

a. Em	đập	cho	kính	vỡ,	nhưng	nó	không	vỡ.
1sg	叩く	CAUS	ガラス	壊れる	しかし	3sg	NEG	壊れる

ガラスを叩き割ったけど、割れませんでした。

b. Em	đã	đập	cho	kính	vỡ,	nhưng	nó	không	vỡ.
1sg	既然	叩く	CAUS	ガラス	壊れる	しかし	3sg	NEG	壊れる

ガラスを叩き割ったけど、割れませんでした。

c. *Em	đập	cho	kính	vỡ	rồi,	nhưng	nó	không	vỡ.
1sg	叩く	CAUS	ガラス	壊れる	完了	しかし	3sg	NEG	壊れる

ガラスを叩き割ったけど、割れませんでした。

(1-2)と同様、動詞連続の形で表現されており、rồi(完了)はVP2(cho kính vỡ)のvỡ(壊れる)に作用しているので、(1-4-c)が非文となる、と解釈できる。

(1-5) 糸を切った。しかし、切れなかった。

【注】糸を刃物(あるいは手、歯など)で切ろうとしたが、切れなかったという状況。

a. Em	cắt	chỉ,	nhưng	nó	không	đứt.
1sg	切る	糸	しかし	3sg	NEG	切れる

糸を切ったけど、切れませんでした。

b. Em	cắn	chỉ,	nhưng	nó	không	đứt.
1sg	噛む	糸	しかし	3sg	NEG	切れる

糸を歯で噛んだけど、切れませんでした。

c. Em	cắn	chỉ	rồi.
1sg	噛む	糸	完了

糸を噛みました。

(1-5)【注】の状況を表現する文として、(1-5-a)と(1-5-b)が示された。特に「歯で噛んで切る」ことを明示する表現として後者が示された。当然のことながらcắn(噛む)という動作そのものには「ちぎる」という意味は含意されないので、(1-5-c)はrồiを含むものの、結果は含意されない。cắn(噛む)を用いて「ちぎれた」結果まで表現するには、(1-5-d)または(1-5-e)のよう

な動詞連続の形を必要とする。

d. Em cắn cho chỉ đứt rồi.
1sg 噛む CAUS 糸 切れる 完了
糸を噛みちぎりました。

e. Em cắn đứt chỉ rồi.
1sg 噛む 切れる 糸 完了
糸を噛みちぎりました。

(1-6) 枝を折った。しかし、折れなかった。
Em bẻ cành, nhưng nó không gãy.
1sg 折り曲げる 枝 しかし 3sg NEG 折れる
枝を折ったけど、折れませんでした。

したがって、bẻは折り曲げる動作を示し、折れた状態までは含意しない。

(1-7) 窓をあけた。しかし、あかなかった。
a. *Em mở cửa, nhưng nó không mở.
1sg 開ける 窓 しかし 3sg NEG 開く
窓をあけたけど、あきませんでした。

mởは自他両用動詞であり、(1-7-a)の前件文で他動詞、後件文で自動詞として用いられているが、この場合は容認されない。(1-7-b)のようにいずれも他動詞として用いた場合は容認される。状況としては、鍵がかかっていて開けられない、蝶番が壊れていて開けられない、などが想定されている。

b. Em mở cửa, nhưng không mở được.
1sg 開ける 窓 しかし NEG 開く 可能
窓を開けたけど、開けられませんでした。

đã(既然), rồi(完了)を付加すると、以下の通り容認度に差が生じる。

c. Em đã mở cửa, nhưng không mở được.
1sg 既然 開ける 窓 しかし NEG 開く 可能
窓を開けたけど、開けられませんでした。

d. *Em　mở　cửa　rồi,　nhưng　không　mở　được.
　1sg　開ける　窓　完了　しかし　NEG　開く　可能
　窓を開けたけど、開けられませんでした。

mở cửa(窓を開ける)に関しては、đã(既然)を付加すると「窓を開けようとした」状況を含意することが可能であるが、rồi(完了)を付加すると、窓が開いた状態になることを含意する傾向が強いようである。

(1-8) 紙を貼った。しかし、くっつかなかった。
Em　dán　giấy,　nhưng　nó　không　dính.
1sg　貼る　紙　しかし　3sg　NEG　くっつく
紙を貼ったけど、つきませんでした。

(1-9) 木を倒した。しかし、倒れなかった。
a. *Em　làm　cây　đổ,　nhưng　cây　không　đổ.
　1sg　CAUS　木　倒れる　しかし　木　NEG　倒れる
　木を倒したけど、倒れませんでした。

b. *Em　làm　đổ　cây,　nhưng　cây　không　đổ.
　1sg　CAUS　倒れる　木　しかし　木　NEG　倒れる
　木を倒したけど、倒れませんでした。

いずれも使役の形式làmを用いる(1-9-a), (1-9-b)は共に結果を含意する。一方、「木を引いたが、倒れなかった」を表現する(1-9-c)は容認可能である。

c. Em　kéo　cây,　nhưng　cây　không　đổ.
　1sg　引く　木　しかし　木　NEG　倒れる
　木を引いたけど、倒れませんでした。

ただし、そこに結果を表すđổ(倒れる)を付加すると容認不可となる。

d. *Em　kéo　cây　đổ,　nhưng　cây　không　đổ.
　1sg　引く　木　倒れる　しかし　木　NEG　倒れる
　木を引いて倒したけど、倒れなかった。

(1-10) 湯を沸かした。しかし、沸かなかった。

a. ?Em đun nước, nhưng nước không sôi.
1sg 湧かす 水 しかし 水 NEG 湧く
水を沸かしたけど、沸きませんでした。

b. Em đun nước, nhưng nước chưa sôi.
1sg 湧かす 水 しかし 水 未完了 湧く
水を沸かしたけど、まだ沸いていません。

đun(沸かす)は火をつける動作を示し、sôi(沸く)は温度が100度に達して沸騰する状態を表す。前件の動作が完了してから後件の状態に達するまで明らかな時間の幅があることから、後件の否定表現は、không(NEG)に比べてchưa(未完了)の方が容認度が高い。

(1-11) ござを広げた。しかし、広がらなかった。

Em trải chiếu, nhưng không trải được.
1sg 敷く ござ しかし NEG 敷く 可能
ござを敷いたが、敷けなかった。

想定される状況は、部屋が狭すぎてござが敷けなかった。

(1-12) 木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった。

【注】木の枝を焚き木にしようとしたが、湿っていて燃えなかったという状況。

Em đốt cành, nhưng nó không cháy.
1sg 燃やす 枝 しかし 3sg NEG 燃える
木の枝を燃やしたけど、燃えませんでした。

(1-13) 山芋を煮た。しかし、煮えなかった。

【注】芋を煮ようとしたが、火力が弱く、煮えなかったという状況。

a. Em ninh khoai, nhưng nó không nhừ.
1sg 煮る 芋 しかし 3sg NEG 煮えた
芋を煮たけど、煮えませんでした。

後件を省略して前件にrồi(完了)を付加した(1-13-b)は、煮えた状態までを含意しない。

b. Em ninh khoai rồi.
1sg 煮る 芋 完了

芋を煮ました。

煮えた状態までを表現したい場合には、(1-13-c)のように動詞連続の形で表現することになる。

c. Em	ninh	khoai	cho	nó	nhừ	rồi.
1sg	煮る	芋	CAUS	3sg	煮えた	完了

芋を（煮えるまで）煮ました。

(1-14) 魚を干した。しかし、乾かなかった。
【注】干し魚を作ろうとしたが、乾ききらなかったという状況。

Em	phơi	cá,	nhưng	nó	không	khô.
1sg	干す	魚	しかし	3sg	NEG	乾く

魚を干したけど、乾きませんでした。

(1-15) スイカを冷やした。しかし、冷えなかった。

a. Em	để	dưa hấu	vào	tủ lạnh	cho	mát,	nhưng	nó	không
1sg	置く	スイカ	入る	冷蔵庫	ために	冷えた	しかし	3sg	NEG
mát.									
冷えた									

スイカを冷やすために冷蔵庫に入れたけど、冷えませんでした。

因みに、ビール、ワイン、果物などを冷蔵庫や氷水に入れて冷やす意味を示すướp lạnh(冷やす)という表現があるが、コンサルタントによると、スイカを目的語として表現することに違和感を感じるとのことであった。

魚を冷凍する場合、(1-15-b)のように使役の形式làmを用いるが、この場合(1-9-a, b)と同様、結果が含意されることになり、非文となる。

b. *Em	làm	lạnh	cá,	nhưng	nó	không	lạnh.
1sg	CAUS	冷たい	魚	しかし	3sg	NEG	冷たい

魚を冷凍したけど、冷えませんでした。

Q2. 対象物の知覚が否定され得るか

(2-1) 見た。しかし、見えなかった。

a. Em nhìn, nhưng không thấy.
1sg 見る しかし NEG 見える[2]
見たけど、見えなかった。

霧のため、対象が遠すぎてみえないような状況を示す。因みに、前件の動詞の後に目的語を置くと結果を含意する読みが強くなる。

b. *Em nhìn nó, nhưng không nhìn thấy nó.
1sg 見る 3sg しかし NEG 見る 見える 3sg
あの子を見たけど、見えませんでした。

(2-2) 聞いた。しかし、聞こえなかった。
a. Em nghe, nhưng không nghe thấy.
1sg 聞く しかし NEG 聞く 聞こえる
聞いたけど、聞こえませんでした。

前件の事象をキャンセルする(2-2-a)は確かに容認可能であるが、同様の状況を表すには動詞連続を用いた以下(2-2-b)の方が自然とのことである。

b. Em không nghe thấy.
1sg NEG 聞く 聞こえる
聞こえません。（聞こえませんでした。）

(2-1-b)と同様、目的語を付加した(2-2-c)はやはり結果を含意する読みが強くなる。

c. *Em nghe tiếng chim, nhưng không nghe thấy nó.
1sg 聞く 声 鳥 しかし NEG 聞く 聞こえる 3sg
鳥の声を聞いたけど、聞こえませんでした。

(2-3) 魚醤のにおいをかいだ。しかし、においがしなかった。
a. Em ngửi, nhưng không thấy mùi nước mắm.
1sg 嗅ぐ しかし NEG においがする におい 魚醤
嗅いだけど、魚醤のにおいがしなかった。

(2-3-a)は後件の動詞に目的語を付加した形が示されているが、前件の動詞に目的語を付加し

[2] thấy は知覚一般を表す動詞。文脈によって「見える」「聞こえる」「においがする」「感じる」等に訳す。

た(2-3-b)はやはり結果を含意する読みが強くなる。

b. *Em	ngửi	mùi	nước mắm,	nhưng	không	thấy	nó.
1sg	嗅ぐ	におい	魚醤	しかし	NEG	においがする	3sg

魚醤の匂いを嗅いだけど、匂いがしなかった。

Q3. 対象物の移動が否定され得るか

(3-1) 小石を投げた。しかし、投げられなかった。

【注】小石を投げようとしたが、手にくっついて、手から離れなかったという状況。

a. Em	ném	kẹo	đi,	nhưng	không	ném	được.
1sg	投げる	飴	行く	しかし	NEG	投げる	可能

飴を投げたけど、投げられませんでした。

手にくっついて投げられなかった状況に加えて、投げる勇気がなかった場合も同様。đã(既然)とrồi(完了)を付加した(3-1-b)と(3-1-c)の容認度に差がある。この差はrồiが方向を示す動詞điに作用し、手から離れた状態が実現したことを含意するためと考えられる。

b. Em	đã	ném	kẹo	đi,	nhưng	không	ném	được.
1sg	既然	投げる	飴	行く	しかし	NEG	投げる	可能

飴を投げたけど、投げられませんでした。

c. *Em	ném	kẹo	đi	rồi,	nhưng	không	ném	được.
1sg	投げる	飴	行く	完了	しかし	NEG	投げる	可能

飴を投げたけど、投げられませんでした。

(3-2) スイカを籠に入れた。しかし、入らなかった。

【注】スイカを籠に入れようとしたが、大きくて入らなかったという状況。

Em	cho	dưa hấu	vào	rổ,	nhưng	không	vừa.
1sg	CAUS	西瓜	入る	籠	しかし	NEG	そぐう

西瓜を籠に入れたけど、入らなかった。

使役の形式choを用いた(3-2)は結果を含意しない。

(3-3) 山芋を抜いた。しかし、抜けなかった。

Em	nhổ	khoai,	nhưng	không	nhổ	được.
1sg	引き抜く	芋	しかし	NEG	引き抜く	可能

芋を引き抜いたけど、引き抜けなかった。

(3-4) 岩を動かした。しかし、動かなかった。
【注】大きな岩を動かそうとしたが、重すぎて動かなかったという状況。

a. *Em	di chuyển	tảng	đá,	nhưng	không	di chuyển	được.
1sg	動かす	CLF	石	しかし	NEG	動かす	可能

岩を動かしたけど、動かせませんでした。

前件の動詞の前にthử(試す)を置くと、動かそうとした意味が表現できる。

b. Em	thử	di chuyển	tảng	đá,	nhưng	không	di chuyển	được.
1sg	試す	動かす	CLF	石	しかし	NEG	動かす	可能

岩を動かそうとしたけど、動かせませんでした。

(3-5) 鳥を放した。しかし、放せなかった。
【注】鳥を放そうとしたが、鳥かごから出て行かなかったという状況。

a. Em	thả	chim	đi,	nhưng	nó	không	đi.
1sg	放す	鳥	行く	しかし	3sg	NEG	行く

鳥を放したけど、飛んでいきませんでした。

(3-5)の場合、前件の動詞句にđã(既然), rồi(完了)を付加すると、いずれも結果を含意する。

b. *Em	đã	thả	chim	đi,	nhưng	nó	không	đi.
1sg	既然	放す	鳥	行く	しかし	3sg	NEG	行く

鳥を放したけど、飛んでいきませんでした。

c. *Em	thả	chim	đi	rồi,	nhưng	nó	không	đi.
1sg	放す	鳥	行く	完了	しかし	3sg	NEG	行く

鳥を放したけど、飛んでいきませんでした。

(3-6) 臼を載せた。しかし、載らなかった。
【注】石臼を棚に載せようとしたが、思ったより重くて載せられなかったという状況。

a. Em	cho	cối	lên	giá,	nhưng	không	cho	được.
1sg	CAUS	臼	上る	棚	しかし	NEG	CAUS	可能

臼を棚に載せたけど、載せられませんでした。

(3-6)は使役の形式choを用いており、容認可能である。一方、前件の動詞句にđã(既然), rồi(完了)を付加するといずれも結果を含意する。

b. *Em đã cho cối lên giá, nhưng không cho được.
1sg 既然 CAUS 臼 上る 棚 しかし NEG CAUS 可能
臼を棚に載せたけど、載せられませんでした。

c. *Em cho cối lên giá rồi, nhưng không cho được.
1sg CAUS 臼 上る 棚 完了 しかし NEG CAUS 可能
臼を棚に載せたけど、載せられませんでした。

Q4. 対象物との接触が否定され得るか

(4-1) Xさんを叩いた。しかし、叩けなかった。
【注】叩こうとしたが、手が届かなかったという状況。
a. *Em đánh nó, nhưng không tới.
1sg 叩く 3sg しかし NEG 届く
あいつを叩いたけど、届きませんでした。

(4-1-a)の前件の動詞から目的語を削除した(4-1-b)は容認可能となる。

b. Em đánh, nhưng không tới.
1sg 叩く しかし NEG 届く
叩いたけど、届きませんでした。

ただし、(4-1-b)の前件の動詞にrồi(完了)を付加すると容認度が低下する。

c. ?Em đánh rồi, nhưng không tới.
1sg 叩く 完了 しかし NEG 届く
叩いたけど、届きませんでした。

(4-2) Xさんを蹴った。しかし、蹴れなかった。
【注】蹴ろうとしたが、足が届かなかったという状況。
a. *Em đá nó, nhưng không tới.
1sg 蹴る 3sg しかし NEG 届く
あいつを蹴ったけど、届きませんでした。

(4-2-a)の場合も、目的語を削除すると容認可能となる。

b. Em đá, nhưng không tới.
1sg 蹴る しかし NEG 届く
蹴ったけど、届きませんでした。

(4-3) コップをつかんだ。しかし、つかめなかった。
【注】コップに一瞬触れたが、熱くてしっかりと持つことができなかったという状況。
Em cầm cốc, nhưng nóng quá không cầm được.
1sg つかむ コップ しかし 熱い 過ぎる NEG つかむ 可能
コップをつかんだけど、熱すぎてつかめませんでした。

Q5. 目的地への到達が否定され得るか

(5-1) 東京に行った。しかし、着かなかった。
a. *Em đi Tokyo, nhưng không tới được Tokyo.
1sg 行く/出る 東京 しかし NEG 着く 可能 東京
東京に{行った/向かって出発した}けど、東京に着きませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能。想定されている状況は、途中で引き返さなければならない用事ができた。発話時に話し手は東京以外の場所にいる。

b. Em định đi Tokyo, nhưng không đi được.
1sg 積りだ 行く/出る 東京 しかし NEG 行く/出る 可能
東京に行くつもりだったけど、行けませんでした。

一方、話し手が発話時東京にいる場合、(5-1-c)のように後件の動詞をtới(着く)にする必要がある。

c. Em định đi Tokyo, nhưng không tới được.
1sg 積りだ 行く/出る 東京 しかし NEG 着く 可能
東京に行くつもりだったけど、着けませんでした。

(5-2) ここに来た。しかし、着かなかった。
【注】昨日もここに来ようとしたのだが、道が分からなくてたどり着かなかったという状況。

a. *Em tới đây, nhưng không tới.
1sg 来る/着く ここ しかし NEG 来る/着く
ここに{来た/着いた}けど、着きませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置き、文頭にhôm qua(昨日)を置くと容認可能となる。後件には可能表現を置いた方がよい。

b. Hôm qua em định tới đây, nhưng không tới được.
昨日 1sg 積りだ 来る/着く ここ しかし NEG 来る/着く 可能
昨日ここに来る積りでしたが、来られませんでした。

(5-3) 家に帰った。しかし、着かなかった。
a. *Em về nhà, nhưng không tới được.
1sg 帰る 家 しかし NEG 着く 可能
家に帰ったけど、着きませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置き、文頭にhôm qua(昨日)を置くと容認可能となる。

b. Hôm qua em định về nhà, nhưng lại không về được.
昨日 1sg 積りだ 帰る 家 しかし 意外性 NEG 帰る 可能
昨日家に帰る積りでしたが、帰れませんでした。

(5-4) 二階に上がった。しかし、着かなかった。
【注】家の二階に上がろうとしたが、膝が痛くて階段を上がれなかったという状況。
a. *Em lên tầng hai, nhưng không lên được.
1sg 上がる 階 2 しかし NEG 上がる 可能
二階に上がったけど、上がれませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em định lên tầng hai, nhưng không lên được.
1sg 積りだ 上がる 階 2 しかし NEG 上がる 可能
二階に上がる積りでしたが、上がれませんでした。

Q6. 作成物の出現が否定され得るか (どの程度まで出現したかに注意)
(6-1) 人形を作った。しかし、出来なかった。

【注】人形を作ろうとしたが、技術がなかったので結局は出来上がらなかったという状況。

a. Em	làm	búp-bê,	nhưng	không	làm	được.
1sg	作る	人形	しかし	NEG	作る	可能

人形を作ったけど、作れませんでした。

前件の動詞にđã(既然)を付加しても容認度に差はないが、rồi(完了)を付加すると結果を含意する可能性が高まり容認度が下がる。

b. Em	đã	làm	búp-bê,	nhưng	không	làm	được.
1sg	既然	作る	人形	しかし	NEG	作る	可能

人形を作ったけど、作れませんでした。

c. ?Em	làm	búp-bê	rồi,	nhưng	không	làm	được.
1sg	作る	人形	完了	しかし	NEG	作る	可能

人形を作ったけど、作れませんでした。

(6-2) 家を建てた。しかし、出来なかった。

【注】家を作ろうとしたが、途中で風雨で壊れ、出来なかったという状況。

a. *Em	xây	nhà,	nhưng	không	xây	được.
1sg	建てる	家	しかし	NEG	建てる	可能

家を建てたけど、建てられませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em	định	xây	nhà,	nhưng	không	xây	được.
1sg	積りだ	建てる	家	しかし	NEG	建てる	可能

家を建てようとしたけど、建てられませんでした。

(6-3) 穴を掘った。しかし、穴ができなかった。

【注】穴を掘ろうとしたが、地面が固くて穴が出来なかったという状況。

a. Em	đào	hố,	nhưng	không	đào	được.
1sg	掘る	穴	しかし	NEG	掘る	可能

穴を掘ったけど、掘れませんでした。

(6-3)の場合、前件の動詞にđã(既然)を付加しても容認度に差はないが、rồi(完了)を付加する

と結果を含意し容認不可となる。

b. Em đã đào hố, nhưng không đào được.
1sg 既然 掘る 穴 しかし NEG 掘る 可能
穴を掘ったけど、掘れませんでした。

c. *Em đào hố rồi, nhưng không đào được.
1sg 掘る 穴 完了 しかし NEG 掘る 可能
穴を掘ったけど、掘れませんでした。

Q7. 対象物の獲得が否定され得るか

(7-1) その本を買った。しかし、買えなかった。

【注】本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなくて、入手することができなかったという状況。

a. *Em mua quyển đó, nhưng không mua được.
1sg 買う CLF その しかし NEG 買う 可能
その本を買ったけど、買えませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em định mua quyển đó, nhưng không mua được.
1sg 積りだ 買う CLF その しかし NEG 買う 可能
その本を買おうとしたけど、買えませんでした。

(7-2) 金を盗んだ。しかし、盗めなかった。

【注】金を盗もうとして店に入ったが、警備員に見つかって入手できなかったという状況。

a. *Em ăn trộm tiền, nhưng không ăn trộm được.
1sg 盗む お金 しかし NEG 盗む 可能
お金を盗んだけど、盗めませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em định ăn trộm tiền, nhưng không ăn trộm được.
1sg 積りだ 盗む お金 しかし NEG 盗む 可能
お金を盗もうとしたけど、盗めませんでした。

Q8. 発声が否定され得るか

(8-1) 話した。しかし、声が出なかった。

Em	nói,	nhưng	không	ra	tiếng.
1sg	話す	しかし	NEG	出る	声

話したけど、声が出ませんでした。

(8-2) 歌った。しかし、声が出なかった。

Em	hát,	nhưng	không	ra	tiếng.
1sg	歌う	しかし	NEG	出る	声

歌ったけど、声が出ませんでした。

Q9. 飲食物の摂取が否定され得るか

(9-1) 魚を食べた。しかし、食べられなかった。

【注】魚を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。

a. *Em	ăn	cá,	nhưng	không	nuốt	được.
1sg	食べる	魚	しかし	NEG	飲み込む	可能

魚を食べたけど、飲み込めませんでした。

(9-1-a)の前件の動詞から目的語を削除した(9-1-b)は容認可能となる。

b. Em	ăn,	nhưng	không	nuốt	được.
1sg	食べる	しかし	NEG	飲み込む	可能

食べたけど、飲み込めませんでした。

前件の動詞に目的語がある場合でも、thử(試す)を付加すると容認可能となる。想定される状況は、一口目は飲み込んだが、二口目以降は無理だったという状態。

c. Em	ăn	thử	một	miếng	cá,	nhưng	không	ăn	được.
1sg	食べる	試す	1	口	魚	しかし	NEG	食べる	可能

魚を一口食べてみたけど、食べられませんでした。

(9-2) 酒を飲んだ。しかし、飲めなかった。

【注】酒を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。

a. Em	uống	rượu,	nhưng	không	uống	được.
1sg	飲む	酒	しかし	NEG	飲む	可能

酒を飲んだけど、飲めませんでした。

(6-3)のđào hố(穴を掘る)と同様、(9-2)の場合も、前件の動詞にđã(既然)を付加しても容認度に差はないが、rồi(完了)を付加すると結果を含意し容認不可となる。

b. Em đã uống rượu, nhưng không uống được.
1sg 既然 飲む 酒 しかし NEG 飲む 可能
酒を飲んだけど、飲めませんでした。

c. *Em uống rượu rồi, nhưng không uống được.
1sg 飲む 酒 完了 しかし NEG 飲む 可能
酒を飲んだけど、飲めませんでした。

Q10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか

(10-1) 立った。しかし、立てなかった。

【注】椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況。

a. *Em đứng, nhưng không đứng (lên) được.
1sg 立つ しかし NEG 立つ 上がる 可能
立ったけど、立ち上がれませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em định đứng, nhưng không đứng (lên) được.
1sg 積りだ 立つ しかし NEG 立つ 上がる 可能
立とうとしたけど、立ち上がれませんでした。

(10-2) 座った。しかし、座れなかった。

【注】椅子に座ろうとして脚を曲げたが、脚が痛くて、尻を椅子につけた状態にならなかったという状況。

a. *Em ngồi, nhưng không ngồi được.
1sg 座る しかし NEG 座る 可能
座ったけど、座れませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em định ngồi, nhưng không ngồi được.
1sg 積りだ 座る しかし NEG 座る 可能

座ろうとしけど、座れませんでした。

(10-3) 眠った。しかし、眠れなかった。
【注】眠ろうとして横になったが、眠りに入ることができなかったという状況。

a. *Em	ngủ,	nhưng	không	ngủ	được.
1sg	眠る	しかし	NEG	眠る	可能

眠ったけど、眠れませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em	định	ngủ,	nhưng	không	ngủ	được.
1sg	積りだ	眠る	しかし	NEG	眠る	可能

眠ろうとしたけど、眠れませんでした。

因みに、đi ngủ(行く+寝る: 床に就く)の場合、結果は含意せず容認可能となる。

c. Em	đi	ngủ,	nhưng	không	ngủ	được.
1sg	行く	眠る	しかし	NEG	眠る	可能

床に就いたけど、眠れませんでした。

Q11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか

(11-1) 立った。しかし、立てなかった。
【注】立ち上がろうとして力を入れたが、椅子から尻をまったく離すことができなかったという状況。
(10-1)に同じ。

(11-2) 座った。しかし、座れなかった。
【注】座ろうとして力を入れたが、脚が痛くてまったく動作を開始することができなかったという状況。
(10-2)に同じ。

(11-3) 歩いた。しかし、歩けなかった。
【注】歩こうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。

a. *Em	bước,	nhưng	không	bước	được.
1sg	歩く	しかし	NEG	歩く	可能

歩いたけど、歩けませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em　định　bước,　nhưng　không　bước　được.
1sg　積りだ　歩く　しかし　NEG　歩く　可能
歩こうとしたけど、歩けませんでした。

(11-4) 走った。しかし、走れなかった。
【注】走ろうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。
a. *Em　chạy,　nhưng　không　chạy　được.
1sg　走る　しかし　NEG　走る　可能
走ったけど、走れませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em　định　chạy,　nhưng　không　chạy　được.
1sg　積りだ　走る　しかし　NEG　走る　可能
走ろうとしたけど、走れませんでした。

(11-5) 笑った。しかし、笑えなかった。
【注】笑った顔を作ろうとしたが、恐怖感のため、笑った顔を作ることができなかったという状況。
a. *Em　cười,　nhưng　không　cười　được.
1sg　笑う　しかし　NEG　笑う　可能
笑ったけど、笑えませんでした。

前件の動詞の前にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em　định　cười,　nhưng　không　cười　được.
1sg　積りだ　笑う　しかし　NEG　笑う　可能
笑おうとしたけど、笑えませんでした。

(11-6) 泣いた。しかし、泣けなかった。
【注】演技のため、泣こうとしたが、演技力がないので涙を流すことができなかったとい

う状況。

a. *Em khóc, nhưng không khóc được.
1sg 泣く しかし NEG 泣く 可能
泣いたけど、泣けませんでした。

前件の動詞の前にmuốn (欲する)を置くと容認可能となる。泣き声も出ず、涙も出ず、悲しい顔をしているだけの状態を表す。

b. Em muốn khóc, nhưng không khóc được.
1sg 欲する 泣く しかし NEG 泣く 可能
泣きたいけど、泣けませんでした。

因みに、泣いたが声が出ない場合は、(11-6-c)となる。

c. Em khóc, nhưng không ra tiếng.
1sg 泣く しかし NEG 出る 声
泣いたけど、声が出ませんでした。

Q12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか

(12-1) Xさんを踊らせた。しかし、(Xさんは)踊らなかった。
Em bắt nó nhảy, nhưng nó không nhảy.
1sg CAUS 3sg 踊る しかし 3sg NEG 踊る
あの子を踊らせたけど、踊りませんでした。

「踊りなさい」と言う、あるいは踊り開始の合図として音楽をかける場合などを示す。

(12-2) Xさんを行かせた。しかし、(Xさんは)行かなかった。
Em bắt nó đi, nhưng nó không đi.
1sg CAUS 3sg 行く しかし 3sg NEG 行く
あの子を行かせたけど、行きませんでした。

「行け」と言う、背中を押す、手を引いて一緒に行かせようとする、などの状況を示す。

(12-3) Xさんにマンゴーを食べさせた。しかし、(Xさんは)食べなかった。
Em bắt nó ăn xoài, nhưng nó không ăn.
1sg CAUS 3sg 食べる マンゴー しかし 3sg NEG 食べる

あの子にマンゴーを食べさせたけど、食べませんでした。

「食べろ」と言う、口に押し込むなどの状況を示す。

(12-4) Xさんにマンゴーを売った。しかし、(Xさんは)買わなかった。

a. Em	bán	xoài	cho	nó,	nhưng	nó	không	mua.
1sg	売る	マンゴー	に	3sg	しかし	3sg	NEG	買う

あの子にマンゴーを売ったけど、買いませんでした。

売るために言葉のやり取りをする場合を示す。(12-4)の場合、前件の動詞句にđã(既然), rồi(完了)を付加するといずれも結果を含意し、非文となる。

b. *Em	đã	bán	xoài	cho	nó,	nhưng	nó	không	mua.
1sg	既然	売る	マンゴー	やる	3sg	しかし	3sg	NEG	買う

あの子にマンゴーを売ったけど、買いませんでした。

c. *Em	bán	xoài	cho	nó	rồi,	nhưng	nó	không	mua.
1sg	売る	マンゴー	やる	3sg	完了	しかし	3sg	NEG	買う

あの子にマンゴーを売ったけど、買いませんでした。

(12-5) Xさんにマンゴーを見せた。しかし、(Xさんは)見なかった。

Em	cho	nó	xem	xoài,	nhưng	nó	không	xem.
1sg	CAUS	3sg	見る	マンゴー	しかし	3sg	NEG	見る

あの子にマンゴーを見せたけど、見ませんでした。

目の前にもっていって見せる状況を示す。

(12-6) Xさんにマンゴーを与えた。しかし、(Xさんは)受け取らなかった。

Em	cho	nó	xoài,	nhưng	nó	không	lấy.
1sg	やる	3sg	マンゴー	しかし	3sg	NEG	取る

あの子にマンゴーをやったけど、受け取りませんでした。

手に持たせる状況を想定している。

(12-7) Xさんに本を貸した。しかし、(Xさんは)受け取らなかった。

Em	cho	nó	mượn	sách,	nhưng	nó	không	lấy.
1sg	CAUS	3sg	借りる	本	しかし	3sg	NEG	取る

あの子に本を貸したけど、受け取りませんでした。

想定される状況は、忘れたから貸してやると言う。

(12-8) Xさんに電話した。しかし、(Xさんは)電話に出なかった。

Em	gọi	điện thoại	cho	nó,	nhưng	nó	không	nghe	máy.
1sg	呼ぶ	電話	に	3sg	しかし	3sg	NEG	聞く	機械

あの子に電話をしたけど、出ませんでした。

(12-9) Xさんを驚かせた。しかし、(Xさんは)驚かなかった。

a. *Em	làm	nó	giật mình,	nhưng	nó	không	giật mình
1sg	CAUS	3sg	驚く	しかし	3sg	NEG	驚く

あの子を驚かせたけど、驚きませんでした。

(1-9-a), (1-9-b), (1-15-b)と同様、使役の形式làmを用いた場合結果を含意するので、前件の動詞句にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em	định	làm	nó	giật mình,	nhưng	nó	không	giật mình
1sg	積りだ	CAUS	3sg	驚く	しかし	3sg	NEG	驚く

あの子を驚かせようとしたけど、驚きませんでした。

(12-10) Xさんを怒らせた。しかし、(Xさんは)怒らなかった。

【注】Xさんを悪者にするため、Xさんを怒らせようとしたが、怒らなかったという状況。

a. *Em	làm	nó	nổi giận,	nhưng	nó	không	nổi giận.
1sg	CAUS	3sg	怒る	しかし	3sg	NEG	怒る

あの子を怒らせたけど、怒りませんでした。

やはり、使役の形式làmを用いた場合結果を含意するので、前件の動詞句にđịnh(積りだ)を置くと容認可能となる。

b. Em	định	làm	nó	nổi giận,	nhưng	nó	không	nổi giận.
1sg	積りだ	CAUS	3sg	怒る	しかし	3sg	NEG	怒る

あの子を怒らせようとしたけど、怒りませんでした。

(12-11) Xさんを説得した。しかし、(Xさんは)引き受けなかった。
【注】困難な仕事をXさんに任せようとしたが、引き受けてくれなかったという状況。

a. Em	thuyết phục	nó,	nhưng	nó	không	nhận.
1sg	説得する	3sg	しかし	3sg	NEG	受け入れる

あの子を説得したけど、引き受けませんでした。

thuyết phục(説得する)の場合、後件なしで前件の動詞にrồi(完了)を付加した(12-11-b)も結果は含意しない。結果を表現するには(12-11-c)のように更に可能の形式を付加する必要がある。

b. Em	thuyết phục	nó	rồi.
1sg	説得する	3sg	完了

あの子を説得しました。

c. Em	thuyết phục	được	nó	rồi.
1sg	説得する	可能	3sg	完了

あの子を説得できました。

Q13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2しなかった」が可能か

(13-1) 魚を<行く>(V1)<買う>(V2)した。しかし、買わなかった。
【注】<行く>(V1)<買う>(V2)の部分は、「行く」を表す動詞と「買う」を表す動詞を、動詞連続の形で並べる。

Em	đi	mua	cá,	nhưng	cuối cùng	lại	không	mua.
1sg	行く	買う	魚	しかし	最後	意外性	NEG	買う

魚を買いに行ったけど、結局買いませんでした。

(13-2) 魚を<煮る>(V1)<食べる>(V2)した。しかし、食べなかった。
【注】<煮る>(V1)<食べる>(V2)の部分は、「煮る」を表す動詞と「食べる」を表す動詞を、動詞連続の形で並べる。動詞の間に魚を表す名詞が介在してもよい。

Em	kho	cá	ăn,	nhưng	lại	không	ăn.
1sg	煮る	魚	食べる	しかし	意外性	NEG	買う

魚を煮て食べようと思ったけど、食べませんでした。

Q14. 受身

(14-1) Xさんは殺された。しかし、死ななかった。

a. Nó	bị	giết,	nhưng	nó	không	chết.
3sg	PASS	殺す	しかし	3sg	NEG	死ぬ

あの子は殺されたけど、死にませんでした。

前件の動詞句にđã(既然)を付加しても容認度に差はないが、rồi(完了)を付加すると結果を含意し容認不可となる。

b. Nó	đã	bị	giết,	nhưng	nó	không	chết.
3sg	既然	PASS	殺す	しかし	3sg	NEG	死ぬ

あの子は殺されたけど、死にませんでした。

c. *Nó	bị	giết	rồi,	nhưng	nó	không	chết.
3sg	PASS	殺す	完了	しかし	3sg	NEG	死ぬ

あの子は殺されたけど、死にませんでした。

おわりに

まず、Q1からQ12各グループの結果をまとめると以下の通りとなる（付表参照）。

Q1.「対象物の物理的変化が否定され得るか」について、以下に述べる使役の形式làmを用いる場合(1-9, 1-15)以外は、基本的にキャンセル可であった。ただし、(1-3)bổ(割る)のように、通常その動作が完了した時点で割れた状態が実現している場合は不可、chặt(叩き切る)のように対象が堅くてその動作を何度も繰り返す可能性がある場合には可であった。

Q2.「対象物の知覚が否定され得るか」について、全て可であった。一部、目的語を置くと不可の場合があった。

Q3.「対象物の移動が否定され得るか」について、漢語「移転」からの借用語(3-4)di chuyển(動かす)以外は全て可であった。ただし、移動の方向を表すđi(行く/出発する)をV2とする動詞連続の形で表現される場合、rồi(完了)を付加すると結果を含意しキャンセル不可となる傾向が見られた。

Q4.「対象物との接触が否定され得るか」について、全て可であった。一部、目的語を置くと不可の場合があった。

Q5.「目的地への到達が否定され得るか」については、全て不可であった。

Q6.「作成物の出現が否定され得るか」について、(6-1)làm(作る)、(6-3)đào hố(穴を掘る)は可、(6-2)xây(建てる)は不可であった。

Q7.「対象物の獲得が否定され得るか」については、全て不可であった。

Q8.「発声が否定され得るか」について、全て可であった。

Q9.「飲食物の摂取が否定され得るか」について、全て可であった。一部、目的語を置くと不可の場合があった。

Q10.「自己完結的動作の最終状態が否定され得るか」については、全て不可であった。

Q11.「自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか」についても、全て不可であった。

Q12.「被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか」について、Q1で指摘したように、使役の形式làmを用いる場合(12-9, 12-10)以外は基本的に可であった。

Q13.「動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か」について、いずれも可であった。

Q14.「受身」については、可であったが、rồi(完了)を付加した場合は結果を含意しキャンセル不可となった。

次いで、ベトナム語内部の問題として、使役の各形式と結果含意の有無について相関がみられたことを指摘しておく。ベトナム語の使役の形式は複数あるが、本稿の例文にはbắt, làm, choの三種が見られた。それぞれ元来「とらえる」「つくる」「やる/あたえる」を意味する動詞から派生した語であるが、元来の語彙的意味を反映して、bắtは強制的なニュアンス、choは許可のニュアンスを伴うことが一般的である。一方làmはThompson(1987:330-1)が原因・結果表現(Causative-Resultive Expressions)を構成する典型的な動詞として挙げるもので、その結果や効果を表す語が後続する。以上、本稿の例文に出現した例をまとめると以下のようになる。

調査票番号	動詞句	キャンセル可否
12-1	**bắt** X nhảy (躍らせる)	○
12-2	**bắt** X đi (行かせる)	○
12-3	**bắt** X ăn xoài(マンゴーを食べさせる)	○
1-9	**làm** X đổ/**làm** đổ X (倒す)	×
1-15	**làm** lạnh (冷やす)	×
12-9	**làm** X giật mình (驚かす)	×
12-10	**làm** X nổi giận (怒らせる)	×
3-2	**cho** X vào rổ (籠に入れる)	○
3-6	**cho** X lên giá (棚に載せる)	○
12-5	**cho** X xem xoài (マンゴーを見せる)	○
12-7	**cho** X mượn sách (本を貸す)	○

以上より、bắt, choによる使役表現には結果が含意されず、làmを用いる場合は結果を含意する傾向が強いことが指摘できる。

略号

1sg　一人称単数
3sg　三人称単数
CAUS　使役の形式

CLF　類別詞
NEG　否定辞
PASS　受け身の形式

参考文献

Thompson, Laurence C. 1987. *A Vietnamese Reference Grammar*. Mon-Khmer Studies XIII-XIV. Stephen O'Harrow (ed.). University of Hawaii Press.

付表

	動詞(句)	キャンセル可否	đã(既然)+VP	VP + rồi(完了)
Q1. 対象物の物理的変化が否定され得るか				
1-1	giết (殺す)	○	○	○
1-2	chọc cho X rơi (落とす)	○	○	×
1-3	chặt (叩き切る)	?	×	×
1-3	bổ (割る)	×	×	×
1-4	đập cho X vỡ (壊す)	○	○	×
1-5	cắt (切る)	○	○	○
1-5	cắn (噛む)	○	○	○
1-6	bẻ (折る)	○	○	○
1-7	mở (開ける)	○	○	×
1-8	dán (貼る)	○	○	○
1-9	làm X đổ/làm đổ X (倒す)	×	×	×
1-10	đun (沸かす)	○	○	○
1-11	trải (敷く)	○	○	○
1-12	đốt (燃やす)	○	○	○
1-13	ninh (煮る)	○	○	○
1-14	phơi (干す)	○	○	○
1-15	để X vào tủ lạnh cho mát (冷蔵庫に入れて冷やす)	○	○	○
1-15	làm lạnh (冷やす)	×	×	×
Q2. 対象物の知覚が否定され得るか				
2-1	nhìn (見る)	○	○	○
2-2	nghe (聞く)	○	○	○
2-3	ngửi (嗅ぐ)	○	○	○

Q3. 対象物の移動が否定され得るか				
3-1	ném X đi (投げる)	○	○	×
3-2	cho X vào rổ (籠に入れる)	○	○	○
3-3	nhổ (抜く)	○	○	○
3-4	di chuyển (動かす)	×	×	×
3-5	thả X đi (放す)	○	×	×
3-6	cho X lên giá (棚に載せる)	○	×	×
Q4. 対象物との接触が否定され得るか				
4-1	đánh (叩く)	○	○	?
4-2	đá (蹴る)	○	○	○
4-3	cầm (つかむ)	○	○	○
Q5. 目的地への到達が否定され得るか				
5-1	đi (行く)	×	×	×
5-2	tới (来る)	×	×	×
5-3	về (帰る)	×	×	×
5-4	lên (上がる)	×	×	×
Q6. 作成物の出現が否定され得るか				
6-1	làm (作る)	○	○	?
6-2	xây (建てる)	×	×	×
6-3	đào hố (穴を掘る)	○	○	×
Q7. 対象物の獲得が否定され得るか				
7-1	mua (買う)	×	×	×
7-2	ăn trộm (盗む)	×	×	×
Q8. 発声が否定され得るか				
8-1	nói (話す)	○	○	○
8-2	hát (歌う)	○	○	○
Q9. 飲食物の摂取が否定され得るか				
9-1	ăn (食べる)	○	○	○
9-2	uống (飲む)	○	○	×
Q10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか				
10-1	đứng (立つ)	×	×	×
10-2	ngồi (座る)	×	×	×
10-3	ngủ (眠る)	×	×	×
Q11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか				
11-1	đứng (立つ)	×	×	×

11-2	ngồi (座る)	×	×	×
11-3	bước (歩く)	×	×	×
11-4	chạy (走る)	×	×	×
11-5	cười (笑う)	×	×	×
11-6	khóc (泣く)	×	×	×
Q12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか				
12-1	bắt X nhảy (躍らせる)	○	○	○
12-2	bắt X đi (行かせる)	○	○	○
12-3	bắt X ăn xoài (マンゴーを食べさせる)	○	○	○
12-4	bán X cho nó (売る)	○	×	×
12-5	cho X xem xoài (マンゴーを見せる)	○	○	○
12-6	cho X xoài (マンゴ―を与える)	○	○	○
12-7	cho X mượn sách (本を貸す)	○	○	○
12-8	gọi điện thoại cho X (電話する)	○	○	○
12-9	làm X giật mình (驚かす)	×	×	×
12-10	làm X nổi giận (怒らせる)	×	×	×
12-11	thuyết phục (説得する)	○	○	○
Q13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か				
13-1	đi mua cá (魚を買いに行く)	○	○	○
13-2	kho cá ăn (魚を煮て食べる)	○	○	○
Q14. 受身				
14-1	bị giết (殺される)	○	○	×

※ 目的語を削除するとキャンセルが可となる場合は可（○）とした。

クメール語の事象キャンセル

上田　広美

1. はじめに

クメール語はカンボジア王国の公用語であり、系統としてはオーストロアジア語族のモン・クメール語族に属す。クメール語には活用や曲用等の語形変化が存在せず、類型論的には孤立語に分類される。クメール文字は、南インドから伝えられた文字を独自に発展させた表音文字であるが、本稿では、坂本（1988）に従った音韻表記を用いる。

基本語順としては、例（1a）に示すように、主語は述語に前置され、補語は述語に後置される。修飾語は後置され、付属語は前置される。時制を明示する特別な形式は存在せず、文脈や、時を表す語句によって判断される。また、一文中で複数の動詞（句）が接続詞の介在なく連続することができるため、例（1a）のように一つ動詞のみが用いられる文よりも、例（1b）のような文が多く観察される。例（1b）のように、連続する二つの動詞がともに随意な動作を表す場合には、後置される動詞は、前の動詞の動作の目的を表す。一方、例（1c）のように、後置される動詞が不随意な動作や状態を表す場合には、前の動詞の表す動作の結果を表す。

(1)a. kèe[1]　sɔmlap　lòok-suon
　　3PL　殺す　PSN
　　「彼らはスオンさんを殺す/殺した。」
　b. kèe　baŋ　sɔmlap　lòok-suon
　　3PL　銃撃する　殺す　PSN
　　「彼らはスオンさんを殺そうとして銃撃する/した。」
　c. kèe　baŋ　lòok-suon　slap
　　3PL　銃撃する　PSN　死ぬ
　　「彼らはスオンさんを銃撃し（スオンさんは）死ぬ/死んだ。」

以下、本稿では、本巻所収の「事象キャンセル調査票」に基づきクメール語の例文を調査した結果を述べる。

2. 調査

本稿の調査にあたっては、「事象キャンセル調査票」の項目順にクメール語の例文を調べ

[1] 例文中の三人称代名詞として、/kèe/は単数複数を問わず不特定の人を、/kɔət/は特定の人を、/vèə/は特定の物を示すために用いた。

た。以下に示す各例の判断は、コンサルタント[2]にとって「前件で示した事象が後件で否定される」という状況が想定できるか否かということに左右された。それに加えて、たとえ想定できる状況であっても、調査した例文のように修飾語句の少ない短文の中で、ある事象とそのキャンセルを二つの動詞で明示する形式は、自然なクメール語文とは感じられないという指摘もあった。従って、以下の例文は、「前件で示した事象が後件で否定され得るかという点にのみ着目すれば理解可能だ」とコンサルタントが判断した文であり、日常的に多用される自然な文ではない場合もあることをお断りしておく。

3. 調査結果

以下、調査票の項目順にクメール語の例文を提示する。

3.1. 対象物の物理的変化が否定され得るか

対象物の物理的変化が否定され得るか否かは前件の動詞句によって異なる。Q1-10 の例（11）/lèət kɔntèel/「ござを広げる」は否定できなかった。

本節の例文の前件にある動詞は、例（9）の/duol/「倒れる」と/pduol/「倒す」や、例（2）の/slap/「死ぬ」と/sɔmlap/「殺す」のように、前接辞（/p/など）を加えたり、接中辞（/ɔm/など）を挿入して後件の動詞から派生させた動詞と対になっているものがある。しかし、このような派生した動詞は意味が変化している場合もあり、必ずしも対で使用されるとは限らない。そのため、以下の例文中の前件では、対にならない動詞も用いている。また、前件で対となる動詞を用いる場合も、その動詞の前に、物理的な変化を与えるような具体的な動作を表す別の動詞（例として、「殺す」に対する「銃撃する」）を置く方がより自然な例文と感じられる。しかし、例（2a）の/sɔmlap/「殺す」に/baŋ/「銃撃する」を前置した例（2b）では、前述の通り、「殺そうという意図で銃撃した」という意味となり、「銃撃した」ことは否定されない。

Q1-1. X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかった。

(2)a.	kèe	sɔmlap	lòok-suon	tae	kɔət	mɯn	slap	tèe[3]
	3PL	殺す	PSN	しかし	3SG	NEG	死ぬ	PTCL

「彼らはスオンさんを殺した。しかし、彼は死ななかった。」

b.	kèe	baŋ	sɔmlap	lòok-suon	tae	kɔət	mɯn	slap	tèe
	3PL	銃撃する	殺す	PSN	しかし	3SG	NEG	死ぬ	PTCL

「彼らはスオンさんを殺そうと銃撃した。しかし、彼は死ななかった。」

---

[2] 本稿のコンサルタントとしてウンサー・マロム氏、カエプ・ソクンティアロアト氏にご指導いただいた。お時間をさいてご指導くださったことに深く感謝する。

[3] /tèe/は文末や節末で強調を表す語であり、否定文に現れやすいが、否定辞とともに用いられる必須の要素ではない。

Q1-2.ココヤシの実を落とした。しかし、落ちなかった。

(3) kèe tòmlɛ̀ək plae dooŋ tae vèə mɯn tlɛ̀ək tèe
3PL 落とす 実 ココヤシ しかし 3SG NEG 落ちる PTCL
「彼らはココヤシの実を落とした。しかし、それは落ちなかった。」

Q1-3.ココヤシの実を割った。しかし、割れなかった。（ヤシの実を鉈(なた)で割ろうとしたが、割れなかったという状況。）

(4) kèe puh plae dooŋ tae vèə mɯn baek tèe
3PL 割る 実 ココヤシ しかし 3SG NEG 割れる PTCL
「彼らはココヤシの実を鉈で割った。しかし、それは割れなかった。」

この例（4）では、後件の動詞/baek/「割れる、壊れる」には、対となる動詞/bɔmbaek/「割る、壊す」があるが、鉈で割る場合には/puh/を用いる。

Q1-4.窓を壊した。しかし、壊れなかった。（ガラス窓を棒で叩いて壊そうとしたが、壊れなかったという状況。）

(5) kèe bɔmbaek kɔɲcɔk bɔŋʔuoc tae vèə mɯn baek tèe
3PL 壊す ガラス 窓 しかし 3SG NEG 壊れる PTCL
「彼らは窓ガラスを壊した。しかし、それは壊れなかった。」

Q1-5.枝を折った。しかし、折れなかった。

(6) kèe kac mɛ̀ɛk chɔ̀ə tae vèə mɯn bak tèe
3PL 折る 枝 木 しかし 3SG NEG 折れる PTCL
「彼らは枝を折った。しかし、それは折れなかった。」

この例（6）では、後件の動詞/bak/「折れる」には、対となる動詞/bɔmbak/「折る」があるが、枝を折る動作には/kac/を使う。

Q1-6.窓をあけた。しかし、あかなかった。

(7) kèe baək bɔŋʔuoc tae vèə mɯn baək tèe
3PL 開ける 窓 しかし 3SG NEG 開く PTCL
「彼らは窓をあけた。しかし、それはあかなかった。」

この例（7）の「あく」「あける」は同じ動詞/baək/を用いる。

Q1-7.紙を貼った。しかし、くっつかなかった。

(8) kèe bət krəədaah tae vèə mɯn cəəp tèe
3PL 貼る 紙 しかし 3SG NEG つく PTCL
「彼らは紙を貼った。しかし、それはくっつかなかった。」

この例（8）では、後件の動詞/cɔəp/「くっつく」には、対となる動詞/pcɔəp/「くっつける」があるが、紙を貼る動作には/bət/を用いる。

Q1-8.木を倒した。しかし、倒れなかった。

(9)	kèe	pduol	ròmlòm	daəm-chàə	tae	vèə	mɯn	duol	tèe
	3SG	倒す	倒す	木	しかし	3SG	NEG	倒れる	PTCL

「彼らは木を倒した。しかし、それは倒れなかった。」

Q1-9.湯を沸かした。しかし、沸かなかった。

(10)	kèe	dam	tɯk	ʔaoj	puh	tae	vèə	mɯn	puh	tèe
	3PL	沸かす	水	CAUS	沸く	しかし	3SG	NEG	沸く	PTCL

「彼らは湯を沸かした。しかし、それは沸かなかった。」

この例（10）の前件は、使役動詞/ʔaoj/を用いて「沸くように水を沸かす」という動詞句になっている。

Q1-10.ござを広げた。しかし、広がらなかった。

(11)a.*	kèe	lèət	kɔntèel	tae	vèə	mɯn	rɔ̀ɔlèət	tèe[4]
	3PL	広げる	ござ	しかし	3SG	NEG	広がる	PTCL

「彼らはござを広げた。しかし、それは広がらなかった。」

b.	kèe	kraal	kɔntèel	tae	vèə	mɯn	rɔ̀ɔlèət	tèe
	3PL	敷く	ござ	しかし	3SG	NEG	広がる	PTCL

「彼らはござを敷いた。しかし、それは広がらなかった。」

この例（11a）では、前件の動詞句/lèət kɔntèel/「ござを広げる」について、「人の力で広げることができないござは想像できない」というコンサルタントの意見があった。前件の動詞を例（11b）のように/kraal/「敷く」に変えると可能となった。

Q1-11.木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった。（木の枝を焚き木にしようとしたが、湿っていて燃えなかったという状況。）

(12)	kèe	dot	mɛ̀ɛk	chàə	tae	vèə	mɯn	chɛh	tèe
	3PL	燃やす	枝	木	しかし	3SG	NEG	燃える	PTCL

「彼らは木の枝を燃やした。しかし、それは燃えなかった。」

この例（12）では、後件の動詞/chɛh/「燃える、エンジンがかかる」には、対となる動詞/bɔŋchɛh/「燃やす、エンジンをかける」があるが、枝を燃やす動作には別の動詞/dot/を用いる。

[4] コンサルタントに許容されなかった例の番号に*を付す。

Q1-12.山芋を煮た。しかし、煮えなかった。（芋を煮ようとしたが、火力が弱く、煮えなかったという状況。）

(13) kèe sŋao dəmlooŋ tae vèə mɯn cʔən tèe
3PL 煮る 芋 しかし 3SG NEG 煮える PTCL
「彼らは山芋を煮た。しかし、それは煮えなかった。」

この例（13）では、後件の動詞/cʔən/「食べられる状態になった」には、対となる動詞/cəmʔən/「調理する」があるが、芋を煮る場合には別の動詞/sŋao/を用いる。

Q1-13.魚を干した。しかし、乾かなかった。（干し魚を作ろうとしたが、乾ききらなかったという状況。）

(14) kèe haal trəj tae vèə mɯn sŋuot tèe
3PL 干す 魚 しかし 3SG NEG 乾く PTCL
「彼らは魚を干した。しかし、それは乾かなかった。」

この例（14）では、後件の動詞/sŋuot/「乾く」には、対となる動詞/səmŋuot/「乾かす」があるが、魚を乾かす場合には別の動詞/haal/を用いる。

Q1-14.スイカを冷やした。しかし、冷えなかった。

(15) kèe tvèə ʔəvlək (ʔaoj) trəəcɛ̀ək tae vèə mɯn trəəcɛ̀ək tèe
3PL する スイカ CAUS 冷たい しかし 3SG NEG 冷たい PTCL
「彼らはスイカを冷やした。しかし、それは冷えなかった。」

この例（15）では、前件の「冷やす」は「冷たくさせる」という使役文となる。

3.2. 対象物の知覚が否定され得るか

対象物の知覚は否定され得る。

Q2-1.見た。しかし、見えなかった。[5]

(16)a. mə̀əl tae mɯn khə̀əɲ tèe
見る しかし NEG 見える PTCL
「見た。しかし、見えなかった。」

b. mə̀əl pkaaj haəj tae mɯn khə̀əɲ tèe
見る 星 PFV しかし NEG 見える PTCL
「星を見た。しかし、見えなかった。」

例（16a）の前件の動詞/mə̀əl/「見る」に補語/pkaaj/「星」を付加し、さらに完了相を表す語/haəj/を付加した例（16b）でも対象物の知覚は否定され得る。

[5] 主語は必須要素ではないため、以下の例文では省略する。

Q2-2.聞いた。しかし、聞こえなかった。

(17)a. sdap tae mɯn lɯɯ tèe
聞く しかし NEG 聞こえる PTCL
「聞いた。しかし、聞こえなかった。」

b. sdap cəmriəŋ haəj tae mɯn lɯɯ tèe
聞く 歌 PFV しかし NEG 聞こえる PTCL
「歌を聞いた。しかし、聞こえなかった。」

例（17a）の前件の動詞/sdap/「聞く」に補語/cəmriəŋ/「歌」を付加し、さらに完了相を表す語/haəj/を付加した例（17b）でも対象物の知覚は否定され得る。

Q2-3.魚醤のにおいをかいだ。しかし、においがしなかった。

(18) hət klən tɯk trəj tae ʔət[6] dəŋ klən tèe
嗅ぐ におい 魚醤 しかし NEG 気づく におい PTCL
「魚醤のにおいをかいだ。しかし、においがしなかった。

この例（18）では、後件の動詞/dəŋ/「気づく」の補語/klən/「におい」は省略できないというコンサルタントの判断であった。

3.3. 対象物の移動が否定され得るか

対象物の移動が否定され得るか否かは、前件の動詞句によって異なる。Q3-1 の「石を投げる」は、「石を投げてもその石が手から離れない」という状況が想定できないとして、許容されなかった。

Q3-1.小石を投げた。しかし、投げられなかった。（小石を投げようとしたが、手にくっついて、手から離れなかったという状況。）

この例では、前件の動詞が/kòp/「投げる」、/caol/「放る」のいずれであっても、「小石を投げたのに、その小石が手から離れない状況は想像できないため表現できない」というコンサルタントの判断であった。

Q3-2.スイカを籠に入れた。しかし、入らなかった。（スイカを籠に入れようとしたが、大きくて入らなかったという状況。籠は袋に替えてもよい。）

(19) dak ʔəvlək knoŋ kəntrəək tae vèə mɯn cool tèe
入れる スイカ 中 籠 しかし 3SG NEG 入る PTCL
「スイカを籠に入れた。しかし、それは入らなかった。」

[6] 否定辞の/ʔət/は、既出の/mɯn/よりも口語表現で用いられることが多い。

Q3-3.山芋を抜いた。しかし、抜けなかった。

(20) dɔɔk　dɔmlooŋ　tae　vèə　mɯn　ceɲ　tèe
抜く　芋　しかし　抜く　NEG　出る　PTCL
「山芋を抜いた。しかし、それは抜けなかった。」

Q3-4.岩を動かした。しかし、動かなかった。（大きな岩を動かそうとしたが、重すぎて動かなかったという状況。）

(21) ròmkəl　ptɛ̀əŋ-tmɔɔ　tae　vèə　mɯn　rɔ̀ɔkəl
ずらす　岩　しかし　3SG　NEG　動く
「岩を動かした。しかし、それは動かなかった。」

Q3-5.鳥を放した。しかし、放せなかった。（鳥を放そうとしたが、鳥かごから出て行かなかったという状況。）

(22) kèe　lɛ̀ɛŋ　caap　tae　vèə　mɯn　ceɲ
3SG　放す　小鳥　しかし　3SG　NEG　出る
「鳥を放した。しかし、それは出なかった。」

Q3-6.臼を載せた。しかし、載らなかった。（臼を棚に載せようとしたが、思ったより重くて載せられなかったという状況。）

(23) lə̀ək　tbal　tae　vèə　mɯn　haəp
上げる　臼　しかし　3SG　NEG　少し持ち上がる
「臼を載せた。しかし、それは動かなかった。」

3.4. 対象物との接触が否定され得るか

対象物との接触は否定され得る。

Q4-1.X さんを叩いた。しかし、叩けなかった。（叩こうとしたが、手が届かなかったという状況。）

(24)a.　vèəj　lòok-suon　tae　vèəj　mɯn　trəv
叩く　PSN　しかし　叩く　NEG　当たる
「スオンさんを叩いた。しかし、当たらなかった。」

b.　vèəj　lòok-suon　tae　vèəj　khoh
叩く　PSN　しかし　叩く　外れる
「スオンさんを叩いた。しかし、外れた。」

この例（24）では、後件に否定辞を用いない/vèəj khoh/「叩きそこなった」という例（24b）の方が多用されるというコンサルタントの判断であった。

Q4-2.X さんを蹴った。しかし、蹴れなかった。（蹴ろうとしたが、足が届かなかったという状況。）

(25) thɛ̀ək　lòok-suon　tae　thɛ̀ək　mɯn　dəl
蹴る　PSN　しかし　3SG　NEG　届く
「スオンさんを蹴った。しかし、届かなかった。」

Q4-3.コップをつかんだ。しかし、つかめなかった。（コップに一瞬触れたが、熱くてしっかりと持つことができなかったという状況。）

(26) cap　kaev　tae　cap　mɯn　kaət
つかむ　コップ　しかし　つかむ　NEG　生じる
「コップをつかんだ。しかし、つかめなかった。」

3.5. 目的地への到達が否定され得るか

目的地への到達は否定され得る。クメール語の移動表現は、話者に向かう移動を/tàv/で、その他の移動を/mɔ̀ɔk/で示す。

Q5-1.東京に行った。しかし、着かなかった。

(27) tàv　tookjoo　tae　tàv　mɯn　dəl
行く　PLN　しかし　行く　NEG　到着する
「東京に行った。しかし、着かなかった。」

Q5-2.ここに来た。しかし、着かなかった。（昨日もここに来ようとしたのだが、道が分からなくてたどり着かなかったという状況。）

(28) mɔ̀ɔk　tii　nih　tae　mɔ̀ɔk　mɯn　dəl
来る　場所　これ　しかし　来る　NEG　到着する
「ここに来た。しかし、着かなかった。」

Q5-3.家に帰った。しかし、着かなかった。

(29) trɔɔləp　tàv　ptɛ̀əh　tae　tàv　mɯn　dəl
帰る　行く　家　しかし　行く　NEG　到着する
「家に帰った。しかし、着かなかった。」

Q5-4.二階に上がった。しかし、着かなかった。（家の二階に上がろうとしたが、膝が痛くて階段を上がれなかったという状況。）

(30) laəŋ　tàv　cɔən　tii　pii　tae　laəŋ　mɯn　dəl
上がる　行く　階　第　2　しかし　上がる　NEG　到着する

「二階に上がった。しかし、着かなかった。」

3.2. 作成物の出現が否定され得るか (どの程度まで出現したかに注意)

作成物の出現は否定され得る。後件で用いられる可能表現には複数の選択肢があるが、コンサルタントが最も自然な文だと判断したものを挙げた。動詞に前置する可能表現としては、/cɛh/「知る」があり、否定辞を付加すると「(～する方法を知らないので) できない」ことになる。動詞に後置する可能表現としては、/baan/「得る」、/ruoc/「終わる」、/kaət/「生じる」があり、否定辞を付加すると「～できない」ことになる。また、例（33）のように、後件で前件の動詞を繰り返すのではなく、/baan/「得る」の補語として作成物を表す名詞を繰り返す場合もある。

Q6-1.人形を作った。しかし、できなかった。(人形を作ろうとしたが、技術がなかったので結局はでき上がらなかったという状況。)

(31)a.	tvàə	tokkaʔtaa	tae	mɯn	cɛh	tvàə
	作る	人形	しかし	NEG	知る	作る

「人形を作った。しかし、できなかった。」

b.	tvàə	tokkaʔtaa	tae	tvàə	mɯn	kaət
	作る	人形	しかし	NEG	知る	作る

「人形を作った。しかし、できなかった。」

この例（31）の場合には、後件で用いられる可能表現は、動詞に前置する/cɛh/「知る」を用いるか、動詞に後置する/kaət/「生じる」を用いる表現の方が、/baan/「得る」、/ruoc/「終わる」を用いる表現よりも自然に感じられるというコンサルタントの判断であった。

Q6-2.家を建てた。しかし、できなかった。(家を作ろうとしたが、途中で風雨で壊れ、できなかったという状況。)

(32)	sɔŋ	ptɛ̀əh	tae	sɔŋ	mɯn	baan
	建てる	家	しかし	建てる	NEG	得る

「家を建てた。しかし、できなかった。」

この例（32）の場合には、後件で用いられる可能表現は、動詞に後置する/baan/「得る」を用いる表現の方が、/ruoc/「終わる」を用いる表現よりも自然に感じられるというコンサルタントの判断であった。

Q6-3.穴を掘った。しかし、穴ができなかった。(穴を掘ろうとしたが、地面が固くて穴ができなかったという状況。)

(33)	ciik	rɔ̀ndaə	tae	mɯn	baan	rɔ̀ndaə	tèe
	掘る	穴	しかし	NEG	終わる	穴	PTCL

「穴を掘った。しかし、穴ができなかった。」

この例（33）の場合には、例（31-32）のように前件の動詞/ciik/「掘る」を後件で繰り返すことはせず、動詞/baan/「得る」の補語として、作成物の/rɔ̀ndaə/「穴」を繰り返す表現の方が、前件の動詞/ciik/「掘る」繰り返し/ruoc/「終わる」を後続させる表現よりも自然に感じられるというコンサルタントの判断であった。

3.7. 対象物の獲得が否定され得るか

対象物の獲得が否定され得るか否かは、前件の動詞句によって異なる。/tèɲ sièəvphèəv nuh/「その本を買う」は否定できない。

Q7-1.その本を買った。しかし、買えなかった。（本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなくて、入手することができなかったという状況。）

(34)*	tèɲ	sièəvphèəv	nuh	tae	tèɲ	mɯn	baan
	買う	本	その	しかし	買う	NEG	得る

「その本を買った。しかし、買えなかった。」

この例（34）では、前件の動詞/tèɲ/「買う」は、対象物の獲得を否定できない。

Q7-2.金を盗んだ。しかし、盗めなかった。（金を盗もうとして店に入ったが、警備員に見つかって入手できなかったという状況。）

(35)	luoc	lòj	tae	luoc	mɯn	baan
	盗む	金	しかし	盗む	NEG	得る

「金を盗んだ。しかし、盗めなかった。」

3.8. 発声が否定され得るか

発声は否定され得る。

Q8-1.話した。しかし、声が出なかった。

(36)	niijèəj	tae	mɯn	ceɲ	sɔmleeŋ
	話す	しかし	NEG	出る	声

「話した。しかし、声が出なかった。」

Q8-2.歌った。しかし、声が出なかった。

(37)	criəŋ	tae	mɯn	ceɲ	sɔmleeŋ
	歌う	しかし	NEG	出る	声

「歌った。しかし、声が出なかった。」

3.9. 飲食物の摂取が否定され得るか

飲食物の摂取は否定され得る。

Q9-1.魚を食べた。しかし、食べられなかった。（魚を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。）

(38) ɲam　trəj　tae　ɲam　mɯn　cool
食べる　魚　しかし　食べる　NEG　入る
「魚を食べた。しかし、食べられなかった。」

Q9-2.酒を飲んだ。しかし、飲めなかった。（酒を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。）

(39) phək　sraa　tae　phək　mɯn　cool
飲む　酒　しかし　飲む　NEG　入る
「酒を飲んだ。しかし、飲めなかった。」

3.10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか

自己完結的動作の最終状態が否定され得るか否かは、前件の動詞によって異なる。/deek lɔ̀k/「眠る」は否定できない。

Q10-1.立った。しかし、立てなかった。（椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況。）

(40) chɔ̀ɔ　tae　chɔ̀ɔ　mɯn　kaət
立つ　しかし　立つ　NEG　生じる
「立った。しかし、立てなかった。」

Q10-2.座った。しかし、座れなかった。（椅子に座ろうとして脚を曲げたが、脚が痛くて、尻を椅子につけた状態にならなかったという状況。）

(41) ʔɔŋkòj　tae　ʔɔŋkòj　mɯn　baan
座る　しかし　座る　NEG　得る
「座った。しかし、座れなかった。」

Q10-3.眠った。しかし、眠れなかった。（眠ろうとして横になったが、眠りに入ることができなかったという状況。）

(42)a.* deek　lɔ̀k　tae　mɯn　lɔ̀k　tèe
寝る　眠る　しかし　NEG　眠る　PTCL
「眠った。しかし、眠れなかった。」

b. deek tae deek mɯn lɔ̀k tèe
寝る しかし 寝る NEG 眠る PTCL
「寝た。しかし、眠れなかった。」

この例(42a)の動詞/deek lɔ̀k/「寝る＋眠る」はキャンセルできない。横になったものの、体調が悪かったり、周囲が騒がしくて眠れない、という場合は、例（42b）のように、前件には、動詞/deek/「寝る」のみを用いる。

3.11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか

自己完結的動作の開始は否定され得る。後件は動詞連続の形となるが、例（43-44）のように、前件の動詞を繰り返さず他の動詞を用いる場合がある。

Q11-1.立った。しかし、立てなかった。（立ち上がろうとして力を入れたが、椅子から尻をまったく離すことができなかったという状況。）

(43) chɔ̀ə tae kraok mɯn ruoc
立つ しかし 立ち上がる NEG 終わる
「立った。しかし、立てなかった。」

この例（43）では、前件の動詞/chɔ̀ə/「立つ」を後件で繰り返さない。Q10-1 との違いは、後件の動詞/kraok/「起きる、立ち上がる」と、可能を表す動詞/ruoc/「終わる」である。

Q11-2.座った。しかし、座れなかった。（座ろうとして力を入れたが、脚が痛くてまったく動作を開始することができなかったという状況。）

(44) ʔəŋkòj tae bɔt cə̀əŋ mɯn ruoc
座る しかし 曲げる 脚 NEG 終わる
「座った。しかし、座れなかった。」

この例（44）では、前件の動詞/ʔəŋkòj/「座る」を後件で繰り返さない。Q10-2 との違いは、後件の動詞/bɔt cə̀əŋ/「脚を曲げる」と、可能を表す動詞/ruoc/「終わる」である。

Q11-3.歩いた。しかし、歩けなかった。（歩こうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。）

(45) daə tae daə mɯn kaət
歩く しかし 歩く NEG 生じる
「歩いた。しかし、歩けなかった。」

Q11-4.走った。しかし、走れなかった。（走ろうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。）

(46) rɔ̀t　tae　rɔ̀t　mɯn　kaət
走る　しかし　走る　NEG　生じる
「走った。しかし、走れなかった。」

Q11-5.笑った。しかし、笑えなかった。（笑った顔を作ろうとしたが、恐怖感のため、笑った顔を作ることができなかったという状況。）

(47) saəc　tae　saəc　mɯn　ceɲ
笑う　しかし　笑う　NEG　出る
「笑った。しかし、笑えなかった。」

Q11-6.泣いた。しかし、泣けなかった。（演技のため、泣こうとしたが、演技力がないので涙を流すことができなかったという状況。）

(48) jòm　tae　jòm　mɯn　ceɲ
泣く　しかし　泣く　NEG　出る
「泣いた。しかし、泣けなかった。」

3.12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか

使役表現で被使役者の動作や感情の実現は否定され得る。クメール語の使役表現は、被使役者が行う動作が随意の動作であれば、/ʔaoj/を用いる。例（57-58）のように、驚く、怒るなどの感情の場合には、/tvɜ̀ə-ʔaoj/を用いる。

Q12-1.X さんを踊らせた。しかし、(X さんは)踊らなかった。

(49) ʔaoj　lòok-suon　rɔəm　tae　kɔət　mɯn　rɔəm　tèe
CAUS　PSN　踊る　しかし　3SG　NEG　踊る　PTCL
「スオンさんを踊らせた。しかし、彼は踊らなかった。」

Q12-2.X さんを行かせた。しかし、(X さんは)行かなかった。

(50) ʔaoj　lòok-suon　təv　tae　kɔət　mɯn　təv　tèe
CAUS　PSN　行く　しかし　3SG　NEG　行く　PTCL
「スオンさんを行かせた。しかし、彼は行かなかった。」

Q12-3.X さんにマンゴーを食べさせた。しかし、(X さんは)食べなかった。

(51) ʔaoj　lòok-suon　ɲam　svaaj　tae　kɔət　mɯn　ɲam　tèe
CAUS　PSN　食べる　マンゴー　しかし　3SG　NEG　食べる　PTCL
「スオンさんにマンゴーを食べさせた。しかし、彼は食べなかった。」

Q12-4.X さんにマンゴーを売った。しかし、(X さんは)買わなかった。

(52)	lɔ̀k	svaaj	ʔaoj	lòok-suon	tae	kɔət	mɯn	tèɲ	tèe
	売る	マンゴー	与える	PSN	しかし	3SG	NEG	買う	PTCL

「スオンさんにマンゴーを売った。しかし、彼は買わなかった。」

Q12-5.X さんにマンゴーを見せた。しかし、(X さんは)見なかった。

(53)	ʔaoj	lòok-suon	mɔ̀əl	svaaj	tae	kɔət	mɯn	mɔ̀əl	tèe
	CAUS	PSN	見る	マンゴー	しかし	3SG	NEG	見る	PTCL

「スオンさんにマンゴーを見せた。しかし、彼は見なかった。」

Q12-6.X さんにマンゴーを与えた。しかし、(X さんは)受け取らなかった。

(54)	ʔaoj	svaaj	tɔ̀v	lòok-suon	tae	kɔət	mɯn	tɔ̀ɔtuol	tèe
	与える	マンゴー	行く	PSN	しかし	3SG	NEG	受け取る	PTCL

「スオンさんにマンゴーを与えた。しかし、彼は受け取らなかった。」

Q12-7.X さんに本を貸した。しかし、(X さんは)受け取らなかった。

(55)	ʔaoj	lòok-suon	kɕəj	siəvphə̀v	tae	kɔət	mɯn	jɔ̀ɔk	tèe
	CAUS	PSN	借りる	本	しかし	3SG	NEG	取る	PTCL

「スオンさんに本を貸した。しかし、彼は受け取らなかった。」

Q12-8.X さんに電話した。しかし、(X さんは)電話に出なかった。

(56)	hav	tuurɛ̀əʔsap	tɔ̀v	lòok-suon	tae	kɔət	mɯn	lɔ̀ək	tèe
	呼ぶ	電話	行く	PSN	しかし	3SG	NEG	上げる	PTCL

「スオンさんに電話した。しかし、彼は電話に出なかった。」

Q12-9.X さんを驚かせた。しかし、(X さんは)驚かなかった。

(57)	tvɔ̀ə-ʔaoj	lòok-suon	pɲɛ̀ək	tae	kɔət	mɯn	pɲɛ̀ək	tèe
	CAUS	PSN	驚く	しかし	3SG	NEG	驚く	PTCL

「スオンさんを驚かせた。しかし、彼は驚かなかった。」

Q12-10.X さんを怒らせた。しかし、(X さんは)怒らなかった。（X さんを悪者にするため、X さんを怒らせようとしたが、怒らなかったという状況。）

(58)	tvɔ̀ə-ʔaoj	lòok-suon	khəŋ	tae	kɔət	mɯn	khəŋ	tèe
	CAUS	PSN	怒る	しかし	3SG	NEG	怒る	PTCL

「スオンさんを怒らせた。しかし、彼は怒らなかった。」

Q12-11.X さんを説得した。しかし、(X さんは)引き受けなかった。（困難な仕事を X さんに任せようとしたが、引き受けてくれなかったという状況。）

(59) bəŋcoh bəŋcool　ʔaoj　lòok-suon　tvàə　tae　kɔət　mɯn　tvàə　tèe
説得する　CAUS　PSN　行う　しかし　3SG　NEG　行う　PTCL
「スオンさんにやらせようと説得した。しかし、彼は引き受けなかった。

3.13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か

動詞連続表現の結果は否定され得る。クメール語の動詞連続では、動詞の間に補語が介在できる。本節の例では、後件の末尾に方向転換を表す文末詞/vɯŋ/が必要であった。

Q13-1.魚を<行く>(V1)<買う>(V2)した。しかし、買わなかった。

(60) təv　tèŋ　trəj　tae　ʔət　tèŋ　vɯŋ
行く　買う　魚　しかし　NEG　買う　PTCL
「魚を買いに行った。しかし、買わなかった。」

この例（60）では、前件の/təv/「行く」＋/tèŋ/「買う」の部分は、動詞連続の形である。動詞連続中の二つの動詞が共に随意な動作を表す場合に、V2 は V1 の目的を表す。この例（60）では、文末詞/vɯŋ/がないと不自然である。この/vɯŋ/は「転じて～する」という意味である。

Q13-2.魚を<煮る>(V1)<食べる>(V2)した。しかし、食べなかった。

(61) sŋao　trəj　ɲam　tae　mɯn　ɲam　vɯŋ
煮る　魚　食べる　しかし　NEG　食べる　PTCL
「魚を食べようと煮た。しかし、食べなかった。」

この例（61）では、前件の/sŋao/「煮る」＋/ɲam/「食べる」の部分は、動詞連続の形であるが、クメール語の動詞連続では、動詞の間に補語/trəj/「魚」が介在する。例文（61）は、料理ができあがったのに喧嘩を始めて食べなかった、あるいは、味が苦すぎて食べなかったという状況で可能である。例（60）と同じく文末詞/vɯŋ/が必要である。

3.14. 受身

クメール語の受身表現は、下記に示す例(62b)のように、「当たる」という意味の動詞/trəv/を用いる。しかし、受身表現は文体により出現頻度に差があり、特に口語では、下記の例(62a)のような動作主を/kèe/で表す能動表現が用いられる。

受身表現の表す結果は否定され得る。しかしながら、受身表現では、/trəv/の後に/baan/「得る」を置くことで、過去の事象であることを明示することがあり、そのような例（62c）は許容されなかった。この場合には、例（62d）に示すように、前件に具体的な動作を示す別の動詞/baŋ/「銃撃する」を付加する必要があるというコンサルタントの判断であった。この

例（62d）では、「銃撃した」ことは後件で否定されない。

Q14-1.X さんは殺された。しかし、死ななかった。

(62) a. kèe sɔmlap lòok-suon tae kɔət mɯn slap tèe
3SG 殺す PSN しかし 3SG NEG 死ぬ PTCL
「彼らはスオンさんを殺した。しかし、彼は死ななかった。」

b. lòok-suon trəv kèe sɔmlap tae kɔət mɯn slap tèe
3SG PAS 3SG 殺す しかし 3SG NEG 死ぬ PTCL
「スオンさんは彼らに殺された。しかし、彼は死ななかった。」

c.* lòok-suon trəv baan kèe sɔmlap tae kɔət mɯn slap tèe
3SG PAS 得る 3SG 殺す しかし 3SG NEG 死ぬ PTCL
「スオンさんは彼らに殺された。しかし、死ななかった。」

d. lòok-suon trəv baan kèe baŋ sɔmlap tae kɔət mɯn slap tèe
3SG PAS 得る 3SG 銃撃する 殺す しかし 3SG NEG 死ぬ PTCL
「スオンさんは彼らに殺意をもって銃撃された。しかし、死ななかった。」

3. おわりに

以上の調査から、クメール語の事象キャンセルについて以下の結果を得た。本巻所収の「事象キャンセル調査票」の範囲では、「対象物の物理的変化」、「対象物の知覚」、「対象物の移動」、「対象物との接触」、「目的地への到達」、「作成物の出現」、「対象物の獲得」、「発声」、「飲食物の摂取」、「自己完結的動作の最終状態」、「自己完結的動作そのものの開始」、「被使役者の動作や感情の実現」、「動詞連続」、「受身」の、ほぼ全ての例文で、前件で示した事象を後件で否定する例文が許容された。調査範囲で事象のキャンセルが不可能な動詞としては、/lɔ̀k/「眠る」があった。また補語も付加した動詞句としては、/lèət/「（ござを）広げる」、/kòp/「（小石を）投げる」、/caol/「（小石を）放る」、/tèŋ/「（本を）買う」があった。コンサルタントによると、前件の動詞が随意な動作を表す場合は動作の意図のみを表すため、後件でキャンセルが可能であることが多い。しかし、最後の受身表現の例で述べたように、前件の動詞に/baan/「得る」を前置することで事象のキャンセルが不可能となる例もあった。このことから、過去に確実に起きた事象であることを明示する要素が文中に増えることが後件に影響すると考えられるが、これについては今後の課題としたい。

略号

1	一人称	PAS	受身
3	三人称	PFV	完結相
CAUS	使役	PLN	地名
NEG	否定	PSN	人名

PTCL　文末詞　　SG　単数

参考文献

坂本恭章(1988)「クメール語」亀井孝、河野六郎、千野栄一・(編)『言語学大辞典第１巻世界言語編（上）』1479-1505. 東京：三省堂.

ラオ語の事象キャンセル

鈴木　玲子

1. はじめに

本稿は、本巻所収の「事象キャンセル調査票」を用いてラオ語の事象キャンセルを調査した結果を記述することを目的とする。

ラオ語はタイ(Tai)諸語南西タイ語群に属する言語で、分布域は主にラオス人民民主共和国とタイ王国東北タイ地方の一部である。ラオ語は地域差、年代差ともに著しい言語であり、本稿で扱うラオ語は首都ビエンチャンで話されているラオ語である。

ラオ語は形態論的には語形変化を有しない孤立語タイプの言語である。文の基本語順は「主語＋述語＋補語」で、句の修飾関係は「被修飾語＋修飾語」である。情報構造上の観点からの語順も肝要で、主題は文頭に置き、焦点は文末に置くという特徴がある。

2. 調査方法

2020 年 10 月から 2022 年 3 月にかけて対面、あるいは zoom で東南アジア諸言語研究会の「事象キャンセル調査票」を使用して調査を行った。調査協力者 1 は男性、30 台前半、調査協力者２は女性 20 台後半（以下、調査協力者２）で、両者共にビエンチャン生まれビエンチャン育ち、日本語を解する在日歴 5 年未満のラオ族である[1]。調査は 2 名、別々に行った。日本語文に沿って、なるべく自然な[2]ラオ語文を作文し、その使用容認度や使用場面などの情報を提供してもらった。

3. 調査結果

調査結果の記述に先立ち、例文中に用いる記号などについて以下に述べておく。

・{a/b} はａかｂのどちらかを使う。どちらを使っても使用容認度は同じである。

・(　) はあってもなくても言える場合か、2 名の使用容認度に差がある場合である。

・調査協力者 2 名の間で解釈が異なる場合は、そのことについても例文の後に記述する。

・特に記さない限り、主語は一人称単数「私」。

・特に記さない限り、前件動詞句の後ろに完了辞/lɛ̂ɛw/を入れても入れなくても同じ判断である。

・キャンセル事象とは直接には関係しない動詞の意味や表現などに関する記述は脚注で記す。

---

[1] ご協力に心よりお礼申し上げる。

[2] 本稿における「自然な文」とは、「ラオ語の文として違和感なく、よく使われる形の文」という意味。

・3.1 以降の小節の小見出しは、調査票の小見出しに従う。

3.1. 対象物の物理的変化が否定され得るか

3.1. の文は全てキャンセルすることができる。Q1-1 に示すように、原則として前件に物理的変化を示す動詞、即ち動作達成の終端を表す動詞を入れてはいけない。使役動詞/hày/をその動詞の前に置いて「/hày/＋動詞」と言う形ならば入れてもよいが、入れない方が自然であることの方が多い。ただし、前件の動詞が後件の結果を連想しにくい動詞の場合は、前件に使役動詞/hày/を使って動作の目的を明示する。また、前件と後件の動詞が異なる形の動詞であれば後件の主語はなくてもよいが、自他同形で、前件と後件の動詞が同じ形の場合は、後件の主語は入れる方がよい。各文の詳細は以下のとおりである。

Q1-1.Xさんを殺した。しかし、(Xさんは)死ななかった。

(1) khàa　nǔu　tɛɛ　(mán)　bɔɔ　tǎay
殺す　ネズミ　しかし　3sg　NEG　死ぬ
「ネズミを殺した。しかし(それは)死ななかった」

(2)*[3]khàa　nǔu　tǎay　tɛɛ　(mán)　bɔɔ　tǎay
殺す　ネズミ　死ぬ　しかし　3sg　NEG　死ぬ

(3)khàa　nǔu　hày　tǎay　tɛɛ　(mán)　bɔɔ　tǎay
殺す　ネズミ　CAUS　死ぬ　しかし　3sg　NEG　死ぬ
「ネズミを死なせようと殺した。しかし(それは)死ななかった」

前件に/tǎay/(死ぬ)を入れると結果と解釈され、キャンセルできなくなるので入れてはいけない。ただし、使役動詞/hày/を使って、/hày tǎay /ならばよい(例(2)(3))。調査協力者 2 は後件に/mán/(3sg)を入れた方がよく、調査協力者 1 はなくてもよい、という判断である。

Q1-2.ココヤシの実を落とした。しかし、落ちなかった。[4]

【注】高い所になっているココヤシの実を長い棒で取ろうとしたが、落ちなかったという状況。

---

[3] ＊は非文であることを示す。

[4] 調査票では「ココヤシの実を落とした。しかし落ちなかった(高い所になっているココヤシの実を長い棒でつついて落とそうとしたが、落ちなかったという状況）。」だが、ラオスではココヤシをつついてとる状況は考えにくいので、最も自然な動詞/mɛ̀ɛn/(もぐ)を使用。

(4)mɛ̀ɛn　màakphâaw　tɛɛ　bɔɔ　tók
もぐ　ココヤシ　しかし　NEG　落ちる
「ココヤシをもいだ。しかし落ちなかった」

(5)*mɛ̀ɛn　màakphâaw　tók　tɛɛ　bɔɔ　tók
もぐ　ココヤシ　落ちる　しかし　NEG　落ちる

(6)mɛ̀ɛn　màakphâaw　hày　tók　tɛɛ　bɔɔ　tók
もぐ　ココヤシ　CAUS　落ちる　しかし　NEG　落ちる
「ココヤシを落とそうともいだ。しかし落ちなかった」

(7)mɛ̀ɛn　màakphâaw　tók　lɛ̂ɛw　tɛɛ　bɔɔ　tók　lóŋ　máa
もぐ　ココナツ　落ちる　PRF　しかし　NEG　落ちる　下がる　来る
「ココヤシをもいで落とした。しかし落ちて来なかった」

(7)は (5)と同様、前件に使役動詞/hày/がないので、一見、非文となりそうだが、途中まで落ちてきたが地上までは落ちて来なかった、と言う場面に使える文である。このとき前件の動作「もぐ」は着手済みである。

Q1-3.ココヤシの実を割った。しかし、割れなかった。
【注】ヤシの実を鉈(なた)で割ろうとしたが、割れなかったという状況。
(8)phaa　màakphâaw　tɛɛ　bɔɔ　tɛ̀ɛk
割る　ココナツ　しかし　NEG　割れる
「ココヤシを割った。しかし割れなかった」

(9)*het　màakphâaw　tɛ̀ɛk　tɛɛ　bɔɔ　tɛ̀ɛk
する　ココナツ　割れる　しかし　NEG　割れる

(8)の/phaa/は、大きな物体を大きく上から振り下ろして大きく「分割する・割る」と言う意味である。このように物理的変化を起こす具体的な動作を含意する動詞を使う形が自然な文のようである(Q1-4参照)。このことから/phaa/と/tɛ̀ɛk/は、純然たる有対動詞ではないと考えられる。そこで(9)において、/het/(する)を/tɛ̀ɛk/の前に置き、/tɛ̀ɛk/の有対動詞の形/het tɛ̀ɛk/としてみたが非文となる。以下のQ1-4などでも/het/(する)を用いて有対動詞にした形の文はいずれも非文となる。

Q1-4. 窓を壊した。しかし、壊れなかった。

【注】ガラス窓を棒で叩いて壊そうとしたが、壊れなかったという状況。

(10)thup　pɔɔŋyîam　tɛɛ　bɔɔ　tɛ̀ɛk
叩き壊す　窓　しかし　NEG　割れる
「窓を叩き壊した。しかし割れなかった」

(11)?thup　pɔɔŋyîam　tɛ̀ɛk　tɛɛ　bɔɔ　tɛ̀ɛk
叩き壊す　窓　割れる　しかし　NEG　割れる

(12) *het　pɔɔŋyîam　tɛ̀ɛk　tɛɛ　bɔɔ　tɛ̀ɛk
する　窓　割れる　しかし　NEG　割れる

(13)pháŋ　pɔɔŋyîam　tɛɛ　pɔɔŋyîam　bɔɔ　pháŋ
壊す　窓　しかし　窓　NEG　壊れる
「窓を壊した。しかし壊れなかった」

(10)から(13)では、窓を割る具体的な動作を含意する動詞を使う(10)(11)がよい。Q1-1からQ1-3では、前件に物理的変化を示す動詞を入れてはいけないが、Q1-4の(11)では調査協力者１、２の使用容認度に揺れがみられた。調査協力者１は、前件に「割れる」を入れるのは不自然だが、調査協力者２は、「窓を割る」までに至る具体的な行為である「叩き壊す」そのものに着目点があり、物理的変化を表す「割れる」は動作の目的と捉えていて、結果として捉えていないため、動詞を入れてよいとする判断である。即ち、前件で窓が割れる局面が連想でき、さらには後件の文末に「割れる」があるので、全体として前件でも割ることを目的としていると解釈したのである(後述Q1-9、Q1-15参照)。(12)は、Q1-3と同様に、/het/を入れたが非文で、(13)の/pháŋ/(壊す・壊れる)は、自他同形動詞の文である。(13)は、物理的変化を被る対象物である後件の主語「窓」はある方がよく、文としては、壊す具体的な動作を前件で述べていないと何か足りない感じがするということである。換言すると、「壊す」結果に至るまでの具体的な動作を意味する動詞、壊れるに至るまでの経緯、プロセスを述べる動詞を使わないとキャンセルを述べる文として自然ではなく、そのため、Q1-4では/pháŋ/より/thup/の動詞の方がよいという判断となっている。

3.1.のこれまでの調査から動詞によって意味連鎖の含意度（動作することによって必ず結果が引き起こされるという連想度）が異なり、それによって容認度も異なると言えそうである。

Q1-5. 糸を切った。しかし、切れなかった。

【注】糸を刃物(あるいは手、歯など)で切ろうとしたが、切れなかったという状況。

(14)tát　fàay　tɛɛ　bɔɔ　khàat
切る　糸　しかし　NEG　切れる
「糸を切った。しかし切れなかった」

/tát/と/khàat/は有対動詞である。このとき、物理的変化を被る対象物である後件の主語「糸」はない方がよい。

Q1-6. 枝を折った。しかし、折れなかった。

(15)hák　ŋaamây　tɛɛ　ŋaamây　bɔɔ　hák
折る　枝　しかし　枝　NEG　折れる
「枝を折った。しかし枝は折れなかった」

動詞/hák/(折る・折れる)は自他同形動詞で、このような場合、後件の主語はある方がよい。これは先のQ1-4と同じである。

Q1-7. 窓をあけた。しかし、あかなかった。

(16)pə̀ət　pɔɔŋyîam　tɛɛ　pɔɔŋyîam　bɔɔ　pə̀ət
あける　窓　しかし　窓　NEG　あく
「窓をあけた。しかし窓はあかなかった」

(17)pə̀ət　pɔɔŋyîam　tɛɛ　(pɔɔŋyîam)　pə̀ət　bɔɔ　{ʔɔ̀ɔk /dây}
あける　窓　しかし　窓　あく　NEG　出る/PSBL
「窓をあけた。しかしあかなかった」

動詞/pə̀ət/(あく・あける)は自他同形動詞である。(16)と(17)の/dây/は窓が全くあかない場合で、(17)の/ʔɔ̀ɔk/は全くあかなくても途中まであいてもよい場合である。後件における主語の必須度はQ1-6と同様である。 (16)よりも方向動詞/ʔɔ̀ɔk/(出る)や可能動詞/dây/を使っている(17)の方が自然である。

Q1-8. 紙を貼った。しかし、くっつかなかった。

(18)tít　cîa　tɛɛ　cîa　bɔɔ　tít
貼る　紙　しかし　紙　NEG　くっつく
「紙を貼った。しかしくっつかなかった」

動詞/tít/(貼る(くっつく)・くっつける)は自他同形動詞である。

Q1-4、Q1-6～Q1-8から動詞が自他同形の場合は、後件の主語は必須であると言うことができる。

Q1-9. 木を倒した。しかし、倒れなかった。

(19)tát　tônmây　tɛɛ　mán　bɔɔ　lôm
切る　木　しかし　3sg　NEG　倒れる
「木を切った。しかし倒れなかった」

(20)tát　tônmây　hày　lôm　tɛɛ　mán　bɔɔ　lôm
切る　木　CAUS　倒れる　しかし　3sg　NEG　倒れる
「木を倒すために切った。しかし倒れなかった」

前件で、木が倒れることが連想できなくもなく、続く後件の文末に/lôm/(倒れる)があるので、全体として前件でも倒すことを目的としていると解釈できるが、「倒すために切る」ということを明示するためには、前件に目的/hày lôm/(倒すために)を入れる(20)の方がよい。また、後件の主語「それ」(=木)はある方がよい。

Q1-10. 湯を沸かした。しかし、沸かなかった。

(21)tôm　nâm　tɛɛ　bɔɔ　fot
沸かす　水　しかし　NEG　沸く
「湯を沸かした。しかし沸かなかった」

/tôm/と/fot/は有対動詞で、Q1-5と同様に後件の主語はない方がよい。

Q1-11. ござを広げた[5]。しかし、広がらなかった。

(22)pŭu　sàat　tɛɛ　pŭu　bɔɔ　dây
敷く　ござ　しかし　敷く　NEG　PSBL
「ござを敷いた。しかし敷けなかった」

Q1-11は/pŭu/(敷く)の対になる動詞がなく、後件は可能表現を使う。前件、後件の主語は両方とも動作主である「私」である。

[5] 「広げる」という意味の動詞/phuŋ/, /phɛɛ/があるが、ゴザには使わない。

Q1-12. 木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった。

【注】木の枝を焚き木にしようとしたが、湿っていて燃えなかったという状況。

(23)cùut　ŋaamây　tɛɛ　bɔɔ　mày
燃やす　枝　しかし　NEG　燃える
「枝を燃やした。しかし燃えなかった」

Q1-13.芋（サツマイモ）を煮た。しかし、煮えなかった。

【注】芋を煮ようとしたが、火力が弱く、煮えなかったという状況。

(24)tôm　mándâaŋ　tɛɛ　bɔɔ　súk
煮る　芋　しかし　NEG　火がとおる
「サツマイモを煮た。しかし火がとおらなかった」

Q1-14. 魚を干した。しかし、乾かなかった。

【注】干し魚を作ろうとしたが、乾ききらなかったという状況。

(25)tàak　pǎa　tɛɛ　bɔɔ　hɛ̀ɛŋ
干す　魚　しかし　NEG　乾く
「魚を干した。しかし乾かなかった」

Q1-15. スイカを冷やした。しかし、冷えなかった。

(26)sɛɛ　màakmóo　hày　yěn　tɛɛ　mán　bɔɔ　yěn
浸す　スイカ　CAUS　冷たい　しかし　3sg　NEG　冷たい
「スイカが冷えるように（水に）浸した。しかし冷えなかった」

Q1-9と同様で、前件が/sɛɛ màakmóo/(スイカを浸す)のみであると冷やしているのかどうか、目的が明確ではない。したがって、/hày yěn /（冷えるように）で目的を明示する必要がある。後件の主語「それ」（=スイカ）はある方がよい。

3.2. 対象物の知覚が否定され得るか

3.2.の文のうち、Q2-1とQ2-2は意志動詞－無意志動詞の形でキャンセルできる。

Q2-1. 見た。しかし、見えなかった。

(27)bəŋ　tɛɛ　bɔɔ　hěn
見る　しかし　NEG　見える
「見た。しかし見えなかった」

例えば対象物「富士山」を入れる場合は、前件/bəŋ/(見る)の後ろに置く。

Q2-2. 聞いた。しかし、聞こえなかった。

(28)fáŋ　tɛɛ　bɔɔ　dâyɲín
聞く　しかし　NEG　聞こえる
「聞いた。しかし聞こえなかった」

Q2-1と同様に、対象物「彼の声」を入れる場合は、前件/fáŋ/(聞く)の後ろに置く。

Q2-3. 魚醤のにおいをかいだ。しかし、においがしなかった。

(29)dǒm　nâm pǎa　tɛɛ　bɔɔ　{dây/míi}　kin
かぐ　魚醤　しかし　NEG　{得る/ある}　におい
「魚醤をかいだ。しかしにおいがしなかった」

前件、後件の主語は共に動作主「私」で、事象キャンセルの可否は検証できない。後件の動詞は/dây/(得る)の方が自然である。

3.3. 対象物の移動が否定され得るか

3.3.の文は、Q3-6以外はいずれも移動動詞を否定することによってキャンセルすることができる。

Q3-1. 小石を投げた。しかし、投げられなかった。

【注】小石を投げようとしたが、手にくっついて、手から離れなかったという状況。

(30) {dúk/ ɲóon}　kɔ̂ɔnhǐin　tɛɛ　{dúk/ ɲóon}　bɔɔ　{pǎy/dây}
投げる　小石　しかし　投げる　NEG　行く/PSBL
「小石を投げた。しかし離れなかった/投げられなかった」

石が単に手から離れなかった場合は/pǎy/(行く)、投げる勇気がなかった場合は/dây/(PSBL)を使う。

Q3-2. スイカを籠に入れた。しかし、入らなかった。

【注】スイカを籠に入れようとしたが、大きくて入らなかったという状況。籠は袋に替えてもよい。

(31)ʔǎw　màakmóo　say　kataa　tɛɛ　say　bɔɔ　khàw[6]
取る　スイカ　入れる　籠　しかし　入れる　NEG　入る
「スイカを籠に入れた。しかし入らなかった」

Q3-3. 芋（キャッサバ）を抜いた。しかし、抜けなかった。
(32)dǔŋ[7]　mántôn　tɛɛ　dǔŋ　bɔɔ　ʔɔ̀ɔk
引く　キャッサバ　しかし　引く　NEG　出る
「キャッサバを抜いた。しかし抜けなかった」

Q3-4. 岩を動かした。しかし、動かなかった。
【注】大きな岩を動かそうとしたが、重すぎて動かなかったという状況。
(33)ɲâay　hǐin　ɲay　tɛɛ　mán　bɔɔ　{něŋ/pǎy/ɲâay}
移す　石　大きい　しかし　3sg　NEG　動く/行く/移る
「岩を動かした。しかし動かなかった」

後件の動詞は/něŋ/(少しずれる、ゆれる程度に動く)が一番よい。/ɲâay/(移す・移る)は自他同形動詞である。

Q3-5. 鳥を放した。しかし、放せなかった。
【注】鳥を放そうとしたが、鳥かごから出て行かなかったという状況。
(34)pɔɔy　nok　tɛɛ　mán　bɔɔ　{ʔɔ̀ɔk/ pǎy}
放つ　鳥　しかし　3sg　NEG　{出る/行く}
「鳥を放した。しかし出なかった/行かなかった」

Q3-6. 臼を載せた。しかし、載らなかった。
【注】臼(東南アジアでよく見る、食材をすりつぶす擂り鉢大の石臼)を棚に載せようとしたが、思ったより重くて載せられなかったという状況。
(35)ʔǎw　khok　wáaŋ　(say)　tɛɛ　{tâŋ/?wáaŋ}　bɔɔ　{dây/wǎy}
取る　臼　置く　入れる　しかし　置く　NEG　PSBL
「臼を置いた。しかし置けなかった」

/wáaŋ/は置こうとする動作に着目点があり、/tâŋ/は置いたという設置自体に着目点がある

---

[6] 「籠の中に入れた」という表現も可能であるが、ラオ語は前置詞を使う形よりは動詞連続の形の文の方をよく使う。
[7] 「抜く」は、例えば「草を抜く」に使う/lok/という動詞があるが、「キャッサバを抜く」場合は/lok/は使えず、/dɯ̌ŋ/(引き寄せる・引っ張る)を使う。

動詞で、後件の動詞は/wáaŋ/は不自然で、/tâŋ/を使う方がよい。

3.4. 対象物との接触が否定され得るか

3.4.の文はキャンセルできるが、後件に到達、あるいは可能を表す動詞を使う。また、いずれも前件に/waasiʔ/(～つもり)あるいは/siʔ/(irrealis)を入れる方がよく、このときは前件の動作に着手していない(＝対象物に接触していない)ことを示す。

Q4-1. ノイさんを叩いた。しかし、叩けなかった。

【注】叩こうとしたが、手が届かなかったという状況。

(36)tǐi　nɔ̂ɔy　tɛɛ　tǐi　bɔɔ　{thùɯk/thuǐŋ/*dây}
叩く　ノイ　しかし　叩く　NEG　当たる/届く/ PSBL
「ノイを叩いた。しかし当たらなかった/届かなかった」

(37)waasiʔ　tǐi　nɔ̂ɔy　tɛɛ　tǐi　bɔɔ　dây
～つもり　叩く　ノイ　しかし　叩く　NEG　PSBL
「ノイを叩こうとしたが叩けなかった」

Q4-2. ボールを蹴った。しかし、蹴れなかった。

【注】蹴ろうとしたが、足が届かなかったという状況。

(38)téʔ　màakbǎan　tɛɛ　téʔ　bɔɔ　{thùɯk/thuǐŋ/*dây}
蹴る　ボール　しかし　蹴る　NEG　当たる/届く/ PSBL
「ボールを蹴った。しかし当たらなかった/届かなかった」

Q4-3. コップをつかんだ。しかし、つかめなかった。

【注】コップに一瞬触れたが、熱くてしっかりと持つことができなかったという状況。

(39)cáp　cɔ̀ɔk　tɛɛ　cáp　bɔɔ　{dây/ wǎy}
つかむ　コップ　しかし　つかむ　NEG　PSBL
「コップをつかんだ。しかしつかめなかった」

3.5. 目的地への到達が否定され得るか

3.5.の文は、いずれもキャンセルしにくい。後件がなければ、普通は目的地へ到達していると解釈する。なかでもQ5-2「来る」は、Q5-1「行く」と異なり、キャンセルできない。ラオ語の/máa/(来る)は移動だけではなく、到着をも含意するためである。前件の動作に着手していない場合は、3.4.と同様に動詞の前に/waasiʔ/(～つもり) あるいは/siʔ/(irrealis)を入れる。

Q5-1. 東京に行った。しかし、着かなかった。

(40)pǎy　tǒokǐaw　tɛɛ　pǎy　bɔɔ　hɔ̂ɔt
行く　東京　しかし　行く　NEG　到着する
「東京に行った。しかし着かなかった」

調査協力者２名共、長考し、言えなくもない、という判断であった。例えば、東京に到着しているが、まだ東京の銘菓を食べていないので、まだ到着したと言う感じではない、と言う場面で使えるということである。

Q5-2. ここに来た。しかし、着かなかった。

【注】昨日もここに来ようとしたのだが、道が分からなくてたどり着かなかったという状況。

(41)*máa　nìi　tɛɛ　máa　bɔɔ　hɔ̂ɔt
来る　ここ　しかし　来る　NEG　到着する

(42)　{siʔ/waasiʔ}　máa　nìi　tɛɛ　máa　bɔɔ　hɔ̂ɔt
IRR/～つもり　来る　ここ　しかし　来る　NEG　到着する
「ここへ来ようとした。しかし着かなかった」

Q5-3. 家に帰った。しかし、着かなかった。

(43)kápmúa　húan　tɛɛ　káp　bɔɔ　hɔ̂ɔt
帰る　家　しかし　帰る　NEG　到着する
「家に帰った。しかし着かなかった」

Q5-4. 二階に上がった。しかし、着かなかった。

【注】家の二階に上がろうとしたが、膝が痛くて階段を上がれなかったという状況。

(44)khùun　pǎy　sân　{sɔ̌ɔŋ/thɔ́ŋ}　tɛɛ　bɔɔ　hɔ̂ɔt
上がる　行く　階　２ / 上　しかし　NEG　到着する
「２階/上 に上がった。しかし着かなかった」

3.6. 作成物の出現が否定され得るか（どの程度まで出現したかに注意）

3.6.の文はキャンセルできる。Q6-1からQ6-3のいずれも作成物が全く出現していない場面では、前件の動詞の前に/waasiʔ/(～つもり)を入れ、後件には/dây/(PSBL)を使う。ただし、この/dây/(PSBL)は作成物が全く出現していなくても出現途中の段階でも使える。

Q6-1. 人形を作った。しかし、出来なかった。

【注】人形を作ろうとしたが、技術がなかったので結局は出来上がらなかったという状況。

(45)het　túkkatǎa　tɛɛ　het　bɔɔ　{lɛ̂ɛw /dây}
作る　人形　しかし　作る　NEG　終える/PSBL
「人形を作った。しかし作り終わらなかった/作れなかった」

/lɛ̂ɛw/(終える)の場合は、作ることには着手しており、作ることを途中でやめて、完成しなかった場面に使う。

Q6-2. 家を建てた。しかし、出来なかった。

【注】家を作ろうとしたが、途中で風雨で壊れ、出来なかったという状況。

(46)púk　húan　tɛɛ　bɔɔ　{lɛ̂ɛw/?dây}
建てる　家　しかし　NEG　終える/PSBL
「家を建てた。しかし建て終わらなかった」

後件に動詞 /púk/(建てる)を入れない方がよい。調査協力者１は、前件の動詞/púk/(建てる)は建てることには着手していると解釈でき、後件の動詞の/dây/は不自然で、/lɛ̂ɛw/がよいという判断である。一方の調査協力者２は、どちらでも使えるが、/lɛ̂ɛw/の方がよいという判断である。

Q6-3. 穴を掘った。しかし、穴ができなかった。

【注】穴を掘ろうとしたが、地面が固くて穴が出来なかったという状況。

(47)khút　khǔm[8]　tɛɛ　khút　bɔɔ　{lóŋ/dây}
掘る　穴　しかし　掘る　NEG　下がる/ PSBL
「穴を掘った。しかし掘り下げられなかった/掘れなかった」

3.7. 対象物の獲得が否定され得るか

3.7.の文は、前件に/waasiʔ/(～つもり)や/lɛ̂ɛw/(PRF)を入れればキャンセルできる。これらを入れなければキャンセルできない。このことから獲得を表す動詞/sûɯɯ/(買う)、/lak/(盗む)は、キャンセルしにくいと言える。なお、/lɛ̂ɛw/(PRF)は単に前件が完了したことを表すだけではなく、後件は前件の場面が転換されることを含意する意味を持つ。ここでは前件の事象の着手成立を明示し、/lɛ̂ɛw/以降の後件では異なる事象が展開されることを示唆する機能を果たしている。

---

[8] 「小さな穴をあける」場合は、/cɔ́ʔ/(あける)と/húu/(穴)を使う。

Q7-1. その本を買った。しかし、買えなかった。

【注】本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなくて、入手することができなかったという状況。

(48)*sûɯɯ　pûɯm　(lêɛw)　tɛɛ　sûɯɯ　bɔɔ　dây
買う　本　PRF　しかし　買う　NEG　PSBL

(49)waasiʔ　sûɯɯ　pûɯm　(lêɛw)　tɛɛ　sûɯɯ　bɔɔ　dây
～つもり　買う　本　PRF　しかし　買う　NEG　PSBL
「本を買おうとした。しかし買えなかった」

調査協力者１は/lêɛw/がある方がよく、調査協力者２はあってもなくても同じという判断である。

Q7-2. 金を盗んだ。しかし、盗めなかった。

【注】金を盗もうとして店に入ったが、警備員に見つかって入手できなかったという状況。

(50)lak　ŋɔ́n　lêɛw　tɛɛ　lak　bɔɔ　dây
盗む　お金　PRF　しかし　盗む　NEG　PSBL
「お金を盗んだ。しかし盗めなかった」

(51)waasiʔ　lak　ŋɔ́n　(lêɛw)　tɛɛ　lak　bɔɔ　dây
～つもり　盗む　お金　PRF　しかし　盗む　NEG　PSBL
「お金を盗もうとした。しかし盗めなかった」

(50)は、お金をいったんは盗んだが、最終的には盗みが成功しなかった場面で、この場合、/lêɛw/ は必須である。(51)は、盗む前に見つかって全く盗むことができなかった場面で、調査協力者１は/lêɛw/がある方がよく、調査協力者２はあってもなくても同じという判断である。

3.8. 発声が否定され得るか

3.8.の文は、前件に発声が着手成立していることを示す/lêɛw/や程度の副詞/yuu/を入れればキャンセルできる。これらを入れなければキャンセルできない。

Q8-1. 話した。しかし、声が出なかった。

(52)wâw　lɛ̂ɛw　tɛɛ　　sǐaŋ　bɔɔ　　ʔɔ̀ɔk
　話す　PRF　しかし　声　NEG　出る
「話した。しかし声が出なかった」

(53)wâw　yuu　　tɛɛ　　sǐaŋ　bɔɔ　　ʔɔ̀ɔk
　話す　まあまあ　しかし　声　NEG　出る
「話してはみた。しかし声が出なかった」

Q8-2. 歌った。しかし、声が出なかった。

(54)hɔ̂ɔŋ　phéeŋ　lɛ̂ɛw　tɛɛ　　sǐaŋ　bɔɔ　　ʔɔ̀ɔk
　歌う　歌　PRF　しかし　声　NEG　出る
「歌を歌った。しかし声が出なかった」

(55)hɔ̂ɔŋ　phéeŋ　yuu　　tɛɛ　　sǐaŋ　bɔɔ　　ʔɔ̀ɔk
　歌う　歌　まあまあ　しかし　声　NEG　出る
「歌を歌ってはみた。しかし声が出なかった」

3.9. 飲食物の摂取が否定され得るか

3.9.の文はコンサルタントによって判断が分かれた。Q9-1、Q9-2いずれも摂取に着手しているのであれば、コンサルタント１は前件の動詞の後に/lɛ̂ɛw/を入れなければならず、コンサルタント２は入れなくてもキャンセルできるという判断である。

Q9-1. 魚を食べた。しかし、食べられなかった。

【注】魚を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。

(56)kǐn　　pǎa　(lɛ̂ɛw)　tɛɛ　　kǐn　　bɔɔ　　{dây/lóŋ}
　食べる　魚　PRF　しかし　食べる　NEG　PSBL/下がる
「魚を食べた。しかし食べられなかった」

Q9-2. 酒を飲んだ。しかし、飲めなかった。

【注】酒を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。

(57)kǐn　　làw　(lɛ̂ɛw)　tɛɛ　　kǐn　　bɔɔ　　{dây/lóŋ}
　飲む　酒　PRF　しかし　飲む　NEG　PSBL/下がる
「酒を飲んだ。しかし飲めなかった」

3.10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか

3.10.の文はキャンセルできる。いずれも前件の動作を開始していることを明示するために前件の動詞の後に/lɛ̂ɛw/を入れる。

Q10-1. 立った。しかし、立てなかった。

【注】椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況。

(58)yŭɯn　khùn　lɛ̂ɛw　tɛɛ　yŭɯn　bɔɔ　{dây/*khùn}
立つ　上がる　PRF　しかし　立つ　NEG　PSBL/上がる
「立った。しかし立てなかった」

Q10-2. 座った。しかし、座れなかった。

【注】椅子に座ろうとして脚を曲げたが、脚が痛くて、尻を椅子につけた状態にならなかったという状況。

(59)naŋ　lɛ̂ɛw　tɛɛ　naŋ　bɔɔ　dây
座る　PRF　しかし　座る　NEG　PSBL
「座った。しかし座れなかった」

Q10-3. 眠った。しかし、眠れなかった。

【注】眠ろうとして横になったが、眠りに入ることができなかったという状況。

(60)nɔ́ɔn　lɛ̂ɛw　tɛɛ　bɔɔ　láp
寝る　PRF　しかし　NEG　眠る
「寝た。しかし眠れなかった」

前件の動詞/nɔ́ɔn/(寝る)を後件に入れない方がよい。

3.11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか

3.11.の文はキャンセルできない。Q11-1からQ11-4は前件の動詞の前に/waasiʔ/(～つもり)か/siʔ/(irrealis)を入れなければならない[9]。Q11-5とQ11-6は前件の動詞の前に/yàak/(～たい)を入れなければならない。

Q11-1. 立った。しかし、立てなかった。

【注】立ち上がろうとして力を入れたが、椅子から尻をまったく離すことができなかったという状況。(10-1との違いに注意)

[9] Q11-1 から Q11-4、いずれも動作を遂行しようという動作者の意思表示を明示したい場合は、/waasiʔ/(～つもり)を使う方がよい。

(61)siʔ　yǔɯn　khùn　(lɛ̂ɛw)　tɛɛ　yǔɯn　bɔɔ　dây
IRR　立つ　上がる　PRF　しかし　立つ　NEG　PSBL
「立ち上がろうとした。しかし立てなかった」

Q11-2. 座った。しかし、座れなかった。

【注】座ろうとして力を入れたが、脚が痛くてまったく動作を開始することができなかったという状況。(10-2との違いに注意)

(62)siʔ　naŋ　(lɛ̂ɛw)　tɛɛ　naŋ　bɔɔ　dây
IRR　立つ　PRF　しかし　立つ　NEG　PSBL
「座ろうとした。しかし座れなかった」

Q11-3. 歩いた。しかし、歩けなかった。

【注】歩こうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。

(63)siʔ　ɲaaŋ　tɛɛ　ɲaaŋ　bɔɔ　{dây/wǎy}
IRR　歩く　しかし　歩く　NEG　PSBL
「歩こうとした。しかし歩けなかった」

Q11-4. 走った。しかし、走れなかった。

【注】走ろうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。

(64)siʔ　lɛɛn　tɛɛ　lɛɛn　bɔɔ　{dây/wǎy}
IRR　走る　しかし　走る　NEG　PSBL
「走ろうとした。しかし走れなかった」

Q11-5. 笑った。しかし、笑えなかった。

【注】笑った顔を作ろうとしたが、恐怖感のため、笑った顔を作ることができなかったという状況。

(65)yàak　hǔa　tɛɛ　hǔa　bɔɔ　ʔɔ̀ɔk
～たい　笑う　しかし　笑う　NEG　出る
「笑いたかった。しかし笑えなかった」

Q11-6. 泣いた。しかし、泣けなかった。

【注】演技のため、泣こうとしたが、演技力がないので涙を流すことができなかったという状況。

(66)hày　lɛ̂ɛw　tɛɛ　hày　bɔɔ　ʔɔ̀ɔk
　泣く　PRF　しかし　泣く　NEG　出る
「泣いた。しかし（涙が）出なかった」

(67)yàak　hày　tɛɛ　hày　bɔɔ　ʔɔ̀ɔk
　～たい　泣く　しかし　泣く　NEG　出る
「泣きたかった。しかし泣けなかった」

(66)と(67)のどちらでもよいが、演技で泣こうとして、涙が出なかったという場面では、調査協力者 1 は(66)の方がよいという判断である。(67)は、例えば予期せず身近で大切な人が急逝したとき、悲しすぎて涙が出なかった場面で使う。

3.12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか

3.12.の文は、まず、Q12-1からQ12-8の被使役者の動作についてはキャンセルできる。このとき、いずれも後件に被使役者を入れる方がよい。また、Q12-9とQ12-10の感情の実現はキャンセルしにくいかキャンセルできない。

Q12-1. ノイさんを踊らせた。しかし、(ノイさんは)踊らなかった。
(68)hày　nɔ̂ɔy　{tên/ fɔ̂ɔn}　tɛɛ　láaw　bɔɔ　{tên/ fɔ̂ɔn[10]}
　CAUS　ノイ　踊る　しかし　3sg　NEG　踊る
「ノイを躍らせた。しかし彼女は踊らなかった」

Q12-2. ノイさんを行かせた。しかし、(ノイさんは)行かなかった。
(69)hày　nɔ̂ɔy　pǎy　tɛɛ　láaw　bɔɔ　pǎy
　CAUS　ノイ　行く　しかし　3sg　NEG　行く
「ノイを行かせた。しかし彼女は行かなかった」

Q12-3. ノイさんにマンゴーを食べさせた。しかし、(ノイさんは)食べなかった。
(70)hày　nɔ̂ɔy　kǐn　màakmuaŋ　tɛɛ　láaw　bɔɔ　kǐn
　CAUS　ノイ　食べる　マンゴー　しかし　3sg　NEG　食べる
「ノイにマンゴーを食べさせた。しかし彼女は食べなかった」

[10] 「踊る」の/tên/は現代舞踊、/fɔ̂ɔn/は古典舞踊に対して使う。

Q12-4. ノイさんにマンゴーを売った。しかし、(ノイさんは)買わなかった。

(71)khǎay màakmuaŋ hày nɔ̂ɔy tɛɛ láaw bɔɔ sûɯ
売る マンゴー 与える ノイ しかし 3sg NEG 買う
「ノイにマンゴーを売った。しかし彼女は買わなかった」

Q12-5. ノイさんに写真を見せた。しかし、(ノイさんは)見なかった。

(72)ʔǎw hûupthaay hày nɔ̂ɔy bəŋ tɛɛ láaw bɔɔ bəŋ
取る 写真 与える ノイ 見る しかし 3sg NEG 見る
「ノイに写真を見せた。しかし彼女は見なかった」

(73)hày nɔ̂ɔy bəŋ hûupthaay tɛɛ láaw bɔɔ bəŋ
CAUS ノイ 見る 写真 しかし 3sg NEG 見る
「ノイに写真を見せた。しかし彼女は見なかった」

(72)の動詞連続の形の方が自然である。

Q12-6. ノイさんにお金を与えた。しかし、(ノイさんは)受け取らなかった。

(74)ʔǎw ŋə́n hày nɔ̂ɔy tɛɛ láaw bɔɔ {hap/ʔǎw}
取る お金 与える ノイ しかし 3sg NEG 受け取る/取る
「ノイにお金を与えた。しかし彼女は受け取らなかった」

Q12-7. ノイさんに本を貸した。しかし、(ノイさんは)受け取らなかった。

(75)ʔǎw pûm hày nɔ̂ɔy yǔɯm tɛɛ láaw bɔɔ ʔǎw
取る 本 与える ノイ 借りる しかし 3sg NEG 取る
「ノイに本を貸した。しかし彼女は受け取らなかった」

(76)hày nɔ̂ɔy yǔɯm pûm tɛɛ láaw bɔɔ yǔɯm ʔǎw
CAUS ノイ 借りる 本 しかし 3sg NEG 借りる 取る
「ノイに本を貸した。しかし彼女は借りようとしなかった」

(75)の動詞連続の形の方が自然である。(76)は無理矢理貸す場面に使用する。

Q12-8. ノイさんに電話した。しかし、(ノイさんは)電話に出なかった。

(77)thóo hǎa nɔ̂ɔy (lɛ̂ɛw) tɛɛ láaw bɔɔ hap
電話する ～まで ノイ PRF しかし 3sg NEG 受ける
「ノイに電話した。しかし彼女は出なかった」

Q12-9. ノイさんを驚かせた。しかし、(ノイさんは)驚かなかった。

(78)cə́ʔ　nɔ̂ɔy　tɛɛ　láaw　bɔɔ　tɯɯn[11]
驚かす　ノイ　しかし　3sg　NEG　驚く
「ノイを驚かせた。しかし彼女は驚かなかった」

(79)?hethày　nɔ̂ɔy　tókcǎy　tɛɛ　láaw　bɔɔ　tókcǎy
CAUS　ノイ　驚く　しかし　3sg　NEG　驚く
「ノイを驚かせた。しかし彼女は驚かなかった」

(80) waasiʔ　hethày　nɔ̂ɔy　tókcǎy　tɛɛ　láaw　bɔɔ　tókcǎy
～つもり　CAUS　ノイ　驚く　しかし　3sg　NEG　驚く
「ノイを驚かそうとした。しかし彼女は驚かなかった」

(78)が一番自然で、 次に(80)、(79)は言えなくもないが、不自然な感じがするという判断である。

Q12-10. ノイさんを怒らせた。しかし、(ノイさんは)怒らなかった。

【注】ノイさんを悪者にするため、ノイさんを怒らせようとしたが、怒らなかったという状況。

(81)?hethày　nɔ̂ɔy　hâay　tɛɛ　láaw　bɔɔ　hâay
CAUS　ノイ　怒る　しかし　3sg　NEG　怒る
「ノイを怒らせた。しかし彼女は怒らなかった」

(82)waasiʔ　hethày　nɔ̂ɔy　hâay　tɛɛ　láaw　bɔɔ　hâay
～つもり　CAUS　ノイ　怒る　しかし　3sg　NEG　怒る
「ノイを怒らせようとした。しかし彼女は怒らなかった」

/hâay/は「表情や動作として目に見えて怒る・叱る」の意味で、 (81)は言えなくもないが、不自然な感じがするという判断である。 (82)の方を使う方が自然である。もし、/hâay/の代わりに/khîat/「心の中でカッカして怒る」を使うと、(81)は非文で、(82)のみが使える。

Q12-11. ノイさんを説得した。しかし、(ノイさんは)引き受けなかった。

【注】困難な仕事をXさんに任せようとしたが、引き受けてくれなかったという状況。

---

[11] /cə́ʔ/は「わっと驚かす」。/tɯɯn/と/tókcǎy/は同じ「驚くという意味」。

(83)lɔ̂ɔ[12]　hày　nɔ̂ɔy　het　tɛɛ　láaw　bɔɔ　het
誘惑する　CAUS　ノイ　する　しかし　3sg　NEG　する
「誘惑してノイにやらせた。しかし彼女はやらなかった」

3.13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か

3.13.の文はキャンセルできる。

Q13-1. 魚を<行く>(V1)<買う>(V2)した。しかし、買わなかった。

【注】<行く>(V1)<買う>(V2)の部分は、それぞれの言語で「行く」を表す動詞と「買う」を表す動詞を、動詞連続の形で並べる。

(84)pǎy　sûɯ　pǎa　tɛɛ　bɔɔ　sûɯ
行く　買う　魚　しかし　NEG　買う
「魚を買いに行った。しかし買わなかった」

(85)pǎy　sûɯ　pǎa　tɛɛ　bɔɔ　dây　sûɯ
行く　買う　魚　しかし　NEG　得る　買う
「魚を買いに行った。しかし買わなかった」

(84)は買いたくなくて買わなかった、(85)は買うのを忘れたなど、自分の意志とは別の理由により買っていないと言うときに使用する。

Q13-2. 魚を<煮る>(V1)<食べる>(V2)した。しかし、食べなかった。

【注】<煮る>(V1)<食べる>(V2)の部分は、それぞれの言語で「煮る」を表す動詞と「食べる」を表す動詞を、動詞連続の形で並べる。動詞の間に魚を表す名詞が介在してもよい。

(86)tôm　pǎa　kǐn　tɛɛ　(phat)　bɔɔ　kǐn
煮る　魚　食べる　しかし　逆に　NEG　食べる
「魚を煮て食べた。しかし食べなかった。」

調査協力者１は、/phat/(逆に)がないと言えないが、調査協力者２はなくてもよいが、ある方がよいという判断である。

[12] /lɔ̂ɔ/は「誘惑する・誘ってその気にさせる」の意味。

(87)tôm　pǎa　kǐn　tɛɛ　bɔɔ　dây　kǐn
煮る　魚　食べる　しかし　NEG　得る　食べる
「魚を煮て食べた。しかし食べなかった」

(86)は食べたくなくて食べなかった、(87)は時間がないなど、自分の意志とは別の理由により食べていないと言うときに使用する。

3.14. 受身

3.14.の文はキャンセルできる。

Q14-1. ノイさんは殺された。しかし、死ななかった。

(88)nɔ̂ɔy　thɯ̀ɯk　khàa　tɛɛ　bɔɔ　tǎay
ノイ　PASS　殺す　しかし　NEG　死ぬ
「ノイは殺された。しかし死ななかった」

4. まとめ

ラオ語文のいわゆる自然な文は、文末で述べる終点への到達、あるいは結果に向かって時が流れるように述べるのが原則である。したがって全体を通して、前件「結果に至る具体的な動作」、後件「結果」を言う構造がみてとれる。

本稿の調査結果をして言えることは、ラオ語は概ね事象キャンセルの文を使うことができるということである。その際、前件では結果を述べず、後件で結果を否定する形を使うのが原則である。ただし前件の動詞によって、動作の終端への到達や達成を「含意する」から「含意しない」までの意味連鎖の含意度（動作することによって必ず結果が引き起こされるという連想度）の違いがありそうである。意味連鎖の含意度が強いのはキャンセルできず、弱いのはキャンセルできる。今回の調査では、3.5.の/máa/(来る)、3.7.の/sûɯɯ/(買う)はキャンセルができなかった。これらは前者に属する動詞であると考えられる。また、3.11.の文は、realis のキャンセルは全て不可能なので、自己完結的動作の着手自体はキャンセルできないと言える。3.12.の感情もキャンセルしにくい。動詞の意味として達成まで含むか、含まないか、あるいは動作の着手に着目点があるか、ということも関係しそうである。詳細な検討は稿を改めて検討したい。

略号

3sg	3人称単数	NEG	否定	CAUS	使役
PRF	完了	IRR	未然(irrealis)	PSBL	可能
PASS	受身				

参考文献

アラム佐々木幸子(2001)「燃やしたけれど燃えなかった」のはなぜ？－「強い達成動詞」と「弱い達成動詞」南昌彦・アラム佐々木幸子（編）『言語学と日本語教育Ⅱ』57-74. 東京：くろしお出版

上原聡, Kingkarn Thepkanjana(2009)「タイ語の結果構文」小野尚之(編)『結果構文のタイポロジー』365-406. 東京：ひつじ書房

小野尚之(2007)『結果構文研究の新視点』東京：ひつじ書房

Enfield, N.J.(2008) Verbs and multi-verb constructions in Lao. In: Anthony V.N.Diller and others (eds.) (2008) *The Tai-Kadai Languages.* 83-183. New York: Routledge,

Enfield,N.J. (2007) Lao separation verbs and the logic of Linguistic event categorization. *Cognitive Linguistics,* 18(2), 287-296. New York: Routledge,

Enfield,N.J. (2007) *A grammar of Lao*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter

Prasitharathsint, Amara (2010) *chanit khoang kham nay phaasaa Thai* (in Thai). Bangkok: Chulalongkorn University Press

タイ語の事象キャンセル

峰岸　真琴

1.　はじめに

1.1.　本稿の構成

本稿は事象キャンセルの調査結果を以下のような構成で示すものである。

第１節に、タイ語の概要および言語類型上の特徴を示す。タイ語の類型的特徴は、隣接するラオ語、クメール語と共通する点が多い。本稿のテーマである「事象キャンセル」に関わる類型的特徴として「主題卓立性、いわゆる文の必須成分の省略、動詞連続構造の存在」が挙げられるが、これらも三言語に共通する特徴である。

第２節では、プロジェクトに共通する「事象キャンセル」に関する調査項目の調査結果を示す。事象キャンセルの調査の過程で、方向動詞および完結相（perfective aspect）の例文が得られたので、これも併せて記した。

第３節では、調査結果のまとめとタイ語の事象キャンセルの分析方法および結果について述べる。本稿では、各調査項目の前件動詞の語義的アスペクト、対象物との関係、他者との関わりの有無、自立的動作といった観点からの分類を行っている。タイ語の「事象キャンセル」の特徴として「動作の着手」そのものはキャンセルできない点、および受身はキャンセルできない点が明らかになった。

第４節では、「事象キャンセル」現象と関わる補足資料を挙げる。タイ語の事象キャンセルの分析には、「随意動詞」（する動詞）と「不随意動詞」（なる動詞）の意味的な対立が重要である。クメール語の動詞連続における「随意動詞」と「不随意動詞」の意味的な対立の重要性については、峰岸（1986）において論じている。タイ語についてもこの意味的対立は重要だが、本稿の事象キャンセルの分析の結果を踏まえて、クメール語やタイ語の出来事の表現に関わる、動作の「企図」および実際の「着手」、動作を企図、着手した際の結果状態の「達成」の概念を明確化した。

タイ語を始めとした動詞連続構造を持つ孤立語では、事象のキャンセルにあたり、いわゆる完結相の意義を持つとされる機能語（タイ語では、lɛɛw, クメール語では haəy）の果たす機能が重要となるため、補足資料として完結相および lɛɛw の分析案を示す。私見では、タイ語の完結相は動詞が単独で出現することで表される。一方、lɛɛw は完結相の表現ではなく、未然相から已然相への局面の新展開の認識を表す。従って、動詞連続の前件に lɛɛw を用いて２つの節に区切っても、事象キャンセルに関する文法性の判断は変わらないと考えられる。

補足資料の最後に、「方向動詞」について、現段階での私見を示す。移動を表す「行く、来る」などの本動詞から文法化した方向動詞は、外見上本動詞と区別が付かない。そもそも方向動詞を独立した機能語と認めるべきかも、現段階では判断ができない。今回の「事象キャンセル」の調査では、方向動詞が独立した本動詞と解釈される恐れのある場合、曖昧性を回避するために方向動詞に先立つ本動詞を繰り返す例が観察された。しかし、このような分析では説明できない例もあるため、方向動詞の意味と機能については、今後、さらなる検討を要する。

1.2. タイ語の系統と言語類型上の特徴

本稿の調査対象である標準タイ語は、タイ・カダイ語族の南西タイ諸語に属するタイ王国の公用語である。言語類型上は、語形が文法機能により変化しない孤立語で、基本語順は「主語（S: Subject）＋動詞（V: Verb）＋目的語（O: Object）」の SVO 語順、名詞（N: Noun）を修飾する状態動詞（Adjective あるいは Stative Verb）は名詞の後に置かれる。

タイ語には５種の声調（1: 中平 /aa/ 、2: 低平 /àa/、3: 下降 /âa/、4: 高平 /áa/、5: 上昇 /ǎa/）があるが、以下では音韻表記に数字の１から５を付して声調を表す。タイ語の概要については、三谷 (1989) および Iwasaki & Ingkaphirom (2005) を参照のこと。

本稿に関わるタイ語の類型的特徴として、以下の３点が挙げられる。

(1)
1. **主題卓立性**　タイ語は主題卓立型言語である。文頭の時間詞および文頭に置かれた主語、目的語成分は主題となる。ただし、峰岸・ウィッタヤーパンヤーノン（2019）に示したように、主題は一般に先行文脈によって継承され、語句として明示されない。
2. **省略と明示による対比機能**　文の必須成分とされる主語、目的語であっても、その指示対象が文脈や状況から了解可能な場合は「省略」される。むしろ、省略可能な主語あるいは目的語をあえて明示すると、「対比焦点」の意味をもってしまう。言い換えれば、一般に対比焦点を持たない発話では、主語も目的語も明示されない。この第２点は第１点と表裏の関係にある。
3. **動詞連続構造**　タイ語は動詞連続構造（Serial Verb Construction/ Verb Serialization）を持つ。動詞連続と事象キャンセルの関係については、次の §1.3.節で述べる。

1.3. 動詞連続と事象キャンセル

Bisang (1991:509) は統語論の観点から、動詞連続を次のように定義している。

Verb Serialization　“the unmarked juxtaposition of two or more verbs or verb phrases (with or without subject and/or object), each of which would also be able to form a sentence on its own.”

一般に、２つの動詞 V_1 と V_2 からなる動詞連続の意味は、(A)「V_1（先行動作）＋ V_2（後続動作）＝継起動作」:「V_1 して V_2 する」、(B)「V_1（先行出来事）＋ V_2（後続出来事）＝因果関係」:「V_1 の結果 V_2 が生じる」、(C)「V_1（意図的行為）＋ V_2（目的動作・出来事）＝目的実現行為」:「V_2 するために V_1 する」などであるが、これらの意味と、その表現する事象の時間経過との間には、「類像性：iconicity」が認められるという共通点がある。本稿の事象キャンセルの表現の場合は、使役と受け身の例文を除いて、上記の (C)「目的実現行為」に関わっている。

タイ語の目的実現行為は、一般に動詞連続構文を用いて、前件が示す意図的動作 V_1 と、後件が示す実現結果 V_2 とを対比させることで、以下のように表現される。

(2) a. 動作主 S_1 が被動作者 O_1 に動作 Vt_1 という働きかけをする。
b. （働きかけの結果）被動作者 $(O_1 = S_2)$ に状態 Vi_2 が生じる。
c. 上記の a と b とは、$O_1 = S_2$ であるために、一つの出来事を表す動詞連続構文として、（3）のように定式化することができる。

(3) a. $S_1\ Vt_1\ (O_1)$
b. $S_2\ Vi_2$
c. $Vt_1 + (O_1 = S_2) + Vi_2$

「目的実現行為」の（3）a, b, c を、本稿の調査項目（Q1-1）の例に当てはめると、それぞれ以下の（4）a, b, c に対応する。

(4) a. dɛɛŋ1 khaa3 lek3
デーン 殺す レック [$S_1\ Vt_1\ O_1$]
デーンがレックを殺した。

b. lek3 taay1
レック 死ぬ [$S_2\ Vi_2$]
レックが死んだ。

c. dɛɛŋ1 khaa3 lek3 taay1
デーン 殺す レック 死ぬ [$S_1\ Vt_1\ (O_1 = S_2)\ Vi_2$]
デーンがレックを殺した（その結果、レックは死んだ）。

本稿の調査対象である「事象キャンセル」は、「目的実現行為 V_1 で企図・着手されていた目的事象 V_2 が（なんらかの理由 R で）成立・実現しなかった」という意味の表現である。この場合、タイ語では V_2 の直前に否定詞 may3 を置いて、目的事象のみを否定する。

本調査においては、次の（5）に示すように、先行動作を示す前件と後続する目的事象を示す後件の間を、いわゆる Perfective を表す lɛɛw4 「完結」を付加して、前件と後件を２つの叙述に分割し、両者を逆接の接続詞 tɛɛ2「しかし」で結びつける。さらに後件の叙述を否

定詞 may3 「否定」で打ち消す[1]。

ただし、(1) の第２点の特徴により、被動作者が「非対比的」な目的語である場合、「他動詞の目的語＝後続する自動詞の主語」($O_1 = S_2$) は明示されない。このことを丸かっこ（　）で示す。

(5)　dɛɛŋ1　khaa3　lek3　　lɛɛw4　tɛɛ2　　(lek3)　may3　taay1
　　デーン　殺す　レック　完結　しかし　レック　否定　死ぬ
　　デーンがレックを殺した（その結果、レックは死んだ）。

このような場合、前件は行為者の意図的かつコントロール可能な動作を表す動詞（「する動詞」あるいは「随意動詞」）であり、後件は前件行為の結果として成立する事態を表す動詞（「なる動詞」あるいは「不随意動詞」）である。「する動詞」、「なる動詞」については、§4.1.節の「調査結果のまとめ」で述べる。

2.　調査の概要と結果

本稿のデータ収集は主に 2020 年に行ったが、その後 2022 年秋まで、断続的にデータの追加と確認を行った。

本稿の執筆には、タイ語母語話者のコンサルタントとして、スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン（斎藤）氏（1969 年生まれ）のご協力をいただいた。ここに記して深く感謝する。

調査の課題は、動詞述語 A を含む前件の意味に何らかの終点が含まれ、その終点を表す動詞述語 B を含む後件があるとき、「A した。しかし、B しなかった」と言うことが可能か、である。

調査票の例文で用いられている動詞と目的語は、タイ語を使用する生活空間を考慮して、適宜変更した。

調査結果の記述法について注意すべき点を以下にまとめる。

- 例文中の丸カッコ（　）内に、動詞 V_1 の目的語（かつ、V_2 の主語）を示す。(1) に挙げた類型的特徴の第２点、「省略と明示による対比機能」で述べたように、タイ語では、文脈から指示対象が特定できる場合に目的語を明示すると、目的語が「対比焦点」の解釈を受けてしまうため、文の許容度が下がる。本稿の例文の丸カッコ内の目的語は、目的語の潜在的な位置を示すために記されているが、個々の例文の容認可能性は、目的語が明示されない文の場合のものである。
- 例文のグロスに続く【　】内には、調査項目に対応するタイ語文が適格文と解釈される場合の例を示す。

[1] Iwasaki & Ingkaphirom (2005) によれば、lɛɛw4 は文脈によって、Perfect「完了」あるいは Perfective「完結」を意味するとされる。私見によれば、lɛɛw4 は「未然相（irrealis）から已然相（realis）への局面の新展開」を表すと考えるが、本稿では lɛɛw4 のグロスは「完結」としておく。lɛɛw4 の意味の分析の詳細については峰岸（印刷中）を参照されたい。

- 「#」は、文脈次第で意味が異なり、両義的になるか、不適格文になる場合を示す。
- 例文のグロスの [dir] は「方向動詞」を示す。V_2 の中に方向動詞 [directive verb]（pay1「行く」、maa1「来る」、khɯn3「上がる」、loŋ1「下がる」khaw3「入る」、ɔɔk2「出る」などの出来事の方向性を表す動詞の一種）が現れると、曖昧性を回避するために、V_2 として V_1 を繰り返す場合がある。この方向動詞の問題は、本稿の論旨とは関係のない問題であるが、未解決の問題であるため、§4.4.節に今後の課題として挙げておく。

2.1. 対象の物理的変化が否定されうるか

（Q1-1）（X さんを）殺した。しかし死ななかった。

(6) a. khaa3 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 taay1
殺す 完結 しかし 否定 死ぬ
【殺そうとしたけど、死ななかった。】

b. khaa3 lek4 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 taay1
殺す レック 完結 しかし 否定 死ぬ
（デーンは）レックは殺そうとした。しかし（レックは）死ななかった。

一般に、「する動詞」（随意的に着手できる動作を表す動詞）である khaa3 に lɛɛw4 が付くと、[lek4 taay1] に至らしめるための具体的な行動（撃った、叩いた、毒を盛った）を実際に行ったことを含意する。

（Q1-2）（マンゴーの実を）鎌で切って落とした。しかし、落ちなかった。

(7) sɔɔy5 (mamuaŋ3) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 lon2
切り落とす マンゴー 完結 しかし 否定 落ちる [dir]
【高い所になっているマンゴーの実を切り落とそうとしたが（枝が太くて切れず）落ちなかった。】cf. sɔɔy5 「（棒の先に鎌状の刃物の付いたもので）切り落とす。」

（Q1-3）（ヤシの実を）割った。しかし、割れなかった。

(8) chɔʔ2 (luuk3=maphraaw4) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 tɛɛk2
割る ヤシの実 完結 しかし 否定 割れる
cf. chɔʔ2 「鎌のような刃物で同じ場所を何度も傷つけて）割る。」

（Q1-4）（窓を）壊した。しかし、壊れなかった。

(9) thup4 (naa3-taaŋ2) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 phaŋ1
叩く ガラス窓 完結 しかし 否定 壊れる

cf. thup4「こぶしで叩く」、phaŋ1（自動詞）「壊れている」状態を表す（本来、他動詞「壊す」には使えない）。

（Q1-5）（糸を）切った。しかし、切れなかった。

(10) tat2 (daay3) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 khaat2
切る 糸 完結 しかし 否定 切れる
【刃物で（あるいは歯で）切ろうとした】

（Q1-6）（枝を）折った。しかし、折れなかった。

(11) a. hak2 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 hak2
折る 完結 しかし 否定 折れる
（枝を）折ろうとしたが、折れなかった。
cf. hak2 は、自他両用の動詞。他動詞としては「（手で曲げて）折る」

b. mii1 khon1 hak2 tɛɛ2 chan5 may3 day3 hak2
有る 人 折る しかし 私 否定 得る 折る
（誰か）折った人がいるが、私は折らなかった。

（11）b の前件は、mii1 khon1 hak2「折った人がいる」という存在文である。タイ語では、ひとまとまりの事実を表す「完結相：perfective aspect」の表現を、連体修飾「折った人（あるいは折る人）」の名詞句にすることによって表現している。この例では、さらに存在文「折った人がいる」が前件とされ、「私は折らなかった」という後件と対比して述べられている。この完結相の表現については、§4.3.節で述べる。

（Q1-7）（窓を）開けた。しかし、開かなかった。

(12) pəət2 lɛɛw4 tɛɛ2 pəət2 may3 ʔɔɔk2
開ける 完結 しかし 開ける 否定 出る [dir]
【窓が錆び付き壊れている。】cf. pəət2「開ける、開く」は、自他両用の動詞。

後件で前件の他動詞が繰り返されるのは、後件だけが別の自動詞文（例えば、【鳥を追い出そうと窓を開けたが、中にいた鳥が出て行かなかった】）と解釈され、両義的になる場合である。この前件の動詞 pəət2 の後件での繰り返しについては、§4.4.節を参照されたい。

ただし、pəət2 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 pəət2「窓を開けたが開かなかった。」のように、pəət2 を自他両用動詞として使う人もいるため、後件に pəət2 を繰り返さなくとも適格文とする人もいるかもしれない。

（Q1-8）（紙を）貼った。しかし、くっつかなかった。

(13) paʔ2 (kradaat2) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 tit2
貼る 紙 完結 しかし 否定 くっつく
【糊が足りなかった】cf. paʔ2 「貼る、くっつける」

（Q1-9）（木を）倒した。しかし、倒れなかった。

(14) khoon3 (ton3=maay4) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 lom4
切る 木 完結 しかし 否定 倒れる
【木が太くて丈夫、根が思ったよりも張っていた。】cf. khoon3 「切り倒す」

（Q1-10）（湯を）沸かした。しかし、沸かなかった。

(15) tom3 (naam4) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 duɯat2
沸かす 水 完結 しかし 否定 沸く
【火力が足りなかった。ガスが切れた。】

（Q1-11）（ござを）広げた。しかし、広がらなかった。

(16) puu1 (sɯa3) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 phɛɛ2
広げる ござ 完結 しかし 否定 広がる
【しまうために長い間丸めてあったので、広げても丸まってしまう。】

（Q1-12）（木の枝を）燃やした。しかし、燃えなかった。

(17) phaw5 (kiŋ2=maay4) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 may3
燃やす 枝 完結 しかし 否定 燃える
【焚き木しようとしたが、湿っていて燃えなかった。】
cf. phaw5「火を付ける、（エビなどを焼くのに）直火を充てる」

（Q1-13）（山芋を）煮た。しかし、煮えなかった。

(18) tom3 (man1=theet3) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 suk2
煮る 芋 完結 しかし 否定 煮える
cf. tom3 「煮る」、suk2「煮える、熟す」、man1=theet3「サツマイモ」

（Q1-14）（魚を）干した。しかし、乾かなかった。

(19) taak2 (ɲaa1) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 hɛŋ3
干す 魚 完結 しかし 否定 乾く

（Q1-15）（スイカを）冷やした。しかし、冷えなかった。

(20) chɛɛ3 (tɛɛŋ1-moo1) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 yen1
冷やす スイカ 完結 しかし 否定 冷える
cf. chɛɛ3「～を冷やす、水、湯にしばらく浸ける、冷蔵庫に入れる」、chɛɛ3 yen1「冷やす」、chɛɛ3=khɛŋ5「冷凍する」

以上、2.1. の例文は、全て適格文である。

2.2. 対象物の知覚が否定され得るか

（Q2-1）見た。しかし、見えなかった。

(21) a. mɔɔŋ1 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 hen5
見る 完結 しかし 否定 見える

b. *hen5 lɛɛw4, tɛɛ2 may3 hen5
見える 完結 しかし 否定 見える

cf. mɔɔŋ1「見る、眺める、全体をイメージとして見る」は「する動詞」、hen5「見える」は「なる動詞」である。一方、「なる動詞」hen5 を前件、後件で反復することは矛盾であり、容認されない。

（Q2-2）聞いた。しかし、聞こえなかった。

(22) faŋ1 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 day3-yin1
聴く 完結 しかし 否定 聞こえる

（Q2-3）（魚醤の匂い）をかいだ。しかし、匂いがしなかった。

(23) dom1 (naam4-plaa1) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 day3 klin2
嗅ぐ 魚醤 完結 しかし 否定 得る 匂い
【風邪をひいて鼻がつまっている。魚醤の瓶が密閉されていて臭いを発していない、など。】

以上、2.2. の例文は、全て適格文である。

2.3. 対象物の移動が否定され得るか

（Q3-1）（小石を）投げた。しかし、投げられなかった。

(24) khwaaŋ3 (kruat2) lɛɛw4 tɛɛ2 (pay1) may3 thɯŋ5
投げる 小石 完結 しかし 行く 否定 届く [dir]
【行く（目標に届く）と思ったのに、石が重かった、思ったより、目標が遠かったなど】

（Q3-2）（スイカを）籠に入れた。しかし、入らなかった。

(25) say2 (tɛɛŋ1-moo1) nay1 takraa3 lɛɛw4 tɛɛ2 say2 may3 khaw3
入れる スイカ 中 かご 完結 しかし 入れる 否定 入る [dir]
【スイカが大きくて入らなかった】

（Q3-3）（芋を）抜いた。しかし、抜けなかった。

(26) thɔɔn5 (man1=theet3) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 lut2
抜く 芋 完結 しかし 否定 抜ける
cf. thɔɔn5「しっかり根付いたものを上に向かって抜こうとして引っ張る。根こそぎ抜く」、dɯŋ1 「（方向性はなく）引っ張る」。
例：草刈りは、dɯŋ1 では抜けない。ちゃんと thɔɔn5 する必要がある。

（Q3-4）（岩を）動かした。しかし、動かなかった。

(27) khlɯan3=yaay4 (kɔɔn3=hin5) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 khayap2
動かす 岩 完結 しかし 否定 動く

（Q3-5）（鳥を）放した。しかし、放せなかった。

(28) plɔɔy2 (nok4) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 pay1
放す 鳥 完結 しかし 否定 行く
【鳥かごの扉を開けたが、鳥かごから出て行かなかった。鳥の行動は制御できないから】

（Q3-6）（臼を棚の上に）載せた。しかし、載らなかった。

(29) a. yok4 (khrok4 khɯn3 waaŋ1 bon1 chan4) lɛɛw4 tɛɛ2 may3
上げる 臼 上がる [dir] 置く 上 棚 完結 しかし 否定
khɯn3
上がる [dir]
（臼を棚の上に）上げようとしたが、上がらなかった。

b. lɔɔŋ1 yok4 (khrok4 khɯn3 waaŋ1 bon1 chan4) lɛɛw4 tɛɛ2 may3
試みる 上げる 臼 上がる [dir] 置く 上 棚 完結 しかし 否定

khɯn3
上がる

臼は、重さにより上がったり、上がらなかったりするので、lɔɔŋ1「試みる」があった方がよい。

以上、2.3. の例文は、全て適格文である。しかし、（29）b のように、持ち上げるものの重さによっては達成に困難が予想される場合、lɔɔŋ1「試みる」があった方がよい場合もある。

2.4. 対象物との接触が否定され得るか

（Q4-1）（レックを）叩いた。しかし、叩けなかった。

(30) tii1 (lek4) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 doon1
叩く レック 完結 しかし 否定 当たる

（Q4-2）（ボールを）蹴った。しかし、蹴れなかった

(31) teʔ2 (luuk3=bon1) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 doon1
蹴る ボール 完結 しかし 否定 当たる

（Q4- 3）（コップを）つかんだ。しかし、つかめなかった。

(32) a. cap2 (kɛɛw3) lɛɛw4 tɛɛ2 cap2 day3 may3 naan1
つかむ コップ 完結 しかし つかむ 得る 否定 長い
【つかんだが、熱くて長くはつかんでいられなかった。】

b. cap2 (kɛɛw3) lɛɛw4 tɛɛ2 cap2 naan1 may3 way5
つかむ コップ 完結 しかし つかむ 長い 否定 耐える
【つかんだが、熱くて長くつかむことには耐えられなかった。】

熱いものを長時間つかむというのは、熱さの程度による問題であり、「長くはつかめない」といった、程度を限定する表現を入れた方が自然である。

以上、2.4. の例文は、全て適格文である。

2.5. 目的地への到達が否定され得るか

（Q5-1）（東京に）行った。しかし、着かなかった。

(33) pay1 (Tokyo) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 thɯŋ5
行く 東京 完結 しかし 否定 着く

【東京へと出発したが、（例えば最終目的地の府中には）行き着いていない】

（Q5-2）（ここに）来た。しかし、着かなかった。

(34) maa1 lɛɛw4 tɛɛ2 yaŋ1 may3 thɯŋ5 thii3=nii3
来る 完結 しかし まだ 否定 着く ここ
【こっちに向かって来たのだが、目的地である「ここ」にはまだ到着していない。】

（Q5-3）（家に）帰った。しかし、着かなかった。

(35) klap2 (baan3) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 thɯŋ5 baan3
帰る 家 完結 しかし 否定 着く 家

日本語でもタイ語でも、「家に帰る」という表現が、「家に帰り着くこと」を必ずしも含意しないことに注意されたい。

（Q5-4）（二階に）上がった。しかし、着かなかった。

(36) khɯn3 pay1 (chan4=sɔɔŋ5) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 thɯŋ5
上がる 行く 二階 完結 しかし 否定 着く
【二階には着いたが、母の部屋には着いていない。】

以上、2.5. の例文は、全て適格文である。

一般に、どこかへ移動したからといって、出発と到着には距離と時間の差がある。出発したからといって必ず最終的な目的地に到着するとは限らないので、結果だけをキャンセルすることは可能である。

2.6. 作成物の出現が否定され得るか

（Q6-1）（人形を）作った。しかし、作れなかった。

(37) pan3 (tuk4kataa1) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 pen1
こねる 人形 完結 しかし 否定 なる
【人形を作ろうと粘土をこねたが、人形の形にならなかった】
cf. pan3「粘土をこねて（茶碗、人形などの）形にする」

（Q6-2）（家を）建てた。しかし、建てられなかった。

(38) saaŋ3 (baan3) pay1 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 set2
建てる 家 行く 完結 しかし 否定 終わる
【建てたが、完成していない。】

（Q6-3）（穴を）掘った。しかし、掘れなかった。

(39) khut2 (lum5) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 day3
掘る 穴 完結 しかし 否定 可能

以上、2.6. の例文は、全て適格文である。

2.7. 対象物の獲得が否定され得るか

（Q7-1）（その本を）買った。しかし、買えなかった。

(40) sɯɯ4 (naŋ4-sɯɯ5) lɛɛw4 tɛɛ2 yaŋ1 may3 day3
買う 本 完結 しかし まだ 否定 得る
【代金を払ったが、まだ商品が手元に届いていない。】

（Q7-2）（金を）盗んだ。しかし、盗めなかった。

(41) khamooy1 (ŋən1) lɛɛw4 tɛɛ2 may3 sam5-ret2
盗む 金 完結 しかし 否定 成功する
【盗んだのは事実だが、逃走中に警官に逮捕されてしまい、成功しなかった。】

以上、2.7. の例文は、全て適格文である。

2.8. 発声が否定され得るか

（Q8-1）話した。しかし、声が出なかった。

(42) a. phuut3 lɛɛw4 tɛɛ2 siaŋ5 may3 ɔɔk2
話す 完結 しかし 声 否定 出る
【話したが、声がまったく出なかった】

b. phayaayaam1 phuut3 lɛɛw4 tɛɛ2 siaŋ5 may3 ɔɔk2
努める 話す 完結 しかし 声 否定 出る
【話そうと努めたが、声そのものが出なかった。】

（Q8-2）歌った。しかし、声が出なかった。

(43) a. rɔɔŋ4 lɛɛw4 tɛɛ2 siaŋ5 may3 ɔɔk2
歌う 完結 しかし 声 否定 出る
【歌声は出ているが、例えばマイクがなくて、家の外には声が聞こえない、など】

b. phayaayaam1 rɔɔŋ4 lɛɛw4 tɛɛ2 siaŋ5 may3 ɔɔk2
努める 歌う 完結 しかし 声 否定 出る
【歌おうと努めたが、声そのものがまったく出なかった。】

以上、2.8. の例文は、全て適格文である。

一般に、「話す」あるいは「歌う」ことは平常の身体状態では容易なことだが、喉に何か支障があれば、「話そう」、「歌おう」などと試みても声が出ない場合も考えられる。そのような場合は phayaayaam1「努める」があった方が良い。

2.9. 飲食物の摂取が否定され得るか

（Q9-1）（魚を）食べた。しかし、食べられなかった。

(44) a. kin1 (plaa1) lɛɛw4 tɛɛ2 kin1 may3 way5
食べる 魚 完結 しかし 食べる 否定 耐える [dir]
【いったん口に入れたが、まずくて飲み込めなかった】

b. lɔɔŋ1 kin1 plaa1 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 way5
試みる 食べる 魚 完結 しかし 否定 耐える
【lɔɔŋ1「試みる」が必要、kin1 「食べる」は既に口に入れていることを意味する。】

（Q9-2）（酒を）飲んだ。しかし、飲めなかった。

(45) a. kin1 (law3) lɛɛw4 tɛɛ2 kluɯn1 may3 loŋ1
飲む 酒 完結 しかし 飲み込む 否定 下がる [dir]
【口に入れたが、まずくて飲み込めなかった】

b. lɔɔŋ1 kin1 (law3) lɛɛw4 tɛɛ2 kluɯn1 may3 loŋ1
試みる 飲む 酒 完結 しかし 飲み込む 否定 下がる [dir]

以上、2.9. の例文は、全て適格文である。

一般に、「食べる」、「飲む」ために口に入れるのは通常容易に実現できることだが、「まずい」などの支障があれば、簡単に飲み下すことが出来ない場合も考えられる。そのような場合には、lɔɔŋ1「試みる」があった方が良い。

2.10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか

（Q10-1）立った。しかし、立てなかった。

(46) a. luk4 khɯn3 yuɯn1 lɛɛw4 tɛɛ2 luk4 may3 khɯn3
起きる 上がる [dir] 立つ 完結 しかし 起きる 否定 上がる [dir]

【立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢までにはならなかった。】

b. phayaayaam1 luk4 khɯn3 yɯɯn1 lɛɛw4 tɛɛ2 luk4 may3 khɯn3
努める 起きる 上がる 立つ 完結 しかし 起きる 否定 上がる [dir]
【同上。】

「立ち上がる」という一般には容易な動作が、よほどの事情により達成できないことを示すためには、phayaayaam1「努める」があった方が良い。

（Q10-2）座った。しかし、座れなかった。

(47) a. naŋ3 lɛɛw4 tɛɛ2 naŋ3 may3 loŋ1
座る 完結 しかし 座る 否定 下がる [dir]
【座ろうとして腰を曲げたが、足が痛くて、尻を椅子につけた状態までにはならなかった】

b. phayaayaam naŋ3 lɛɛw4 tɛɛ2 naŋ3 may3 loŋ1
努力する 座る 完結 しかし 座る 否定 下がる [dir]
【同上。phayaayaam1「努める」があった方が良い。】

（Q10-3）眠った。しかし、眠れなかった。

(48) nɔɔn1 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 lap2
横たわる 完結 しかし 否定 眠る
【眠ろうとして横になったが、眠りに入ることができなかった】

以上、2.10. の例文は、全て適格文である。
「立つ」、「座る」など、一般には容易な動作が、よほどの事情により達成できないことを示すためには、phayaayaam1「努める」があった方が良い。

2.11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか

（Q11-1）立った。しかし、立てなかった。

(49) phayaayaam1 ca=luk4 khɯn3 lɛɛw4 tɛɛ2 luk4 may3 khɯn3
努める 未然 = 起きる 上がる [dir] 完結 しかし 起きる 否定 上がる [dir]
【椅子から立ち上がろうとして力を入れたが、椅子から尻を離すことがまったくできなかった。】

（Q10-1）（46）b の phayaayaam1 luk4 と、（Q11-1）（49）の phayaayaam1 ca=luk4 とで、後者に ca=「未然」があることに注意されたい。（46）b が「起きよう」と企図し、動作に着手して、

途中まで起きる努力をしていたのに対し、（49）は「起きようと思う」ところ（企図）までが実現したが、「実際の起きる動作」の着手までは出来ていないことを示す。

（Q11-2）座った。しかし、座れなかった。

(50) phayaayaam1 ca=naŋ3 loŋ1 lɛɛw4 tɛɛ2 naŋ3 may3 loŋ1
努める 未然 = 座る 下がる [dir] 完結 しかし 座る 否定 下がる [dir]
【座ろうとして力を入れたが、足が痛くてまったく動作を開始することができなかった。】

（Q10-2）（47）b との違いに注意されたい。

（Q11-3）歩いた。しかし、歩けなかった。

(51) a. # dəən1 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 sam5ret2
歩く 完結 しかし 否定 成功する

「歩くこと」の着手を打ち消す「歩こうとして力を入れたが、足が痛くて一歩も踏み出すことができなかった」の意味では不適格だが、「歩いたが、目標までの距離は歩けなかった」という意味では適格文である。

b. phayaayaam1 dəən1 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 sam5ret2
努める 歩く 完結 しかし 否定 成功する
【歩こうとして力を入れたが、足が痛くて一歩も踏み出すことができなかった。】

（Q11-4）走った。しかし、走れなかった。

(52) a. # wiŋ3 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 sam5ret2
走る 完結 しかし 否定 成功する
「走ること」の着手を打ち消す「走ろうとして力を入れたが、足が痛くて一歩も前に進めなかった」の意味では不適格だが、「走ったが、目標までの距離は走れなかった」という意味では適格文である。

b. phayaayaam1 wiŋ3 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 sam5ret2
努める 走る 完結 しかし 否定 成功する
【走ろうとして力を入れたが、足が痛くて一歩も踏み出すことができなかった】

（Q11-5）笑った。しかし、笑えなかった。

(53) a. yim4 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 sam5ret2
微笑む 完結 しかし 否定 成功する

【笑顔を作ろうとしたが、恐怖のため、笑った顔をうまく作ることができなかった】

b. phayaayaam1 yim4 lɛɛw4 tɛɛ2 may3 sam5ret2
努める 微笑む 完結 しかし 否定 成功する
【同上。】

（Q11-6）泣いた。しかし、泣けなかった。

(54) rɔɔŋ4 lɛɛw4 tɛɛ2 naam4=taa1 may3 lay5
泣く 完結 しかし 涙 否定 流れる
【演技で泣こうとしたが、演技力がないので涙を流すことができなかった】

以上、2.11. の「歩く」「走る」など、普通は容易に実現可能な動作に関しては、「一歩も前進出来ない」という「活動そのものの開始、着手」を全否定する意味では不適格だが、「目標の距離・時間など、結果の完全達成にまでは至らない」という解釈の場合は適格文になる。

2.12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか

（Q12-1）（レックを）踊らせた。しかしレックは踊らなかった。

(55) a. hay3 (lek4) ten3 tɛɛ2 lek4 may3 ten3
使役 レック 踊る しかし レック 否定 踊る

b. ＃ hay3 khaw5 ten3 tɛɛ2 may3 ten3
使役 彼 踊る しかし 否定 踊る

（55）b は a と同様、適格文だが、後件の動作に主語がないと、(A) 主語が khaw5 「彼」あるいは (B) tua1=eeŋ1 「自分」のどちらの解釈も許す両義的な文になる。(B) の場合、「彼に踊らせたが、自分は踊らない」という意味にもなりうる。

（Q12-2）レックを行かせた。しかし、（レックは）行かなかった。

(56) a. hay3 (lek4) pay1 tɛɛ2 lek4 may3 pay1
使役 レック 行く しかし レック 否定 行く

b. ＃ hay3 khaw5 pay1 tɛɛ2 may3 pay1
使役 彼 行く しかし 否定 行く

（56）b は a と同様、適格文だが、後件の主語を明示しないないと、後件の動作主が不明確で、両義的な文になる。

（Q12-3）レックにマンゴーを食べさせた。しかし（レックは）食べなかった。

(57) hay3 lek4 kin1 (mamuaŋ3) tɛɛ2 lek4 may3 kin1
使役 レック 食べる マンゴー しかし レック 否定 食べる

（Q12-4）レックにマンゴーを売った【= 買わせた】。しかし、レックは買わなかった。

(58) a. hay3 lek4 sɯɯ4 (mamuaŋ3) tɛɛ2 lek4 may3 sɯɯ4
使役 レック 買う マンゴー しかし レック 否定 買う

b. # hay3 lek4 sɯɯ4 (mamuaŋ3) tɛɛ2 may3 sɯɯ4
使役 レック 買う マンゴー しかし 否定 買う

（58）b は a と同様、適格文だが、後件に主語がないと両義的な文になる。

（Q12-5）レックに写真を見せた。しかし、レックは見なかった。

(59) hay3 (lek4) duu1 ruup3=thaay2 tɛɛ2 (lek4) may3 duu1
使役 レック 見る 写真 しかし レック 否定 見る

（Q12-6）レックにマンゴーを与えた。しかし、レックは受け取らなかった。

(60) hay3 mamuaŋ4 (lek4) tɛɛ2 (lek4) may3 rap4
与える マンゴー レック しかし レック 否定 受け取る

（Q12-7）レックに本を貸した（借りさせた）。しかしレックは受け取らなかった。

(61) hay3 lek4 yɯɯm1 naŋ4-sɯɯ5 tɛɛ2 lek4 may3 yɯɯm1
使役 レック 借りる 本 しかし レック 否定 借りる

タイ語では「貸す」は「借りる」の使役表現を用いることに注意されたい。

（Q12-8）レックに電話した。しかしレックは電話に出なかった。

(62) thoorasap2 pay3 haa5 (lek3) tɛɛ2 (lek3) may3 rap4
電話する 行く [dir] 探す レック しかし レック 否定 受ける
cf. thoorasap2 pay3 haa5 X「X に電話をかける」

（Q12-9）レックを驚かせた。しかし彼は驚かなかった。

(63) a. phayaayaam tham1 hay3 lek4 tok2=cay1 lɛɛw4 tɛɛ2 lek4 may3
努める する 使役 レック 驚く 完結 しかし レック 否定
tok2=cay1
驚く

b. *tham1-hay3 lek4 tok2=cay1 lɛɛw4 tɛɛ2 lek4 may3 tok2=cay1
（前件の）結果 レック 驚く 完結 しかし レック 否定 驚く

（63）a は、本動詞 tham1「する」と hay3「使役標識」による使役文だが、（63）b は使役文ではなく、tham1-hay3～「結果として～となる」という意味の１語の接続句である。
（63）a は、phayaayaam1「努める」があった方が分かりやすい。（63）b は、前件が「驚いた」という結果状態を表す。「（結果として）驚いたが、驚かなかった」は矛盾するため、不適格文である。

（Q12-10）レックを怒らせた。しかし彼は怒らなかった。

(64) phayaayaam1 tham1 hay3 lek4 kroot2 lɛɛw4 tɛɛ2 lek4 may3 kroot2
努める する 使役 レック 怒る 完結 しかし レック 否定 怒る
phayaayaam1「努める」があった方が分かりやすい。
【レックを悪者にするため、怒らせようとしたが、レックは怒らなかった】

（Q12-11）レックを説得した。しかし、レックは引き受けなかった。

(65) klia3-klɔɔm2 lek4 lɛɛw4 tɛɛ2 lek4 may3 rap4
説得する レック 完結 しかし レック 否定 受ける
【難しい仕事をレックに任せようとしたが、引き受けてくれなかった】

以上、2.12. の使役文は、原則として全て適格文であるが、一部の例で後件の被動作者を明示しないと、文脈によっては両義的な文になる場合がある。また、（63）,（64）のように、相手の感情に働きかける表現は、そのための具体的な動作を想像しにくいためか、phayaayaam1「努める」を使ったほうが分かりやすい。

2.13. 動詞連続「V_1 + V_2 した。しかし、V_2 しなかった」が可能か

（Q13-1）魚を買い（V_2）に行った（V_1）。しかし、買わなかった。

(66) a. pay1 sɯɯ4 plaa1 tɛɛ2 may3 day3 sɯɯ4
行く 買う 魚 しかし 否定 得る 買う
pay1（V_1）「行った」が、sɯɯ4（V_2）「買って」はいない。

b. *pay1 sɯɯ4 plaa1 tɛɛ2 may3 pay1
行く 買う 魚 しかし 否定 得る 行く
pay1（V_1）「行った」が、pay1（V_1）「行って」はいないというのは矛盾である。

（Q13-2）魚を煮て（V1）食べた（V2）。しかし、食べなかった。

(67) a. tom3 plaa1 kin1 tɛɛ2 may3 kin1
煮る 魚 食べる しかし 否定 食べる
tom3（V_1）「煮て」食べようとしたが、kin1（V_2）食べていない。

b. *tom3 plaa1 kin1 tɛɛ2 may3 tom3
煮る 魚 食べる しかし 否定 煮る
tom3（V_1）「煮て」食べようとしたが、tom3（V_2）「煮て」はいないというのは矛盾である。

c ca=tom3 plaa1 kin1 tɛɛ2 may3 day3 tom3
未然 = 煮る 魚 食べる しかし 否定 煮る
ca=tom（V_1）「煮ようとし」たが、（V_2）「煮ていない」には、ca=「未然」が必要である。

以上、2.13. の動詞連続の例文は、前件（V_1）を否定すると不適格文であるが、後件（V_2）を否定するのであれば適格文となる。

2.14. 受身

受け身標識の thuuk2 は、本動詞としては「当たる」を意味する「なる動詞」（不随意動詞）である。thuuk2 khaa3「殺された」は「なる」的な結果状態を表す文なので、may3 taay1「死ななかった」は不適格文となる。

（Q14-1）レックは殺された。しかし、死ななかった。

(68) a. *lek4 thuuk2 khaa3 tɛɛ2 may3 taay1
レック 受け身 殺す しかし 否定 死ぬ

b. *thuuk2 khamooy1 ŋən1, tɛɛ2 ŋən1 yaŋ1 yuu2 thii3=baan3
受け身 盗む 金 しかし 金 まだ ある 家に
金を盗まれたが、金はまだ家にある。

（68）a, b は、現実に関する叙述としては不適格文であるが、「ミステリー、SF 小説、夢、思い違い」など、「非現実の事態」の説明なら適格文になる。

以上、2.14. の受け身文は、既に成立した「なる的状況」を表すため、キャンセルは、原則

として不適格文であるが、例外的に、空想、小説、夢、思い違いなどの「非現実の事態」を叙述する表現であれば適格文になる。

3. 調査結果のまとめと分析

事象キャンセルの調査結果のまとめを以下に示す。

3.1. 調査結果のまとめ

各調査項目の前件動詞の語義的アスペクト、対象物との関係、他者との関わりの有無、自立的動作といった観点から以下のような分類を試みた。なお、「到達」（achievement）は一定の持続的動作を含意するが、「達成」（accomplishment）にはそのような意味はないものとする。

（I）当初の目標に完全に到達しないと「失敗」と見なされる行為

得られた結果が不完全であれば「失敗・未遂」と見なされる。

- **2.1 対象の物理的変化**（1. 殺す、2. 切り落とす、3. 割る、4. 壊す、5. 切る、6. 折る、7. 開ける、8. 貼る、9. 倒す、10. 沸かす、11. 広げる、12. 燃やす、13. 煮る、14. 干す、15. 冷やす）
  【得られた結果が不完全であれば、「失敗・未遂」と見なされる。】
- **2.6 作成物の出現**（1. 作る、2. 建てる、3. 掘る）
  【作成物が出来上がっても、出来上がりに不満であれば「失敗」と見なされる。】
- **2.5 目的地への到達**（1. 行く、2. 来る、3. 帰る、4. 上がる）
  【出発したからといって目的地に到着しなければ「失敗」と見なされる。】

（II）自己の能力と目標の難易度との両方に左右される行為

能力を超えた目標に挑戦した結果として、目標に届かなければ「失敗・未遂」と見なされる。

- **2.3 対象物の移動**（1. 投げる、2. 入れる、3. 抜く、4. 動かす、5. 放す、6. 載せる）
  【当初の目標が未達成に終わると想定されるような困難がある場合、lɔɔŋ1「試みる」があった方がよい】
- **2.4 対象物との接触**（1. 叩く、2. 蹴る、3. つかむ）
  【当初のもくろみが外れた場合、「失敗・未遂」と見なされる。】

（III）平常は自己の自律的な行動の能力だけで完全に可能な行為

たとえ平常は容易な自律的行為であっても、障害になるような特別の事情があれば、達成できない場合もある。その場合、phayaayaam1「努める」あるいはlɔɔŋ1「試みる」があった方が良い。

- **2.8 発声** （1. 話す、2. 歌う）
  【何か障害になる事情があって、試みても出来ないような場合、phayaayaam1「努める」があった方が良い。】
- **2.9 飲食物の摂取**（1. 食べる、2. 飲む）
  【何か障害になる事情があって、簡単に出来ないような場合、lɔɔŋ1「試みる」があった方が良い。】
- **2.10 自己完結的動作の最終状態**（1. 立つ、2. 座る、3. 眠る）
  【何か障害になる事情があって最終目標に到達できない場合、phayaayaam1「努める」があった方が良い。】
- **2.11 自己完結的動作そのものの開始**（1. 立つ、2. 座る、3. 笑う、4. 泣く）
  【前件の動作 V_1 の「動作そのものの開始」を全否定する表現は不適格文になる。】

注目すべき点は、2.11 の V_1 動作の「着手」を全否定する表現だけは常に不適格文になることである。

（IV）自己の自律的な能力が外的な状況に左右される行為

- **2.2 対象物の知覚**（1. 見る、2. 聞く、3. 嗅ぐ）
- **2.7 対象物の獲得**（1. 買う、2. 盗む）

（V）目標への到達が、自己および他者の意図・状況によって左右される行為

- **2.12 被使役者の動作や感情の実現** （1. 踊らせる、2. 行かせる、3. 食べさせる、4. 買わせる、5. 見せる、6. 与える、7. 借りさせる、8. 電話する、9. 驚かせる、10. 怒らせる、11. 説得する）

（VI）その他

- **2.14 受身**（1. 殺される、盗まれる）
- **2.13 動詞連続** （1. 買いに行く、2. 煮て食べる）

受け身文は、既に成立した「なる的状況」を表すため、キャンセルは、原則として不適格文であるが、例外的に、空想、小説、夢、思い違いなどの「非現実」を叙述する表現であれば適格文になる。

行為とその目的を表す動詞連続文は、自分の心変わりでキャンセルが可能である。前件（V_1）の行為そのものを否定すると不適格文であるが、後件（V_2）の目的動作を否定するのであれば適格文となる。

3.2. タイ語の事象キャンセルのまとめ

以上のことから、タイ語の動詞連続は以下のようにまとめることができる。

1. ２つの動詞の組合せ全体の意味とキャンセルの可否は相関する。即ち、「する」的動作に起因する「なる」的状態への到達までの一連の過程において、達成までに何らかの支障が想定しうる場合や、目標の達成の難易度の違いによっては、キャンセル表現が容易に作れる。反面、「する」的動作の結果の実現がごく容易な「自律的動作」の場合、「よほどの支障があって、努力してもできない」と言う必要があるため、lɔɔŋ1「試みる」, phayaayaam1「努める」を必要とする。
2. 特に注目すべき点は、2.11「自己完結動作そのものの開始」のキャンセルが出来ない点である。このことから、V_1 は動作の「着手」だけを意味しており、「到達あるいは達成」は文脈による「推意」であると考えられる。

4. 参考資料

本稿の結果の分析に関連して、タイ語およびクメール語の統語構造に関わる基本的な意味的な対立の概念である「する動詞」と「なる動詞」について補足しておく。

4.1. 「する動詞」と「なる動詞」の意味的対立

峰岸（1986）では、クメール語の文法分析に際し、動詞連続の解釈における「する」動詞と「なる」動詞の意味的対立の重要性を指摘した。この分類は、当初から孤立語一般の動詞の分析を念頭にしたもので、タイ語にも適用可能である。同論文の一部を以下に要約する。

> 一般にクメール語では、動作主が自らの意志によって行うことのできる（あるいは、行おうとすることのできる）動作と、誰の意図とも無関係に、いわば状況によって成立する事態とを明確に区別して表現する。そこで、前者を「する」動詞、後者を「なる」動詞と呼ぶことにする。ごく大まかに言えば、「する」動詞には、人間や動物などの「有生」「有情」の存在による動作、行動等を表わす動詞が含まれる。一方、「なる」動詞には、いわゆる存在動詞、知覚動詞、情意動詞、状態動詞、自然現象を表わ

す動詞などが含まれる。［峰岸 1986: 46］

本稿の調査結果を踏まえ、上記の「行うことのできる（あるいは行おうとすることのできる）動作」という表現を次のように修正して明確化する。

(69) a. **行為の実現可能性** 「行うことができる」とは、「当該の行為を行おうと思えば行える」という、潜在的な実現可能性を意味する。実現可能な行為であっても、実際に「行うか行わないか」は、当然別問題である。

b. **企図** 「行おうとする」は「実現可能性のある行為を行う意図があること」を意味する。これを「企図」と呼ぶ。

c. **着手** 企図した行為を実行に移す段階を「着手」と呼ぶ。

d. **達成** 行為の着手により、意図した結果状態が実現することを「達成」という。

（69）d は「達成」を、「動作主の意図した結果状態が実現すること」と定義しており、「なる動詞」で表されるような、動作主の意図とは無関係に実現する「なる的状態」は含まない。

4.2. 動詞連続における随意動詞と不随意動詞

定義（69）に従って、動詞連続における随意動詞（「する動詞」と同義）と不随意動詞（「なる動詞」）を次のように定義し直す。

(70) a. **随意動詞** (voluntary verb) 動作主が行おうと「企図」すれば、「着手」することができる随意的動作を表す動詞を「随意動詞」あるいは「する動詞」と呼ぶ。

b. **着手と到達** (achievement) 随意動詞の表す行為に着手しても、能力の不足や周囲の状況によって、意図した結果状態にまでは到達しないことがあり得る。

c. **到達と達成** 到達動詞では、動作の積み上げ期間における努力は含意されるが、その過程で具体的な行為が積み上げられたかどうかまでは意味に含まれていない。

d. **不随意動詞** (involuntary/ spontaneous verb) 自然現象を含む、動作主の意図とは無関係に成立・実現する状態を表す動詞を「不随意動詞」あるいは「なる動詞」と呼ぶ。

（70）b により、随意動詞が「随意」に行えるのは「着手」までであり、意図した結果への「到達」を含意しない。結果の成否は蓋然性に留まる点で、「到達」とは Grice（1975）で言う「会話の推意：implicature」にすぎない。

（70）d の不随意動詞は、人間の意図とは無関係の自然現象、例えば「日が昇る、草木が育つ」などの自動詞だけでなく、「植物が実をつける」などの他動詞も含む。知覚動詞も、「見る」は随意動詞、「見える」は不随意動詞である。このように、随意・不随意の対立は、動詞の自他とは異なる意味的な動詞分類である [2]。

[2] 峰岸（2007）で論じたように、二項動詞の分類は、直接影響性に基づく他動性の強弱よりも、随意・不随意による分析の方が、よ

次に、随意動詞を含む動詞連続の「企図・着手」「結果状態」の表現の語用論的意味についてまとめておく。

「企図」の表現形式 「動作を行おうと思う」だけで、実際には着手しないことを意味する連用詞は、タイ語では接語 ca= 、クメール語では接語 nɯŋ= を用いる有標の表現である。

「着手」の表現 「着手」の表現は無標である。動詞連続 $V_1 + V_2$ において、随意動詞が「企図」の表現形式を伴わず、単独で V_1 として現れれば、「動作の着手」を含意する。

含意（entailment）と推意（implicature） Grice（1975）の論理的含意（entailment）と会話の推意（implicature）の区別によれば、命題 $P \rightarrow Q$ において、Q が偽（キャンセル）だと P も偽である場合、P は Q の含意である。一方、Q が偽（キャンセル）でも P は真である場合、P は Q の推意である。

4.3. 完結相の表現例

lɛɛw4 は完結相の表現ではなく、未然相から已然相への局面展開の認識を表す。

Comrie（1976）に従って、完結相を「出来事をひとまとまりと見なして、外部から見る」と定義すると、タイ語でこれに相当するのは、例えば「Copula ＋動詞の連体修飾」による表現である。もちろん連体修飾は「完結相」専用の形式ではなく、いわば特定の叙述の時間から切り離された表現である。例えば、khon1 khap2 rot4（人＋運転する＋車）の khap（運転する）は、「職業的な運転手」という超時間的な動作を意味するだけでなく、「今日は私が運転手だ（私が運転するよ）」のように、特定の時間に行った、あるいは行う、具体的な動作の叙述も意味することができる。

調査項目の例で言うと、(11) b の khon1 hak2 は、「枝を折る役割の人」という超時間的な意味も持ちうるが、以下の文脈では「ある特定の枝を折った人」という特定の行為を実行した人の意味である。

(11) b. mii1 khon1 hak2 lɛɛw4 tɛɛ2 chan5 may3 day3 hak2
有る 人 折る 完結 しかし 私 否定 得る 折る
（Q1-6）（誰か）折った人がいるが、私は折らなかった。［再掲］

以下に「殺人の罪状認否の尋問」という、行為の実行の真偽が厳しく問われる例を挙げる。

(71) a. khun1 khaa3 khun1-A ciŋ1 rəə5
あなた 殺す A さん 本当に 疑問
（弁護人）「あなたが A さんを本当に殺したのですか？」

り自然な分類が可能である。角田の他動性に基づく二項動詞の分類は、英語の形態上の自動詞・他動詞に引きつけられているためか、他動詞ではないが随意的な look at, listen to などの句動詞や、他動詞であっても不随意的な see, hear などの基礎的な知覚動詞が除外されているという問題もある。同様に、日本語の動詞例も選び直すことにより、より自然な分類が得られると期待される。

b. khrap4, phom5 pen1 khon1 khaa3
肯定 私 である 人 殺す
（被告）「はい、私が殺しました。」

c. plaaw2, phom5 may3 day3 khaa3
打消 私 否定 得る 殺す
（被告）「いいえ、私は殺していません。」

4.4. 方向動詞と曖昧性の回避

移動を表す本動詞から文法化した方向動詞は、外見上本動詞と区別が付かない。（12）は、前件の動詞 pəət2 が後件で繰り返されている例である。

（12） pəət2 lɛɛw4 tɛɛ2 pəət2 may3 ʔɔɔk2
開ける 完結 しかし 開ける 否定 出る [dir]
（Q1-7）（窓を）開けた。しかし、開かなかった。［再掲］

後件で pəət2 を繰り返さないと、聞き手が後件の方向動詞 ʔɔɔk2 を主動詞「出る」と解釈することで、例えば「（鳥を追い出そうと窓を開けたが、中にいた鳥が）出なかった」のような解釈も可能になる。このような曖昧性を回避するために、V_2 に pəət2 を繰り返す必要がある。

（25）say2 may3 khaw3「（何かを）入れる／（誰かが）入る」についても、同様の説明が可能である。

しかし、（44）、kin1 may3 way5「耐える／放置する」、および（46）luk4 may3 khɯn3、「上がる／昇る」については、上記と同様の説明が出来ない。これらの表現が頻用されるため、既に連語化しているのかもしれないが、今後の検討を要する課題である。

参考文献

Bisang, Walter (1991) Verb serialization, grammaticalization and attractor positions in Chinese, Hmong, Vietnamese, Thai and Khmer. In Seiler, Hansjakob & Waldfried. Premper (eds) (1991) *Paritzipation: Das sprachliche Erfassen von Sachverhalten* , 509-602. Tübingen:Narr.

Comrie, Bernard (1976) *Aspect.* Cambridge: Cambridge University Press.

Grice, H. P. (1975) Logic and Conversation. In P. Cole, & J. L. Morgan. (eds.) (1975) *Syntax and Semantics, Vol. 3, Speech Acts*, 41–58. New York: Academic Press.

Iwasaki, Shoichi & Preeya Ingkaphirom (2005) *A Referenc Grammar of Thai.* Cambridge: Cambridge University Press.

峰岸真琴 (1986)「クメール語の動詞連続における /baan/ の意義について」『東京大学言学論

集'86』pp.45-57. 東京大学文学部.

峰岸真琴 (2007)「孤立語の他動詞性と随意性：タイ語を例に」角田三枝，佐々木冠，塩谷亨編『他動性の通言語的研究』pp.205-216. くろしお出版.

峰岸真琴（印刷中）「タイ語の時と出来事の表現」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 54 号.

峰岸真琴、ウィッタヤーパンヤーノン・スニサー (2019)「タイ語の主題とその談話での現れ方について」『言語の類型特徴対照研究会論集』第 2 号. pp.111-135. 大阪：日中言語文化研究社.

三谷恭之 (1989)「タイ語」亀井孝、河野六郎、千野栄一（編著）(1989)『言語学大辞典　第２巻』529–545. 三省堂.

ポー・カレン語の事象キャンセル

加藤　昌彦

1. はじめに

ポー・カレン語(Pwo Karen)は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派カレン語群に属する言語である。ポー・カレン語には西部ポー・カレン語(Western Pwo Karen)、東部ポー・カレン語(Eastern Pwo Karen)、トークリーバウン・ポー・カレン語(Htoklibang Pwo Karen)、北部ポー・カレン語(Northern Pwo Karen)、といった互いに意思疎通の困難な方言群がある(Kato 2019)。本稿で扱うパアン方言(Hpa-an dialect)は、ミャンマー連邦共和国カレン州(Karen State)の州都であるパアン(Hpa-an)の周辺で話されている方言で、東部ポー・カレン語に属する。以降、このパアン方言を単にポー・カレン語と呼ぶ。

カレン系諸言語は、SOV 型言語がほとんどを占めるチベット・ビルマ語派に属しながら、SVO 型の特徴を持つ。ポー・カレン語もその例に漏れない。ここでポー・カレン語の文法的特徴をざっと見ておく。(1)に単一他動詞文の例を、(2)に複他動詞文の例を挙げる。

(1) ʔəwê　ʔánɴ　　mi̱.
　　3SG　食べる　ご飯
　　「彼はご飯を食べた。」

(2) ʔəwê　phí̱lânɴ　jə̀　　láiʔàʊ.
　　3SG　与える　1SG　本
　　「彼は私に本をくれた。」

ポー・カレン語は前置詞を持ち、名詞を修飾する状態動詞は名詞の後に置かれる。関係節は名詞の前に置かれる場合と後に置かれる場合とがある。副詞的な要素は主に動詞の後に置かれる。助動詞的な要素は動詞の前に置かれるものと後に置かれるものとがある。時制はない。進行相(progressive aspect)を表す文法形式もない。(1)は、「彼はご飯を食べた」という過去の行為以外にも、「彼は(日常的に)ご飯を食べている」といった習慣を表すことができ、また、「彼は(今)ご飯を食べている」「彼は(さきほど)ご飯を食べていた」という現在や過去時点における進行を表すこともできる。ただし、未来事象は動詞の前に非現実法(irrealis modality)を表す助詞 mə を置き、mə ʔánɴ「(未来において)食べる」のようにして表すのが普通である。否定は、(3)のように、述部末に助詞 ʔé を置くことによって表す。ただし、これは主節の否定の場合であり、従属節の場合には、動詞の前に助詞 lə を置き、かつ動詞の直

後あるいは節末に助詞 bá を置くことによって否定を表す。ポー・カレン語の音韻や文法の概要については Kato (2019)を、カレン系諸言語全体の文法の特徴については Kato (2021)を参照していただきたい。

(3) ʔəwê ʔánɴ mi̱ ʔé.
3SG 食べる ご飯 NEG
「彼はご飯を食べなかった。」

本稿の目的は、本巻所収の「事象キャンセル調査票」を用いてポー・カレン語の事象キャンセルを調査した結果に基づき、この言語の事象キャンセルの様相を示すことである。

2. 調査

2018 年 11 月と 2019 年 11 月にパアン市において、本巻所収の「事象キャンセル調査票」を用いて調査を行った。調査協力者は Saw Hla Chit 氏(1940 年代生まれ、男性)である。

3. 調査の結果

以下では調査によって得た例を 1 つずつ観察する。調査票の各例は前件文と後件文の 2 つの文からなるので、ポー・カレン語の採取例も 2 文からなる。ただし、採取例の 2 文をつなぐ lānânɴθí「しかし」については注意が必要である。この形式は逆接を表す助詞 lānânɴ と「～も」の意を表す助詞 θí の 2 語からなるが、便宜的に分かち書きをせずに表記する。注意すべきは、この lānânɴθí が(4)のように 2 つの文をつなぐ接続詞のように機能する一方で、(5)のように節の末尾に現れ、逆接を表す従属節標識としても機能することができるということである。音素表記をした(4)と(5)は表面上、区別をするのが難しい。しかし、(4)の場合、最初の節がなだらかに下降するイントネーションで終わる、lānânɴθí の前にポーズを置くことができる、等の特徴があり、(5)の場合には、最初の節のイントネーションが下降しない、lānânɴθí の前にポーズを置くことができる、等の特徴がある。

(4) jə ʔánɴ mi̱. lānânɴθí jə ʔánɴ θə̂ɴ ʔé.
1SG 食べる ご飯 しかし 1SG 食べる おかず NEG
「私はご飯を食べた。しかし、おかずを食べなかった。」

(5) jə ʔánɴ mi̱ lānânɴθí, jə ʔánɴ θə̂ɴ ʔé.
1SG 食べる ご飯 だけれども 1SG 食べる おかず NEG
「私はご飯を食べたけれども、おかずを食べなかった。」

事象キャンセルの調査においては、2 文をなるべく独立させたほうがよい。文の境界を越え

てキャンセルができるのであれば、それだけキャンセルが確固とした現象であることが示せるからである。したがって、調査においては、(4)の構造に固定するため、最初の節の後にポーズを置いてキャンセルが可能か否かを確認した。

続く 3.1 以降、調査票に即して採取した例の上には、調査票の調査用文例を「Q1-1. X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかった。」のように示す。この「1-1」は調査票の項目番号で、本稿ではこれの前に Q を付して見やすくする。ポー・カレン語の各採取例について注意すべき点がある場合には、その下に【注】として付記する。採取したポー・カレン語は、言語的あるいは文化的な観点においてポー・カレン語として自然なものとするため、必ずしも調査用文例をそのまま訳したものにはなっていない。以下 3.1 以降の小節の「対象物の物理的変化が否定され得るか」といった小見出しは、調査票の小見出しに従う。

3.1. 対象物の物理的変化が否定され得るか

すべての採取例で対象物の物理的変化をキャンセルすることが可能だった。以下に採取例を示す。

Q1-1. X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかった。

(6) jə mà θî ʔə̀. lānâɴθí θî ʔé.
1SG CAUS 死ぬ 3SG しかし 死ぬ NEG
「私は彼を殺した。しかし、(彼は)死ななかった。」
【注】mà は使役助詞。略号 CAUS は使役助詞を表す。

Q1-2. ココヤシの実を落とした。しかし、落ちなかった。(高い所になっているココヤシの実を長い棒でつついて落とそうとしたが、落ちなかったという状況。)

(7) jə chètòɴ dà làɴthé phlə̀θá. lānâɴθí làɴthé ʔé.
1SG つつく CAUS 落ちる ココヤシの実 しかし 落ちる NEG
「ココヤシの実をつつき落とした。しかし、落ちなかった。」
【注】dà は使役を表す助詞。mà が無意志動詞にのみつくのに対し、dà は意志動詞と無意志動詞の両方につくことができる。dà が無意志動詞についた場合、その動詞の表す事象が使役者のコントロールを離れて生起することを表す。一方、mà は、事象生起に対して使役者のコントロールが及んでいることを表す。

Q1-3. ココヤシの実を割った。しかし、割れなかった。(ヤシの実を鉈で割ろうとしたが、割れなかったという状況。)

(8) jə mà théphà phlɔ̀θá. lānânɴθí théphà ʔé.
1SG CAUS 割れる ココヤシの実 しかし 割れる NEG
「私はココナツを割った。しかし、割れなかった。」

Q1-4. 窓を壊した。しかし、壊れなかった。(ガラス窓を棒で叩いて壊そうとしたが、壊れなかったという状況。)

(9) jə mà ɣàɣòɴ pàɪntərâɴ. lānânɴθí ɣàɣòɴ ʔé.
1SG CAUS 壊れる 窓 しかし 壊れる NEG
「私は窓を壊した。しかし、壊れなかった。」

Q1-5. 糸を切った。しかし、切れなかった。(糸を刃物(あるいは手、歯など)で切ろうとしたが、切れなかったという状況。)

(10) jə kàʊ thé phlì. lānânɴθí thé ʔé.
1SG 引く 切れる 糸 しかし 切れる NEG
「私は糸を切った。しかし、切れなかった。」

【注】kàʊ は「刃物を引いて～を切る」の意を表す他動詞、thé は「切れる」を表す自動詞である。

Q1-6. 枝を折った。しかし、折れなかった。

(11) jə bò khā θéɪnthàɪɴ. lānânɴθí khā ʔé.
1SG 力を加える 折れる 枝 しかし 折れる NEG
「私は枝を折った。しかし、折れなかった。」

【注】bò は手で対象物に何らかの物理的な力を加えることを表す他動詞、khā は「折れる」を表す自動詞である。

Q1-7. 窓をあけた。しかし、あかなかった。

(12) jə pàʊ thánɴ pàɪntərâɴ. lānânɴθí pàʊ thánɴ θà ʔé.
1SG あける UP 窓 しかし あける UP MID NEG
「私は窓をあけた。しかし、あかなかった。」

【注】thánɴ は上昇を表す動詞助詞。「上がる」を表す同形の動詞に由来する。動詞 pàʊ「あける」は常に動詞助詞 thánɴ と共に現れる。θà は中動態標識。ポー・カレン語には「あく」を表す自動詞がなく、他動詞 pàʊ に θà を後置することによって「あく」を表す自動詞的述語を作る。

Q1-8. 紙を貼った。しかし、くっつかなかった。

(13) jə khədà càkhɔ̂. lānânɴθí { bàʊthá / khədà θà } ʔé.
1SG 貼る 紙 しかし くっつく 貼る MID NEG
「私は紙を貼った。しかし、くっつかなかった。」

【注】「くっつく」に対応する形式としては、ぴったりと貼りついた状態を表す動詞 bàʊthá「貼りつく」あるいは他動詞 khədà「貼る」に中動態標識 θà を後置して自動詞化した khədà θà「くっつく」のどちらを用いてもよい。

Q1-9. 木を倒した。しかし、倒れなかった。

(14) jə kháʊ θéɪɴ. lānânɴθí ɣàkhī làɴ ʔé.
1SG 切る 木 しかし 揺らぐ DOWN NEG
「私は木を切った。しかし、倒れなかった。」

Q1-10. 湯を沸かした。しかし、沸かなかった。

(15) jə dòɴ thánɴ thìkhlânɴ. lānânɴθí khō thánɴ ʔé
1SG 沸かす UP 湯 しかし 熱い UP NEG
「湯を沸かした。しかし、熱くならなかった。」

【注】動詞助詞 thánɴ は、状態を表す動詞に後置されると、状態の開始(その状態への変化)を表す。したがって、khō「熱い」に thánɴ を後置した khō thánɴ は「熱くなる」の意を表す。dòɴ「沸かす」の後に置かれた thánɴ は温度の上昇を表していると考えられる。

Q1-11. ござを広げた。しかし、広がらなかった。

(16) jə dà làɴ khlɔ́. lānânɴθí làɴpjá ʔé.
1SG 敷く DOWN ござ しかし 広がる NEG
「私はござを敷いた。しかし、広がらなかった。」

Q1-12. 木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった。(木の枝を焚き木にしようとしたが、湿っていて燃えなかったという状況。)

(17) jə dwɛ́ θéɪɴthàɪɴ. lānânɴθí mḭ́ ʔánɴ ʔé.
1SG 燃やす 木の枝 しかし 火 食う NEG
「私は木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった。」

【注】mḭ́ ʔánɴ は「燃える」の意のイディオムである。

Q1-13. 山芋を煮た。しかし、煮えなかった。(芋を煮ようとしたが、火力が弱く、煮えなかったという状況。)

(18) jə ʔánxwī xúthī. lānâɴθí mêiɴ ʔé.
1SG 煮る 山芋 しかし 煮える NEG
「私は山芋を煮た。しかし、煮えなかった。」
【注】mêiɴ は、煮えて食べ頃になった状態を表す。

Q1-14. 魚を干した。しかし、乾かなかった。(干し魚を作ろうとしたが、乾ききらなかったという状況。)

(19) jə ʔánlô jáphʊ́. lānâɴθí xâiɴ ʔé.
1SG 干す 小魚 しかし 乾燥した NEG
「私は小魚を干した。しかし乾かなかった。」

Q1-15. スイカを冷やした。しかし、冷えなかった。

(20) jə mà khléiɴ táitɔ̀θá. lānâɴθí khléiɴ ʔé.
1SG CAUS 冷たい スイカ しかし 冷たい NEG
「私はスイカを冷やした。しかし、冷えなかった。」

このように、採取例(6)から(20)のすべてにおいて対象物の物理的変化をキャンセルすることが可能である。これらのうち、(6)(8)(9)(20)では使役助詞 mà を用いた使役構文が使われており、(7)では使役助詞 dà を用いた使役構文が使われている。ポー・カレン語の使役構文については Kato (2009)と加藤(2019)を参照されたい。Kato (2009)で述べたとおり、ポー・カレン語には Vendler (1967)の言う達成(accomplishment)を表す典型的な他動詞が少ないため、対象の変化をこうした使役構文を用いて表すことが多い。3.12 でも論じるように、ポー・カレン語の使役構文においては、被使役者の動作のキャンセルが可能である。また、(10)と(11)では対象の変化を表すのに Vtr + Vintr (他動詞+自動詞)という組み合わせを持つ動詞連続が使われている。Kato (2009, 2017, 2019)と加藤(2019)で述べたとおり、ポー・カレン語のこのタイプの動詞連続では、一般的に他動詞の目的語項と自動詞の主語項が同一となり、意味的には、他動詞が表す動作の影響によって自動詞の表す事象が生じることが表される。加藤(2019)で述べたように、この動詞連続も使役構文の一種であると見なすことができる。使役構文の事象キャンセルについては 3.12 で、動詞連続の事象キャンセルについては 3.13 で詳しく述べる。

3.2. 対象物の知覚が否定され得るか

まず採取例を示す。

Q2-1. 見た。しかし、見えなかった。

(21) jə jō. lānâɴθí dá ʔé.
1SG 見る しかし 見える NEG
「私は見た。しかし、見えなかった。」
【注】動詞 dá は、視覚の経験者を主語として取り、見えた対象物を目的語として取る無意志他動詞である。

Q2-2. 聞いた。しかし、聞こえなかった。
(22) jə chôɴná. lānâɴθí ɣə̂ɴ ʔé.
1SG 聞く しかし 聞こえる NEG
「私は聞いた。しかし、聞こえなかった。」
【注】動詞 ɣə̂ɴ は、聴覚の経験者を主語として取り、聞こえた音やその発信源を表す名詞を目的語として取る無意志他動詞である。(22)は例えば、ラジオの受信状態が悪く、聞こうとしても聞こえない状態を表す。

Q2-3. 魚醤のにおいをかいだ。しかし、においがしなかった。
(23) jə nə̀ɴmə̂ɴ jōwá jáʔúthî. lānâɴθí nə̂ɴ ʔé.
1SG かぐ (～し)てみる 魚醤 しかし においを感じる NEG
「私は魚醤のにおいをかいでみた。しかし、においがしなかった。

採取例(21)と(22)において、対象物の知覚をキャンセルすることが可能である。(23)については注意が必要である。動詞 nə̀ɴmə̂ɴ は、「(においを)かぐ」と「接吻する」と「香る」の意味を表し、「かぐ」の意の場合、通常、動詞小辞 jōwá「(～し)てみる」と共起する。そのため、(23)では nə̀ɴmə̂ɴ を単独で使うことができず、「かぐ」の意を表す nə̀ɴmə̂ɴ そのものの事象キャンセルの可否は検証不可能である。3.11 で見るように、助詞 jōwá には動作の実現を含意(entail)しなくさせる働きがあるからである。

3.3. 対象物の移動が否定され得るか

まず採取例を示す。

Q3-1. 小石を投げた。しかし、投げられなかった。(小石を投げようとしたが、手にくっついて、手から離れなかったという状況。)
(24) jə khwáiɛò lōʊɴ. lānâɴθí phlò ʔé.
1SG 投げる 石 しかし 離れる NEG
「私は石を投げた。しかし、(石は手から)離れなかった。」

Q3-2. スイカを籠に入れた。しかし、入らなかった。(スイカを籠に入れようとしたが、大き

くて入らなかったという状況。籠は袋に替えてもよい。)

(25) jə chûɯ làɴ táitɔ̀θá lɔ́ dàɴ phɔ̀ɴ. lānâɴθí thɔ̄ ʔé.
1SG 入れる DOWN スイカ LOC 籠 中 しかし 入りきる NEG
「私はスイカを籠の中に入れた。しかし、入らなかった。」

Q3-3. 山芋を抜いた。しかし、抜けなかった。

(26) jə thè xúthī. lānâɴθí tài thánʔé.
1SG 抜く 山芋 しかし 出る UP NEG
「私は山芋を抜いた。しかし、出なかった。」

Q3-4. 岩を動かした。しかし、動かなかった。(大きな岩を動かそうとしたが、重すぎて動かなかったという状況。)

(27) jə chánʔ lōʊɴ phàdó. lānâɴθí wà ʔé.
1SG 押す 石 大きな しかし 動く NEG
「私は大きな石を押した。しかし、動かなかった。」

Q3-5. 鳥を放した。しかし、放せなかった。(鳥を放そうとしたが、鳥かごから出て行かなかったという状況。)

(28) jə kwɛ́ phəjā thóphó. lānâɴθí jùɯ thánʔé.
1SG はずす 放す 鳥 しかし 飛ぶ UP NEG
「私は鳥を放した。しかし、飛び上がらなかった。」

Q3-6. 臼を載せた。しかし、載らなかった。(臼を棚に載せようとしたが、思ったより重くて載せられなかったという状況。)

(29) jə chó thánʔ chɔ́ɯɴlōʊɴ. lānâɴθí chó nī̱ ʔé.
1SG 持ち上げる UP 石臼 しかし 持ち上げる 得る NEG
「私は石臼を持ち上げた。しかし、持ち上げられなかった。」

例(27)については注意が必要である。この例の採取においては、「動かす」の意を表す動詞 θàʊ を前件文に使おうとしたが、全身の力を込めて押す動作はこの動詞を使っては表せない。θàʊ は手で持ち上げられるような重さの物を動かすときに使うからである。代わりに動詞 chánʔ を使う必要がある。しかし、chánʔ は達成動詞ではないので、(27)は事象キャンセルの検証には使えない。(24)から(29)は、この(27)を除くと、前件文の表す対象物の移動をキャンセルすることが可能であると言える。

3.4. 対象物との接触が否定され得るか

まず採取例を示す。

Q4-1. X さんを叩いた。しかし、叩けなかった。(叩こうとしたが、手が届かなかったという状況。)

(30) jə dó ʔə̀. lānâɴθí khlàʊ ʔé.
1SG 叩く 3SG しかし とどく NEG
「私は彼を叩いた。しかし、(手が)とどかなかった。」

Q4-2. X さんを蹴った。しかし、蹴れなかった。(蹴ろうとしたが、足が届かなかったという状況。)

(31) jə thɛ̀ ʔə̀. lānâɴθí khlàʊ ʔé.
1SG 蹴る 3SG しかし とどく NEG
「私は彼を蹴った。しかし、(足が)とどかなかった。」

Q4-3. コップをつかんだ。しかし、つかめなかった。(コップに一瞬触れたが、熱くてしっかりと持つことができなかったという状況。)

(32) jə phóɴ nī thìkhlâɴ khwɛ́. lānâɴθí phóɴ bə́ɯɴ ʔé.
1SG つかむ 得る 湯 椀 しかし つかむ 勇気がある NEG
「私は湯呑みをつかんだ。しかし、つかめなかった。」

【注】phóɴ「つかむ」の後の nī「得る」は動詞連続の V2 として現れ、V1 の表す動作を行うために努力が必要であることを表す。意味が抽象化しているため、助動詞的要素と考えることも可能かもしれない。

例(30)と(31)は、調査票が意図したとおり、接触がまったく起きなかった状況を表している。また、(32)は、これも調査票が意図したとおり、対象物に一瞬触れたが、しっかりと持つことはできなかったという状況を表している。

3.5. 目的地への到達が否定され得るか

下掲(33)から(36)のすべての例において、目的地への到達をキャンセルすることができる。

Q5-1. 東京に行った。しかし、着かなかった。

(33) jə lì tòcò. lānâɴθí thòɴ ʔé.
1SG 行く 東京 しかし 着く NEG
「私は東京に行った。しかし、着かなかった。」

Q5-2. ここに来た。しかし、着かなかった。(昨日もここに来ようとしたのだが、道が分からなくてたどり着かなかったという状況。)

(34) jə ɣɛ̂ lə́ jò. lānânθí thòn ʔé.
1SG 来る LOC ここ しかし 着く NEG
「私はここに来た。しかし、着かなかった。」

Q5-3. 家に帰った。しかし、着かなかった。

(35) jə thàin ɣéin. lānânθí thòn ʔé.
1SG 帰る 家 しかし 着く NEG
「私は家に帰った。しかし、着かなかった。」

Q5-4. 二階に上がった。しかし、着かなかった。(家の二階に上がろうとしたが、膝が痛くて階段を上がれなかったという状況。)

(36) jə thán chəphânkhʊ́ thân. lānânθí thòn ʔé.
1SG 上がる 上 階 しかし 着く NEG
「私は二階に上がった。しかし、着かなかった。」

3.6. 作成物の出現が否定され得るか

下掲(37)から(39)のすべての例において、作成物の出現をキャンセルすることができる。どの例においても、作成物がまったく出現しなかったという読みと、途中までは出来上がったが最終段階には到達しなかったという読みのいずれもが可能である。

Q6-1. 人形を作った。しかし、出来なかった。(人形を作ろうとしたが、技術がなかったので結局は出来上がらなかったという状況。)

(37) jə tàin chəɣàn. lānânθí kɛ́ thán ʔé.
1SG 作る 人形 しかし 成る UP NEG
「私は人形を作った。しかし、出来上がらなかった。」

Q6-2. 家を建てた。しかし、出来なかった。(家を作ろうとしたが、途中で風雨で壊れ、出来なかったという状況。)

(38) jə θə́ɯn ɣéin. lānânθí kɛ́ thán ʔé.
1SG 帰る 家 しかし 成る UP NEG
「私は家を建てた。しかし、出来上がらなかった。」

Q6-3. 穴を掘った。しかし、穴ができなかった。(穴を掘ろうとしたが、地面が固くて穴が出来なかったという状況。)

(39) jə khɔ́ɯɴ chəphɔ̀ɴ. lānâɴθí kɛ́ thánɴ ʔé.
1SG 掘る 穴 しかし 成る UP NEG
「私は穴を掘った。しかし、出来上がらなかった。」

3.7. 対象物の獲得が否定され得るか

採取例(40)と(41)のどちらも、対象物の獲得をキャンセルすることが可能である。

Q7-1. その本を買った。しかし、買えなかった。(本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなくて、入手することができなかったという状況。)

(40) jə xwè láiʔàʊ nɔ́. lānâɴθí nī ʔé.
1SG 買う 本 その しかし 得る NEG
「私はその本を買った。しかし、得られなかった。」

Q7-2. 金を盗んだ。しかし、盗めなかった。(金を盗もうとして店に入ったが、警備員に見つかって入手できなかったという状況。)

(41) jə ʔánɣúɯ pèɪnchânɴ. lānâɴθí nī ʔé.
1SG 盗む 金 しかし 得る NEG
「私は金を盗んだ。しかし、得られなかった。」

3.8. 発声が否定され得るか

下掲(42)と(43)はどちらも、「話す」「歌う」という発生を伴う動作を行おうとしたけれども声が出なかったことを表す。

Q8-1. 話した。しかし、声が出なかった。

(42) jə khlàiɴ. lānâɴθí jə lūɯ tài thánɴ ʔé.
1SG 話す しかし 1SG 声 出る UP NEG
「私は話した。しかし、私の声は出なかった。」

Q8-2. 歌った。しかし、声が出なかった。

(43) jə mà thàkhɔ́. lānâɴθí jə lūɯ tài thánɴ ʔé.
1SG する 歌 しかし 1SG 声 出る UP NEG
「私は歌った。しかし、声が出なかった。」

3.9. 飲食物の摂取が否定され得るか

下掲(44)と(45)いずれの例においても、食べ物や飲み物の摂取をキャンセルすることが可能である。

Q9-1. 魚を食べた。しかし、食べられなかった。(魚を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。)

(44) jə ʔánᴺ já. lānânᴺθí jə ʔánjūɯ làᴺ nī̲ ʔé.
1SG 食べる 魚 しかし 1SG 飲み込む DOWN 得る NEG
「私は魚を食べた。しかし、飲み込むことができなかった。」

Q9-2. 酒を飲んだ。しかし、飲めなかった。(酒を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。)

(45) jə ʔò θài. lānânᴺθí jə ʔánjūɯ làᴺ nī̲ ʔé.
1SG 飲む 酒 しかし 1SG 飲み込む DOWN 得る NEG
「私は酒を飲んだ。しかし、飲み込むことができなかった。」

3.10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか

まず採取例を示す。

Q10-1. 立った。しかし、立てなかった。(椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況。)

(46) jə chîthə́ɯᴺ thánᴺ. lānânᴺθí chîthə́ɯᴺ nī̲ ʔé.
1SG 立つ UP しかし 立つ 得る NEG
「私は立った。しかし、立つことができなかった。」

Q10-2. 座った。しかし、座れなかった。(椅子に座ろうとして脚を曲げたが、脚が痛くて、尻を椅子につけた状態にならなかったという状況。)

(47) jə chînànᴺ. lānânᴺθí chînànᴺ nī̲ ʔé.
1SG 座る しかし 座る 得る NEG
「私は座った。しかし、座ることができなかった。」

Q10-3. 眠った。しかし、眠れなかった。(眠ろうとして横になったが、眠りに入ることができなかったという状況。)

(48) jə mî. lānânᴺθí mî nī̲ ʔé.
1SG 眠る しかし 眠る 得る NEG
「私は眠った。しかし、眠ることができなかった。」

上掲(46)(47)(48)いずれの例においても、「立つ」「座る」「眠る」という動作が、それらの最終的な局面である「立った状態」「座った状態」「睡眠に入った状態」に到達しなかったこ

とを表すことができる。

3.11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか

このグループにおいては、調査票のすべての例においてキャンセルが不可能だった。個々のケースについて下に詳細を述べる。

Q11-1 の「立った。しかし、立てなかった。(立ち上がろうとして力を入れたが、椅子から尻をまったく離すことができなかったという状況。)」は事象キャンセルを用いて表すことができない。この日本語をポー・カレン語に直訳すれば 3.10 で見た(46)になるが、(46)はこういった状況を表すことができないのである。このような状況を表すには、一例として試行を表す助詞 jōwá「(～し)てみる」「(～すること)を試みる」を用い、次の(49)のように言う必要がある。これは、動作の開始を含意(entail)されなくする働きが助詞 jōwá にあるためだと考えられる。

(49) jə chîthɔ́ɯɴ jōwá. lānâɴθí chîthɔ́ɯɴ nī̱ ʔé.
1SG 立つ (～し)てみる しかし 立つ 得る NEG
「私は立ってみた。しかし、立つことができなかった。」

Q11-2 の「座った。しかし、座れなかった。(座ろうとして力を入れたが、脚が痛くてまったく動作を開始することができなかったという状況。)」も事象キャンセルを用いて表すことができない。調査票の日本語を直訳した 3.10 の(47)はこういった状況を表すことができないのである。このような状況を表すには、一例として、(49)と同様に試行を表す助詞 jōwá を用い、次の(50)のように言う必要がある。

(50) jə chînàɴ jōwá. lānâɴθí chînàɴ nī̱ ʔé.
1SG 座る (～し)てみる しかし 座る 得る NEG
「私は座ってみた。しかし、座ることができなかった。」

Q11-3 から Q11-6 についても、上記 Q11-1 および Q11-2 と同様である。Q11-3 の「歩いた。しかし、歩けなかった。(歩こうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。)」、Q11-4 の「走った。しかし、走れなかった。(走ろうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。)」、Q11-5 の「笑った。しかし、笑えなかった。(笑った顔を作ろうとしたが、恐怖感のため、笑った顔を作ることができなかったという状況。)」、Q11-6 の「泣いた。しかし、泣けなかった。(演技のため、泣こうとしたが、演技力がないので涙を流すことができなかったという状況。)」は事象キャンセルを用いて表すことができない。次の(51)から(54)の文連続は許容されないのである。

(51) *jə cáiɴ. lānâɴθí cáiɴ θí̱ ʔé.
1SG 歩く しかし 歩く できる NEG
「私は歩いた。しかし、歩くことができなかった。」

(52) *jə klí. lānâɴθí klí θí̱ ʔé.
1SG 走る しかし 走る できる NEG
「私は走った。しかし、走ることができなかった。」

(53) *jə nī. lānâɴθí nī nī̱ ʔé.
1SG 笑う しかし 笑う 得る NEG
「私は笑った。しかし、笑うことができなかった。」

(54) *jə ɣáɴ. lānâɴθí ɣáɴ nī̱ ʔé.
1SG 泣く しかし 泣く 得る NEG
「私は泣いた。しかし、泣くことができなかった。」

調査票が意図した状況は、やはり試行を表す助詞 jōwá を用いて次の(55)から(58)のように表す。

(55) jə cáiɴ jōwá. lānâɴθí cáiɴ θí̱ ʔé.
1SG 歩く (～し)てみる しかし 歩く できる NEG
「私は歩いてみた。しかし、歩くことができなかった。」

(56) jə klí jōwá. lānâɴθí klí θí̱ ʔé.
1SG 走る (～し)てみる しかし 走る できる NEG
「私は走ってみた。しかし、走ることができなかった。」

(57) jə nī jōwá. lānâɴθí nī nī̱ ʔé.
1SG 笑う (～し)てみる しかし 笑う 得る NEG
「私は笑ってみた。しかし、笑うことができなかった。」

(58) jə ɣáɴ jōwá. lānâɴθí ɣáɴ nī̱ ʔé.
1SG 泣く (～し)てみる しかし 泣く 得る NEG
「私は泣いてみた。しかし、泣くことができなかった。」

このことから、ポー・カレン語において、自己完結的動作そのものの開始はキャンセルすることができないと言うことができるだろう。

3.12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか

まず採取例を示す。

Q12-1. X さんを踊らせた。しかし、(X さんは)踊らなかった。

(59) jə dà thə́ɯnlī ʔə̀. lānânθí ʔəwê thə́ɯnlī ʔé.
1SG CAUS 踊る 3SG しかし 3SG 踊る NEG
「私は彼を踊らせた。しかし、彼は踊らなかった。」

Q12-2. X さんを行かせた。しかし、(X さんは)行かなかった。

(60) jə dà lḭ ʔə̀. lānânθí ʔəwê lḭ ʔé.
1SG CAUS 行く 3SG しかし 3SG 行く NEG
「私は彼を行かせた。しかし、彼は行かなかった。」

Q12-3. X さんにマンゴーを食べさせた。しかし、(X さんは)食べなかった。

(61) jə dà ʔánˀ ʔə̀ khòθá. lānânθí ʔəwê ʔánˀ ʔé.
1SG CAUS 食べる 3SG マンゴー しかし 3SG 食べる NEG
「私は彼にマンゴーを食べさせた。しかし、彼は食べなかった。」

Q12-4. X さんにマンゴーを売った。しかし、(X さんは)買わなかった。

(62) jə ʔánchâ ʔə̀ khòθá. lānânθí ʔəwê xwè ʔé.
1SG 売る 3SG マンゴー しかし 3SG 買う NEG
「私は彼にマンゴーを売った。しかし、彼は買わなかった。」

Q12-5. X さんにマンゴーを見せた。しかし、(X さんは)見なかった。

(63) jə dànɛ́ ʔə̀ khòθá. lānânθí ʔəwê jō ʔé.
1SG 見せる 3SG マンゴー しかし 3SG 見る NEG
「私は彼にマンゴーを見せた。しかし、彼は見なかった。」

Q12-6. X さんにマンゴーを与えた。しかし、(X さんは)受け取らなかった。

(64) jə phḭlân ʔə̀ khòθá. lānânθí ʔəwê mànī ʔé.
1SG 与える 3SG マンゴー しかし 3SG 取る NEG
「私は彼にマンゴーを与えた。しかし、彼は受け取らなかった。」

Q12-7. X さんに本を貸した。しかし、(X さんは)受け取らなかった。

(65) jə ʔánlōɴ phi̱lâɴ ʔə̀ láiʔàʊ. lānâɴθí ʔəwê ʔánlōɴ ʔé.
1SG 貸す BEN 3SG 本 しかし 3SG 借りる NEG
「私は彼に本を貸した。しかし、彼は(本を)借りなかった。」

【注】動詞 ʔánlōɴ は「借りる」「貸す」の 2 つの意味を表す。これに受益を表す助詞 phi̱lâɴ「(～し)てやる」を後置すると、「貸す」の意味に限定することができる。この助詞は「与える」を表す動詞に由来する。

Q12-8. X さんに電話した。しかし、(X さんは)電話に出なかった。

(66) jə chɛ́ làɴ phōʊɴ lə́ ʔə ʔɔ́. lānâɴθí ʔəwê phóɴ phōʊɴ ʔé.
1SG つなぐ DOWN 電話 LOC 3SG ところ しかし 3SG 取る 電話 NEG
「私は彼に電話を掛けた。しかし、彼は電話を取らなかった。」

Q12-9. X さんを驚かせた。しかし、(X さんは)驚かなかった。

(67) jə mà ɕàʊ ʔə̀. lānâɴθí ʔəwê ɕàʊ ʔé.
1SG CAUS 驚く 3SG しかし 3SG 驚く NEG
「私は彼を驚かせた。しかし、彼は驚かなかった。」

Q12-10. X さんを怒らせた。しかし、(X さんは)怒らなかった。(X さんを悪者にするため、X さんを怒らせようとしたが、怒らなかったという状況。)

(68) jə mà θàtháɴ ʔə̀. lānâɴθí ʔəwê θàtháɴ ʔé.
1SG CAUS 怒る 3SG しかし 3SG 怒る NEG
「私は彼を怒らせた。しかし、怒らなかった。」

Q12-11. X さんを説得した。しかし、(X さんは)引き受けなかった。(困難な仕事を X さんに任せようとしたが、引き受けてくれなかったという状況。)

(69) jə lə̀ nāɣə̂ɴ ʔə̀. lānâɴθí ʔəwê chôɴná ʔé.
1SG CAUS 聞こえる 3SG しかし 3SG 聞く NEG
「私は彼を説得した。しかし、聞かなかった。」

【注】lə̀ は、動詞 lə̀「語る」に由来する使役助詞である。語りかけることによって被使役者に何らかの状態や状態変化を起こすことを表す。「説得する」は動詞 nāɣə̂ɴ「聞こえる」に使役助詞 lə̀ を前置することによって表す。

上掲(59)(60)(61)(67)(68)(69)の前件文はいずれも使役助詞を用いた使役構文である(Kato [2009]; 加藤[2019]参照)。加藤(2019)で述べたとおり、ポー・カレン語の使役構文には、このように使役助詞を用いる TYPE 1 の使役構文と、動詞 ʔánmə̂ɴ「命じる」等を用いてその後

に補文を置く TYPE 2 の使役構文の 2 種類がある。TYPE 2 は被使役行為を表す動詞が意志動詞である必要がある等の制限があるため、本稿では TYPE 1 の使役構文を検証に用いた。ポー・カレン語の使役構文は、TYPE 1 であれ TYPE 2 であれ、一般的に、被使役者の動作(状態変化や状態を含む)はキャンセルが可能である。TYPE 2 の例として下記(70)を見ておく。これは、ʔánmân「命じる」を用いた TYPE 2 の使役構文における被使役者の動作をキャンセルした例である。

(70) jə ʔánmân [ʔə tháɯnlī]. lānânθí ʔəwê tháɯnlī ʔé.
1SG 命じる 3SG 踊る しかし 3SG 踊る NEG
「私は彼に踊るよう命じた。しかし、彼は踊らなかった。」

上に示した採取例の動詞のうち、(62)の ʔánchâ「売る」、(63)の dàné「見せる」、(64)の phi̱lân「与える」、(65)の ʔánlōn「貸す」、(66)の ché「つなぐ」が表す状況においては、いずれも、働きかける相手が何らかの意志的な動作を行って初めて、動作主の目的が達成される。言い換えると、動作主の目的が達成されるためには、「買う」「見る」「受け取る」「借りる」「(電話に)出る」といった相手側の動作が必要になる。このような動作も、(62)(63)(64)(65)(66)から見て取れるように、ポー・カレン語ではキャンセルが可能である。

3.13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か

ポー・カレン語の連結型動詞連続(concatenated type serial verb construction; 加藤[1998, 2019]および Kato [2009, 2017, 2019]参照)は、最初の動詞 V1 と 2 番目の動詞 V2 の 2 つの動詞からなる最少の連続を考えたとき、(a) Vintr + Vintr, (b) Vintr + Vtr, (c) Vtr + Vtr, (d) Vtr + Vintr の 4 つの組み合わせが存在する(Vintr と Vtr はそれぞれ自動詞と他動詞)。連結型動詞連続は、V1 と V2 の間に名詞句や前置詞句の介在を許さない動詞連続である。上記(a)から(d)のうち(a)(b)(c)の組み合わせにおいては、項の同一性がそれぞれ S=S, S=A, A=A (S は自動詞主語、A は他動詞主語)となる。つまり V1 と V2 の主語項が同一である。この(a)(b)(c)の組み合わせにおいては通常、(71)の例に示すように、V2 が表す事象の生起をキャンセルすることはできない。しかしながら、(72)のように V1 が移動動詞である場合に限り、V2 が表す事象の生起をキャンセルすることができる。移動動詞には少なくとも、li̱「行く」、ɣê「来る」、thàin「帰る」、thán「上がる」、làn「下る」がある。V1 にこれらの動詞が現れた連結型動詞連続では、一般的に(72)のように V2 が表す動作を後続する文で否定することが可能である。

Q13-2. 魚を<煮る>(V1)<食べる>(V2)した。しかし、食べなかった。

(71) *jə ʔánphôɴ ʔáɴ já. lānâɴθí ʔáɴ ʔé.
1SG 煮る 食べる 魚 しかし 食べる NEG
「私は魚を煮て食べた。しかし、食べなかった。」

Q13-1. 魚を<行く>(V1)<買う>(V2)した。しかし、買わなかった。

(72) jə lì̱ xwè já. lānâɴθí xwè ʔé.
1SG 行く 買う 魚 しかし 買う NEG
「私は魚を買いに行った。しかし、買わなかった。」

一方、V1 は常に否定することが不可能である。(73)と(74)に見るとおりである。

(73) *jə lì̱ xwè já. lānâɴθí lì̱ ʔé.
1SG 行く 買う 魚 しかし 行く NEG
「私は魚を買いに行った。しかし、行かなかった。」

(74) *jə ʔánphôɴ ʔáɴ já. lānâɴθí ʔánphôɴ ʔé.
1SG 煮る 食べる 魚 しかし 煮る NEG
「私は魚を煮て食べた。しかし、煮なかった。」

連結型動詞連続の上記 4 つの組み合わせのうち(d)は、(a)(b)(c)と大きく異なる特徴を持つ。それは項の同一性が O=S となることである(O は他動詞目的語)。例えば、jə dó θî thòmèiɴ (1SG / 叩く / 死ぬ / イノシシ)「私はイノシシを叩き殺した」では、dó「叩く」の目的語項と θî「死ぬ」の主語項が共に thòmèiɴ「イノシシ」である。(d)のタイプの動詞連続では、各動詞の項がこのように O=S という形で共有され、意味的には、V1 が表す動作の影響によって V2 の表す事象が生じることが表される。加藤(2019)ではこの動詞連続も使役構文の一種と見なした。そして、3.12 で見た使役構文の様々な例と同じように、被使役者に生じる事象すなわち V2 が表す事象は、(75)の例に見るように、キャンセルすることができる。

(75) jə dó θî thòmèiɴ. lānâɴθí θî ʔé.
1SG 叩く 死ぬ イノシシ しかし 死ぬ NEG
「私はイノシシを叩き殺した。しかし、死ななかった。」

既に 3.1 で見た(10)と(11)の動詞連続は、この(d)のタイプの動詞連続である。

3.14. 受身

調査票のこの項目は、受動構文で動詞の結果部分をキャンセルすることができるか否か

を調べるためのものである。しかし、ポー・カレン語に受動態は存在しない。したがって、この項目はポー・カレン語に適用できない。参考までに、この調査項目の日本語をポー・カレン語に訳すとどうなるかを述べておく。

通言語的に受動態に見られる機能的な特徴として、動作主非焦点化(agent defocusing)の機能がある。動作主を目立たなくする機能である。Kato (2020)で詳しく論じたように、ポー・カレン語でこの動作主非焦点化の機能を担うのは、主語位置に名詞 chə「物」を置く非人称構文(impersonal construction)である。これを Kato (2020)では chə 構文(*chə*-construction)と呼んだ。例えば、chə mà θî ʔə̀ (物 / CAUS / 死ぬ / 3SG)では、chə を主語位置に置くことによって、動作主についての情報が重要ではないこと、あるいは動作主が総称的(generic)であることが表される。これを字義通りに日本語に訳せば、「物が彼を殺した」となるが、動作主非焦点化の観点からは、「彼は殺された」と訳すことができる。したがって、Q14-1 の調査項目に意味的あるいは語用論的に対応するポー・カレン語として、chə 構文を用いた(76)を挙げることができる。

Q14-1. X さんは殺された。しかし、死ななかった。

(76) chə mà θî ʔə̀. lānâɴθí θî ʔé.
物 CAUS 死ぬ 3SG しかし 死ぬ NEG
「彼は殺された。しかし、死ななかった。」

これは言うまでもなく使役構文である。3.12 で述べたように、ポー・カレン語の使役構文では一般的に被使役行為をキャンセルすることができるから、(76)の文連続は許容される。

4. まとめ

ポー・カレン語の事象キャンセルについて、「対象物の物理的変化が否定され得るか」「対象物の知覚が否定され得るか」「対象物の移動が否定され得るか」「対象物との接触が否定され得るか」「目的地への到達が否定され得るか」「作成物の出現が否定され得るか」「対象物の獲得が否定され得るか」「発声が否定され得るか」「飲食物の摂取が否定され得るか」「自己完結的動作の最終状態が否定され得るか」「自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか」「被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか」「動詞連続で「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か」「受身で結果が否定され得るか」という 14 の観点から検討してきた。「受身」はポー・カレン語に存在しないので除外すると、3.11 で論じた「自己完結的動作そのものの開始」と、3.13 で論じた「動詞連続の V2 が表す動作」(V1 に移動動詞を持つ場合を除く)についてはキャンセルができなかったものの、それ以外についてはキャンセルが可能であることが明らかになった。

「自己完結的動作そのものの開始」は、Kato (2014)や加藤(2015)あるいは岡野(本巻所収)の指摘にあるように、ビルマ語ではキャンセル可能なことがある。ポー・カレン語はビルマ語

に隣接する言語で、話者にはビルマ語とのバイリンガルも多いが、この点については差異が見られるようである。ただし、調査協力者を増やせば、自己完結的動作の開始をキャンセル可能と見なす話者が見つかったとしても奇妙ではない。

全体として、ポー・カレン語は事象キャンセルを大幅に許す言語であると結論づけることができる。基本的には、ポー・カレン語の動詞が表す意志的な動作の終端部分は一般的にキャンセルすることができると見ることができそうである。自己完結的動作の開始部分については、この言語でこれを「意志→動作開始」という流れの中の終端部分と解釈することは不可能なのだろう。

もし動作の終端部分が一般的にキャンセル可能であるならば、逆にそれをキャンセルすることができないように「固定化」できないのかという疑問が持ち上がる。ポー・カレン語にはその方法が存在する。それは、分離型動詞連続(separated type serial verb construction; 加藤[1998]および Kato [2017, 2019]参照)を用いて、V2 の位置に結果を表す動詞を置くことである。分離型動詞連続は、3.13 で述べた連結型動詞連続と異なり、V1 と V2 の間に名詞句や前置詞句の介在を許す。しかし分離型動詞連続の V2 として現れることのできる動詞には無意志動詞でなければならないという制約がある。そして、この V2 として現れた動詞は、「V1 が表す事象の結果」または「V1 が表す事象の生起可能性」を表す。重要なことは、加藤(1998)や Kato (2017, 2019)で既に指摘しているとおり、分離型動詞連続の V2 が表す事象の成立はキャンセルできないという事実である。例えば、分離型動詞連続を用いた jə dó thwí θî (1SG / 叩く / 犬 / 死ぬ)「犬を叩き殺した」は、これ自体は文法的にも意味的にも適格な文である。しかし、後に V2 の事象を否定する文を置くと、その文連続は、(77)のように意味的に矛盾を生じてしまう。

(77) *jə dó thwí θî. lānâɴθí θî ʔé.
1SG 叩く 犬 死ぬ しかし 死ぬ NEG
「私は犬を叩き殺した。しかし、死ななかった。」

これは、分離型動詞連続の V2 によって表された結果が、キャンセルできない「固定化」したものだからである。ポー・カレン語では、この方法を用いて、キャンセル可能な事象をキャンセル不可能にすることができる。(6)の前件文 jə mà θî ʔə̀「私は彼を殺した」を例に取ろう。この文を、次の(78)のように、mà θî「殺す」全体を V1 として用い、θî「死ぬ」を V2 として用いた分離型動詞連続に変えれば、「死ぬ」という事象の成立が確定する。

(78) jə mà θî ʔə̀ θî jàʊ.
1SG CAUS 死ぬ 3SG 死ぬ PFV
「私が彼を殺したところ、(彼は)死んだ。」

なお、θî のような状態変化を表す動詞は、単独で述部に現れたときに、直後に何らかの文が続くか、動詞の後に何らかの助詞を置かないと文の落ち着きが悪くなる。そのために(78)では完結相(perfective)を表す jàʊ を θî の後に置いているが、これそのものはキャンセル不可能への固定化に関与しない。例えば(6)の前件文の末尾に jàʊ を加えて jə mà θî ʔə̀ jàʊ「私はもう彼を殺した」と変えても、「死ぬ」という事象は、jə mà θî ʔə̀ jàʊ. lānâɴθí θî ʔé「私はもう彼を殺した。しかし、(彼は)死ななかった」に見るとおり、依然としてキャンセルすることが可能である。

略号

1	一人称	O	他動詞目的語
2	二人称	PFV	完結相(perfective)
3	三人称	S	自動詞主語
A	他動詞主語	SG	単数
BEN	受益	UP	上方向を表す助詞
CAUS	使役助詞	V	動詞
DOWN	下方向を表す助詞	Vintr	自動詞
LOC	場所・起点・着点を表す助詞 lə́	Vtr	他動詞
MID	中動態標識	V1	動詞連続の第一動詞
NEG	否定	V2	動詞連続の第二動詞

参考文献

加藤昌彦(1998)「ポー・カレン語（東部方言）の動詞連続における主動詞について」『言語研究』113: 31–61.

Kato, Atsuhiko (2009) Valence-changing particles in Pwo Karen. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 32.2: 71–102.

Kato, Atsuhiko (2014) Event cancellation in Burmese. Paper read at 24th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, Yangon University.

加藤昌彦(2015)「ビルマ語の事象キャンセル」*EX ORIENTE* 22: 1–36.

Kato, Atsuhiko (2017) Pwo Karen. In: Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages (2nd Edition)*, 942–958. London and New York: Routledge.

Kato, Atsuhiko (2019) Pwo Karen. In: Alice Vittrant and Justin Watkins (eds.) *The Mainland Southeast Asia Linguistic Area*, 131–175. Berlin: Mouton de Gruyter. https://doi.org/10.1515/9783110401981-004

加藤昌彦(2019)「ポー・カレン語の使役と逆使役」池田巧（編）『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 2 使役の諸相』181–203. 京都: 京都大学人文科学研究所.

Kato, Atsuhiko (2020) Impersonal construction with the noun ‘thing’ in subject position in Pwo Karen.

In: Norihiko Hayashi (ed.) *Topics in Middle Mekong Linguistics 2* (*Journal of Research Institute* 61), 159–183. Kobe: Kobe City University of Foreign Studies.

Kato, Atsuhiko (2021) Typological profile of Karenic languages. In: Paul Sidwell and Mathias Jenny (eds.) *The Languages and Linguistics of Mainland Southeast Asia*, pp. 337–367. Berlin/Boston: Mouton de Gruyter.
https://doi.org/10.1515/9783110558142-018

岡野賢二(本巻所収)「ビルマ語の事象キャンセルについての一考察」

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

ロンウォー語の事象キャンセル

澤田　英夫

1.　はじめに

本稿では、本巻所収の「事象キャンセル調査票」（以下、調査票）を用いて標準ロンウォー語の事象キャンセルを調査した結果を提示し、この言語における事象キャンセルの様相を明らかにすることに努める。

1.1.　言語の概況

ロンウォー Lhaovo[1] は民族文化集団カチンを構成する民族の一つで、ミャンマーのカチン州、シャン州および中国雲南省に居住する。ロンウォー人はシナ＝チベット語族に属するビルマ語群 Burmish[2] の北部下位語群に属するいくつかの言語・方言を話す。このうち、エーヤーワディー川の 2 大支流のうち東の支流であるンマイ N’mai（ラウンビィッ Laungbyid /laun̩^{F} pjit^{F}/）川と、ソーロー郡と雲南省との国境付近に発し、西へ、次いで北へと下ってンマイ川の東岸に流れ込むンゴーチャン Ngochang /ŋo^{F} tʃ^{h}aŋ^{H}/ 川という 2 本の川に縁どられた丘陵地帯であるダゴッ Da-go, /tăko?^{F}/ 丘陵で話される変種（ラウンビィッ＝ダゴッ変種）を「標準（的な）ロンウォー語」とみなす。本稿で対象とする言語も、この「標準ロンウォー語」である。

1.2.　音韻論

筆者は、ランスー語 (Sawada, 2018) など他のビルマ語群北部下位語群の音韻分析と表記に合わせて、ロンウォー語の音韻分析と表記を改めた。このため、本稿で用いたロンウォー語の表記は、(澤田, 2017) で用いた表記と大きく異なっている。以下に修正された音韻論の概略を示す[3]

音韻構造　$(C_i)(C_m)V(C_f)/T$

頭子音 C_i　*p/p’/p^{h}, t/t’/t^{h}, ts/ts’/ts^{h}, tʃ/tʃ’/tʃ^{h}, k/k’/k^{h}, ʔ; m/m’, n/n’, ɲ/ɲ’, ŋ/ŋ’; l/l’, (r/r’), j/j’; v/v’/(f), s, ʃ,*

[1] 自称。ジンポー語およびビルマ語ではマル Maru と呼ばれる。

[2] シナ＝チベット語族からビルマ語群 Burmish に至る階層関係は、Ethnologue 25th Edition では Sino-Tibetan > Tibeto-Burman > Ngwi-Burmese > Burmish となり、Glottolog 4.7 では Sino-Tibetan > Burmo-Qiangic > Lolo-Burmese > Burmish となる。そのどちら、あるいはそれ以外を選択しても、本稿の内容には影響を与えない。

[3] 本節と次節の内容は、おおむねSawada (to appear) における記述に依拠している。

ɣ/ɣ'/(x), h. 頭子音は以下の 3 系列に分類される: 無気音 plain 系列 (C) /きしみ音 creaky 系列 (C') /有気音 aspirated 系列 (C^h)。無声摩擦音 *(f), s, ʃ, (x), h* は有気音系列に属する。きしみ音系列の頭子音に後続する母音音素は、きしみ音の発声で実現される。

介子音 C_m　ロンウォー語本来の語に現れる介子音は *-j-* のみで、これは頭子音 *p/p'/p*^{h}*, k/k'/k*^{h}*; m/m'* と共起する。借用語（特にジンポー語からの）には時々 *-r-* が現れる。

母音 V　*a, au, o, ø, e, u, i.*

末子音 C_f　*-j, -m, -p, -n, -t, -ŋ, -k, -ʔ.*

声調 T　Falling (*F*): デフォルトは 21; 声調 *L* を持つ音節の前で 31.

Low (*L*): デフォルトは 22–33; 語頭で声調 *F* を持つ音節が後続する場合に 22（33 ではない）; 語頭で声調 *L* が後続する場合、upward-curling (Sawada 2010, 168) が起こって 223.

High (*H*): デフォルトは 44–34; 末子音*-p, -t, -k, -ʔ* を伴う音節で 42.

弱音節　弱く短めに発音される音節。固有の弱音節と、声調を持つ完全音節が形態音韻的プロセスによって弱化したものがある。弱音節のピッチは 1–2 であるが、upward-curling を被った声調 *L* の音節が弱化すると、後続する声調 *L* の音節よりもやや高いピッチを取る。固有の弱音節を V̆ で、弱化した音節を $\breve{V}^T$ (T=*F, L, H*) で表す。

1.3.　文法的特徴

ロンウォー語は名詞類・動詞類・助詞類の 3 つの語類を有する。属性概念語 Property-concept term は動詞類の下位類を成す。

複合はこの言語の生産的な形態論的プロセスで、他の言語で接辞付加が担う派生のかなりの範囲は、この言語では複合によってカバーされる。また、複合に参与する名詞・動詞が脱意味化を起こして、様々な意味機能を持つ要素を提供する。

- は語内の要素（接辞、あるいは複合の構成要素）の境界を示す。また、= は句を意味的作用域とする接語の境界を示す。語（音韻的に拘束された語を含む）はスペースによって区切られる。

ロンウォー語は、先行する音節に声調交替 *F→L; L→H; H→H* を引き起こす抽象的要素を持つ。これを *TA* で表す (Sawada 2012, fn.5)。以下の形態素は、*TA* という形式を取る。

- 情報授受・現実法肯定の文標識 (RLS)
- 名詞修飾標識 (ATTR)
- 連続した動詞、あるいは、連続した数詞-類別詞複合の連結子 (&)

ビルマ語群に属する言語の例に漏れず、ロンウォー語は動詞末位言語 verb-final language である。動詞句の非主要部要素の順序は比較的自由である。名詞句の非主要部要素のあるものは主要部名詞の前に生起し、あるものは後に生起する。

これもビルマ語群に属する言語の例に漏れず、ロンウォー語は複動詞構造 multi-verb construction を多用する (澤田 2017)。複動詞構造は少なくとも 1 つの語彙的動詞を含むが、連続した事象を指示する 2 つ以上の動詞を含み得る。複動詞構造はまた非語彙的動詞を含むこともあり、これは語彙的動詞の修飾要素として、あるいは、語彙的動詞を埋め込む上位の動詞として機能する。複動詞構造内の動詞のあるものは連結子 & を介して連結されるが、あるものは直接連結される。動詞コピー構造 copy-verb construction における振る舞いは複動詞構造が多語的であることを示唆するが、一方で複動詞構造は単純動詞と同様、補語（項・随意的補語）を取って動詞句を形成する。動詞句の主要部となる単位を「述語」と呼び[4]、単純動詞だけでなく複動詞構造も述語になれると仮定する。

ロンウォー語は名詞句に後置される関係標示要素 relator による従属部標示 dependent marking を行う。関係標示要素のあるものは、文法化あるいは脱意味化した名詞である。ロンウォー語は主格-対格型格標示パターンを示す。P 項の標示は随意的 (Sawada 2012)、より正確には示差的 differential である。

2. 調査

対面調査の協力者は、長年にわたって著者の調査に協力していただいた Lamaung: Khao Hhao” /lǎmauŋ^{L} k^{h}oŋ^{F}xoŋ^{H}/ 氏（男性、1938 年、カチン州チープウェー Chipwe 郡パラー Phala 村生まれ、以下 LMKH 氏）である[5]。対面調査は、2018 年 12 月 26 日と 29 日、カチン州ミッチーナー Myitkyina 市にある LMKH 氏の自宅で行った[6]。媒介言語であるビルマ語で質問票各項目の状況を説明して、その状況を表すようなロンウォー語の文を作ってもらった。いくつかの項目については、筆者の作例したロンウォー語文を判定・修正してもらった。

3. 調査結果

3.1. 対象物の物理的変化が否定され得るか

最初に、対象物の物理的変化を引き起こすことを目指して行われる活動を表す述語について、その物理的変化がキャンセル可能かどうかをみる。

---

[4] (澤田 2017) では「述部」の名称を用いたが (p.203)、「述語」に改める。語でないものに「〜語」の名称を適用する例としては、「名詞化節が主語となる」などがある。

[5] Lamaung: Khao Hhao” 氏は 2022 年 3 月、カチン州ミッチーナー Myitkyina 市の自宅で急逝された。氏の長年にわたる厚誼と協力に改めて深く感謝の意を捧げるものである。

[6] この調査は、科研費基盤 (B)「「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語：言語接触と言語形成の類型を探る」（研究代表者：藤代節神戸市看護大学教授、研究課題/領域番号 16H03417）によって行われた現地調査の一部である。

Q1-1　X さんを殺した。しかし、（X さんは）死ななかった。

(1) *moŋ*^{L}*nuk*^{H}=*re*^{F}　***seʔ***$^{\boldsymbol{H}}$=*TA*=*ra*^{H}.　*ŋat*^{F}=*ɣă*^{L}*re*^{L}　*moŋ*^{L}*nuk*^{H}　*mă*-***ʃit***$^{\boldsymbol{F}}$=∅.

PN　=ACC　**kill**　=RLS =RA　COP　=CONS　PN　not- **die**　=NEG

「モンヌックを殺そうとした。しかし、モンヌックは死ななかった。」

調査票の各項目は 2 文からなる。それに基づいたロンウォー語の調査結果は、以下の点で共通する。

- 第 1 文は、情報授受・現実法肯定の文標識によって形成され、過去に動態事象 X が起こったことを表す。
- 第 2 文は、動詞句の主要部が否定辞を伴い、情報授受・現実法否定の文標識によって形成され、過去、動態事象 X が起こったのと同時かその後に、動態あるいは状態の事象 Y が起こらなかったことを表す。
- 事象 X は、事象 Y を引き起こすことを目指して行われる。
- 第 2 文は、主節に先行する逆接の従属節 *ŋat*^{F}=*ɣă*^{L}*re*^{L}「しかし」を伴う。

この例では、第 1 文の事象 X と、第 2 文の事象 Y は、それぞれ異なる 2 つの語彙 *seʔ*^{H}「殺す」と *ʃit*^{F}「死ぬ」によって表される。*seʔ*^{H} は動作主の A 項と被動者の P 項を取る動詞、*ʃit*^{F} は主題の S 項を取る動詞で、前者の P 項と後者の S 項が同一の人物 *moŋ*^{L}*nuk*^{H} を指示する。

Q1-2　ココヤシの実を落とした。しかし、落ちなかった。

【注】高い所になっているココヤシの実を長い棒でつついて落とそうとしたが、落ちなかったという状況。

(2) *mŏ*^{F}*ʔun*^{F}-*ʃi*^{L}　***k***$^{\boldsymbol{h}}$***jo***$^{\boldsymbol{H}}$ =*TA*=*ra*^{H}.　*ŋat*^{F}=*ɣă*^{L}*re*^{L}　*mŏ*^{F}*ʔun*^{F}-*ʃi*^{L}　*mă*-***kjo***$^{\boldsymbol{H}}$=∅.

coconut　-fruit　**drop.VT**=RLS =RA　COP　=CONS　coconut　-fruit　not- **drop** =NEG

「ココヤシの実を落とそうとした。しかし、ココヤシの実は落ちなかった。」

第 1 文の述語 *k*^{h}*jo*^{H}「落とす」と第 2 文の述語 *kjo*^{H}「落ちる」は、頭子音の発声タイプのみが異なる。（前者が有気音系列、後者が無気音系列。）前者は、後者の位置的変化を引き起こすことを目指して行われる活動を表す述語である。音韻的に関連付けられる後者（単純動詞 simplex verb）と前者（使役動詞 causative verb）の対を単純-使役（動詞）対と呼ぶことにする[7]。ロンウォー語にはこのような単純-使役対が約 70 対存在する (Sawada, 2015)。

Q1-3　ココヤシの実を割った。しかし、割れなかった。

【注】ヤシの実を鉈（なた）で割ろうとしたが、割れなかったという状況。

[7] 後述する使役を表す複動詞構造と区別されたい。例えば「自他動詞対」のような名称を用いない理由は、単純動詞の中に A 項と P 項を取る動詞 *tso*^{L}「食べる」、*ʃauk*^{H}「飲む」、*vin*^{F}「担う」、*ɣu*^{H}「見る」、*kyo*^{L}「聞く」が含まれるからである。

(3) *mǒ^{F}ʔun^{F}-ʃi^{L}* ***k^{h}oʔ^{H}***=*TA*=*ra^{H}*. *ŋat^{F}*=*ɣǎ^{L}re^{L}* *mǒ^{F}ʔun^{F}-ʃi^{L}* *mǎ-**koʔ^{F}***=∅.

coconut -fruit **split.VT**=RLS =RA COP =CONS coconut -fruit not- **split** =NEG

「ココヤシの実を割ろうとした。しかし、ココヤシの実は割れなかった。」

この例も単純-使役対を含むが、(2) の対と異なるのは、単純動詞の声調と使役動詞の声調が異なる点である。しかし、ここでも使役動詞の声調は *H* である。ロンウォー語の単純-使役対の半数以上は *F, L* の単純動詞と *H* の使役動詞の対で、これに (2) のような単純動詞・使役動詞とも *H* であるものを加えると全体の 2/3 以上となる。

Q1-4 窓を壊した。しかし、壊れなかった。

【注】ガラス窓を棒で叩いて壊そうとしたが、壊れなかったという状況。

(4) *p'at^{H}*=*re^{F}* ***peʔ^{F}-TA-k^{h}jøʔ^{H}***=*TA*=*ra^{H}*. *ŋat^{F}*=*ɣǎ^{L}re^{L}* *p'at^{H}* *mǎ-**kjøʔ^{F}*** =∅.

glass =ACC **hit** **-&** **-smash** =RLS =RA COP =CONS glass not- **be.smashed**=NEG

「ガラス（窓）を叩き壊そうとした。しかし、ガラス（窓）は壊れなかった。」

第 1 文の述語が、動作「壊す」とその様態「叩く」を表す要素からなる並位型複動詞構造[8]になっていることに注意されたい。

Q1-5 （刃物（手・歯）で）糸を切った。しかし、切れなかった。

調査後に追加された項目につき、未質問。

Q1-6 枝を折った。しかし、折れなかった。

(5) *ʔǎk'oʔ^{H}*=*re^{F}* ***k^{h}juk^{H}***=*TA*=*ra^{H}*. *ŋat^{F}*=*ɣǎ^{L}re^{L}* *ʔǎk'oʔ^{H}* *mǎ-**kjuk^{L}***=∅.

branch =ACC **break.VT**=RLS =RA COP =CONS branch not- **break** =NEG

「枝を折ろうとした。しかし、枝は折れなかった。」

Q1-7 窓をあけた。しかし、あかなかった。

(6) *poŋ^{L}tso^{L}k^{h}am^{L}*=*re^{F}* ***p^{h}uŋ^{H}***=*TA*=*ra^{H}*. *ŋat^{F}*=*ɣǎ^{L}re^{L}* *poŋ^{L}tso^{L}k^{h}am^{L}* *mǎ-**puŋ^{H}***=∅.

window =ACC **open.VT**=RLS =RA COP =CONS window not- **open** =NEG

「窓を開けようとした。しかし、窓が開かなかった。」

---

[8] (澤田, 2017) は、2 つの動詞からなる複動詞構造が並位節化のパラフレーズ V_1-V_2=*TA*=*ra^{H}*. → V_1=*TA*=*ra^{H}*. V_2=*TA*=*ra^{H}*. を許すかどうかによって、並位型と非並位型の 2 つのタイプに大きく分類する (p.176)。並位型では V_1 と V_2 は構造的に対等である (p.171)。並位型複動詞構造を構成する動詞の表す事象の基本的な関係として継起、同義・類義、対置がある (pp.179–180)。さらに、これらの基本的関係から様々な意味機能が派生する。様態-動作の意味関係は、継起の基本的意味から派生したものである。

Q1-8　紙を貼った。しかし、くっつかなかった。

(7) *muk^{F}suk^H-k^{h}je?^{H}=re^F* ***t'e?^{H}*** *=TA=ra^H.* *ŋat^F=ɣă^{L}re^L* *muk^{F}suk^H-k^{h}je?^{H}* *mă-**te?^{F}**=∅.*

paper -sheet =ACC **stick.VT**=RLS =RA COP =CONS paper -sheet not- **stick** =NEG

「紙を貼ろうとした。しかし、くっつかなかった。」

ここまでの例で見た単純-使役対と異なり、この例では使役動詞の頭子音が有気音系列ではなくきしみ音系列である。ロンウォー語の単純-使役対の中では、使役動詞の頭子音が有気音系列であるものはむしろ少なく、使役動詞の頭子音がきしみ音系列である対が全体の3/4 以上を占める。

Q1-9　木を倒した。しかし、倒れなかった。

(8) *sak^{H}keŋ^F=re^F* ***t'au^F-TA-l'aŋ^F*** *=TA=ra^H.* *ŋat^F=ɣă^{L}re^L* *sak^{H}keŋ^F* *mă-**laŋ^F**=∅./ mă-**kjaŋ^F**=∅.*

tree =ACC **cut** **-&** **-fell** =RLS =RA COP =CONS tree not- **fall** =NEG not- **fall** =NEG

「木を切り倒そうとした。しかし、木は倒れなかった。」

第 1 文の述語は、動作「倒す」とその様態「切る」を表す要素からなる並位型複動詞構造 *t'au^F-TA-l'aŋ^F* である。

第 2 文主節の一つ目に含まれる *laŋ^F*「倒れる」は、第 1 文の *l'aŋ^F*「倒す」と単純-使役対を成すが、2 つ目の例に含まれる *kjaŋ^F*「倒れる」は *l'aŋ^F* と対を成さない。コンサルタントによると、木を倒す場合には後者が使われることが多い。

Q1-10　湯を沸かした。しかし、沸かなかった。

(9) *ɣit^F -lauŋ^F* ***ts'auk^H****=TA=ra^H.* *ŋat^F=ɣă^{L}re^L* *ɣit^F -lauŋ^F* *mă-**tsauk^F**=∅.*

water-be.warm **boil.VT** =RLS =RA COP =CONS water-be.warm not- **boil** =NEG

「湯を沸かそうとした。しかし、沸かなかった。」

Q1-11　ござを広げた。しかし、広がらなかった。

mj'uŋ^L-「広げる」と対を成す単純形式が存在しないためか、LMKH 氏からは回答が得られなかった。後から考えると、第 2 文を後述の複動詞構造 *ɣo^H-TA*-V を用いた *mă-ɣo^H-TA-mj'uŋ^H* 'not-get-&-spread.VT' 「広げられなかった」にすれば可能だったかもしれないが、調査者も LMKH 氏もこのような用例を思いつかなかった。

Q1-12　木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった。

【注】木の枝を焚き木にしようとしたが、湿っていて燃えなかったという状況。

(10) *sak*^{H}*-k'auŋ*^{F}*=re*^{F} *mji*^{L} ***ŋ'a***$^{\boldsymbol{H}}$ *=TA=ra*^{H}. *ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L} *sak*^{H}*-k'auŋ*^{F} *mji*^{L} *mă-**ŋa***$^{\boldsymbol{H}}$*=∅.*

tree -branch =ACC fire **burn.VT**=RLS =RA COP =CONS tree -branch fire not- **burn**=NEG

「木の枝を燃やそうとした。しかし、木の枝は燃えなかった。」

Q1-13　山芋を煮た。しかし、煮えなかった。

【注】芋を煮ようとしたが、火力が弱く、煮えなかったという状況。

(11) *mj'auk*^{H} ***ʧ'oʔ***$^{\boldsymbol{H}}$*=TA=ra*^{H}. *ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L} *mj'auk*^{H} *mă-**ɲoʔ***$^{\boldsymbol{F}}$ *=∅.*

yam **cook** =RLS =RA COP =CONS yam not- **be.cooked**=NEG

「山芋を煮ようとした。しかし、煮えなかった。」

この例に見られる単純-使役対は、単純動詞と使役動詞の頭子音の調音方法が一致しない（単純動詞：鼻音、使役動詞：破擦音）という点で極めて例外的である。

Q1-14　魚を干した。しかし、乾かなかった。

【注】干し魚を作ろうとしたが、乾ききらなかったという状況。

LMKH 氏は回答不能と判断した。調査者も LMKH 氏も「魚を干す」に直接対応する語彙にこだわりすぎたきらいがある。ちなみにロンウォー語で状態あるいは変化「乾く」を表す述語は *k'jauk*^{H} だが、他動的動作「乾かす」を意味する動詞はない。調査で得られたデータの中に *ŋŏ*^{L}*-k'jauk*^{H} *k'jauk*^{H} 'fish-dry dry'「干し魚を作る」という N+V 熟語があるという注記が見つかったが、これについては事象キャンセルの調査を行っていない。

Q1-15　スイカを冷やした。しかし、冷えなかった。

「冷やす」に当たる動詞が存在しないため、代替として *ŋin*^{H}*=ʃoŋ=kă*^{L} *k'at*^{H}「冷たくなるようにする」が用いられた。

(12) *lăʃau*^{L} *-ʃi*^{L} ***ŋin***$^{\boldsymbol{H}}$ ***=ʃoŋ***$^{\boldsymbol{L}}$***=kă***$^{\boldsymbol{L}}$ ***k'at***$^{\boldsymbol{H}}$*=TA=ra*^{H}. *ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L} *lăʃau*^{L} *-ʃi*^{L} *mă-**ŋin***$^{\boldsymbol{H}}$ *=∅.*

watermelon-fruit **be.cool=OPT** **=QUOT** **make** =RLS =RA COP =CONS watermelon-fruit not- **be.cool**=NEG

「スイカが冷たくなるようにした。しかし、スイカは冷たくなかった。」

3.2.　対象物の知覚が否定され得るか

次に、知覚の受容を引き起こすことを目指して行われる知覚的活動を表す述語について、その知覚の受容がキャンセル可能であるかどうかを検証する。対象となる動詞は、五感のうち視覚・聴覚・嗅覚にかかわるものである。

Q2-1　見た。しかし、見えなかった。

(13)　***ɣu***$^{\boldsymbol{H}}$*=TA=ra*^{H}*.*　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*mă-**mjoŋ***$^{\boldsymbol{F}}$*=∅.*

look =RLS =RA　COP　=CONS　not- **see**　=NEG

「見ようとした。しかし、見えなかった。」

第 1 文の *ɣu*^{H} は視覚を受容しようとする活動を表す述語であり、第 2 文の *mjoŋ*^{F} は視覚の受容そのものを表す述語である。いずれも、経験者の A 項と対象の P 項を取る動詞であり、ゆえに両者は単純-使役対を成さない。

Q2-2　聞いた。しかし、聞こえなかった。

(14)　***t'eŋ***$^{\boldsymbol{H}}$ ***-TA-kjo***$^{\boldsymbol{L}}$*=TA=ra*^{H}*.*　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*mă-**kjo***$^{\boldsymbol{L}}$*=∅.*

be.quiet-&　**-hear** =RLS =RA　COP　=CONS　not- **hear** =NEG

「聞こうとした。しかし、聞こえなかった。」

例 (13) と同様、第 1 文の述語である複動詞構造 *t'eŋ*^{H}*-TA-kjo*^{L} も、第 2 文の述語である動詞 *kjo*^{L} も、経験者の A 項と主題の P 項を取る動詞であり、単純-使役対を成さない。ちなみに並位型複動詞構造 *t'eŋ*^{H}*-TA-kjo*^{L} の第 1 要素 *t'eŋ*^{H} は「静かに」「耳を澄まして」という意味で、後続する動詞が表す感覚受容のプロセス「聞く」の様態を表す。

Q2-3　魚醤のにおいを嗅いだ。しかし、においがしなかった。

(15)　***neŋ***$^{\boldsymbol{F}}$***-TA-kjo***$^{\boldsymbol{L}}$*=TA=ra*^{H}*.*　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*p'e*^{H}　*ʃøm*^{F}　*mă-**neŋ***$^{\boldsymbol{F}}$*=∅.*

smell -&　**-hear** =RLS =RA　COP　=CONS　what　smell.N　not- **smell** =NEG

「においをかごうとした。しかし、何のにおいもにおわなかった。」

この例からはわかりにくいが、第 1 文の述語である複動詞構造 *neŋ*^{F}*-TA-kjo*^{L} は、経験者の A 項と主題の P 項を取るものであり、第 2 文の述語である *neŋ*^{F} は、主題の S 項 *p'e*^{H} *ʃøm*^{F}「何の匂い」を取っている。この点で、知覚を受容しようとする活動を表す述語と、知覚の受容を表す述語との関係が、視覚・聴覚の場合とは異なっている。

3.3.　対象物の移動が否定され得るか

続いて、対象物の移動を目指して行われる活動を表す述語について、対象物の移動がキャンセル可能かどうかを観察する。

Q3-1　小石を投げた。しかし、投げられなかった。

【注】小石を投げようとしたが、手にくっついて、手から離れなかったという状況。

(16) *lauk^{F}paujF* ***p'jeʔ^H***=*TA*=*ra^H*. *ŋat^F*=*ɣă^{L}re^L* *mă-**ɣo^H-TA-p'jeʔ^H***=∅.

stone **cast** =RLS =RA COP =CONS not- **get -& -cast** =NEG

「石を投げようとした。しかし、投げられなかった。」

第 1 文の述語 *p'jeʔ^H*「投げる」は使役動詞ではなく、第 2 文に用いることのできる単純動詞もない。また、(1) の「殺す」に対する「死ぬ」のように、活動が目指す事象を明確に表す音韻的に関連付けられない述語もない[9]。

このような場合に用いることのできる汎用的な表現として、動詞 V とそれに先行し「外的状況によって V の表す事象が可能になる」という意味を表す修飾動詞 *ɣo^H* からなる非並位型複動詞構造 *ɣo^H-TA*-V がある[10]。現実法肯定の文標識 =*TA* 'RLS' が後接した *ɣo^H-TA*-V=*TA* は「外的状況によって V の表す事象が現実のものになった」という意味に解釈され、その否定形式で現実法否定の文標識 =∅ 'NEG' が後接した *mă-ɣo^H-TA*-V=∅ は「状況によって V の表す事象の不生起が現実のものになった」という意味に解釈される[11]。

ɣo^H による複動詞構造形成は、*p'jeʔ* のもともとの項構造（動作主の A 項と主題の P 項を取る）を変更しない。

Q3-2　スイカを籠に入れた。しかし、入らなかった。

【注】スイカを籠に入れようとしたが、大きくて入らなかったという状況。籠は袋に替えてもよい。

(17) *lăʃau^L* *-ʃi^L* =*re^F* *kjan^F*=*meŋ^F* ***k'eʔ^H***=*TA*=*ra^H*. *ŋat^F*=*ɣă^{L}re^L* *mă-**ɣuj^L*** =∅.

watermelon-fruit=ACC basket =LOC **put.in** =RLS =RA COP =CONS not- **be.settled**=NEG

「スイカを籠に入れようとした。しかし、入らなかった。」

第 1 文の述語 *k'eʔ^H*「入れる」は使役動詞ではない。第 2 文の述語として、LMKH 氏は *ɣuj^L*「位置が移る」を選択した。

Q3-3　山芋を抜いた。しかし、抜けなかった。

(18) *mj'auk^H*=*re^F* ***loŋ^L-TA-nat^F*** =*TA*=*ra^H*. *ŋat^F*=*ɣă^{L}re^L* *mă-**t^{h}uk^H-TA-li^H*** =∅.

yam =ACC **pull -& -pull.out**=RLS =RA COP =CONS not- **exit -& -come**=NEG

「山芋を引き抜こうとした、しかし、出てこなかった。」

---

[9] 「石が手から離れない」という言い方をすることが可能かもしれないが、未調査である。ただこの表現が、日常使うにはかなり迂遠な表現であろうということは推測される。

[10] 澤田 (2017, pp.186–189) は、2 つの動詞からなる非並位型複動詞構造を次の 4 類に分類する。A 類：修飾動詞-主動詞、B 類：補動詞-主動詞、C 類：主動詞-補助動詞、D 類：主動詞-補動詞。修飾動詞 modifier verb は主動詞の意味に修飾を加える要素であり、補動詞 complement verb は主動詞の「補語」相当要素として、自らの項構造ごと主動詞の項構造に埋め込まれる要素である。

[11] 澤田 (2017) では、*yo^H-TA*-V を、*kaj^F-TA*-V「（潜在的可能性や先天的能力によって）V することができる」や *nuk^F-TA*-V「V したい」と同様に非並位型複動詞構造の D 類に含めている。ただこの扱いでは、文標識が担う現実性が適用される対象が、V の表す事象ではなく、「外的状況によって V の表す事象が可能になる」という事象となるため、この複動詞構造が肯定で用いられた場合に生じる、「外的状況によって V の表す事象が現実のものになった」という解釈が得られる余地がない。ゆえに、*yo^H-TA*-V には、D 類（*yo^H* が主動詞）と A 類（*yo^H* が修飾動詞）の両方があると考える必要があるかもしれない。

第 1 文の述語は、動作「抜く」を表す動詞とその様態「引っぱる」を表す動詞からなる並位型複動詞構造 *loŋ*^{L}*-TA-nat*^{F} である。

Q3-4　岩を動かした。しかし、動かなかった。

【注】大きな岩を動かそうとしたが、重すぎて動かなかったという状況。

(19)　*lauŋ*^{F}*mo*^{H}*pauj*^{F}*=re*^{F}　***ɣ'uj***^{H}　*=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*mă-**ɣuj***^{L}*=∅.*

rock　=ACC　**move.vт**=RLS =RA　COP　=CONS　not- **move**=NEG

「岩を動かそうとした。しかし、動かなかった。」

第 2 文の述語 *ɣuj*^{L}「位置が移る」は (17) と共通であるが、第 1 文の述語 *ɣ'uj*^{H}「位置を移す」と単純-使役対を成している。

Q3-5　鳥を放した。しかし、放せなかった。

【注】鳥を放そうとしたが、鳥かごから出て行かなかったという状況。

(20)　*ŋ'oʔ*^{H}*=re*^{F}　***l'øʔ***^{H}　*=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*ŋ'oʔ*^{H}　*mă-**løʔ***^{F}　*=∅.*

bird　=ACC　**release**=RLS =RA　COP　=CONS　bird　not- **be.released**=NEG

「鳥を放そうとした。しかし、鳥は逃れなかった。」

Q3-6　臼を載せた。しかし、載らなかった。

【注】臼（東南アジアでよく見る、食材をすりつぶす擂り鉢大の石臼）を棚に載せようとしたが、思ったより重くて載せられなかったという状況。

(21)　*ts*^{h}*am*^{F}*=re*^{F}　*ʔătoŋ*^{F}*=k*^{h}*jo*^{F}　***t'oʔ***^{H}*=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*mă-**toʔ***^{F}*=∅.*

mortar　=ACC　top　=ALL　**raise**　=RLS =RA　COP　=CONS　not- **rise**　=NEG

「臼を上に上げようとした。しかし、上がらなかった。」

ロンウォー語には、高いところにものを置くという意味を専ら表す述語は存在しないようである。第 2 文の述語 *toʔ*^{F} は単に主題の S 項のもとあったより高い位置への移動を表す単純動詞であり、第 1 文の述語 *t'oʔ*^{H} はこの単純動詞の表す事象を引き起こそうとする活動を表す使役動詞である。

3.4.　対象物との接触が否定され得るか

主に身体の一部と対象物との瞬間的・持続的接触を目指す動作を表す述語については、接触の事象をキャンセルすることができないという反応が得られた。

Q4-1　X さんを叩いた。しかし、叩けなかった。

【注】叩こうとしたが、手が届かなかったという状況。

LMKH 氏は「言えない」と答えた。曰く、「叩いた後で、どうしたら『叩けなかった』なんてことになるかね？」

Q4-2　X さんを蹴った。しかし、蹴れなかった。

【注】叩こうとしたが、足が届かなかったという状況。

Q4-1と同様の反応を示した。

Q4-3　コップをつかんだ。しかし、つかめなかった。

【注】コップに一瞬触れたが、熱くてしっかりと持つことができなかったという状況。

(22) *ɣit^{F} -k^{h}uk^{H}=re^{F} **ts'ap^{H}**=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} mă-**ɣo^{H}-TA-ts'ap^{H}**=∅.

water-cup =ACC **grasp** =RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-grasp** =NEG

LMKH 氏は筆者がビルマ語で状況を説明したのに合わせて上の例を作成し、その上で適切でないとした。理由はQ4-1やQ4-2と同様である。

3.5.　目的地への到達が否定され得るか

次は、2 点間の移動を表す述語について、着点への到達がキャンセルされ得るかどうかの検証である。着点への到達を表す述語としては専ら *tʃø^{H}*「到着する」が用いられる。

Q5-1　東京に行った。しかし、着かなかった。

(23) t'u^{L}k'ju^{L}=k^{h}jo^{F} **je^{L}**=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} mă-**tʃø^{H}** =∅.

Tokyo =ALL **go** =RLS =RA COP =CONS not- **arrive**=NEG

「東京に行こうとした。しかし、着かなかった。」

Q5-2　ここに来た。しかし、着かなかった。

【注】昨日もここに来ようとしたのだが、道が分からなくてたどり着かなかったという状況。

(24) tʃ^{h}ĕ^{L}=k^{h}jo^{F} **li^{H}** =TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} mă-**tʃø^{H}** =∅.

here =ALL **come**=RLS =RA COP =CONS not- **arrive**=NEG

「ここに来ようとした。しかし着かなかった。」

Q5-3　家に帰った。しかし、着かなかった。

(25) *joŋ^{L}/ŋo^{F}　j'am^{F}=k^{h}jo^{F}　**tam^{L}-lo^{H}**　va^{H12}=TA.　ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L}　mă-**ʧø^{H}** =∅.*

he　/I　house =ALL　**again　-go$_{H}$**　RLZN　=RLS　COP　=CONS　not- **arrive**=NEG

「彼は/私は家に帰ろうとした。しかし、着かなかった。」

Q5-4　二階に上がった。しかし、着かなかった。

【注】家の二階に上がろうとしたが、膝が痛くて階段を上がれなかったという状況。

(26) *ʔătoŋ^{F}-pjeŋ^{F}=k^{h}jo^{F}　**toʔ^{F}**[13]**-lo^{H}**=TA=ra^{H}.　ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L}　mă-**ʧø^{H}** =∅.*

top　-floor　=ALL　**rise**　**-go$_{H}$** =RLS =RA　COP　=CONS　not- **arrive**=NEG

「上の階に上って行こうとした。しかし、たどり着かなかった。」

概して、2 点間の移動を表す述語については、着点への到達をキャンセルすることが可能である。

3.6.　作成物の出現が否定され得るか（どの程度まで出現したかに注意）

ものの生成を引き起こすことを目指して行われる活動を表す述語にはある程度のバリエーションがあるようだが、ものの生成そのものは *pø^{H}*「生じる」によって表されることが多い。ものの生成がキャンセル可能かどうかをみる。

Q6-1　人形を作った。しかし、出来なかった。

【注】人形を作ろうとしたが、技術がなかったので結局は出来上がらなかったという状況。

(27) *ʔă^{F}l'o^{F}　**k'at^{H}**=TA.　ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L}　mă-**pø^{H}**=∅.*

dool　**make**　=RLS　COP　=CONS　not- **arise**=NEG

「人形を作ろうとした。しかし、出来上がらなかった。」

LMKH 氏には、人形が途中までしか作られなかった場合に言えるのかどうかの確認は取っていないが、*pø^{H}* に「成就する、完成する」という意味があるため、人形が完成しなかった場合にも言えると思われる。

---

[12] *va^{H}* は助動詞 Auxiliary という閉じた類の成員である。これまでは助動詞が動詞句を作用域とする動詞接語であると考えていたが、助動詞に強調の前接辞 *ʔă-*を付加することができるという事実を鑑みると、ロンウォー語に内部構造を持った接語を認めなければならなくなる。扱いを改め、単に音韻的に動詞に拘束された語とみなすことにした。

[13] *toʔ^{F}*「上る」とそれに後続する動詞によって形成される非並位型複動詞構造は、例外的に 2 つの動詞の間に動詞連結子 *TA* が介在しない。同じことは *voŋ^{F}*「入る」とそれに後続する動詞にも当てはまる。cf. 澤田 (2003, p.347).

Q6-2　家を建てた。しかし、出来なかった。

【注】家を作ろうとしたが、途中で風雨で壊れ、出来なかったという状況。

(28)　*j'am*^{F}　***k'at***$^{\boldsymbol{H}}$*=TA.*　*ŋat*^{F}*=yǎ*^{L}*re*^{L}　*mǎ-**pø***$^{\boldsymbol{H}}$*=∅.*

house　**make** =RLS　COP =CONS　not- **arise**=NEG

「家を建てようとした。しかし、出来上がらなかった。」

作られるものが家でも、動詞は (27) と同じ *k'at*^{H} が用いられる。

LMKH 氏は、家を建て始めたが資金が足りないため完成しなかった場合に (28) と言えると述べている。これはおそらく、家の形を全くなしていない段階では (28) と言うことができないことを意味する。

Q6-3　穴を掘った。しかし、穴が出来なかった。

【注】穴を掘ろうとしたが、地面が固くて穴が出来なかったという状況。

(29)　*tuŋ*^{L}*k*^{h}*uŋ*^{L}　***tau***$^{\boldsymbol{L}}$*=TA=ra*^{H}*.*　*ŋat*^{F}*=yǎ*^{L}*re*^{L}　*mǎ-**pø***$^{\boldsymbol{H}}$*=∅.*

hole　**dig** =RLS =RA　COP =CONS　not- **arise**=NEG

「穴を掘ろうとした。しかし、出来上がらなかった。」

（浅い窪みではなく）穴と認められるものができていれば (29) が言えないのか、それとも、穴ができてもそれが当初意図したサイズでなかった場合に (29) が言えるのかについては、確認を取っていない。

3.7.　対象物の獲得が否定され得るか

対象物の獲得を目指して行われる活動を表す述語について、少なくとも LMKH 氏は、対象物の獲得をキャンセルすることができないと判断している。

Q7-1　その本を買った。しかし、買えなかった。

【注】本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなくて、入手することができなかったという状況。

LMKH 氏は3.4.のケースと同様の反応を示した。「買った」と言った以上、それを「買えなかった」と翻すことはできないとのこと。

Q7-2　金を盗んだ。しかし、盗めなかった。

【注】金を盗もうとして店に入ったが、警備員に見つかって入手できなかったという状況。

盗みに入ったがその家にお金がなかったり家人がいたりしてお金を得ることができなか

った場合、*k^{h}uk^{H}=neŋ^{H} søm^{L}=TA* ‘steal=IRL try=RLS’「盗もうとした」とは言えても *k^{h}uk^{H}=TA* ‘steal=RLS’「盗んだ」とは言えない、というのが LMKH 氏の判断である。おそらくQ7-1についても同じことが当てはまる。

少なくとも、対象物の獲得に向けた働きかけの事象が実際の獲得まで込みにしたものとして捉えられる、と認識する話者がいることは確かである。

3.8. 発声が否定され得るか

これらの動詞もものを生成するという点では、上述の3.6.と近い性質にあると言えるかもしれない。なお、音が生成されることを表す述語は *t^{h}uk^{H}*「出る」である。

Q8-1 話した。しかし、声が出なかった。

(30) ***tʃ’au^{F}**=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} **t^{h}ø^{F}** mă-**t^{h}uk^{H}**=∅.*

utter =RLS =RA COP =CONS **sound** not- **exit** =NEG

「話そうとした。しかし、声が出なかった。」

Q8-2 歌った。しかし、声が出なかった。

(31) *ŋ’auj^{H}-t^{h}ø^{F} **ŋ’auj^{H}**=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} **t^{h}ø^{F}** mă-**t^{h}uk^{H}**=∅.*

sing -sound **sing** =RLS =RA COP =CONS **sound** not- **exit** =NEG

「歌おうとした。しかし、声が出なかった。」

いずれの場合にも、音の発生はキャンセル可能である。

3.9. 飲食物の摂取が否定され得るか

Q9-1 魚を食べた。しかし、食べられなかった。

【注】魚を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。

(32) *ŋŏ^{L}-ʃo^{L} **tso^{L}**=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} mă-**ɣo^{H}-TA-tso^{L}**=∅.*

fish -meat **eat** =RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-eat** =NEG

「魚を食べようとした。しかし、食べられなかった。」

ここでは再び、第 2 文の述語として複動詞構造 *ɣo^{H}-TA*-V が用いられている。

Q9-2 酒を飲んだ。しかし、飲めなかった。

【注】酒を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。

(33) *j'it*^{F} ***ʃauk***^{H}*=TA=ra*^{H}*. ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L} *mă-**ɣo***^{H}***-TA-ʃauk***^{H}*=∅.*

brewage **drink** =RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-drink** =NEG

「酒を飲もうとした。しかし、飲めなかった。」

(32) と同様。

飲食物摂取の過程の生起もキャンセル可能である。

3.10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか

本節と次節3.11.は、動作主自身の身体のみで遂行し得る対物対人的でない動作や、生理的変化の事象を表す述語にかかわるものとまとめることができる。

Q10-1 立った。しかし、立てなかった。

【注】椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況。

(34) ***t'o***^{H} *=TA(=ra*^{H}*). ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L} *mă-**ɣo***^{H}***-TA-t'o***^{H} *=∅.*

get.up=RLS (=RA) COP =CONS not- **get** **-&** **-get.up**=NEG

「立ち上がろうとした。しかし、立ち上がれなかった。」

(34) の第 2 文は、「座っている状態を脱しているが完全に直立した（とみなされる）状態には至っていない」状態で発話することができる。Q11-1も参照。

Q10-2 座った。しかし、座れなかった。

【注】椅子に座ろうとして脚を曲げたが、脚が痛くて、尻を椅子につけた状態にならなかったという状況。

(35) ***tsauŋ***^{F}*=TA=ra*^{H}*. ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L} *mă-**ɣo***^{H}***-TA-tsauŋ***^{F}*=∅.*

sit =RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-sit** =NEG

「座ろうとした。しかし、座れなかった。」

(34) の第 2 文同様、「完全に直立した状態を脱しているが座っている状態には至っていない」状態で発話することができる。Q11-2も参照。

Q10-3 眠った。しかし、眠れなかった。

【注】眠ろうとして横になったが、眠りに入ることができなかったという状況。

(36) ***jap***^{F}*=TA=ra*^{H}*. ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L} *mă-**ɣo***^{H}***-TA-jap***^{F}*=∅.*

sleep =RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-sleep** =NEG

「眠ろうとした。しかし、眠れなかった。」

この場合にも、Q10-1およびQ10-2と同様のことが当てはまる。

3.11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか

Q11-1 立った。しかし、立てなかった。

【注】立ち上がろうとして力を入れたが、椅子から尻をまったく離すことができなかったという状況。（Q10-1との違いに注意）

(37) ***t'o^{H}*** *=TA(=ra^{H}). ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} mă-**ɣo^{H}-TA-t'o^{H}*** *=∅.*

get.up=RLS (=RA) COP =CONS not- **get** **-&** **-get.up**=NEG

「立ち上がろうとした。しかし、立ち上がれなかった。」

(34) と全く同じ文の連続。第 2 文の *mă-ɣo^{H}-TA-t'o^{H}*=∅ が「座っている状態を脱していない」状態にある場合にも発話できることがわかる。Q10-1と合わせると、次のようになる。

	座っている状態	座っている状態は脱しているが完全に直立した状態ではない	完全に直立した状態
ma-ɣo^{H}-TA-t'o^{H}=∅	OK	OK	No

第 1 文 *t'o^{H}=TA* の動作が目指す完全直立の状態がキャンセル可能であることがわかる。

Q11-2 座った。しかし、座れなかった。

【注】座ろうとして力を入れたが、脚が痛くてまったく動作を開始することができなかったという状況。（Q10-2との違いに注意）

(38) ***tsauŋ^{F}*** *=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} mă-**ɣo^{H}-TA-tsauŋ^{F}*** *=∅.*

sit =RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-sit** =NEG

「座ろうとした。しかし、座れなかった。」

Q11-1と並行的である。Q10-2を参照。

Q11-3 歩いた。しかし、歩けなかった。

【注】歩こうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。

(39) *k^{h}jo^{F}* ***su^{L}*** *=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} mă-**ɣo^{H}-TA-su^{L}*** *=∅.*

road **walk**=RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-walk**=NEG

「歩こうとした。しかし、歩けなかった。」

このケースでは、Q11-1とQ11-2にあったような「歩ける状態でもなく歩けない状態でもない」中間状態は存在しないと考えられる。

Q11-4 走った。しかし、走れなかった。

【注】走ろうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。

(40) ***t'oŋ^{F}***=*TA*=*ra^{H}*. *ŋat^{F}*=*ɣă^{L}re^{L}* *mă-**ɣo^{H}-TA-t'oŋ^{F}***=∅.

run =RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-run** =NEG

「走ろうとした。しかし、走れなかった。」

前の項目と同様のことが言える。

Q11-5 笑った。しかし、笑えなかった。

【注】笑った顔を作ろうとしたが、恐怖感のため、笑った顔を作ることができなかったという状況。

(41) ***ɣi^{F}*** =*TA*=*ra^{H}*. *ŋat^{F}*=*ɣă^{L}re^{L}* *mă-**ɣo^{H}-TA-ɣi^{F}*** =∅.

laugh=RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-laugh**=NEG

「笑おうとした。しかし、笑えなかった。」

Q11-6 泣いた。しかし、泣けなかった。

【注】演技のため、泣こうとしたが、演技力がないので涙を流すことができなかったという状況。

(42) ***ŋuk^{F}***=*TA*=*ra^{H}*. *ŋat^{F}*=*ɣă^{L}re^{L}* *mă-**ɣo^{H}-TA-ŋuk^{F}***=∅.

weep =RLS =RA COP =CONS not- **get** **-&** **-weep** =NEG

「泣こうとした。しかし、泣けなかった。」

3.10.と本節3.11.の両方で扱われた動詞については、自己完結的動作の目指す事象が完全に実現した段階と全く実現していない段階の間に中間段階を設定することができる。その場合、*ma-ɣo^{H}-TA-V-*∅ によってキャンセルされるのは完全に実現した段階にあるという事象であり、全く実現していない段階にあるか、それとも中間段階にあるかは区別されないとみなして差支えない。

3.12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか

Q12-1 X さんを踊らせた。しかし、（X さんは）踊らなかった。

(43) *moŋ^{L}nuk^{H}*=*re^{F}* ***ko^{H} -n'oŋ^{F}***=*TA*=*ra^{H}*. *ŋat^{F}*=*ɣă^{L}re^{L}* *mă-**ko^{H}*** =∅.

PN =ACC **dance-send.sb**=RLS =RA COP =CONS not- **dance**=NEG

「モンヌックを躍らせようとした。しかし、踊らなかった。」

被使役者 causee に対して何かをするよう働きかける事象は、非並位型複動詞構造 V-*n'oŋ^{F}*[14]「V させる」によって表される。被使役者は有生物、多くの場合人間に限られる。

[14] 澤田 (2017, p.187) では B' 類（補動詞-主動詞の特殊例）としている。

Q12-2　X さんを行かせた。しかし、（X さんは）行かなかった。

(44) a. *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* ***je^{L}-n'oŋ^{F}*** *=TA=ra^{H}.* *ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L}* *mă-**je^{L}**=∅.*

PN =ACC **go -send.sb**=RLS =RA COP =CONS not- **go** =NEG

「モンヌックを行かせようとした。しかし、行かなかった。」

b. *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* ***n'oŋ^{F}-TA-k'eʔ^{H}*** *=TA=ra^{H}.* *ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L}* *mă-**je^{L}**=∅.*

PN =ACC **send.sb-& -put.in** =RLS =RA COP =CONS not- **go** =NEG

「モンヌックを遣わそうとした。しかし、行かなかった。」

(44a) の第 1 文の述語は、使役の複動詞構造である。一方 (44b) 第 1 文の述語は、語彙的動詞としての *n'oŋ^{F}*「遣わす」と、動作が効果的に遂行されたことを表す修飾動詞 *k'eʔ^{H}* からなる複動詞構造である。後者の方が前者より、被使役者（*k'eʔ^{H}* の場合は受領者）に対する強制の度合いが高い。

Q12-3　X さんにマンゴーを食べさせた。しかし、（X さんは）食べなかった。

(45) a. *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* ***tso^{L}-n'oŋ^{F}*** *=TA=ra^{H}.* *ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L}* *mă-**tso^{L}**=∅.*

PN =ACC **eat -send.sb**=RLS =RA COP =CONS not- **eat** =NEG

「モンヌックに食べさせようとした。しかし、食べなかった。」

b. *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* ***ts'o^{L}*** *=TA=ra^{H}.* *ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L}* *mă-**tso^{L}**=∅.*

PN =ACC **feed** =RLS =RA COP =CONS not- **eat** =NEG

「モンヌックに食べさせようとした。しかし、食べなかった。」

(45a) の第 1 文の述語は、使役の複動詞構造である。一方、(45b) の第 1 文の述語は、第 2 文の述語である単純動詞 *tso^{L}* と対をなす使役動詞 *ts'o^{L}*「食べさせる」である。前者は「動作主が被使役者に言葉で食べるように言う」という含意を、後者は「動作主が受領者の口の中に直接食べ物を入れる」という含意を持つ。

Q12-4　X さんにマンゴーを売った。しかし、（X さんは）買わなかった。

(46) *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* *lăʃau^{L}* *-ʃi^{L}* ***ʔauŋ^{L}*** *=TA=ra^{H}.* *ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L}* *moŋ^{L}nuk^{H}* *mă-**vaj^{F}**=∅.*

PN =ACC watermelon-fruit **sell** =RLS =RA COP =CONS PN not- **buy** =NEG

「モンヌックにスイカを売ろうとした。しかしモンヌックは買わなかった。」

「売る」と「買う」は、単一の売買行為の事象を与え手と受け手の 2 人の参与者それぞれの視点から見たものと言えるが、この例で受け手による物品の取得はキャンセル可能である[15]。

[15] Q12-4で売られる物がスイカに変わっているのは、LMKH 氏が調査票の以前の項目に引きずられたためと思われる。

Q12-5　X さんにマンゴーを見せた。しかし、（X さんは）見なかった。

(47) a. *moŋ*^{L}*nuk*^{H}*=re*^{F}　*lăʃau*^{L}　*-ʃi*^{L}　***ɣ'u***$^{\boldsymbol{H}}$*=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*moŋ*^{L}*nuk*^{H}　*mă-**ɣu***$^{\boldsymbol{H}}$*=∅.*

PN　=ACC　watermelon-fruit　**show** =RLS =RA　COP　=CONS　PN　not- **look** =NEG

b. *moŋ*^{L}*nuk*^{H}*=re*^{F}　*lăʃau*^{L}　*-ʃi*^{L}　***ɣ'u***$^{\boldsymbol{H}}$*=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*moŋ*^{L}*nuk*^{H}　*mă-**mjoŋ***$^{\boldsymbol{F}}$*=∅.*

PN　=ACC　watermelon-fruit　**show** =RLS =RA　COP　=CONS　PN　not- **see**　=NEG

「モンヌックにスイカを見せようとした。しかしモンヌックは見なかった。」

(47a) の第 2 文の述語は、(13) の第 1 文と同じ、視覚の受容を引き起こすことを目指して行われる活動を表す述語であり、(47b) の第 2 文の述語は、(13) の第 2 文と同じ、視覚の受容そのものを表す述語である。前者は第 1 文の述語である使役動詞 *ɣ'u*^{H}「見せる」と対をなす単純動詞であることに注意されたい。

Q12-6　X さんにマンゴーを与えた。しかし、（X さんは）受け取らなかった。

(48) *moŋ*^{L}*nuk*^{H}*=re*^{F}　*lăʃau*^{L}　*-ʃi*^{L}　***pjit***$^{\boldsymbol{L}}$*=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*moŋ*^{L}*nuk*^{H}　*mă-**ju***$^{\boldsymbol{F}}$ *=∅.*

PN　=ACC　watermelon-fruit　**give**　=RLS =RA　COP　=CONS　PN　not- **take**=NEG

「モンヌックにスイカを与えようとした。しかしモンヌックは受け取らなかった。」

pyit^{L}「与える」と *ju*^{F}「受け取る」は、Q12-4の場合と同様、単一の授与行為を各参与者の視点から捉えたものである。

Q12-7　X さんに本を貸した。しかし、（X さんは）受け取らなかった。

(49) *moŋ*^{L}*nuk*^{H}*=re*^{F}　*t'uŋ*^{H}*p'auk*^{H}　***ŋ'o***$^{\boldsymbol{L}}$*=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*moŋ*^{L}*nuk*^{H}　*mă-**ju***$^{\boldsymbol{F}}$ *=∅.*

PN　=ACC　book　**lend** =RLS =RA　COP　=CONS　PN　not- **take**=NEG

ŋ'o^{L}「貸す」とQ12-6の *pjit*^{L}「与える」の違いは、前者が所有権の譲渡を伴わないのに対し、後者は所有権の譲渡を伴うかどうかについて無指定であるという点であり、与え手の視点から見たものの移動である点は共通している。ここでも、ものの取得を表す第 2 文の述語は *ju*^{F} によって表される[16]。

Q12-8　X さんに電話した。しかし、（X さんは）電話に出なかった。

(50) a. *moŋ*^{L}*nuk*^{H}*=re*^{F}　***p***$^{\boldsymbol{h}}$***uŋ***$^{\boldsymbol{H}}$　***ts'oʔ***$^{\boldsymbol{H}}$*=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*moŋ*^{L}*nuk*^{H}　*mă-**t'eŋ***$^{\boldsymbol{H}}$　***-TA-kjo***$^{\boldsymbol{L}}$*=∅.*

PN　=ACC　**phone**　**connect**=RLS =RA　COP　=CONS　PN　not- **be.quiet-&　-hear** =NEG

「モンヌックに電話を掛けようとした。しかし、（相手の声を）聞かなかった。」

[16] *ju*^{F} も *pjit*^{L} と同様、所有権の譲渡を伴うかどうかについて無指定である。

b. *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* ***pʰuŋ^{H}*** ***tʃ'au^{F}*** *=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} moŋ^{L}nuk^{H} mă-* ***t'eŋ^{H}*** ***-TA-kjo^{L}*** *=∅.*

PN =ACC **phone** **utter** =RLS =RA COP =CONS PN not- **be.quiet-&** **-hear** =NEG

同上

電話でコミュニケーションを取ることを目指す活動を表す述語として、N+V 熟語である *pʰuŋ^{H} ts'oʔ^{H}*「電話＋つなぐ」と *pʰuŋ^{H} tʃ'au^{F}*「電話＋しゃべる」が示された。

Q12-9　X さんを驚かせた。しかし、（X さんは）驚かなかった。

(51) a. *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* ***tin^{F}*** ***-n'oŋ^{F}*** *=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} mă-* ***tin^{F}*** *=∅.*

PN =ACC **be.startled-send.sb**=RLS =RA COP =CONS not- **be.startled**=NEG

「モンヌックを驚かせようとした。しかし、モンヌックは驚かなかった。」

b. *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* ***t'in^{H}*** *=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} mă-* ***tin^{F}*** *=∅.*

PN =ACC **startle**=RLS =RA COP =CONS not- **be.startled**=NEG

「モンヌックをおどかそうとした。しかし、モンヌックは驚かなかった。」

(51a) の第 1 文の述語は、第 2 文の述語 *tin^{F}*「驚く」を第 1 要素とする使役の複動詞構造であり、(51b) の第 1 文の述語は、*tin^{F}* と対をなす使役動詞である。後者の方が前者より、被使役者に対する働きかけが直接的である。

Q12-10　X さんを怒らせた。しかし、（X さんは）怒らなかった。

【注】X さんを悪者にするため、X さんを怒らせようとしたが、怒らなかったという状況。

(52) a. *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* ***n'ak^{H}*** ***jo^{L}*** ***-n'oŋ^{F}*** *=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} moŋ^{L}nuk^{H}*

PN =ACC **mind** **get.angry-send.sb**=RLS =RA COP =CONS PN

n'ak^{H} *mă-* ***jo^{L}*** *=∅.*

mind not- **get.angry**=NEG

「モンヌックを怒らせようとした。しかし、モンヌックは怒らなかった。」

b. *moŋ^{L}nuk^{H}=re^{F}* ***n'ak^{H}*** ***tsaj^{H}*** ***-TA-j'o^{L}*** *=TA=ra^{H}. ŋat^{F}=ɣă^{L}re^{L} moŋ^{L}nuk^{H}*

PN =ACC **mind** **carelessly-&** **-make.sb.angry**=RLS =RA COP =CONS PN

n'ak^{H} *mă-* ***jo^{L}*** *=∅.*

mind not- **get.angry**=NEG

「モンヌックをつい怒らせようとした。しかし、モンヌックは怒らなかった。」

Q12-9とほぼ同様のことが当てはまるが、(52a, b) の第 2 文の述語が名詞 *n'ak^{H}*「心」を伴った動詞 *jo^{L}*「怒る」である点[17]、また、(52b) の第 1 文の述語が「他のことをしていて V して

[17] *n'ak^{H}* がなくて *jo^{L}* だけでも「怒る」という意味を表す。ロンウォー語には *n'ak^{H}* と動詞との組み合わせによるサイコ・コロケーション psycho-collocation が豊富に存在しているが、もともと *n'ak^{H}* を含むサイコ・コロケーションだったものが *n'ak^{H}* なしにも用いられるようになったものか、それとも、もともと *jo^{L}* だけで「怒る」の意味を表したのが、他のサイコ・コロケーションからの類推で *n'ak^{H}* を伴うようになったものか、定かではない。

しまう」という意味を表す非並位型複動詞構造 *tsaj*^{H}*-TA*-V[18]になっている点が異なる。

Q12-11　X さんを説得した。しかし、（X さんは）引き受けなかった。

【注】困難な仕事を X さんに任せようとしたが、引き受けてくれなかったという状況。

LMKH 氏が「説得する」にうまく対応する動詞を見つけ出せず、代わりに第 1 文の述語として使役の複動詞構造を持つ次の形式が提案された。

(53)　*moŋ*^{L}*nuk*^{H}*=re*^{F}　*tʃ'ĕ*^{L}　*mau*^{H}*=re*^{F}　*tsauj*^{L}*-n'oŋ*^{F} *=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*moŋ*^{L}*nuk*^{H}

PN　=ACC　this.DET　job　=ACC　work　-send.sb=RLS =RA　COP　=CONS　PN

mă-tsauj^{L}*=∅./ mă-k*^{h}*eŋ*^{F}*-TA-ju*^{F}*=∅.*

not- work　=NEG　not- suffer　-&　-take=NEG

「モンヌックにこの仕事をさせようとした。しかしモンヌックはしなかった。／受け入れなかった。」

3.13.　動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か

調査票の「動詞連続」は、筆者によるロンウォー語の記述では、継起的 successive な意味（およびそれから派生する意味）を表す並位型複動詞構造に該当する。

Q13-1　魚を＜行く＞ (V1) ＜買う＞ (V2) した。しかし、買わなかった。

【注】＜行く＞ (V1) ＜買う＞ (V2) の部分は、それぞれの言語で「行く」を表す動詞と「買う」を表す動詞を、動詞連続の形で並べる。

(54) (矛盾) *ŋo*^{L}　***jĕ***^{L}***-TA-vaj***^{F}*=TA=ra*^{H}.　*ŋat*^{F}*=ɣă*^{L}*re*^{L}　*mă-**vaj***^{F}*=∅.*

fish　**go**　**-&**　**-buy**　=RLS =RA　COP　=CONS　not- **buy**　=NEG

「行って魚を買った。しかし、買わなかった。」

LMKH 氏によると、「行って買った」のに「買わなかった」というのは矛盾しているとのこと。継起の複動詞構造 *jĕ*^{L}*-TA-vaj*^{F} の実現が *vaj*^{F} の実現を含意するのは明らかで、A and not A が矛盾を生じるのは自然なことである。第 2 文の述語が *ɣo*^{H}*-TA-vaj*^{F} 'get-&-buy' であれば矛盾を生じないと思われるが、残念ながら確認していない。

Q13-2　魚を＜煮る＞ (V1) ＜食べる＞ (V2) した。しかし、食べなかった。

【注】＜煮る＞ (V1) ＜食べる＞ (V2) の部分は、それぞれの言語で「煮る」を表す動詞と「食べる」を表す動詞を、動詞連続の形で並べる。動詞の間に魚を表す名詞が介在してもよい。

[18] 澤田 (2017, p.190) では A' 類（修飾動詞-主動詞の特殊例）としている。

(55) (矛盾) *ŋo*^{L} ***j'auŋ***^{H}***-TA-tso***^{L}*=TA=ra*^{H}. *ŋat*^{F}*=ɣǎ*^{L}*re*^{L} *mǎ-**tso***^{L}*=∅.*

fish **cook** **-&** **-eat** =RLS =RA COP =CONS not- **eat** =NEG

「魚を煮て食べた。しかし、食べなかった。」

Q13-1同様、LMKH 氏は「煮て食べた」のに「食べなかった」というのは矛盾しているという判断を下した。これも第 2 文の述語が *ɣo*^{H}*-TA-tso*^{L} 'get-&-eat' であれば、(32) と同様に矛盾を生じないと思われる。

3.14. 受身

Q14-1 X さんは殺された。しかし、死ななかった。

(56) *moŋ*^{L}*nuk*^{H}*=a*^{F} ***seʔ***^{H}***-TA-ɣ'uk***^{H}*=TA=ra*^{H}. *ŋat*^{F}*=ɣǎ*^{L}*re*^{L} *mǎ-**ʃït***^{F}*=∅.*

PN =TOP **kill** **-&** **-meet** =RLS =RA COP =CONS not- **die** =NEG

「モンヌックは殺されようとした。しかし、死ななかった。」

ロンウォー語に純然たる受動表現は存在しない。近い意味を表し得るのは、被害を被ることを表す複動詞構造 V-*TA-ɣ'uk*^{H}[19]である。通常有生物、ほとんどの場合人間の被害者を S 項として取る。(56) では、何らかの有生物が死ぬという事象を目指して行われた活動を被害者が被るという意味の述語について、被害者が死に至るという変化がキャンセル可能であることを示している。つまり、第 1 文の述語が受動でないQ1-1のケースと実質変わらない結果を示す。

4. まとめ

各調査結果で、キャンセルされた変化・状態などの事象を表す第 2 文の述語と、その変化・状態などの実現を目指す活動を表す第 1 文の述語の形式的関係は、いくつかのパターンに分類することができる。

I 第 1 文の述語と第 2 文の述語の間に形式的関係がなく、意味的な関連付けのみを有するもの
II 第 1 文の述語と第 2 文の述語が単純-使役対をなすもの
III 第 1 文の述語が、第 2 文の述語 V を含む使役の複動詞構造 *V-n'oŋ*^{F} であるもの
IV 第 1 文の述語 *k'at*^{H} が、第 2 文の述語を含む祈願法の補文を取るもの
V 第 2 文の述語が、第 1 文の述語 V を含む複動詞構造 *ɣo*^{H}*-TA*-V であるもの

質問票の Q1–Q12 の回答が上記のパターンのどれに当てはまるかを示したのが、表1であ

[19] 澤田 (2017) では取り扱っていないが、V と V-*TA-ɣ'uk*^{H} の間で項構造に違いがあるため、B 類（主動詞-補動詞）あるいはその特殊例である可能性が高い。

る。表の m 列の数字 n は、項目 m-n を表す。太字斜体のものは、その項目が複数のパターンを示すことを表す。

表1　調査票 Q1–Q12 各項目の第 1 文述語と第 2 文述語の形式的関係

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12
I	1	1–3	2–3		1–4	1–3		1–2				***2***, 4, ***5, 6***, 7, 8
II	2–4, 6–10, 12–13		4–6									***3, 5, 9, 10***
III												1, ***2, 3, 9, 10***
IV	15											
V			1						1–2	1–3	1–6	
*				1–3			1–2					

Q1-5, 11, 14 は未質問、あるいは回答不能。

パターン I–IV では、第 2 文の述語は第 1 文の述語の表す活動が目指す変化・状態などの事象を表す。第 2 文の述語が現実法肯定の文標識を伴う場合、その目指す事象が実現したことを表す。Q2-1 (13) の第 2 文の述語 *mjoŋ*^{F}「見る」、Q2-2 (14) の第 2 文の述語 *kjo*^{L}「聞く」およびQ12-4 (46) の第 2 文の述語 *vaj*^{F} を除くと、第 1 文の述語の A 項（動作者あるいは経験者の意味役割を担う）に対応する項が第 2 文の述語の項構造に現れない[20]。

一方、パターン V では、第 1 文の述語と第 2 文の述語の項構造に違いはない。複動詞構造 *ɣo*^{H}*-TA*-V は、V の表す事象がその場の状況によって可能になる、という意味を付け加えるのみで、V の項構造に変更を加えない。

おそらく、Q3-1 および Q9, Q10, Q11 の第 1 文に現れる述語のみならず、実質的にすべての述語について複動詞構造 *ɣo*^{H}*-TA*-V を形成することが可能である。(1) の述語 *seʔ*^{H} も例外ではなく、*ɣo*^{H}*-TA-seʔ*^{H} という形式がコーパス中に確認される。現実法肯定の文標識を伴った複動詞構造 *ɣo*^{H}*-TA*-V の意味についてはすでにQ3-1で述べたが、V が *seʔ*^{H} の場合に即して、意味をより厳密に述べると、「外的状況によって、ある有生物を殺すという活動の事象のみならず、それが引き起こすことを目指す、当該有生物が死ぬという変化の事象まで実現する」ことを表す。ゆえに (57a) は (57b) を含意する[21]。

(57) a. *joŋ*^{L}　*moŋ*^{L}*nuk*^{H}*=re*^{F}　***ɣo*^{H}*-TA-seʔ*^{H}***=*TA=ra*^{H}.

s/he　PN　=ACC　**get -& -kill**　=RLS =RA

「彼はモンヌックを殺しおおせた。」

b. *moŋ*^{L}*nuk*^{H}　***ʃit*^{F}**=*TA=ra*^{H}.

PN　**die**　=RLS =RA

[20] このうち *mjoŋ*^{F} の項構造は第 1 文の述語 *yu*^{H} の項構造と同じ、*kjo*^{L} の項構造も第 1 文の述語 *t'eŋ*^{H}*-TA-kjo*^{L} の項構造と同じである。*vaj*^{F} の項構造には、第 1 文の述語 *ʔauŋ*^{L} の動作主の A 項に対応する起点の項が現れる。

[21] (57)–(59) の例については、協力者とは別の母語話者の判断を仰いだ。

「モンヌックは死んだ。」

同様に、(58a) は (58b) を含意する。

(58) a. *joŋ*^{L} *moŋ*^{L}*nuk*^{H}=*re*^{F} *mă-**ɣo**^{H}**-TA-se**^{H}=∅.*

s/he PN =ACC not- **get** **-&** **-kill** =NEG

「彼はモンヌックを殺せなかった。」

b. *moŋ*^{L}*nuk*^{H} *mă-**ʃɨt**^{F}=∅.*

PN not- **die** =NEG

「モンヌックは死ななかった。」

以上より、(59) は矛盾を生じる。

(59) (矛盾) *joŋ*^{L} *moŋ*^{L}*nuk*^{H}=*re*^{F} ***ɣo**^{H}**-TA-se**^{H}=TA=ra*^{H}. *ŋat*^{F}=*ɣă*^{L}*re*^{L} *moŋ*^{L}*nuk*^{H} *mă-**ʃɨt**^{F}=∅.*

s/he PN =ACC **get** **-&** **-kill** =RLS =RA COP =CONS PN not- **die** =NEG

「彼はモンヌックを殺しおおせた。しかし、モンヌックは死ななかった。」

これに対して、(1) とほぼ同じ内容である (60) は矛盾を生じない。

(60) *joŋ*^{L} *moŋ*^{L}*nuk*^{H}=*re*^{F} ***se**^{H}=TA=ra*^{H}. *ŋat*^{F}=*ɣă*^{L}*re*^{L} *moŋ*^{L}*nuk*^{H} *mă-**ʃɨt**^{F}=∅.*

s/he PN =ACC **kill** =RLS =RA COP =CONS PN not- **die** =NEG

「彼はモンヌックを殺そうとした。しかし、モンヌックは死ななかった。」

(59) が矛盾を生じる理由が、第 1 文が「モンヌックが死んだ」ことを含意することであるのは明らかである。そうすると、少なくとも LMKH 氏にとって (60) が矛盾を生じないのは、第 1 文が「モンヌックが死んだ」ことを含意しない、と氏がみなしているからに他ならない。

LMKH 氏は調査票に挙がっている述語の多くについて事象キャンセルが可能であると認めている。氏が事象キャンセルの可能性を認めなかった数少ない例は、矛盾律へと導かれる3.13.のケースを除けば、主に身体の一部と対象物との瞬間的・持続的接触を目指す動作を表す3.4.と、対象物の獲得を目指して行われる活動を表す3.7.のみである。両小類の第 1 文の述語に共通するのは、その表す事象が動作主とは独立した事物を参与者とすることと、その事物に物理的変化や位置的変化をもたらさない働きかけを行うことである。それ以上の特徴づけを行うには各小類に属する述語の数が不足しているので、さらに用例を集めて検討する必要がある。

5. おわりに

本稿では、本巻所収の「事象キャンセル調査票」を用いて標準ロンウォー語の事象キャンセルを調査した結果を提示した。

少なくとも、調査協力者 LMKH 氏が、ロンウォー語のかなり多くの述語について事象キャンセルが可能であるとみなしていること、不可能とみなす述語が 2 つの小類をなすことが明らかとなった。

調査の仕方に関して反省すべき点として。以下の 2 点を挙げる。

- 調査者が、調査票の最初の方に上げられた「殺す」-「死ぬ」や単純-使役動詞対のように、典型的ではあるがある意味特殊な例に囚われてしまったきらいがある。
- 外的状況による事象の実現を表す複動詞構造 γo^{H}-*TA*-V が広く述語一般を入力として形成可能であるにも関わらず、一部の述語についてしかその例を含む事象キャンセルを検証しなかった。

今回の調査は、話者によって結果が異なり得る極めてデリケートなものであると言える。第 1 文の述語が何らかの事象を引き起こすことを目指す働きかけの事象を表すとすれば、多くの場合、その目標とする事象を表すことのできる何らかの言語表現を見つけ出すことは可能であろう。しかし、母語話者が、第 1 文の後に当該の言語表現を用いた第 2 文を続けることを、自然なつながりと認めるかどうかは定かでない。そのような文の組を「話者が日常使う言語表現から見て奇妙な、自然でない言表」とみなしたならば、その容認度は下がる。日常的言語表現のレパートリーという規範と、状況を思い浮かべる想像力の度合いが、話者の間で均等であるとは思われない。この種の調査において、それらの要因をどのようにどれだけ考慮するかという問題は、容易に答えの出るものではないように思えるのである。

略号

&	動詞連結子
ACC	格標識：対格
ALL	格標識：向格
CONS	従属節標識：譲歩
COP	コピュラ
DET	名詞限定形
H	「定位置」への直示的移動
LOC	格標識：位格
N	名詞
NEG	文標識：情報授受：現実法否定
PN	固有名詞
QUOT	引用標識
RA	名詞修飾節における明示的な繋辞 linker ／現実法肯定の情報授受文の文末助詞
RLS	文標識：情報授受：現実法
RLZN	助動詞：事象が生起したことを認識すると同時にそのことを発話する
TOP	話題表示
VT	他動詞

参考文献

Sawada, Hideo (2010) 'Upward-curling' realization of tone L in Lhaovo (maru) language. In Dai, Zhaoming, J.A. Matisoff, Hongkai Sun, and Qingxia Dai eds. *Forty Years of Sino-Tibetan Language Studies: Proceedings of ICSTLL-40*. Harbin: Heilongjiang University Press. pp. 168–175.

——— (2012) Optional marking of NPs with core case functions P and A in Lhaovo. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 35:1. pp. 15–34.

——— (2015) On the simplex-causative verb pairs in Lhaovo. Presentation slides, the 25th meeting of Southeast Asian Linguistic Society, Payap University, Chiang Mai. `https://www.academia.edu/15917391/On_the_Simplex_Causative_Verb_Pairs_in_Lhaovo_handout_`.

——— (2018) The phonology of Lhangsu, an undescribed Northern-Burmish language. In Osaki et. al. ed. *Dynamics in Eurasian Languages, (Contribution to the Studies of Eurasian Languages series)* 20. Kobe: Kobe City College of Nursing. pp. 381–404. `http://el.kobe-ccn.ac.jp/csel/?page_id=539`.

——— (to appear) Mr. lamaung khao hhao's memoir of his life: Until his graduation of high school. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 17.

澤田 英夫 (2003) 「ロンウォー語の直示的移動動詞の意味的対立」. 東南アジア諸言語研究会（編）『東南アジア大陸部諸言語の行く・来る』：東京：慶應義塾大学言語文化研究所, pp. 337–364.

——— (2017) 「ロンウォー語の複動詞構造」. 東南アジア諸言語研究会（編）『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』：東京：慶應義塾大学言語文化研究所, pp. 162–207.

ビルマ語の事象キャンセルについての一考察

岡野　賢二

1. はじめに

ビルマ語 Burmese は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派ビルマ語群に属する言語である。ミャンマー連邦共和国の唯一の公用語 official language であり、同国の教育言語、メディアの言語である。また同国内の多くの地域で、共通語としての機能も果たしていると考えられるが、同国以外では移民のコミュニティーで僅かに話されるのみである。ビルマ語には口語のほか、もっぱら書記に用いられる文語体があるが、本稿で扱うのは口語である。

ビルマ語の特徴を特に本稿に関わりがある部分を中心に簡単に記す。ビルマ語は述語末尾型言語で、文の必須要素は述語のみである。述語は動詞＋動詞文標識という構造を持つ動詞述語と、それ以外の非動詞述語とがある。従属節を含め、文を構成する要素は全て述語に先行する。一般に他動詞文の目的語は動詞の直前に現れるのが最も自然であるので、SOV 型といってよいだろう。ビルマ語の語類は大きく自立語と付属語に分かれる。自立語は動詞と名詞で、単独もしくは助詞を伴って文内に現れる。付属語は自立語の前後に現れる。大まかに言って、自立語の前に現れる助詞は限定、自立語の後に現れる助詞は関係標示の機能を持つ。文内の要素は（文脈や状況によって）復元可能な場合は脱落することが多い。

以下、本稿を読み進めるにあたり、前提となるビルマ語の特徴を述べる。動詞文標識はそれが文であることを示すだけでなく、法を表す機能も持っている。ビルマ語の法助詞には動詞文標識の他に限定節標識、名詞節標識があるが、この三種が共通して持つのは叙実（realis: RLS）と叙想（irrealis: IRR）である。叙実は述べられている事態が現実であることを表し、過去の一回の事柄や常に成り立つ事柄を述べる（(1)）。叙想は述べられている事態が現実であるかどうかの確証がないことを表し、未来の事柄や、推量、話し手の意志などを表す（(2)）。なお否定文においてこの叙実と叙想の対立は中和する（(3)）。

(1)　tù　tʰǎmíN　sá=tè̯.
　　3SG　rice　eat=VS.RLS
　　「彼/彼女はご飯を食べた/（いつも）食べる。」

(2)　tù　tʰǎmíN　sá=mè.
　　3SG　rice　eat=VS.IRR
　　「彼/彼女はご飯を食べる（だろう）/食べただろう。」

(3) ṭù tʰǎmíN mǎ-sá=p̬ʰú.
3SG rice NEG-eat=VS.NEG
「彼/彼女はご飯を食べない(だろう)/食べなかった(だろう)。」

つまり叙実（realis: RLS）によって述べられることは、いわば定 finite であり、事実として確定した事柄である。また事象キャンセルを確認するのに、否定文が用いられるが、文脈的に定 finite である。本稿のテーマである事象キャンセルを考察するにあたり、まずはこの点を確認しておく。

以下、本稿の目的は、本巻所収の「事象キャンセル調査票」を用いてビルマ語の事象キャンセルを調査した結果を示すことである。

2. 有対動詞と「目標明示他動詞構文」

本稿を読み進めうる上で、本稿で使う用語について述べておく。

ビルマ語には形態的に自動詞と他動詞が対応しているペアが 70 組以上存在する（Cornyn and McDavid（1943））[1]。具体的には頭子音の交替によって自他が入れ替わる。

図 1 ビルマ語の形態的な自他動詞のペア

頭子音の種類	自動形	他動／使動形
阻害音	無声無気音	無声有気音
	tɕâ-「落ちる」	tɕʰâ-「落とす」
共鳴音	有声音	無声化音
	niʔ-「沈む」	hniʔ-「沈める」
接頭辞*s-	なし	あり
	ʔeiʔ-「寝る」	ṭeiʔ-「寝かしつける」

これらを本稿では日本語学での用語になぞらえ（早津 1995 など）、「有対動詞（のペア）」、有対動詞のペアをなす自動詞を「有対自動詞」、同じく他動詞を「有対他動詞」と呼ぶことにする。

有対動詞は多くの場合、目標節標識 -ʔàuN を用いた構文を作ることが可能である。

(4) tɕâ=**ʔàuN** tɕʰâ=ṭè.
fall=**PURP** drop=VS.RLS
「落ちるように落とす/落とした。」

この構文とほぼ同じことを加藤（2015）:27 が ṭaʔ-「殺す」と ṭè-「死ぬ」の例を使って指摘している（「落ちる」「落とす」の例も挙げている）。

[1] 加藤（2015）が指摘しているように、全ての形態的なペアが自動詞と他動詞になるわけではない。そのため加藤は「causative 対 non-causative と呼ぶ方が正確である」（同書：12）としている。ただし本稿では自動詞、他動詞、自他という用語を用いることにする。

(5) ṭè=**ʔàuɴ** ṭaʔ=tè. dàbèmê mă-ṭè=p̬ʰú.
die=**PURP** kill=VS.RLS however NEG-die=VS.NEG
「ちゃんと殺した。しかし、死ななかった。」 (同書:27)

これは名詞化接頭辞ʔă-によっても同様の意味を表すことが可能な場合がある。

(6) **ʔă**-ṭè ṭaʔ=tè. dàbèmê mă-ṭè=p̬ʰú.
NLZ-die kill=VS.RLS however NEG-die=VS.NEG
「ちゃんと(死ぬように)殺した。しかし、死ななかった。」

ただしこの名詞化接辞による目標明示は常に可能なわけでもない。目標節標識-ʔàuɴによるものは生産的と言える。

以上、この構文は以下のように図式化できる。これを本稿では仮に「目標明示他動詞構文」と呼ぶことにする。

(7) 目標明示他動詞構文 Vintr=ʔàuɴ Vtr-

Vintr（自動詞）と Vtr（他動詞）[2]は必ずしも有対動詞とは限らない。加藤(同書:27)も指摘しているとおり、目標明示他動詞構文を使うと、目標の表す事態の生起が強く推量され、これをキャンセルしにくくなるが、それでも目標の表す事態の生起が必須とまでは言えない。

3. 調査協力者

日本語が堪能な 2 名のコンサルタントに書面による調査を行った。その後、その回答に対して補足的な質問を行った。コンサルタントは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フェローのトゥザライン氏（女性、日本語能力試験 1 級合格、調査当時は同大学大学院博士後期課程所属、40 歳。以下では A 氏とし、例文には[a]と記す）と Defense Service Academy のトゥエニンイーライン准講師（女性、日本語能力試験 2 級合格、調査当時は東京外国語大学大学院博士前期課程所属、30 歳台。以下では B 氏とし、例文には[b]と記す）である。

4. 調査の結果

以下、調査用文例をほぼ訳してもらっている。以下 3.1 以降の小節の小見出しは、調査票の小見出しに従う。

[2] 目標節の動詞が他動詞であったり、主節の動詞が自動詞である場合もある。*e.g.* yâ=ʔàuɴ yù=ṭè. get=PURP take=VS.RLS「手に入るように取る→必ず取る」（目標節の動詞が他動詞）、là=p̬ʰyiʔ=ʔàuɴ là=ṭè. come=RLZ=PURP come=VS.RLS「来られるように来る→なんとしてでも来る」（主節の動詞が自動詞、なお助動詞-pʰyiʔは「～しおおせる」を表す）

4.1. 対象物の物理的変化が否定され得るか

Q1-1. X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかった。

(8) [a] X=k̬ò ṭaʔ=tè. dàbèmê mă-ṭ̬è=p̬ʰú.
X=ACC kill=VS.RLS however NEG-die=VS.NEG

[b] _____ dàbèmê ṭ̬ù mă-ṭ̬è=p̬ʰú. [3]
X=ACC kill=VS.RLS however 3SG NEG-die=VS.NEG

両氏ともほぼ同じ回答。前件の動詞 ṭaʔ-「殺す」、後件の ṭ̬è-「死ぬ」。

Q1-2. ココヤシの実を落とした。しかし、落ちなかった。(高い所になっているココヤシの実を長い棒でつついて落とそうとしたが、落ちなかったという状況。)

(9) [a] ʔóuɴḍí=k̬ò tɕʰwè~tɕʰâ=t̬è. dàbèmê mă-tɕwè=p̬hú.
coconut=ACC pluck~drop=VS.RLS however NEG-fall=VS.NEG

[b] ʔóuɴḍí=k̬ò kʰouʔ~tɕʰâ=t̬è. dàbèmê mă-tɕâ=p̬hú.
coconut=ACC chop~drop=VS.RLS however NEG-fall=VS.NEG

A 氏の前件の動詞 tɕʰwè-「摘む」と後件の tɕwè-「(実、葉が)落ちる」は有対動詞。前件は、tɕʰwè-「摘む」と tɕʰâ-「落とす」の動詞連続である。一方、B 氏は前件で kʰouʔ-は「(鉈などを振るって)伐る」と tɕʰâ-「落とす」の動詞連続、後件は tɕʰâ-「落とす」の有対自動詞 tɕâ-「落ちる」のみ。

Q1-3. ココヤシの実を割った。しかし、割れなかった。(ヤシの実を鉈で割ろうとしたが、割れなかったという状況。)

(10) [ab] ʔóuɴḍí=k̬ò kʰwɛ́=t̬è. dàbèmê mă-kwɛ́=p̬ʰú.
coconut=ACC break.in.two= VS.RLS however NEG-broken.in.two= VS.NEG

両氏同一回答。前件の kʰwɛ́-「割る」と後件の kwɛ́-「割れる」は有対動詞。

Q1-4. 窓を壊した。しかし、壊れなかった。(ガラス窓を棒で叩いて壊そうとしたが、壊れなかったという状況。)

(11) [a] bădíɴ(bauʔ)=kò pʰyɛʔ=tè. dàbèmê mă-pyɛʔ=pʰú.
window=ACC break=VS.RLS however NEG-broken=VS.NEG

[3] 下線は、該当部分(前件または後件全体)が上の文と同じであることを示す。グロスは示す。

[b]	bădíNbauʔ=kò	kʰwé=ṭè.	dàbèmê	mă-kwé=p̬ʰú.
	window=ACC	break.in.two=VS.RLS	however	NEG-broken.in.two=VS.NEG

A 氏は有対動詞 pʰyɛʔ-「壊す」： pyɛʔ-「壊れる」を、B 氏は(10)と同じ有対動詞 kʰwé-「割る」： kwé-「割れる」を用いている。

Q1-5. 糸を切った。しかし、切れなかった。（糸を刃物（あるいは手、歯など）で切ろうとしたが、切れなかったという状況。）

(12) [ab]	(ʔaʔ)tɕì=ḳò	pʰyaʔ=tè.	dàbèmê	mă-pyaʔ=pʰú.
	(needle)thread=ACC	cut(vt)=VS.RLS	however	NEG-cut(vi)=VS.RLS

両氏同一回答。前件の pʰyaʔ-「切る」と後件の pyaʔ-「切れる」は有対動詞[4]。

Q1-6. 枝を折った。しかし、折れなかった。

(13) [a]	ʔăkáiN/ṭiʔgáiN=ḳò	tɕʰó=ṭè.	dàbèmê	mă-tɕó=p̬ʰú.
	branch/branch=ACC	snap.off(vt)=VS.RLS	however	NEG- snap.off(vi)=VS.NEG
[b]	ṭiʔgáiN=ḳò	kʰouʔ=tè.	dàbèmê	mă-pyaʔ=pʰú.
	branch=ACC	chop=VS.RLS	however	NEG-snap=VS.NEG

A 氏の前件 tɕʰó-「折る」と後件の tɕó-「折れる」は有対動詞。B 氏は前件 kʰouʔ-「（鉈などを振るって）伐る」、後件 pyaʔ-「切れる」となっている[5]。

Q1-7. 窓をあけた。しかし、あかなかった。

(14)	bădíN(bauʔ)=kò	pʰwîN=ṭè.	dàbèmê	mă-pwîN=p̬ʰú.
	window=ACC	open(vt)=VS.RLS	however	NEG-open(vi)=VS.NEG

両氏同一回答。前件 pʰwîN-「開ける」と後件の pwîN-「開（あ）く」は有対動詞。

Q1-8. 紙を貼った。しかし、くっつかなかった。

(15) ??	sɛʔkù=ḳò	kaʔ=tè.	dàbèmê	mă-kaʔ=pʰú.
	papaer=ACC	stick=VS.RLS	however	NEG-stick=VS.NEG

---

[4] 日本語の「切る」に当たる語彙はビルマ語にはいくつかある（例えば(9)[b]の kʰouʔ-は「（鉈などを振るって）伐る」）が、pʰyaʔ-「切る」は「紐状のもの」で「繋がっていて意味をなすもの」を切断すること。コンサルタントの回答にはなかったが、はさみを使って切る場合はを ɦnaʔ-「挟む；（はさみで）切る」を用いる。

[5] “Myanmar-English Dictionary 2nd edition, 2019” には kʰouʔ-「（鉈などを振るって）伐る」と pyaʔ-「切れる」の有対他動詞 pʰyaʔ-「切る」との複合動詞（動詞連続の場合もある）kʰouʔpʰaʔ- “cut off” (p.73) が掲載されている。

同一回答だが、両氏とも不自然な文であるという。動詞 kaʔ-「貼る；くっつく」は自他同形。

Q1-9. 木を倒した。しかし、倒れなかった。

(16)	[a]	ṭiʔpìN=ḳò	hlé=ṭè.	dàbèmê	mă-lé=p̬ʰú.
		tree=ACC	knock.down=VS.RLS	however	NEG-fall.down=VS.NEG
	[b]	ṭiʔpìN=ḳò	(kʰouʔ~)hlé=ṭè.	dàbèmê	mă-lé=p̬ʰú.
		tree=ACC	(chop~)knock.down=VS.RLS	however	NEG-fall.down=VS.NEG

実質的に両氏の回答はほぼ同一。前件の hlé-「倒す」と後件の lé-「倒れる」は有対動詞。B 氏は前件に kʰouʔ-「(鉈などを振るって)伐る」を加えてもよいとしている。

Q1-10. 湯を沸かした。しかし、沸かなかった。

(17)	[a]	yènwé	tɕò=ṭè./tè=ṭè.	dàbèmê		mă-sʰù=pʰú.
		hot.water	boil=VS.RLS/place=VS.RLS	however		NEG-boiling=VS.NEG
	[b]	yènwé=ḳò	tɕò=ṭè.	dàbèmê	yènwé=ḳâ	mă-sʰù=pʰú.
		hot.water=ACC	boil=VS.RLS	however	hot.water=NOM	NEG-boiling=VS.NEG

両氏ともほぼ同じ回答。A 氏は tɕò-「沸かす」と「(コンロに鍋などを)のせる」の二種類の動詞を使っている。yènwé「湯」＋tè-で「湯を沸かす」の意味となる。なお B 氏は yènwé「湯」に対格標識を付しているが、一般的ではないように思われる。

Q1-11. ござを広げた。しかし、広がらなかった。

(18)	[ab]	pʰyà=ḳò	pʰyâN=ṭè.	dàbèmê	mă-pyâN=p̬ʰú.
		rush.mat=ACC	spread=VS.RLS	however	NEG-spreaded=VS.NEG
	[a]	pʰyà	kʰíN=ṭè.	dàbèmê	kʰíN=lô mă-pyâN=p̬ʰú.
		rush.mat	roll.out=VS.RLS	however	roll.out=CNSQ NEG-get=VS.NEG

上の文は両氏同一回答。有対動詞pʰyâN-「広げる」：pyâN-「広がる」を使ったが、A氏はさらにkʰíN-「敷く」を使った例を回答した（[a]文）。こちらは他動詞のみあり、対応する自動詞がないとのことで、結果が実現しないことをV-lô mă-yâ-「Vできない」を用いて表現している。

なおkʰíN-「敷く」はその上に寝るために敷くのであり、pʰyâN-「広げる」は巻いてあるものを広げる、ということでpʰyà「ござ」に使うのは奇妙に感じることもあるようだ。ただし「デザインをあしらったござ（マット）を広げて見る」ならばpʰyâN-「広げる」でよい。

Q1-12. 木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった。（木の枝を焚き木にしようとしたが、湿っていて燃えなかったという状況。）

(19)	[a]1	ṭiʔgáiN=k̬ò	mí＋hmyaiʔ=tè.	dàbèmê	mí＋mă-swé=p̬^{h}ú.
		tree.branch=ACC	fire+singe=VS.RLS	however	fire+NEG-catch=VS.NEG
	[a]2	ṭiʔgáiN=k̬ò	mí＋ɕô=t̬è.	dàbèmê	mă-làuN=p̬^{h}ú.
		tree.branch=ACC	fire+burn=VS.RLS	however	NEG-burnt=VS.NEG
	[b]	_____		dàbèmê	mí＋mă-swé=p̬^{h}ú.
		tree.branch=ACC	fire+burn=VS.RLS	however	fire+NEG-catch=VS.NEG

mí「火」＋hmyaiʔ-「焦がす」。これには有対自動詞myaiʔ-「焦げる」があるが、意味的に合わないため、ここでは使われない。両氏がmí＋ɕô-「燃やす、火を付ける」を使った。後件はmí＋swé-「火が付く」またはlàuN-[6]「燃え（上が）る」である。

Q1-13. 山芋を煮た。しかし、煮えなかった。（芋を煮ようとしたが、火力が弱く、煮えなかったという状況。）

(20)	[a]	gădɛʔʔû=k̬ò	tɕ^{h}ɛʔ=tè.	dàbèmê	(miʔánélô/míʔăɕèinnélô)	mă-tɕ^{h}ɛʔ=p̬^{h}ú.
		yam=ACC	cook=VS.RLS	however	(because the fire was weak)	NEG-cooked=VS.NEG
	[b]	gădɛʔʔû=k̬ò	tɕ^{h}ɛʔ=tè.	dàbèmê	tɕ^{h}ɛʔ-mă-yâ=p̬^{h}ú.	
		yam=ACC	cook=VS.RLS	however	cooked-NEG-get=VS.NEG	

A 氏は tɕ^{h}ɛʔ-「炊く」：tɕɛʔ-「炊ける」という有対動詞を用いたが、B 氏は後件の動詞に有対他動詞を使い、V-mă-yâ-「V できない」としている。この形式は 1-11 例文(18)の V-lô mă-yâ-「V できない」とほぼ同じ。A 氏の括弧内は「火力が弱くて」の意味。

Q1-14. 魚を干した。しかし、乾かなかった。（干し魚を作ろうとしたが、乾ききらなかったという状況。）

(21)	[a]	ŋătɕ^{h}auʔ	hláN=tè.	dàbèmê	(káuNgáuN)	mă-tɕ^{h}auʔ=p^{h}ú.
		dry.fish	put.out=VS.RLS	however	(well)	NEG-dry=VS.NEG
	[b]	ŋá=k̬ò	ʔă-tɕ^{h}auʔ＋hláN=tè.			mă-tɕ^{h}auʔ=p^{h}ú.
		fish=ACC	NMZ-dry+put.out=VS.RLS			NEG-dry=VS.NEG

動詞 tɕ^{h}auʔ-「乾く：乾かす」は自他同形。動詞 hláN-「干す」と動詞 tɕ^{h}auʔ-「乾く：乾かす」がそれぞれ前件、後件の動詞となっている。前件は後件の事態を引き

[6] ここの他の動詞と同じように mí「火」を伴うこともある。

起こすための具体的な行為を表す動詞である。後件については A 氏、B 氏とも同じで、自動詞「乾く」として用いられている。A 氏の括弧内に入っている要素 káuNgáuN「よく」は「乾ききらない」のニュアンスを出そうとしたものである。

前件について、A 氏の回答は逐語的には「干し魚を干した」。いわゆる結果目的語である。ŋǎtɕʰauʔ「干し魚」は動詞 hláN-「干す」の対象だが、対格標示されることはあまりないと思われ、特定性は低いと考えられる。

一方、B 氏の回答の後件は動詞 tɕʰauʔ-「乾く；乾かす」に名詞化接頭辞ʔǎ-がつき、動詞 hláN-「干す」が主動詞となっている(lit. 乾くように干す)。ただこれは干し魚を作ろうとした、と解釈するのは難しく、焼くために水気を取る、という解釈であるという。

Q1-15. スイカを冷やした。しかし、冷えなかった。

(22)	[a]	pʰǎyéḍí=ḳò	ʔǎ-ʔé＋kʰàN=ṭè.	dàbèmê	mǎ-ʔé=ṗʰú.
		watermelon=ACC	NMZ-cool+suffer=VS.RLS	however	NEG-cool-VS.NEG
	[b]	pʰǎyéḍí=ḳò	ʔé=ʔàuN louʔ=tè.	dàbèmê	mǎ-ʔé=ṗʰú.
		watermelon=ACC	cool-PURP do=VS.RLS	however	NEG-cool-VS.NEG

前件に関し、A 氏の回答ʔǎ-ʔé＋kʰàN-「冷たさ＋受ける」＞「冷やす」に対し、B 氏は迂言的な使役ʔé=ʔàuN louʔ-「冷たく(なるように)する」を使った。後件はʔé-「冷たい」が変化動詞となっている。ビルマ語の属性動詞の多くは、それだけで変化を表すことがある(e.g. yàNgòuN=hmà **tɕí**=tè. PLACE=LOC **big**=VS.RLS「ヤンゴンで大きくなった(成長した、育った)」)。

このように、採取例(8)から(22)のうち、自然な文を作ることのできない(15)を除けばいずれもが前件文において言明される対象物の物理的変化を後件文でキャンセルすることが可能で、全く不自然ではない。(15)も不自然ではあるものの、キャンセルが可能であることに変わりはない。

ここで特徴的なのはいわゆる有対動詞のペアの存在で、(10)～(14)、(16)、(18)、(20)が前件の動詞が有対他動詞、後件の動詞が有対自動詞である。(9)も A 氏の回答には後件の動詞 tɕwè-「摘む」の有対他動詞 tɕʰwè-「摘む」が前件の動詞内に含まれているし、B 氏の場合も後件の動詞 tɕâ-「落ちる」の有対他動詞 tɕʰâ-「落とす」が前件の動詞内に含まれている。

一方、(8)、(17)、(19)、(21)、(22)では有対動詞のペアは現れなかった。(8)の「殺す」「死ぬ」は意味的に対応するものの、多くの言語で形態的に対応しないものであろうから、特段おかしなことではない。(19)では「燃やす」「燃える」にあたる有対動詞のペアが存在しない。

(21)では自他同形の動詞 tɕʰauʔ-「乾く：乾かす」があるものの、前件には結果目的語 ŋǎtɕʰauʔ

「干し魚」（A 氏）か、接頭辞がついたʔă-tɕʰauʔ「乾くように」が目的語と動詞の間に挿入されている（B 氏）。これは目標明示他動詞文である。目標明示する句や節が現れても、それが実現しているとは限らないのは 2.で述べたとおりである。

(22)は状態（変化）を表す動詞ʔé-「冷たい（冷たくなる）」が後件の動詞である。ビルマ語には単独で「冷やす」を表す動詞がないため、これを目標節標識によって従属節化したʔé=ʔàuN「冷たい（冷たくなる）ように」が使われている。

これは目標明示他動詞構文によく似ているが、動詞ʔé-「冷たい（冷たくなる）」に対応する他動詞、あるいはそれを実現するための具体的な手段を表す適切な他動詞がないため、目標節ʔé=ʔàuN「冷たい（冷たくなる）ように」を受ける主節の動詞は louʔ-「する」が現れている。この動詞はいわゆる代動詞であり、動作者の意志によって引き起こされる動作全般の代替表現として用いられる。これは使役構文の一種と考えられるものである（岡野 2015:7、後述）。

4.2. 対象物の知覚が否定され得るか

Q2-1. 見た。しかし、見えなかった。

(23) [a] tɕî=ʈè. dàbèmê mă-myìN(=yâ)=p̯ʰú.
look=VS.RLS however NEG-see(=INEV)=VS.NEG

[b] _____ mă-myìN=p̯ʰú.
look=VS.RLS NEG-see=VS.NEG

前件が意志動詞 tɕî-「見る」、後件が無意志動詞 myìN-「見える」（いわゆる知覚動詞）、いずれも他動詞である。

Q2-2. 聞いた。しかし、聞こえなかった。

(24) [a] ná＋tʰàuN=ʈè. dàbèmê mă-tɕá(=yâ)=p̯ʰú.
listen=VS.RLS however NEG-hear(=INEV)=VS.NEG

[b] _____ mă-tɕá=yâ=p̯ʰú.
listen=VS.RLS NEG-hear=INEV=VS.NEG

前件が意志動詞 ná＋tʰàuN-「聞く」、後件が無意志動詞 tɕá-「聞こえる」、いずれも他動詞である。

Q2-3. 魚醤のにおいをかいだ。しかし、においがしなかった。

(25) [a]1 ŋàNbyàyè-nâN=k̯ò ɕù~tɕî=ʈè. dàbèmê ʔănâN mă-yâ=p̯ʰú.
fish.source-smell=ACC breathe~look=VS.RLS however smell NEG-get=VS.NEG

[a]2 _____ dàbèmê bà-nâN=hmâ
fish.source-smell=ACC breathe~look=VS.RLS however what-smell=EVEN

mă-yâ=p̬ʰú.
NEG-get=VS.NEG

[b] ŋàNbyàyè-nâN=k̬ò kʰàN=t̬è dàbèmê ʔănânN mă-yâ=p̬ʰú.
fish.source-smell=ACC accept=VS.RLS however smell NEG-get=VS.NEG

A 氏から後件について 2 種の回答があった。[a]2 は「何のにおいもしなかった」という意味であり、全否定になっている以外、特に[a]1 との違いはない。

A 氏と B 氏とでは前件の動詞が異なる。A 氏は ɕû-「(息を)吸い込む」~ɕî-「見る」で、これは試行「〜てみる」を表す。B 氏は kʰàN-「受ける」を使った。

いずれも対象物の知覚をキャンセルすることが可能である。(23)、(24)は無意志動詞である知覚動詞が後件、それと意味的に対応する意志動詞が前件に現れている。日本語と異なりビルマ語の場合、知覚動詞は意味的に対応する意志動詞と同じ項構造をとる他動詞である。

知覚動詞に助動詞-yâ《不可避》「〜せざるを得ない」が現れる場合と、そうでない場合がある。特に B 氏は(23)ではこの助動詞を使わず、(24)では使っているが、そうなった理由は定かではない。A 氏はいずれも随意的としている。

(25)の嗅覚では、「見る：見える」「聞く：聞こえる」のようなペアがない。前件も後件も(ʔă-)nâN「におい」が名詞化接頭辞 NLZ によって名詞化して項として現れている。

4.3. 対象物の移動が否定され得るか

Q3-1. 小石を投げた。しかし、投げられなかった。(小石を投げようとしたが、手にくっついて、手から離れなかったという状況。)

(26) [a]1 t̬ɕauʔkʰɛ́=nê pauʔ=laiʔ=tè. dàbèmê mă-tʰî=p̬ʰú.
stone=INS explode=DEC=VS.RLS however NEG-hit=VS.NEG

[a]2 t̬ɕauʔkʰɛ́=nê pauʔ=tà lɛʔ-tʰɛ́=k̬â mă-luʔ=lô.
stone=INS explode=NC.RLS hand-inside=ABL NEG-release=CNSQ

[a]3 _____ pauʔ=lô mă-yâ=p̬ʰú.
stone=INS explode=NC.RLS explode=CNSQ NEG-get=VS.NEG

[b] t̬ɕauʔkʰɛ́-lé=k̬ò pyiʔ=tè. dàbèmê pyiʔ=lô mă-yâ=p̬ʰú.
stone-DIM=INS throw=VS.RLS however throw=CNSQ NEG-get=VS.NEG

A 氏から 3 種の回答があった。前件の動詞動詞 pauʔ-「穴が開く；爆ぜる」で、単独では(有対)自動詞だが、具格句 t̬ɕauʔkʰɛ́=nê「石で」と共に用いられて「石を/で(投げて)当てる」の意味。[a]1 の後件は tʰî-「当たる」なので、移動を表しておらず、「対象物の移動」には直接関わらない。[a]2、[a]3 前件が文ではなく、名詞

節「石を投げたこと/の」となっている。これは発話の前提を表す。[a]2 は「手から離れなくて」、[a]3 は「できなかった」。

B 氏はより直訳的。前件は tɕau?kʰɛ́-lé「小石」が対格句、それを受ける動詞が pyi?-「投げる」である。後件は前件と同じ動詞 pyi?-のあとに V=lô mă-yâ-「V できない」が現れ（(18)[a]参照）、「投げられない」となる。

Q3-2. スイカを籠に入れた。しかし、入らなかった。（スイカを籠に入れようとしたが、大きくて入らなかったという状況。籠は袋に替えてもよい。）

(27)	[a]1	pǎyétí=k̬ò	tɕʰíNdáuN-t̬ʰé	tʰê=t̬è.	dàbèmê	mă-wìN=p̬ʰú.
		watermelon=ACC	basket-inside	put.in=VS.RLS	however	NEG-enter=VS.RLS
	[a]2	_____			dàbèmê	mă-sʰâN=p̬ʰú.
		watermelon=ACC	basket-inside	put.in=VS.RLS	however	NEG-hold=VS.RLS
	[a]3	_____			dàbèmê	mă-sʰâN=lô
		watermelon=ACC	basket-inside	put.in=VS.RLS	however	NEG-hold=CNSQ
		tʰê=lô mă-yâ=p̬ʰú.				
		put.in=CNSQ NEG-get=VS.NEG				
(28)	[b]1	pǎyétí=k̬ò	táuN-t̬ʰé	tʰê=t̬è.	dàbèmê	tʰê=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		watermelon=ACC	basket-inside	put.in=VS.RLS	however	put.in=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]2	_____			dàbèmê	mă-sʰâN=p̬ʰú.
		watermelon=ACC	basket-inside	put.in=VS.RLS	however	NEG-hold=VS.RLS

「入る：入れる」には有対動詞 wìN-：t̪wíN-があるが、両氏とも前件には tʰê-「入れる」を使い、t̪wíN-は使っていない。tʰê-「入れる」はおおよそ物理的な「もの」に限られるのに対し、t̪wíN-は「録音する」などにも用いられるという違いがある。

後件の動詞には wìN-「入る」、sʰâN-「入る；収まる」およびは tʰê-lô mă-yâ「入れられない」となっている。なお[a]3 の mă-sʰâN=lô NEG-hold=CNSQ は「入りきらないので」という理由節。

動詞には wìN-「入る」は人などを主語として移動動詞（意志動詞）としても用いられるが、ここではスイカが主語の無意志動詞である。

Q3-3. 山芋を抜いた。しかし、抜けなかった。

(29)	[a]	gǎdɛʔʔû	tú=t̬è.	dàbèmê	tú=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		yam	dig=VS.RLS	however	dig=CNSQ NEG-get=VS.NEG

[b] ɡǎdɛʔʔû=ḳò sʰwɛ́~hnouʔ=tè. dàbèmê hnouʔ=lô mǎ-yâ=p̬ʰú.
yam=ACC pull~pull.out=VS.RLS however pull.out=CNSQ NEG-get=VS.NEG

A 氏は前件に tú-「掘る」、B 氏は動詞連続 sʰwɛ́-「引っ張る」~hnouʔ-「抜く」を用いている。この文の意図は B 氏のものが相応しいだろう。後件は使用する動詞が前件の動詞（の一部）に V=lô mǎ-yâ-「V できない」が後続する点で同じである。

Q3-4. 岩を動かした。しかし、動かなかった。（大きな岩を動かそうとしたが、重すぎて動かなかったという状況。）

(30) [a]1 tɕauʔtóuN=ḳò ɕwê=t̪è. dàbèmê (lé=lúN=lô) mǎ-ywê=p̬ʰú.
rock=ACC move(vt)=VS.RLS however (because ...) NEG-move=VS.NEG

[a]2 tɕauʔtóuN=ḳò hlouʔ=t̪è. dàbèmê hlouʔ=lô mǎ-yâ=p̬ʰú.
rock=ACC shake=VS.RLS however shake=CNSQ NEG-get=VS.NEG

前件について、A 氏は ɕwê-「動かす」、B 氏は hlouʔ-「揺する；揺れる」を用いた。一方後件は A 氏が ɕwê-「動かす」の有対自動詞 ywê-「動く」、B 氏は前件の動詞 hlouʔ-「揺する」に V=lô mǎ-yâ-「V できない」が後続する形である。

Q3-5. 鳥を放した。しかし、放せなかった。（鳥を放そうとしたが、鳥かごから出て行かなかったという状況。）

(31) [a] (hlàuNʔèiN-t̪ʰɛ́=ḳâ) hŋɛʔ=kò hluʔ(~pé)=tè. dàbèmê hŋɛʔ=kâ
(birdcage-inside=ABL) bird=ACC release(~give)=VS.RLS however bird=NOM
(hlàuNʔèiN-t̪ʰɛ́=ḳâ) mǎ-tʰwɛʔ=pʰú.
(birdcage-inside=ABL) NEG-go.out=VS.NEG

[b] hŋɛʔ=kò hluʔ=laiʔ=tè. dàbèmê hŋɛʔ=kâ pyàN~mǎ-t̪wá=p̬ʰú.
bird=ACC release=DEC=VS.RLS however bird=NOM fly~NEG-go=VS.NEG

前件について、両氏とも hluʔ-「自由にする」を用いた。A 氏は pé-「与える」を後続させることも可とした。これは「放してやる」という恩恵表現である。B 氏は助動詞-laiʔを用いている。これは決然性を表すとされるが、意志動詞とともに用いられると、その動詞の表す動作を最後までやり切ることを表すようだ。ただしこの場合も後件でキャンセルが可能なように、その事態が生じることを論理的に含意するわけではない。

後件は A 氏は「(鳥かごの中から)出ていかなかった」、B 氏は「飛んでいかなかった」と表現している。hluʔ-「自由にする」には有対自動詞 luʔ-「自由だ」があるが、意味的にそぐわない。なお動詞 hluʔ-には「遣わす」という意味もあり、形態

的に関連性はないが、ṭwá-「行く」の使動形と見なすことができる。ただ[b]の後件の動詞連続 pyàN-「飛ぶ」~ṭwá「行く」に現れるのは「その場を離れる、去る」の意味であって、使動形と非使動形の関係にあるわけではない。

Q3-6. 臼を載せた。しかし、載らなかった。（臼を棚に載せようとしたが、思ったより重くて載せられなかったという状況。）

(32) [a] tɕauʔ(ŋǎyouʔ)sʰòuN=k̬ò sìN-p̬ò tìN(-p̬ʰô louʔ)=t̬è. dàbèmê (lé=lúN=lô)
millstone=ACC rack-upperside load(-for do)=VS.RLS however (because ...)
tìN=lô mă-yâ=p̬ʰú.
load=CNSQ NEG-get=VS.NEG

[b] ŋǎyouʔsʰòuN=k̬ò mâ=t̬è. dàbèmê mâ=lô mă-yâ=p̬ʰú.
millstone=ACC lift=VS.RLS however lift=CNSQ NEG-get=VS.NEG

A 氏は動詞 tìN-「載せる」を前件、後件とも用い、後件ではそれに V=lô mă-yâ-「V できない」が後続する形である。前件の tìN(-p̬ʰô louʔ)=t̬è. load(-for do)=VS.RLS は「載せるようにする」の意。この形が出てくるのは、tìN-「載せる」がキャンセルしにくい動詞であるのではなく、単に日本語の説明文にある「載せようとした」を忠実に訳そうとしたものであろう。

B 氏の使った動詞 mâ-は「持ち上げる」で、日本語の意味を取り違えたようだ。

(26)から(32)まで、対象物の移動は後件によってすべて否定可能である。(30)[a]1 を除き、前件の動詞に対応する、それが実現した状態・事態を表す単独の動詞があまり存在しないためか、後件には前件で使われた動詞に可能表現 V=lô mă-yâ-「V できない」が後続する形を取る。

4.4. 対象物との接触が否定され得るか

Q4-1. X さんを叩いた。しかし、叩けなかった。（叩こうとしたが、手が届かなかったという状況。）

(33) [a] X=kò yaiʔ(=mă=lô louʔ)=tè. dàbèmê (lɛʔ-hláN mă-hmì=lô)
X=ACC beat(=VS.IRR=Q do)=VS.RLS however (because ....)
yaiʔ=lô mă-yâ=p̬ʰú.
beat=CNSQ NEG-get=VS.NEG

[b] X=kò yaiʔ=laiʔ=tè. dàbèmê mă-hmì=p̬ʰú.
X=ACC beat=DEC=VS.RLS however NEG-reach=VS.NEG

両氏とも前件に動詞 yaiʔ-「叩く」を用いた。B 氏は助動詞-laiʔをさらに後接させ

ている。後件では、A 氏は前件と同じ動詞動詞 yaiʔ-「叩く」に V=lô mă-yâ-「V できない」が後続する形である。B 氏は動詞 hmì-「届く」を使った。

A 氏が V=mă=lô louʔ-「V しようとする」を使っているのは例文に付された説明の中に「叩こうとした」とあるためであろう。生起は随意的であり、これがなければ後件で否定ができないわけではない。

Q4-2. X さんを蹴った。しかし、蹴れなかった。(蹴ろうとしたが、足が届かなかったという状況。)

(34)	[a]1	X=kò	kàN=laiʔ=tè.	dàbèmê	mă-tʰî=p̬ʰú.
		X=ACC	kick=DEC=VS.RLS	however	NEG-touch=VS.RLS
	[a]2	X=kò	kàN(=mă=lô louʔ)=tè.	dàbèmê	kàN=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		X=ACC	kick(=VS.IRR=Q do)=VS.RLS	however	kick=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[a]3	X=kò	hlánˀ~kàN=ʈà	(mă-hmì=lô/wé~nè=lô)	kàN=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		X=ACC	step~kick=NC.RLS	(because ...)	kick=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	X=kò	kàN=laiʔ=tè.	dàbèmê	mă-tʰî=p̬ʰú.
		X=ACC	kick=DEC=VS.RLS	however	NEG-touch=VS.NEG

[a]1、[b]はほぼ(33)と同じ。両氏とも前件に動詞 kàN-「蹴る」、ただし両氏とも助動詞-laiʔをさらに後接させている。後件は(33) [b]とほぼ同じで、こちらは動詞 tʰî-「当たる、触れる」を使った。[a]2 の前件は「蹴ろうとした」で、日本語に忠実であろうとしたと思われる。後件は前件の動詞 kàN-「蹴る」V=lô mă-yâ-「V できない」が後続する形である。

[a]3 は前件が文として独立していない、名詞節である。後件は[a]2 と同じ。括弧内は「届かなかったので/遠いので」という意味。

ここでも A 氏が「蹴ろうとした」に対応して V=mă=lô louʔ-「V しようとする」を使っている。

Q4-3. コップをつかんだ。しかし、つかめなかった。(コップに一瞬触れたが、熱くてしっかりと持つことができなかったという状況。)

(35)	[a]	kʰwɛʔ=kò	kàiN=laiʔ=tè.	dàbèmê	(pù=lúN=lô) kàiN=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		cup=ACC	grab=DEC=VS.RLS	however	(because...) grab=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	kʰwɛʔ=kò	kàiN=laiʔ=tè.	dàbèmê	mă-kàiN=nàiN=p̬ʰú.
		cup=ACC	grab=DEC=VS.RLS	however	NEG-grab=POSS=VS.NEG

[a]の括弧内は「熱すぎて」という意味。

対象物との接触についても、後件でそのキャンセルが可能である。

本節 Q4 の動詞はほぼ全て助動詞-laiʔ《決然性》を使っている点が注目される。これは前述したように動詞の表す動作が動作者の認識として完遂したことを表すと考えられる。4.3 対象物の移動ではこの助動詞が(30)[b]を除いて使われていない。

前件の動詞に対応する、それが実現した状態・事態を表す単独の動詞があまり存在しないためか、後件には前件で使われた動詞に可能表現 V=lô mă-yâ-「V できない」あるいは可能の助動詞-nàiN が後続する形を取る。

4.5. 目的地への到達が否定され得るか

Q5-1. 東京に行った。しかし、着かなかった。

(36) [a]1 tòtɕò ṭwá=ʈɛ̀. dàbèmê mă-yauʔ=kʰɛ̂=p̰ʰú.
PLACE go=VS.RLS however NEG-reach=AUX=VS.NEG

[a]2 ṭwá=ʈóuN=ɖâ=ʈɔ̰̂ tòtɕò, yauʔ=tà=ʈɔ̰̂ mă-yauʔ=kʰɛ̂=p̰ʰú.
go=period=PAST.TIME=CNTR PLACE reach=NC.RLS=CNTR NEG-reach=PAST=VS.NEG

[a]3 ṭwá=ʈóuN=ɖâ=ʈɔ̰̂ tòtɕò, yauʔ=lá sʰò=ʈɔ̰̂ mă-yauʔ=pʰú.
go=period=PAST.TIME=CNTR PLACE reach=Q say=when NEG-reach=VS.NEG

[b] tòtɕò=ɖò ṭwá=ʈɛ̰̀. dàbèmê mă-yauʔ=pʰú.
PLACE=ALL go=VS.RLS however NEG-reach=VS.NEG

[a]1、[b]で前件は ṭwá-「行く」、後件は yauʔ-「至る」。A 氏は後件に助動詞-kʰɛ̂ を使っている。助動詞-kʰɛ̂ の表す意味は多いが、これは過去の事柄であることを示そうとしたものであろう。

[a]2、[a]3 は[a]1、[b]とは表現方法が異なる。前件は「行ったときは東京」、後件は[a]2 は「着いたのは着かなかった」、[a]3「着いたかといえば着かなかった」となる。いずれも前件の動詞が表す事態は行われていると解釈できる。

Q5-2. ここに来た。しかし、着かなかった。（昨日もここに来ようとしたのだが、道が分からなくてたどり着かなかったという状況。）

(37) [a] (mănêgâ) dì=ɖò là=ʈɛ̰́=ʈɛ̰̀. dàbèmê (láN ɕà~mă-twê=lô)
(yesterday) here=ALL come=STILL=VS.RLS however (because ...)
mă-yauʔ=tà.
NEG-reach=NC.RLS

[b] dì=k̬ò　　là(=t̬é)=t̬è.　　dàbèmê　　mă-yauʔ=kʰê=pʰú.
here=ALL　　come(=STILL)=VS.RLS　　however　　NEG-reach=AUX=VS.NEG

前件は là-「来る」、後件は yauʔ-「至る」。両氏とも前件に助動詞-t̬é「まだ～」を使っている。これは「昨日も」を表そうとしたものである。なお A 氏は後件に名詞節、すなわち stand-alone nominalization を用いている。B 氏は助動詞-kʰê《過去》を使っている。

[a]の括弧内は「道を(探しても)見つからなかったので」という意味。

Q5-3. 家に帰った。しかし、着かなかった。

(38) [a] ʔèiN＋pyàN=t̬è.　　dàbèmê　　pyàN~mă-yauʔ=pʰú.
house+return=VS.RLS　　however　　return~NEG-reach=VS.NEG

[b]1 ʔèiN=k̬ò　　pyàN=t̬è.　　dàbèmê　　mă-yauʔ=pʰú.
house=ALL　　return=VS.RLS　　however　　NEG-reach=VS.NEG

[b]2 ʔèiN=k̬ò　　pyàN=t̬à=p̬é.　　dàbèmê　　ʔèiN　　mă-yauʔ=pʰú.
house=ALL　　return=NC.RLS=FOC　　however　　house　　NEG-reach=VS.NEG

前件は pyàN-「戻る；帰る」、後件は yauʔ-「至る」。A 氏は後件に前接動詞 pyàN-「戻る；帰る」があり「帰り着かなかった」となっている。[b]2 は前件が文として独立していない名詞節である。

Q5-4. 二階に上がった。しかし、着かなかった。(家の二階に上がろうとしたが、膝が痛くて階段を上がれなかったという状況。)

(39) [a]1 ʔăpɔ̀daʔ=kò　　tɛʔ=tè.　　dàbèmê　　mă-yauʔ=pʰú.
upstairs=ALL　　climb=VS.RLS　　however　　NEG-reach=VS.NEG

[a]2 ʔăpɔ̀daʔ=kò　　tɛʔ=tà　　tɕʰìdauʔ　　nà=lô　　mă-yauʔ=kʰê=p̬ʰú.
upstairs=ALL　　climb=NC.RLS　　leg　　pain=CNSQ　　NEG-reach=PAST=VS.NEG

[a]3 _____　　yauʔ=ʔàuN　　mă-tɛʔ=nàiN=p̬ʰú.
upstairs=ALL　　climb=NC.RLS　　leg　　pain=CNSQ　　reach=PURP　　NEG-climb=POSS=VS.NEG

[b]1 hnă-taʔ=kò　　tɛʔ=tè.　　dàbèmê　　mă-yauʔ=pʰú.
two-story=ALL　　climb=VS.RLS　　however　　NEG-reach=VS.NEG

[b]2 _____　　dàbèmê　　mă-tɛʔ=nàiN=p̬à=p̬ʰú.
two-story=ALL　　climb=VS.RLS　　however　　NEG-climb=POSS=PLT=VS.NEG

[a]1、[b]1 は実質的にほぼ同じ。[b]2 は後件が「上ることができない」となっている。

[a]2、[a]3 は前件が名詞節で、文として独立しておらず、前提を表している。後件に「足が痛くて」という理由が明示されている。[a]2 は単に動詞 yauʔ-「至る」を用いて「至らなかった」、[a]3 は目標節に動詞 yauʔ-「至る」が現れて「至るように」、それを受ける主節は「上れなかった」（[b]2 とほぼ同じ）である。

(36)から(39)まで、全て前件における目的地への到達を後件でキャンセルすることができる。

4.6. 作成物の出現が否定され得るか

Q6-1. 人形を作った。しかし、出来なかった。（人形を作ろうとしたが、技術がなかったので結局は出来上がらなかったという状況。）

(40)	[a]1	ʔăyouʔ	louʔ(~ʨî)=ṭè.	dàbèmê	mă-pʰyiʔ(myauʔ)=pʰú.
		doll	make(~look)=VS.RLS	however	NEG-success=VS.NEG
	[a]2	_____		dàbèmê	mă-ʔàuNmyìN=p̬ʰú.
		doll	make(~look)=VS.RLS	however	NEG-success=VS.NEG
	[b]	ʔăyouʔ=kò	louʔ=ṭè.	dàbèmê	mă-yâ=p̬ʰú.
		doll=ACC	make=VS.RLS	however	NEG-get=VS.NEG

前件の動詞が louʔ-「作る」[7]、後件は pʰyiʔ(myauʔ)-「成功する」、ʔàuNmyìN-「成功する」、yâ-「できた」で、A 氏が前件に補助動詞 ʨî-《試行》「～てみる」を随意的に入れることができるとしている。

Q6-2. 家を建てた。しかし、出来なかった。（家を作ろうとしたが、途中で風雨で壊れ、出来なかったという状況。）

(41)	[a]	ʔèiN	sʰauʔ=tè.	dàbèmê	mă-pʰyiʔmyauʔ=pʰú.
		house	build=VS.RLS	however	NEG-success=VS.NEG
	[b]	_____		dàbèmê	mă-yâ=p̬ʰú.
		house	build=VS.RLS	however	NEG-get=VS.NEG

(40)とほぼ同じ。

Q6-3. 穴を掘った。しかし、穴ができなかった。（穴を掘ろうとしたが、地面が固くて穴が出来なかったという状況。）

[7] これは代動詞の louʔ-と同じ語彙である。

(42)	[a]	twíN	tú=ṭè.	dàbèmê	(myè mà=lô)	tú=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		pit	dig=VS.RLS	however	(because ...)	dig=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	twíN=k̬ò	tú=ṭè.	dàbèmê	(myèdɤ́í=k̬â mà=lô)	tú=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		pit=ACC	dig=VS.RLS	however	(because ...)	dig=CNSQ NEG-get=VS.NEG

両者ともほぼ同じ回答。前件の動詞 tú-「掘る」、後件は前件の動詞 tú-「掘る」に V=lô mă-yâ-「V できない」が後続する形である。

(40)から(42)まで全ての前件における作成物の出現を後件でキャンセルすることができる。(40)と(41)は作り始めたけれども、できあがらなかったという読み、(42)は掘ることがままならなかった、という読みである。

4.7. 対象物の獲得が否定され得るか

Q7-1. その本を買った。しかし、買えなかった。（本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなくて、入手することができなかったという状況。）

(43)	[a]	ʔédì sàʔouʔ=kò	(laiʔ~/t̪wá~)wè=ṭè.	dàbèmê	wè=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		that book=ACC	(follow~/go~)buy=VS.RLS	however	buy=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	ʔê sàʔouʔ	(laiʔ~)wè=t̪é=ṭè.		wè~mă-yâ=p̬ʰú.
		that book	(follow~)buy=STILL=VS.RLS		buy~NEG-get=VS.NEG

両氏ともほぼ同じ回答。前件の動詞 wè-「買う」の前に laiʔ-「従う」、t̪wá-「行く」などが現れ、動詞連続を形成して「（移動後に）買う」のが自然。B 氏はさらに助動詞-t̪é「まだ、さらに」が現れる。後件は A 氏が前件の動詞 wè-「買う」に V=lô mă-yâ-「V できない」が後続する形、B 氏はそれから接続助詞-lô《単純接続》が脱落した形。

Q7-2. 金を盗んだ。しかし、盗めなかった。（金を盗もうとして店に入ったが、警備員に見つかって入手できなかったという状況。）

(44)	[a]	paiʔsʰàN	kʰó=ṭè.	dàbèmê	kʰó=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		money	steal=VS.RLS	however	steal=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	paiʔsʰàN	kʰó=t̪é=ṭè.	dàbèmê	kʰó~mă-yâ=p̬ʰú.
		money	steal=STILL=VS.RLS	however	steal~NEG-get=VS.NEG

(43)と同じ。

(43)と(44)とも前件で述べられる対象物の獲得を後件でキャンセルすることが可能である。

4.8. 発声が否定され得るか

Q8-1. 話した。しかし、声が出なかった。

(45) [a] zǎgá＋pyɔ́=t̪è. dàbèmê ʔǎt̪àN mă-tʰwɛʔ=pʰú.
talk=VS.RLS however voice NEG-go.out=VS.NEG

[b] _____ dàbèmê ʔǎt̪àN=k̪â tʰwɛʔ~mă-là=pʰú.
talk=VS.RLS however voice=NOM go.out~NEG-come=VS.NEG

前件の動詞 zǎgá＋pyɔ́-「話をする」、後件は(ʔǎt̪àN) tʰwɛʔ-「(声が)出る」。B 氏は補助動詞 là-「来る」が後接して「(声が)出てくる」としている。

Q8-2. 歌った。しかし、声が出なかった。

(46) [a] t̪ǎtɕʰíN＋sʰò=t̪è. dàbèmê ʔǎt̪àN mă-tʰwɛʔ=pʰú.
song+sing=VS.RLS however voice NEG-go.out=VS.NEG

[b] _____ dàbèmê ʔǎt̪àN=k̪â tʰwɛʔ~mă-là=pʰú.
song+sing=VS.RLS however voice=NOM go.out~NEG-come=VS.NEG

前件の動詞が t̪ǎtɕʰíN＋sʰò-「歌を歌う」となったことだけが(45)と異なる。

いずれも「話す」「歌う」という発声を伴う動作を行おうとしたけれども、声が出なかったことを後件で矛盾なく述べることが可能であり、発声についてもキャンセルが可能である。

4.9. 飲食物の摂取が否定され得るか

Q9-1. 魚を食べた。しかし、食べられなかった。(魚を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。)

(47) [a] ŋá=k̪ò sá~tɕî=t̪è. dàbèmê sá=lô mă-yâ=p̪ʰú.
fish=ACC eat~look=VS.RLS however eat=CNSQ NEG-get=VS.NEG

[b]1 ŋá=k̪ò sá=laiʔ=t̪é=t̪è. dàbèmê mă-sá=nàiN=p̪ʰú.
fish=ACC eat=DEC=STILL=VS.RLS however NEG-eat=POSS=VS.NEG

[b]2 _____ dàbèmê myò=t̪àuN mă-tɕâ=p̪ʰú.
fish=ACC eat=DEC=STILL=VS.RLS however swallow=EVEN NEG-fall=VS.NEG

前件の動詞は sá-「食べる」だが、A 氏は補助動詞 tɕî-《試行》、B 氏は助動詞-laiʔ《決然》と-t̪é「まだ～」が生起する。後件は A 氏が前件の動詞 sá-「食べる」に V=lô mă-yâ-「V できない」が後続する形、B 氏は助動詞-nàiN《可能》とするか、[b]2 の

ように「飲み込めさえしない」となるか、である。

Q9-2. 酒を飲んだ。しかし、飲めなかった。（酒を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。）

(48)	[a]	ʔăyɛʔ	t̪auʔ~tɕî=t̪ɕ̌ɛ̀.	dàbèmê	t̪auʔ=lô mă-yâ=p̌ʰú.
		liquor	drink~look=VS.RLS	however	drink=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	ʔăyɛʔ=k̠ò	t̪auʔ=laiʔ=t̪ɕ̌ɛ̀.	dàbèmê	mă-t̪auʔ=nàiN=p̌ʰú.
		liquor=ACC	drink=DEC=STILL=VS.RLS	however	NEG-drink=POSS=VS.NEG

前件の動詞が t̪auʔ-「飲む」となるだけで、あとは(47) [a]、[b]1 と全く変わることはない。

いずれも「食べる」「飲む」という飲食物の摂取を行おうとしたけれども、摂取できなかったことを後件で矛盾なく述べることが可能であり、食物摂取についてもキャンセルが可能である。

4.10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか

Q10-1. 立った。しかし、立てなかった。（椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況。）

(49)	[a]	tʰâ(~tɕî)=t̪ɕ̌ɛ̀.	dàbèmê	tʰâ=lô mă-yâ=p̌ʰú.
		stand.up(~look)=VS.RLS	however	stand.up=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	tʰâ=t̪ɕ̌ɛ̀.		mă-tʰâ=nàiN=p̌ʰú.
		stand.up=VS.RLS		NEG-stand.up=POSS=VS.NEG

Q10-2. 座った。しかし、座れなかった。（椅子に座ろうとして脚を曲げたが、脚が痛くて、尻を椅子につけた状態にならなかったという状況。）

(50)	[a]	tʰàiN(~tɕî)=t̪ɕ̌ɛ̀.	dàbèmê	tʰàiN=lô mă-yâ=p̌ʰú.
		sit.down(~look)=VS.RLS	however	sit.down=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	tʰàiN=t̪ɕ̌ɛ̀.		mă-tʰàiN=nàiN=p̌ʰú.
		sit.down=VS.RLS		NEG-sit.down=POSS=VS.NEG

(49)、(50)は全く同じ。A 氏は補助動詞 tɕî-《試行》を入れることを好むようだ。B 氏はそれがない。また後件で A 氏は前件の動詞にに V=lô mă-yâ-「V できない」が後続する形、B 氏は助動詞-nàiN《可能》を用いる形である。

なお A 氏は補助動詞 tɕî-を用いているが、これは例文に付された説明のなかに「立ち上がろう」「座ろうと」があるからであろう。生起は随意的なものであり、

キャンセルの可否には関わらないと考えられる。

Q10-3. 眠った。しかし、眠れなかった。（眠ろうとして横になったが、眠りに入ることができなかったという状況。）

(51)	[a]1	ʔeiʔ=tè.	dàbèmê	ʔeiʔ=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		sleep=VS.RLS	however	sleep=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[a]2	_____	dàbèmê	ʔeiʔ~mă-pyò=p̬ʰú.
		sleep=VS.RLS	however	sleep~NEG-fan=VS.RLS
	[b]	_____		ʔeiʔ~mă-pyò=p̬ʰú.
		sleep=VS.RLS		sleep~NEG-fan=VS.RLS

前件は動詞ʔeiʔ-「寝る；眠る」、後件は[a]2、[b]で動詞連続ʔeiʔ~pyò-「熟睡する」。[a]1 は前件の動詞ʔeiʔ-「寝る；眠る」に V=lô mă-yâ-「V できない」が後続する形。

(49)、(50)、(51)のいずれもが、前件の自己完結的動作の最終局面への到達をキャンセルできる。後件に現れる V=lô mă-yâ-「V できない」は助動詞-nàiɴ《可能》とほぼ同じ意味（ただし A 氏に依れば、後者は文語的で、口語における使用は減少傾向にある、とのこと）で使われることがあり、実質的にこの二つの表現に意味的な違いはほとんどないと言ってよいであろう。

なお本節で B 氏が接続詞 dàbèmê「しかし」を一切入れていない点は注目してよいかもしれない。本節のような表現は実際の発話においてしばしば用いられ、前件の文と後件の文はほぼ連続してひと息に発話されることが多い。最終状態への到達のキャンセルが極めて容易にできることを示していると考えられる。

4.11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか

Q11-1 立った。しかし、立てなかった。（立ち上がろうとして力を入れたが、椅子から尻をまったく離すことができなかったという状況。）

(52)	[a]	tʰâ(~tɕî)=t̬è.	dàbèmê	(lóuɴwâ)	tʰâ=lô mă-yâ=p̬ʰú.
		stand.up(~look)=VS.RLS	however	(not.at.all)	stand.up=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	tʰâ=t̬è.	dàbèmê	tɕwâ=k̬ò	mă-tɕwâ=p̬ʰú.
		stand.up=VS.RLS	however	rise.up=CNTR	NEG-rise.up=VS.NEG

前件は(49)と同一。A 氏は後件で(49)[a]に随意的に副詞的要素 lóuɴwâ「全く（～ない）」を入れて「椅子から尻をまったく離すことができなかった」を表している。B 氏は前件の動詞 tʰâ-「立つ」ではなく tɕwâ-「身を起こす」を後件に使っている。さらに「椅子から尻をまったく離すことができなかった」を表すため、後件の動詞

述部の前に動詞 tɕwâ-「身を起こす」をコピーし、対比の副助詞-kò を付ける形で「身を起こすことさえ」といった意味を添えている。

Q11-2 座った。しかし、座れなかった。（座ろうとして力を入れたが、脚が痛くてまったく動作を開始することができなかったという状況。）

(53)	[a]	tʰàiN(~tɕî)=ʈʂè.	dàbèmê	(lóuNwâ)	tʰàiN=lô mă-yâ=p̚ʰú.
		sit.down(~look)=VS.RLS	however	(not.at.all)	sit.down=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	tʰàiN=ʈʂè.	dàbèmê	(tɕʰìdauʔ=kâ)	kwé=lô=ʈʂàuN mă-yâ=p̚ʰú.
		sit.down=VS.RLS	however	(leg=NOM)	bend=CNSQ=EVEN NEG-get=VS.NEG

前件は(50)と同一。A 氏は後件で随意的に副詞的要素 lóuNwâ「全く（～ない）」を入れている点で(52)[a]と同じである。

B 氏の後件は tɕʰìdauʔ kwé-「足が曲がる」を用いている。意訳すると「（足を）曲げることさえできなかった」で、V=lô mă-yâ-「V できない」に対比の副助詞-tàuN「さえ」が挿入されている。

Q11-3 歩いた。しかし、歩けなかった。（歩こうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。）

(54)	[a]	ɕauʔ(~tɕî)=tè.	dàbèmê	tă-ɕáN(-lé)=hmâ	hláN=lô mă-yâ=p̚ʰú.
		walk(~look)=VS.RLS	however	one-CLF(-DIM)=EVEN	step=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	láN＋ɕauʔ=tè.	dàbèmê	hláN=lô=ʈʂàuN mă-yâ=p̚ʰú.	
		street+walk=VS.RLS	however	step=CNSQ=EVEN NEG-get=VS.NEG	

前件は(láN＋)ɕauʔ-「歩く」、後件は hláN-「（足を）踏み出す」である。後件で A 氏はこれまでと同様に前件の動詞に V=lô mă-yâ-「V できない」を後続させるが、その前に tă-ɕáN(-lé)=hmâ「一歩も」を置いて「一歩も踏み出せない」とした。B 氏は動詞に V=lô mă-yâ-「V できない」対比の副助詞-tàuN「さえ」が挿入されている形であり、(53)と同じである。

Q11-4 走った。しかし、走れなかった。（走ろうとして力を入れたが、脚が痛くて一歩も踏み出すことができなかったという状況。）

(55)	[a]	pyé(~tɕî)=ʈʂè.	dàbèmê	(néné-lé=hmâ)	pyé=lô mă-yâ=p̚ʰú.
		run(~look)=VS.RLS	however	(little-DIM=EVEN)	run=CNSQ NEG-get=VS.NEG
	[b]	pyé=ʈʂè.	dàbèmê		mă-pyé=nàiN=p̚ʰú.
		run=VS.RLS	however		NEG-run=POSS=VS.NEG

前件は pyé-「走る」、後件は前件の動詞 pyé-「走る」に V=lô mă-yâ-「V できない」を後続させる形（A 氏）または助動詞-nàiN《可能》を使う（B 氏）。A 氏は随意的に néné-lé=hmâ「少しも」を入れることで「一歩も踏み出すことができなかった」ことを表そうとしていると考えられる。

Q11-5 笑った。しかし、笑えなかった。（笑った顔を作ろうとしたが、恐怖感のため、笑った顔を作ることができなかったという状況。）

(56) [a] yì=ʨʰìN=ʈà. ʨauʔ=lô mă-yì=yé=ɲʰú.
smile=DSR=NC.RLS threaten=CNSQ NEG-smile=CRG=VS.NEG

[b]1 yì=ʈɛ̀. dàbèmɛ̂ mă-yì=nàiN=ɲʰú.
smile=VS.RLS however NEG-smile=POSS=VS.NEG

[b]2 yì=ɲʰô ʨózá=ɲèmɛ̂ ʨauʔ=lúN=lô mă-yì=nàiN=ɲʰú.
smile=for strive=although frighten=EXCS=CNSQ NEG-smile=POSS=VS.NEG

両氏の答えが分かれた。自己完結的動作そのものの開始のキャンセルという点では[b]1 のみが該当する。前件は yì-「笑う」、後件は前件の動詞 yì-「笑う」に助動詞-nàiN《可能》が現れる。

これ以外の文、[a]の前件は yì=ʨʰìN=ʈà.「笑いたかった」、[b]2 は yì=ɲʰô ʨózá=ɲèmɛ̂「笑おうと頑張った」であり、動詞 yì-「笑う」が開始されていないことが前件で明示される。

Q11-6 泣いた。しかし、泣けなかった。（演技のため、泣こうとしたが、演技力がないので涙を流すことができなかったという状況。）

(57) [a]1 ŋò=ʈɛ̀. ŋò=lô mă-yâ=ɲʰú.
cry=VS.RLS cry=CNSQ NEG-get-VS.NEG

[a]2 ŋɔ̀=yâ=mɛ̂ ʔăkʰáN=kò mă-ŋò=ʈaʔ=lô myɛʔyè=ʈàuN mă-tʰwɛʔ=pʰú.
cry=INEV=AT.IRR room=CNTR NEG-cry=ABLT=CNSQ tear=EVEN NEG-go.out=VS.NEG

[a]3 _____ ʈ̆ăyouʔ＋mă-sʰàuN=ʈaʔ=lô myɛʔyè=ʈàuN
charactor+NEG-act=ABLT=CNSQ tear=EVEN
mă-tʰwɛʔ=pʰú.
NEG-go.out=VS.NEG

[b] ŋò=ʈɛ̀. dàbèmɛ̂ myɛʔyè=ʄâ mă-ʨâ=pʰú.
cry=VS.RLS however tear=NOM NEG-fall=VS.NEG

[a]1、[b]のみが自己完結的動作そのものの開始のキャンセルに該当する。前件は動詞 ŋò-「泣く」、後件は前件の動詞 ŋò-「泣く」に V=lô mă-yâ-「V できない」を後続させる形（A 氏）または助動詞-nàiN《可能》を使う（B 氏）。

これ以外の文、[a]2、[a]3 は ŋɔ̀=yâ=mê ʔăkʰáN=kò mă-ŋò=ʈaʔ=lô/ʈăyouʔ＋mă-sʰàuN=ʈaʔ=lô「泣かなければいけない場面で、泣けなかったので/演技できなかったので」であり、動詞 ŋò-「泣く」が開始されていないことが前件で明示される。

いずれの場合でも自己完結的動作そのものの開始をキャンセルすること可能である。ただ前節 4.10 自己完結的動作の最終状態の否定の場合は特に断りなく前件の動詞を後件で否定+可能表現で否定したが、副助詞「さえ」などで動作そのものの開始をキャンセルすることを表すことが多い。前節と異なり、B 氏が接続詞 dàbèmê「しかし」をすべて使用していることからすると、自己完結的動作そのものの開始については、最終状態の否定よりも強い文脈を必要とするのかも知れない。とはいえ、前件は前節と同じ形を取る(49)と(52)「立つ」、(50)と(53)「座る」を含め、単に動詞+動詞文標識《叙実》表されていることからすれば、文脈は程度の差と言えるであろう。

4.12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか

Q12-1. X さんを踊らせた。しかし、(X さんは)踊らなかった。

(58)	[a]	X=ʗò	kâ=kʰáiN=ʈɛ̀.	dàbèmê	ʈù	mă-ʗâ=pʰú.
		X=ACC	dance=ORDER=VS.RLS	however	3SG	NEG-dance=VS.NEG
	[b]	X=ʗò	kâ=kʰáiN=ʈɛ̀.	dàbèmê	ʈù=ʗâ	mă-ʗâ=pʰú.
		X=ACC	dance=ORDER=VS.RLS	however	3SG=NOM	NEG-dance=VS.NEG

Q12-2. X さんを行かせた。しかし、(X さんは)行かなかった。

(59)	[a]	X=ʗò	ʈwá=kʰáiN=ʈɛ̀.	dàbèmê	ʈù	mă-ʈwá=pʰú.
		X=ACC	go=ORDER=VS.RLS	however	3SG	NEG-go=VS.NEG
	[b]	X=ʗò	ʈwá=kʰáiN=ʈɛ̀.	dàbèmê	ʈù=ʗâ	mă-ʈwá=pʰú.
		X=ACC	go=ORDER=VS.RLS	however	3SG=NOM	NEG-go=VS.NEG

Q12-3. X さんにマンゴーを食べさせた。しかし、(X さんは)食べなかった。

(60)	[a]	X=ʗò	ʈăyɛʔʈí	ʨwé=ʈɛ̀.	dàbèmê	ʈù	mă-sá=pʰú.
		X=ACC	mango	serve=VS.RLS	however	3SG	NEG-eat=VS.NEG
	[b]	X=ʗò	ʈăyɛʔʈí	sá=kʰáiN=ʈɛ̀.	dàbèmê	ʈù=ʗâ	mă-sá=pʰú.
		X=ACC	mango	eat=ORDER=VS.RLS	however	3SG=NOM	NEG-eat=VS.NEG

いずれも両氏の回答はほぼ同じ。前件は動詞 kâ-「踊る」、ṭwá-「行く」、sá-「食べる」に使役の助動詞-kʰáiN がついたもの。後件は kâ-「踊る」、ṭwá-「行く」、sá-「食べる」である。なお(60)[a]のみ助動詞-kʰáiN ではなく、単独で使役的な意味を含む「食べさせる」という意味の動詞 tɕwé-が使われている。

Q12-4. X さんにマンゴーを売った。しかし、(X さんは) 買わなかった。

(61) [a]1 X=ḳò ṭ̆ăyɛʔṭ̆í wè=kʰáiN=ṭ̆è. dàbèmê ṭ̆ù mă-wè=p̬ʰú.
X=ACC mango buy=ORDER=VS.RLS however 3SG NEG-buy=VS.NEG

[a]2 X=ḳò ṭ̆ăyɛʔṭ̆í ʔá＋pé-p̬ʰô pyɔ́=ṭ̆è. dàbèmê ṭ̆ù mă-wè=p̬ʰú.
X=ACC mango encourage-for speak=VS.RLS however 3SG NEG-buy=VS.NEG

[a]3 X=ḳò ṭ̆ăyɛʔṭ̆í wè-p̬ʰô pyɔ́=ṭ̆è. dàbèmê ṭ̆ù mă-wè=p̬ʰú.
X=ACC mango buy-for speak=VS.RLS however 3SG NEG-buy=VS.NEG

[b] X=ḳò ṭ̆ăyɛʔṭ̆í yáuN=ṭ̆è. dàbèmê ṭ̆ù=ḳâ mă-wè=p̬ʰú.
X=ACC mango sell=VS.RLS however 3SG=NOM NEG-buy=VS.NEG

A 氏は[a]1 の前件で、動詞 wè-「買う」に助動詞-kʰáiN「～させる」を用いている（[a]1）。一方 B 氏は動詞 yáuN-「売る」である。

[a]2、[a]3 は前件の主節の動詞が pyɔ́-「話す」であることからわかるように、買うことを促すことを表している。[a]2 は「応援するように言った」で、売り手が買い手に言う慣用表現。これらも実質的に「売る」という行為と見なしてよいであろう。

後件はいずれも動詞 wè-「買う」の否定である。

Q12-5. X さんにマンゴーを見せた。しかし、(X さんは) 見なかった。

(62) [a] X=ḳò ṭ̆ăyɛʔṭ̆í (hláN~)pyâ(=laiʔ)=ṭ̆è. dàbèmê ṭ̆ù mă-myìN=p̬ʰú.
X=ACC mango (step~)show(=DEC)=VS.RLS however 3SG NEG-see=VS.NEG

[b] X=ḳò ṭ̆ăyɛʔṭ̆í pyâ=ṭ̆è. dàbèmê ṭ̆ù=ḳâ mă-myìN=p̬ʰú.
X=ACC mango show=VS.RLS however 3SG=NOM NEG-see=VS.NEG

ほぼ両者同一回答。いずれも前件は動詞 pyâ-「示す、見せる」、後件は知覚動詞 myìN-「見える」。後件の意味は「(X さんの) 目に入らなかった」という意味。

なお[a]1 前件の(hláN~)は動詞連続の前接動詞で、距離を置いて行われることを示す。

Q12-6. X さんにマンゴーを与えた。しかし、(X さんは) 受け取らなかった。

(63) [a] X=ḵò ṭ̈ăyɛʔṭ̈í pé=ṭ̆è. dàbèmê ṭ̈ù mă-yù=p̆ʰú.
X=ACC mango give=VS.RLS however 3SG NEG-take=VS.NEG

[b] _____ dàbèmê ṭ̈ù=ḵâ mă-yù=p̆ʰú.
X=ACC mango give=VS.RLS however 3SG=NOM NEG-take=VS.NEG

ほぼ両者同一回答。前件は動詞 pé-「与える」、後件は動詞 yù-「取る」。この二つの動詞は授受イベントの、与え手側からの表現と受け手側からの表現となる。

Q12-7. X さんに本を貸した。しかし、(X さんは)受け取らなかった。

(64) [a]1 X=ḵò sàʔouʔ hŋ̀á=ṭ̆è. dàbèmê ṭ̈ù mă-yù=p̆ʰú.
X=ACC book lend=VS.RLS however 3SG NEG-take=VS.NEG

[a]2 _____ dàbèmê ṭ̈ù lɛʔ＋mă-kʰàN=p̆ʰú.
X=ACC book lend=VS.RLS however 3SG [arm]$_{TN}$[8]+NEG-receive=VS.NEG

[b] _____ dàbèmê ṭ̈ù=ḵâ mă-yù=p̆ʰú.
X=ACC book lend=VS.RLS however 3SG=NOM NEG-take=VS.NEG

ほぼ両者同一回答。前件は動詞 hŋ̀á-「貸す；借りる」、後件は動詞 yù-「取る」。動詞動詞 hŋ̀á-「貸す；借りる」は項構造の違いにより「貸す」「借りる」のいずれともなる。ここでは受領者が対格表示されているため「貸す」となる。

Q12-8. X さんに電話した。しかし、(X さんは)電話に出なかった。

(65) [a] X-sʰì=ḵò fóuN＋sʰɛʔ=tè. dàbèmê ṭ̈ù fóuN＋mă-kàiN=p̆ʰú.
X-place=ALL phone+connect=VS.RLS however 3SG phone+NEG-grab=VS.NEG

[b] X=ḵò fóuN＋sʰɛʔ=tè. dàbèmê mă-kàiN=p̆ʰú.
X=ACC phone+connect=VS.RLS however NEG- grab =VS.NEG

ほぼ両者同一回答。前件は fóuN＋sʰɛʔ-「電話する」、後件は(fóuN＋)kàiN-「電話を取る」。

Q12-9. X さんを驚かせた。しかし、(X さんは)驚かなかった。

(66) [a]1 X=ḵò tɕʰauʔ=laiʔ=ṭ̆è. dàbèmê ṭ̈ù mă-lâN=p̆ʰú.
X=ACC frighten=DEC=VS.RLS however 3SG NEG-startled=VS.NEG

[8] [...]$_{TN}$ は NV 型の複合動詞（“verb with tied noun”もしくは“tied-noun verb”, Okell 1969: 36-7）の N の部分を示す。全体で一つの語彙素であるが、否定の場合、否定辞 mă-が V に前接して非連続となるため、[...]$_{TN}$ には N の部分の意味を記し、V に NV 全体の意味を記した。

[a]2	X=ḳò	lânɴ=ʔàuɴ louʔ=tè.	dàbèmê	t̪ù	mă-lânɴ=pʰú.
	X=ACC	startled=PURP do=VS.RLS	however	3SG	NEG-startled=VS.NEG
[a]3	_____		dàbèmê	t̪ù	lânɴ~mă-t̪wá=pʰú.
	X=ACC	startled=PURP do=VS.RLS	however	3SG	startled~NEG-go=VS.NEG
[b]	X=ḳò	ʔânʔád̪ìɴ=ʔàuɴ louʔ=tè.	dàbèmê	t̪ù=ḳâ	mă-ʔânʔɔ́=pʰú.
	X=ACC	surprized=PURP do=VS.RLS	however	3SG	NEG-amazed=VS.NEG

ビルマ語に「驚かせる」に当たる語彙はないと思われる。[a]1 の tɕʰauʔ-は「脅す；怖がらせる」という意味で、ここの求められる意味とは若干異なる。[a]2、[b]のように目標節を用いた迂言的使役構文 V=ʔàuɴ louʔ-「驚くようにする」とするよりほかない。

Q12-10. X さんを怒らせた。しかし、(X さんは)怒らなかった。(X さんを悪者にするため、X さんを怒らせようとしたが、怒らなかったという状況。)

(67) [a]	X=ḳò	dɔ́t̪â＋tʰwɛʔ=ʔàuɴ louʔ=tè.	dàbèmê	t̪ù	dɔ́t̪â＋mă-tʰwɛʔ=pʰú.
	X=ACC	get.angry=PURP do=VS.RLS	however	3SG	[angry]$_{TN}$+NEG-get.angry=VS.NEG
[a]	X=ḳò	seiʔ＋sʰó=ʔàuɴ louʔ=tè.	dàbèmê	t̪ù	seiʔ＋mă-sʰó=pʰú.
	X=ACC	be.angry=PURP do=VS.RLS	however	3SG	[mind]$_{TN}$+NEG-be.angry=VS.NEG
[b]	_____		dàbèmê	t̪ù=ḳâ	seiʔ＋mă-sʰó=pʰú.
	X=ACC	be.angry=PURP do=VS.RLS	however	3SG=NOM	[mind]$_{TN}$+NEG-be.angry=VS.NEG

前項と同じく、ビルマ語に「怒らせる」に当たる語彙はないと思われる。[a]2、[b]のように目標節を用いた迂言的使役構文 V=ʔàuɴ louʔ-「怒るようにする」とするよりほかない。

Q12-11. X さんを説得した。しかし、(X さんは)引き受けなかった。(困難な仕事を X さんに任せようとしたが、引き受けてくれなかったという状況。)

(68) [a]1	X=ḳò	ná＋tɕʰâ=t̪è.	dàbèmê	t̪ù	ná＋mă-tʰàuɴ=pʰú.
	X=ACC	persuade=VS.RLS	however	3SG	[ear]$_{TN}$+NEG-stand=VS.NEG
[a]2	_____		dàbèmê	t̪ù	lɛʔ＋mă-kʰàɴ=pʰú.
	X=ACC	persuade=VS.RLS	however	3SG	[arm]$_{TN}$+NEG-receive=VS.NEG
[b]	X=ḳò	síyóuɴ=t̪é=t̪è.	dàbèmê		mă-yâ=pʰú.
	X=ACC	organize=STILL=VS.RLS	however		NEG-get=VS.NEG

A 氏の前件は ná＋tɕʰâ-「説得する」、B 氏の síyóuɴ-は「組織する；組織に勧誘す

る」で、ここの意味とは若干ずれる。

後件は[a]1「聞かなかった」、[a]2「受け入れなかった」、[b]「だめだった」となる。

使役構文における被使役者の動作（(58)、(59)、(60)[b]、(61)[a]1、）も、使役的な意味を内在する動詞や授受動詞の間接目的語の動作（(60)[a]、(61)[b]、(62)、(63)、(64)）も、また感情の主体の感情（(66)、(67)、(68)）であっても、いずれもキャンセル可能である。

ビルマ語の使役は語彙的な使動形を持つものを除くと、①助動詞-kʰáiN、②助動詞-sè、③特殊な前接動詞 pé-、④迂遠的使役構文 V-ʔàuN louʔ-によるものがある（岡野 2015）。①は動詞 kʰáiN-「指示する、させる」を起源としており、言葉による指示である。一般に被使役者が使役内容を行ったことは含意しない。

②助動詞-sè はそのような制限はなく、単に使動形を派生する形態素と考えられる[9]。現在助動詞-sè の単独での使用は非常に少なくなっており、文語的であるという印象もあるからか、調査協力者の回答にはなかったが、これを使用することも可能である。

(69) [a]’	X=ḳò	kâ=**ʂè**=ṭè.	dàbèmê	ṭù	mă-ḳâ=p̬ʰú.
	X=ACC	dance=**CAUS**=VS.RLS	however	3SG	NEG-dance=VS.NEG

②助動詞-sè は許容的（相手の願望を許容する）な意味や、強制的（相手の望みを考慮せずやらせる）な意味を持つことがあり、①助動詞-kʰáiN に比べて使役内容の実行を若干強く含意すると思われる。しかしそうであってもやはりキャンセルは可能である。

③前接動詞 pé-は（特に標準方言では）許可を与えるというような意味で用いられることが多く、④は既に述べたように結果実現を含意しない。

4.13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か

Q13-1. 魚を<行く>(V1)<買う>(V2)した。しかし、買わなかった。

(70) [a]1！	ŋá	ṭwá~wè=ṭè.	dàbèmê	(ŋá)	mă-wè=p̬ʰú.
	fish	go~buy=VS.RLS	however	(fish)	NEG-buy=VS.NEG
[a]2	ŋá	ṭwá~wè=ṭè.	dàbèmê	(ŋá)	mă-wè=p̬ʰyiʔ=pʰú.
	fish	go~buy=VS.RLS	however	(fish)	NEG-buy=RLZ=VS.NEG
[a]3	ŋá	ṭwá~wè=ṭè.	dàbèmê	(ŋá)	mă-yâ=ḳʰê=p̬ʰú.
	fish	go~buy=VS.RLS	however	(fish)	NEG-get=PAST=VS.NEG

[9] 辞書などで、しばしば有対他動詞の意味記述として、対応する有対自動詞を使って Vintr=sè と書かれていることがある。（例えば tɕʰó-「折る」の意味記述として tɕó=ʔàuN louʔ=ṭì. **tɕó=ʂè**=ṭì.「折れるようにする、折れさせる」（Department of Myanmar Language Commission 1999:52））

[b] ŋá=ḳò ṭwá~wè=ṭè. dàbèmê (wè=lô) mă-yâ=ḳʰê=p̬ʰú.
fish=ACC go~buy=VS.RLS however (buy=CNSQ) NEG-get=PAST=VS.NEG

[a]1 は論理矛盾を起こす。[a]2 の後件は助動詞-pʰyiʔ「しおおせる」を使い、「買うことがかなわなかった」となる。[a]3 の後件は「(魚が)手に入らなかった」、[b] の後件は(wè=lô) mă-yâ=ḳʰê=p̬ʰú「(買おうとして)だめだった」という意味。

Q13-2. 魚を<煮る>(V1)<食べる>(V2)した。しかし、食べなかった。

(71) [a]1！ ŋá tɕʰɛʔ~sá=ṭè. dàbèmê mă-sá=p̬ʰú.
fish cook~eat=VS.RLS however NEG-eat=VS.NEG

[a]2 dìnê ʔèiN=hmà ŋá tɕʰɛʔ~sá=ṭè. dàbèdmê tɕănɔ̀
today house=LOC fish cook~eat=VS.RLS however 1SG.MS
mă-tɕaiʔ=lô mă-sá=p̬ʰú.
NEG-like=CNSQ NEG-eat=VS.NEG

[a]3 ŋá tɕʰɛʔ~sá=ṭè. dàbèmê mă-sá=laiʔ=yâ=p̬ʰú.
fish cook~eat=VS.RLS however NEG-eat=DEC=INEV=VS.NEG

[b] ŋá=ḳò tɕʰɛʔ~sá=ṭè. dàbèmê mă-sá=laiʔ=yâ=p̬ʰú.
fish=ACC cook~eat=VS.RLS however NEG-eat=DEC=INEV=VS.NEG

[a]1 が論理矛盾を起こすことは(70)[a]1 と同じ。[a]3 と[b]は実質的に同じ。助動詞-laiʔ《決然》と助動詞-yâ《不可避》が共起すると「たまたま/結局食べ(られ)なかった」の意味になる。

[a]2 は「今日、家では魚を煮て食べた。しかし私は好きではないので食べなかった」という意味であり、前件では「この家に住む者たち」、後件では「私」と、動詞連続の後項要素＜食べる＞の動作者が異なると考えられ、キャンセルの例には該当しないだろう。

本稿の調査結果からは、V1V2 の動詞連続において、後件において直接的に V2 を否定することは「論理矛盾している」と判断され、不適格とされる（(70)[a]1、(71)[a]1）。しかし可能を表す表現を使ったり（(70)[a]2 mă-wè=p̬ʰyiʔ=pʰú.「買うことがかなわなかった」、(70)[b] (wè=lô) mă-yâ=ḳʰê=p̬ʰú「(買おうとして)だめだった」）、結果そのものに言及したり（(70)[a]3 (ŋá) mă-yâ=ḳʰê=p̬ʰú「(魚が)手に入らなかった」）あるいは何らかの事情によって V2 の事態が生じなかったことを表現したり（(71)[a]3、[b] mă-sá=laiʔ=yâ=p̬ʰú「たまたま/結局食べ(られ)なかった」）することで、V2 のキャンセルが可能である。

(70)「行って買う」は 4.7 Q-1 (43)「買う」と併せて考察する必要があるだろう。(43)では前件に移動を表す動詞が現れやすいことが観察され、「(移動を表す動詞と)動詞連続を形成

して「(移動後に)買う」のが自然」と述べた。そしてこの場合でも後件は wè(=lô)mă-yâ=p̬ʰú.「買うことができなかった」と可能の表現を使ってキャンセルをしている。つまり(70)と(43)は事実上、同じ現象であると言えるだろう。

一方(71)「煮て食べる」は 4.9 Q9-1 (47)の「食べる」とは明らかに想定される状況が異なる。(47)では「(魚を一旦は口に入れたが、まずくて飲み込めなかったという状況。)」であるが、しかし(71)「煮て食べる」は食べられるように調理しているのであり、まずくて飲み込めない状況があり得ないわけではないものの、調査協力者には想像しづらかったのではないかと考えられる。そのため(71)[a]3、[b] mă-sá=laiʔ=yâ=p̬ʰú「たまたま/結局食べ(られ)なかった」という、外的な要因による非実現・不可能の表現が使われたと考えられる。

V1 の否定についても述べておこう。動詞連続の否定は通常、V1V2 の表すイベント全体の否定となる(岡野 2007:117)。しばしば V1 が(文脈対比的に)否定の焦点となり、続く文で異なる V1 によって V1V2 が実現したことを示す。

(72) mănêga ɲâzà tɕʰɛʔ~mă-sá=p̬ʰú, wè~sá=t̬è.
yesterday dinner cook~NEG-eat=VS.NEG buy~eat=VS.RLS
「昨日、夕食を作って食べなかった、買って食べた。」

これはあくまでそのような文脈対比がある場合であり、V1V2 全体が否定されてもよい。

4.14. 受身

ビルマ語には態としての受動はなく、受身的な意味を表す文がある。ビルマ語受身文の詳細については、倉部(2013)が包括的に記述しているので、そちらを見られたい。ビルマ語の受身文は以下のように図式化できる（なお vs.は法助詞の代表として書き入れたもの)。

(73) ビルマ語の受身文

a. X Y=kò Vtr=... 「X は Y を Vtr した」（能動文）
X Y=ACC Vtr=VS.

b. Y (X=yɛ̂/X') ʔă-Vtr+kʰàN=yâ=... 「Y は(X に）Vtr された」（受身文）
Y (X=GEN/X.OBL) NMZ-Vtr+suffer=INEV=VS.

b.' Y (X=yɛ̂/X') ʔă-Vtr+kʰàN=... 「Y は甘んじて(X に）Vtr された」
Y (X=GEN/X.OBL) NMZ-Vtr+suffer=VS.

能動文（a）の動詞 Vtr が名詞化接頭辞ʔă-によって名詞化され、それを動詞 kʰàN-「受ける」の補語としてその直前に置く。そして助動詞-yâ《不可避》を添えることで、直訳調で言うと「Vtr することを受けざるを得なかった」という意味になる（b)。もし助動詞-yâ《不可避》がなければ、それを甘受する、という意味になる（b')。

動詞 Vtr の行為者はʔă-V を限定する要素として現れる。具体的には具格助詞を伴う句

（X=yê）となるか、（可能な場合に）下降調化した斜格形式（X.OBL）となる。

倉部（同書）の指摘するように、これらは生産性が認められるため、倉部は「受動構文」であるとしている。また多くの場合、ビルマ語の受動構文は被害の意味を帯びる。

Q14-1. X さんは殺された。しかし、死ななかった。

(74) [a]1 X (kʰǎnâkʰǎnâ) ʔǎ-ṭaʔ＋kʰàN=yâ(=p̬ʰú)=ṭè. dàbèmê ṭù mǎ-ṭè=p̬ʰú.
X (often) NMZ-kill+suffer=INEV(=EXP)=VS.RLS however 3SG NEG-die=VS.NEG

[a]2 X (ʔǎtɕèINdʑèIN) louʔtɕàN＋kʰàN=yâ(=p̬ʰú)=ṭè. ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
X (many.times) assassinate+suffer=INEV(=EXP)=VS.RLS however 3SG NEG-die=VS.NEG

[b]’ X=hà ʔǎ-ṭaʔ＋kʰàN=yâ=ṭè. dàbèmê mǎ-ṭè=k̬ʰê=p̬ʰú.[10]
X=TOP NMZ-kill+suffer=INEV=VS.RLS however NEG-die=PAST=VS.NEG

A 氏は前件で kʰǎnâkʰǎnâ「しばしば」、ʔǎtɕèINdʑèIN「何度も」といった副詞を入れたり、経験を表す助動詞-pʰú「したとがある」を用いる方が理解しやすいという。生物が死亡するのは通常、一つの個体につき一度しか起こらないことであろうから、これらを使うことにより、「殺される」ということは生じていても、「死んだ」が生じていないことが理解しやすくなるのであろう。

受身の場合でも、前件で述べられた内容をまったく自然に後件でキャンセルすることが可能である。

5. まとめ

以上、調査票による調査結果を記した。ビルマ語の特徴を一言で言うのなら、Kato（2014）や加藤（2015）で指摘されていた通り、事象キャンセルについてほとんど制限なく可能である、という言語事実がが改めて確認された、といえる。

たしかに細かく見れば、やはりキャンセルの内容によっては、キャンセルがしにくいケースもあった。ただ文脈を適切に設定することにより、可能を表す表現を用いるなどして、およそ全てのケースでキャンセルが可能であった。これはビルマ語全体に一貫している見られる特徴であると言うべきであろう。

加藤（2015:28）は「ビルマ語の事象キャンセルは、意志動詞において可能な現象である」と結論づけている[11]。確かにその通りであるが、本調査では受身文においてもキャンセルが可能であることが確認された（4.14 Q14-1 (74)）。受身文は主語側から考えれば、意志動詞ではない。とすれば、キャンセルされているのは、受身文そのものではなく、対応する能動文

[10] 元々の回答はここだけ文語体であったので口語体に修正してある。
[11] 岡野（2014）でも、現象の捉え方は異なるが、「ビルマ語の場合、意志動詞ははっきりと意志の存在がある。しかしその動詞の表す行為の結果についてはなにも確定的なことは言っていない」（同書:18）としている。

で表される事態である、と考えざるを得ない。つまり能動文で表される事態がキャンセルされ得るため、結果として対応する受身文もキャンセル可能となる。

例文(74)について、もう一点、示唆的なことがある。この文における ṭaʔ-「殺す」の動作者が不特定であることである。動作者、すなわちその動作を開始する意志の持ち主は具体的には想定されないことになる。この文がそうであっても意志動詞が意志動詞として用いられている限り、キャンセルは可能ということである。ビルマ語には動作者が意志を持っていると想定しづらい受身文（「車に轢かれた」「犬に噛まれた」etc.）があるが、その場合にはどうなるかを更に調査する必要がある。

略号

-	形態レベルの境界
=	統語レベルの境界
+	NV 動詞の N と V の境界
~	動詞連続の間の境界
1	一人称
2	二人称
3	三人称
ABL	奪格標識
ABLT	獲得可能を表す助動詞
AT.	限定節標識
CAUS	使役の助動詞
CNSQ	接続助詞（単純接続、理由）
CNTR	文脈対比を表す副助詞「は(というと)」
CRG	勇敢さを表す助動詞「勇敢にも」
DEC	決然性を表す助動詞「てしまう」
DIM	指小辞
DSR	願望を表す助動詞「したい」
EVEN	文脈対比を表す副助詞「さえ」
EXCS	過度を表す助動詞「しすぎる」
EXP	経験を表す助動詞「したことがある」
GEN	具格標識
INEV	不可避を表す助動詞「せざるを得ない」
INS	具格標識
IRR	叙想
M	男性
NC.	名詞節標識
NEG	否定辞；否定叙述
NLZ	名詞化接頭辞
NOM	主格標識
OBL	斜格形式
ORDER	使役・指示を表す助動詞「させる」
PAST	過去を表す助動詞
PAST.TIME	過去時を表す格助詞
PLACE	地名
POSS	可能/可能性を表す助動詞「できる」
PURP	目標節標識
RLS	叙実
RLZ	実現を表す助動詞「しおおせる」
STILL	事態継続を表す助動詞「まだ、さらに」
TN	NV 型動詞の N の部分
TOP	話題標識
V	動詞
V1	動詞連続の第一動詞
V2	動詞連続の第二動詞
Vintr (vi)	自動詞
VS.	動詞文標識
Vtr, (vt)	他動詞

参考文献

Cornyn W. S. and R. I. McDavid, Jr. (1943). Causatives in Burmese. *Studies in Linguistics* 1(18). 1–6.

Department of Myanmar Language Commission (1999) *ခရီးဆောင် မြန်မာအဘိဓာန်* {kharī″choṅ‘ mran‘mā’ abhidhān‘}[ポケット ビルマ語辞典]

Department of Myanmar Nationalities’ Languages (2019) *မြန်မာ-အင်္ဂလိပ် အဘိဓာန် (၂၀၁၉)* {mran‘mā-’aṅgalip‘ ’abhidhān‘ (2019)} *Myanmar English Dictionary 2nd Edition, 2019* [英語ビルマ語辞典第 2 版, 2019]

早津恵美子 (1995)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて」.須賀一好・早津恵美子（編）『動詞の自他』ひつじ書房: 179-197

Kato, Atsuhiko (2014) Event cancellation in Burmese. Paper read at 24th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, Yangon University.

加藤昌彦 (2015)「ビルマ語の事象キャンセル」*EX ORIENTE* 22: 1–36.

倉部慶太 (2013)「ビルマ語の受動構文」.『地球研言語記述論集』5 巻: 27-71.

大野徹 (2000)「ビルマ（ミャンマー）語辞典」. 大学書林.

岡野賢二 (2007)『現代ビルマ（ミャンマー）語文法」.国際語学社.

_____ (2014)「日本語と似て非なる言語～ビルマ語～」.東京外国語大学語学研究所『言葉とその周辺をきわめる』1-21.（2012 年 10 月 9 日に行われた東京外国語大学オープンアカデミーの講演記録）

_____ (2015)「ビルマ語の使役」.ＴＢ＋ＯＣ研究集会ハンドアウト.

Okell, John (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. London: Oxford University Press.

Okell, John and Anna Allott (2001) *Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*. Richmond & Surrey: Curzon Press.

執筆者一覧（各言語の報告論文掲載順）

春日　淳（かすが　あつし）　神田外語大学

清水政明（しみず　まさあき）　大阪大学

上田広美（うえだ　ひろみ）　東京外国語大学

鈴木玲子（すずき　れいこ）　東京外国語大学

峰岸真琴（みねぎし　まこと）　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

加藤昌彦（かとう　あつひこ）　慶應義塾大学

澤田英夫（さわだ　ひでお）　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

岡野賢二（おかの　けんじ）　東京外国語大学

東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル

2023（令和 5）年 3 月 20 日発行

編者　加藤昌彦
発行　慶應義塾大学言語文化研究所
〒108-8345　東京都港区三田 2-15-45
印刷　株式会社　白峰社
〒170-0013　東京都豊島区東池袋 5-49-6

ISBN978-4-9912690-0-4